



月光を
纏う者



月の光を
纏う者

ぎゅむむむ、と

白い地面を踏み締める感触を楽しみながら、レイチェルは山道を跳ねるように歩いていた。真っ白な新雪を選んでは足を運び、再び少し離れた新雪へと飛ぶ。

そしてお約束通りに足を滑らせ、ズデンと尻餅をついた。小脇に抱えていた薪が周りに散らばる。

「何やってんだよ・・・そういうのはチャイムの役目だろう」

「！・・・み、見てたんですか・・・」

少し離れた茂みの向こうにエアニスが居た。エアニスも沢山の薪を抱えている。誰も見ていないと思い遊んでいたレイチェルは思わず頬を赤く染めた。

がさり、と、今度は薪を抱えたチャイムが姿を現す。

「ちょっと！あたしの事どんだけオッチョコチョイだと思ってんのよ！！」

そう叫び大きく踏み出したが、足を滑らせてひっくり返り、再び茂みの中へ吸い込まれていた。

それを見届けたエアニスは、痛々しい表情で首を横に振った。

チャイムにも見られていたと知って益々顔を紅潮させるレイチェル。そんな彼女にエアニスが笑いながら手を差し出した。

「雪が珍しいか？エルカカでは雪が降らないのか？」

「いえ、十数年に一度降る事があるとか・・・でも、私は生まれて初めて見ました！」

「へえ。前は海を初めて見たって言ってたし・・・初めて尽くしの旅だな」

「はい！」

楽しそうに頷き、エアニスの手を取って腰を浮かすレイチェル。厚いマントがめくれた状態で尻餅をついてしまった為、服が濡れてしまった。おしりに張り付いたドレスを叩く。

ズドドと、再び茂みの奥からチャイムが飛び出してきた。その姿はいつの間にか泥だらけになっている。ダン！と着地し今度は力強く地面を踏みしめると、彼女は仁王立ちになってエアニスへ指を突きつける。

「ほら、やっぱりまた！！エアニスはレイチェルにだけ優しい！！」

あたしが滑って転んで茂みの奥の土手に転がり落ちて頭打って一瞬意識飛ばしてたのに、ちょっと転んだだけのレイチェルばっか気にかけて！！！」

一息に捲し立てるチャイムにエアニスは気圧されながら、

「そ、そうか、大変だったな・・・でも知らねーよそんな事・・・」

きいっ！とチャイムは地団太を踏む。エアニスは頭を掻いた。

「何が不満なんだよお前・・・」

「何って・・・そりゃあ！・・・」

そこでチャイムが押し黙る。何かを言い返そうと思っているのか、口だけがパクパクと動いていた。そして、チャイムから返って来たのは言葉ではなかった。

何を思ったか、チャイムは足元の雪を掴むと、エアニスに投げつけた。粉のようにサラサラの新雪は、ぶぁさり、とエアニスへ降りかかり、その頭を真っ白にした。

「冷てっ！」

「ふん、避けずにボケっとしてるのが悪いのよ！」

「避けたらレイチェルに雪がかかっちゃうだろーが！！」

「！！」

ガーンと、今度こそチャイムは何か打ちひしがれたかのように崩れ落ちる。二人は跪くチャイムに天からスポットライトが当てられているのを幻視した。

二人がえぐえぐと涙を流すチャイムの取り扱いに難儀していると、最後の旅の連れ、トキがやってきた。

何故かエプロン姿に頭には三角巾、片手にはお玉を持ったクッキングスタイルだ。

「こんな所にいたんですか。夕ご飯の仕込み終わったんで、そろそろ薪が欲しいんですけど・・・って、何やってるんですか？」

「トキ、エアニスがいじめる！！」

思わず「おかあさん！」と呼びたくなってしまいういでたちのトキに、チャイムは泣きながらすがり付いた。

「あー、はいはい、よしよし。何があったんですか？」

「あのね！あのね！！」

「はい、ええ、うん、そうですか。」

貴方達は本当に面倒臭いですね。もう僕を巻き込まないでくれませんか？」

「ロクに考えもせず拒絶されたっ！！」

「日に日に酷い奴になって行くなこいつは・・・」

チャイムは「いやあそれほどでも」と照れるトキを土手に蹴り落とし、怒涛の涙を流しながらその辺に生えている木に抱きついた。

もはや頼るべき仲間は居ない。

エアニスは、は一あ、と溜息か呆れているのか良く分からない器用な息を吐く。確かに、チャイムに対する扱いが日ごろからぞんざいだという自覚が無い訳でもない。エアニスはさめざめと涙を流す(もちろんふざけているのだろうが)チャイムの横に座ると、彼女の頭にポンと手を乗せる。

「ああ、悪かったよ。何かお前頑丈・・・じゃなくて図太い・・・でもねえ。」

えっと、頼もしい感じだからさ。つい遠慮ってモンを忘れちゃって・・・別に嫌ってるワケじゃねーよ。ごめんな」

エアニスはぞんざいな感じで、でも何処か優しく、チャイムの赤い髪をくしゃくしゃと撫ぜた。エアニスに触れられた髪から、柔らかく甘い痺れのようなものが伝わる。

「あ、なあっ、ひあっー！！」

チャイムはエアニスの手を払いのけようとするが、エアニスの手に触れる事に抵抗でもある

のか、両手を頭の上で泳がせるだけだった。怪しい儀式の踊りのようだ。

「・・・大丈夫かお前、ホント最近変だぞ？」

あまりにも奇妙なりアクションに動揺し、エアニスは心配そうに彼女の顔を覗き込む。

熱でもあるかのように耳まで真っ赤にそまった顔。困っているような、でも何処か嬉しそうにニヤついて・・・ハッ！と我に返る。

「気安く触るな妊娠するだろうがー！！」

鬼の表情に豹変したチャイムは、ザクッ！っと、手刀をエアニスの鳩尾に突き刺した。一瞬白目を剥き、「うっ」と短くめき声を漏らしたエアニスは、額を地面に押し付けてドサリと倒れる。

「どあほーっ！！」

「ち、チャイムー！？」

シンプルな捨て台詞を残し一目散に走り去るチャイムを、レイチェルが追いかけて行った。

一人残されたエアニスの元へ、土手に蹴落とされたトキがガサガサと音を立て戻ってきた。

「あー病んでますますねえ・・・恋の病、ですか・・・青春ですね」

ビクンビクンと震えていたエアニスの背中がピクリと動いた。うずくまったまま、訝しげな顔をトキに向ける。

「あ？何だって？」



エアニス達はバイアルス山脈の目前まで来ていた。レイチェルの旅の終着点までは、もう数日で到着する。

一ヶ月で到着する予定だった旅は、様々なトラブルに巻き込まれるうちに既に二ヶ月を過ぎていた。

山脈の峰は白雪化粧をし、それは山の中腹あたりまで下りて来ている。

季節は既に冬の始まり。しかも今年は雪が降り始めるのが早かった。

レイチェルの目指す場所は、バイアルスの山の中腹にあるという。

急がないと、目的の場所が春まで雪の壁で閉ざされてしまうのだ。

そして今いるのが、バイアルス山脈手前の山中。その森の中で古びた廃屋を見つけ、一夜の宿としていた。屋敷とも呼べるその廃屋は、建物様式からして軽く50年以上昔の建物だ。何処かの金持ちの別荘か何かだったのだろう。

こんな汚れて朽ち果てた屋敷に泊まるより、窮屈でも車やテントで眠った方がマシ、という考え方もある。しかし屋敷の中には暖炉があった。今回ばかりは寝床の埃臭さよりも暖炉の火の暖かさが勝ったのだ。ここ数日は特に寒く、そろそろ野宿するには厳しい季節になっていた。

とはいえ、野宿も今日が最後になるかもしれない。

明日にはバイアルス山脈の麓にある街に着く。旅の途中に立ち寄る街も、そこが最後だ。

4人は気まずい空気のまま食事を終え、今はエアニスとトキが暖炉の前に座り込んでいた。明りは暖炉の火と、反対側に置いたガソリンランタンのみ。光量は十分でなく大きな部屋の隅には闇がわだかまっている。

チャイムとレイチェルは食事の片付け係だ。今頃、ふたりで雪を溶かした水で食器を洗っているだろう。

「驚きましたね。まさか気づいていないなんて・・・」

「・・・」

その頃、エアニスはトキになじられていた。

「エアニスは心の機微というものがまるで分かっていません」

「だって、・・・で、でも、あいつ俺の事平気で殴ってくるし、何かと突っかかってくるし・・・そんな相手を、す、す、好きだって思うか？」

「喧嘩するほど仲が良いって事ですよ。どんな形であれ、好きな相手とはコミュニケーションを取りたがるモノなんですよ」

「そ、そういうもんなのか？」

問われたトキは手にしていた本の表紙を指差して、

「らしいですよ。この本にそう書いてあります」

「受け売りかよ。って、何だその表紙が微妙にいかがわしい本は！！」

エアニスは本をひったくと目の前の暖炉の中に叩き込んだ。

如何わしいと言っても、男女がウットリした表情で顔を寄せ合っている絵が描かれた女性向けの恋愛小説だ。エアニスの基準では、これがいかがわしい本に分類されてしまうらしい。よほど純情なのだろう。

「酷いじゃないですか、まだ読みかけなのに。」

それにしても・・・意外ではありますね。こう言うのも腹が立ちますが、エアニスは飛びきりの美形ですよ？モテるんじゃないですか？」

「今まで俺と一緒に居て俺がモテてる所を見た事があるか？」

「というか・・・基本的に人間を避けて生きてきたからな・・・」

「ああ・・・」

トキの目が遠くなった。そういえば、ミルフィストにあるエアニスの家は街から離れた森の中にある。それに、エアニスが戦争中にしてきた事を考えれば、人目を避けるようになるのは仕方の無い事だ。

その為エアニスは異性からそのような感情を向けられた事が無く、また向けられた時の事を考えた事も無かったので、今回の件に戸惑っているのだ。

「多少変わった所はありますが、いい子じゃないですか。くっついちゃったらどうですか？」

「・・・無理だろ」

「何ですか？」

「俺は長生きだからな。いつまでもお前達人間とは一緒に居れないんだよ」

素っ気無く言った割に、それは重い言葉だった。その意味を理解し、トキは口をつぐむ。

普段意識する事は無いが、エアニスは普通の人間ではない。エルフと人間の混血なのだ。

エルフは種族にもよるが、人間の数倍の寿命を持つ。生まれたら人間と同じスピードで成長し、最も身体が健康な状態に達すると成長は止まり、寿命を迎える直前までその姿を保つ。鋭い五感を持ち、桁外れな魔力を身に宿す、人間よりずっと優れた種族。

「関係ないんじゃないんですかね・・・そんな事」

気休めを言っているような気がした。トキは自分の言葉が上滑りしている事を自覚し、すぐに言わなければ良かったと後悔した。

「取り残される身になってみる。お前だって分からない訳じゃないだろう」

「それは・・・」

トキの言葉が途切れた。暫く暖炉の炎を見つめたまま、黙り込む。そして、これまでとは少し違う声色で、こう続けた。

「それでも、失う事を恐れ、求める事を止めるのは、良くないと思います」

はっきりと言われてしまった。

エアニスは唇を噛む。返す言葉も無い。それは、ただ恐れて逃げているだけだから。

「・・・別に求めてねーし・・・」

「またまた。嫌い、ではないんでしょう？」

ギロリ、とトキを睨むエアニス。トキはわざとらしくブルルと身を震わせた。

「いや、これ以上いじめるのは止めましょうかね。僕がおちよくったせいでお二人の関係がぎこちなくなるのも忍びないですし」

トキは荷物から毛布を出し、鞆を枕にして横になる。

「僕はもう休みます。見張りの方はよろしくお願いしますね」

このタイミングで言われると腹が立つが、今日はトキが食事係、チャイムとレイチェルが片付け係りで、エアニスが夜の襲撃に備えた見張り係りだ。

エアニスは剣とショットガンを持ち、肩に自分の毛布をかけると、屋敷の外へ出て行った。



虫の音が響く夜の森がエアニスは好きだった。しかし彼らの殆どが各々の役目を全うし、森の土に還ってしまった。時折聞こえる弱々しい虫の音は、侘しさしか感じられない。風も無い夜の森は耳が痛いほどに静かだ。

車の窓は少しだけ開けてあり、冷たい風が入り込む。窓を閉め、完全に外気を閉ざしてしまうと、外の気配に対し鈍くなってしまうからだ。

目を閉じ、エアニスは耳と肌で屋敷の周りの様子を監視する。車のシートに座り居眠りしているようにしか見えないが、ちゃんと仕事はしているのだ。

1つの気配に反応して、エアニスが目を開ける。目を閉じて暗闇に慣らしたエルフの目は、月

明かりも乏しい暗い森の中でも、相手の姿を認識する事が出来る。

その姿を認め、エアニスの鼓動が早くなる。思わず自分の胸を叩き、舌打ちをした。

車のドアを開けて、助手席に座り込んだのはチャイムだった。

「はい。暖かいコーヒー」

両手に持っていた2つのカップの1つを突き出した。

「な、何だ気味が悪いな・・・」

「失礼ね！有りがたく頂きなさいよ！！」

「熱あっ！何なんだよもう！？」

熱々のコーヒーが注がれたアルミのカップを頬に押し当てられ、エアニスが悲鳴を上げた。カップを引ったくり、息で冷ましながら口にする。

「！、変な薬でも入れてないだろうな？」

眠り薬か、ひよっとすると惚れ薬とか。そいえばチャイムは元・魔法医だ。

「入れるかっ！」

言いながらエアニスの頬を引っ張り、横を向かせた。

「・・・ぶっ」

「あにがおかひい？」

「ううん、別にっ」

頬を引かれたエアニスの顔が面白かったわけではない。自分自身が滑稽で、おかしかったのだ。

(変なの、ケンカしてる時だけ、普通に話せるなんて・・・)

チャイムは自分のカップに口を付け、緩む口元を隠した。

いつの間にか、エアニスの事を考えている時間が多くなっていた。

それは旅も終りに近づき、別れの時が近づいているからだろう。

旅が終わったら自分は、エアニスは、みんなはどうするのか。

自分自身、まだ決めていない。

旅が終わったら、再び自分はエアニスと別の道を歩むのか。

それは、なんだか嫌だ。

もっと、たくさん、一緒に居たい。

こうやって、下らない馬鹿をやっているだけでもいい。

チャイムは、エアニスと別かれなくなかった。

チャイムはエアニスの頬から手を離すと、助手席のシートに座りなおし、コホン、と咳払いをする。

「ちょ、ちょっと、お話しよっか」

「・・・説教ですか？」

「・・・怒るよ」

「・・・すまん」

チャイムの言葉に真剣味を感じ、エアニスはふざけるのをやめた。

「話したくなかったらいいんだけどさ」

「何だよ」

「レナさんの事」

その名を耳にしてもエアニスの表情は変わらない。チャイムは話を続ける。

「エアニスにとって大切な人だったって事は知ってるけど、その・・・」

チャイムは僅かに口ごもってから、エアニスを見上げながら問いかけた。

「・・・好き、だったの？」

ストレートに聞いたチャイムに、エアニスは眉根を寄せる。

がりがり頭を掻き、少しだけ考える素振りを見せてから――首を振った。

「いいや、多分・・・そういうのじゃ・・・無かったんだと思う」

エアニスはシートに深く沈み込み、観念したような、諦めに近い表情で話し始めた。

「あいつと一緒に居たいと思ったのは・・・そうだな、自分の生きてる意味をあいつに見出していたから・・・だと思う」

自分の想いをエアニスは初めて口にしていた。忘れてはならない、しかし思い出したくは無い過去。自分でもまだ完全に整理できていない想いを、最も相応しい言葉を選びながらチャイムへ伝える。

「レナは・・・とても価値のある人間だった。

もっと沢山生きて、沢山の人々と触れあい、あの優しさを分け与えてゆくべき人間だった」

初めは、エアニスの目に偽善とすら映ったレナの優しさ。しかし、それが本物だと気付くのに時間は掛からなかった。

レナは優しい人間だった。その優しさは、自分の身すら省みない危ういものだった。

それを知ってから、エアニスはレナの事を放ってはおけなくなった。

「だから、あいつを守る事が、あいつに必要とされた事が嬉しかった。

金や自分の為じゃない。初めて、他人のために剣を振りたいと思った。レナを守ることで、初めて、自分が生きている意味のある人間になれたと思えたんだ」

不思議な気持ちだった。自分の気持ちを、別の視点から客観的に聞いているような気分だった。言葉にしてみても、ああ、俺はそう思っているのかと、改めて知った。

「だから、好きだとか、忠誠心だとか、そんな大層な物じゃない。

簡単に言っちゃえば・・・あいつに依存していたんだ」

最後はいつものエアニスらしく、自分の想いをぞんざいに、自虐的に結論づけた。手のひらを上に向け、もうこの話はお終い、と意思表示する。

一気に話しきり、エアニスは大きく溜息をついた。

嘘は、ついていない筈だ

「そっか・・・いいな、レナさんは」

「・・・」

何がいいのか、チャイムに問いたいと思うエアニスだったが、何と無く言い出せなかった。

二人の間に穏やかな沈黙が落ちる。

チャイムはエアニスの横顔を見た。いつも通りの、不機嫌そうな表情。

「・・・何でそんな事を聞く？」

いつも通りに見せかけていたものの、実は沈黙に耐えられなくなっていたエアニスが振り向く

。

不意にふたりの視線が間近でぶつかる。何故か心臓が跳ね上がり、チャイムは慌てて顔を逸らす。ごちゃごちゃに絡まり始めた思考を働かせ、とりあえず口を動かす事だけを考えて。

「んんっと、別にっ。何となく、エアニスはレナさんの事が好きで、今も想ってるのかな一っなんて。

え、エアニスの中に、あたしの居場所とか・・・あ、ある・・・のかな一って・・・」

段々と小声になってゆく言葉にあわせ、チャイムの顔にドクンドクンと血がのぼってゆく。

頭が真っ白になって、自分が何を言っているのか分からない。ただ、とんでもない事を言ってしまった様な気がした。

(やば・・・何言ってんのあたし・・・!)

チャイムは熱いコーヒーを一気に飲み干すと、ドアハンドルに手をかける。

「あ、あは、今のナシ！忘れて！！」

逃げるように車の外へ出ようとするチャイム。その手をエアニスが掴んだ。

「え！ なっ！ 何！？」



顔を真っ赤にし、汗をだらだら流すチャイム。いつの間にか窓ガラスの内側が曇っていた。
「お前から話をしようって言ったんだろ。見張り、暇なんだよ」

「へっ？」

エアニスチャイムの手を引きシートに座らせると、不機嫌そうな表情で・・・照れ隠しの表情で言った。

「もう少し・・・話をしよう」



いつも通りのエアニス。その言葉に、チャイムは救われたような気がした。

あのまま逃げ出していたら、明日の朝どんな顔をして会えば良かったか。

とにかく、いつもの当たり障りの無い馬鹿話で、今の出来事の記憶を上塗りしてしまおうと、チャイムは考えた。

正直、あんな言葉を口走ってしまった事を忘れるなど到底出来そうに無いが、話の流れでお互

い無かったような雰囲気になれば、チャイムの精神防衛線は保たれる。

無かった事に、してしまおう。

それから二人は、これまでの旅についての思い出話をした。たった二月の事だが、話す事は沢山あった。

チャイムがエアニスと初めて出会ったミルフィストでの路地裏。追っ手に跳び蹴りを決めながら現れたエアニスを見て、チャイムもレイチェルも、最初は女の人に助けられたと思ったらしい。

オーランドシティで見た珊瑚礁。チャイムは、『また皆で見に行こう』という約束を、エアニスが忘れていない事を確認した。

旅の話から脱線して、エアニスはチャイムは歌が好きだという話を聞いた。故郷であるエベネゼルの教会で歌う聖歌・・・ではない。酒場のステージで楽器をかき鳴らし、酔っ払いと踊りながら歌うのが好きなのだという。

エアニスは、うっかりと口を滑らせ昆虫が苦手という事を暴露した。都会っ子じゃあるまいしと呆れるチャイムに、絶対にトキに言うなよ、と青ざめた顔で言った。背中にムカデでも入れられた日には、比喩表現抜きでショック死出来るらしい。

「でね、レイチェルと一緒に食べに行ったアンジェリカっていゆケーキ屋がすごく美味しくてさ」

「アンジェリカ？ アンジェリカならミルフィストに本店があるぞ」

「そうなの！？ ね、ね、本店の味ってのはどんなの！？」

「いや、知らねえ。行った事ないから・・・」

「うわああ！！ 勿体無い！！ チーズケーキ好きとして勿体無いよエアニス！！」

「そんなに美味しいのか・・・だって本店って凄いボロ屋だぞ？ とてもそうには見えなかったけど・・・」

「そーゆー所が創業120年ッ！ て感じがするんじゃない！

分かってないわねエアニス！！」

「ふうん。ミルフィストに戻ったら行ってみるか・・・」

そう呟いたエアニスの顔が、僅かに曇った。

「・・・どうしたの？」

それを見逃さなかったチャイムが、心配そうに問いかけた。

「いや、今回の件で、俺の素性がバレた事があつたらう」

少なくとも、あの魔族達と、ルゴワールには、エアニスの本当の名前がザード=ウォルサムである事、そして"月の光を纏う者"だという事を知られている。

「ザード=ウォルサムを恨む奴は多い。・・・お前の故郷とかな。

もし俺が活着ているという噂が流れれば、そういう奴らが動き出すかもしれないし・・・

やっぱり、暫くミルフィストには戻れないな。ほとぼりが冷めるまで、街を転々として過ご

すか・・・」

「旅を続けるって事？」

「そうだな」

「・・・ふうん」

チャイムは、寸前のところで言葉を飲み込んだ。

あたしも、エアニスと一緒にいってもいい？

どうしても告げなかったその一言を、飲み込んでしまった。

怖かったから。

せっかく先の失言が無かったかのように、二人で楽しく旅の思い出話をしていたのに、再びこの場の空気をぎこちないものにするのが怖かった。

だから、チャイムは自分の想いを仕舞い込む。

「一緒に行かないか？」

「え？」

予想外の言葉に、チャイムは自分の耳を疑う。

「レイチェルは旅が終わったら村を復興させるって言ってるし、トキもそれを手伝うつもりらしい。

俺は一所に留まる訳にはいかないから、手伝えない。旅を続けなくちゃいけない」

「・・・っ！！」

チャイムは綻ぶ表情を隠す事が出来ずにいた。エアニスから、そのような言葉を掛けて貰えるとは思っても見なかったから。

思わず歓喜の声を上げながらエアニスに抱きついてしまいそうになる衝動を、寸前の所で堪えた。それでも、チャイムの中で嬉しさはどんどんと膨らんでゆき、いてもたってもいられなくなる。

やがてチャイムの感情が爆発寸前に迫った時、エアニスが途切れさせていた言葉の続きを口にした。

「情けない話だが、もう一人は・・・嫌だ。

なまじ、人の優しさを知ってしまったから・・・。

もう、昔みたいには振る舞えそうにない」

沸き上がっていた感情が、急速に凧で行く。

チャイムは啞然とした。こうもハッキリとエアニスが弱みを見せた事は無かったからだ。

同時に、嬉しくもあった。自信の塊のようなエアニスが、自分にこのような一面を見せてくれた事を。

だから、チャイムは優しく、エアニスに言う。

「・・・それが、普通なんだよ。

一人で生きていける人間なんて居ないんだもん。

強がって一人で生きている人より、自分の本当の気持ちを話せる人の方が、ずっと強いんだよ

」

チャイムは、エアニスの手を取った。互いの手を合わせ、指を絡める。普段のチャイムなら、こんな事したら顔から火を噴いているだろう。でも、今のチャイムは、不思議と穏やかな気持ちでいられた。

エアニスは驚いた様子で、握られた自分の手と、彼女の顔を見る。

「あたしでよかったら、いつでも一緒に居てあげるからさ」

自然と、そんな言葉が漏れた。

今までエアニスの事を意識して、ぎゃあぎゃあと騒いでいたのが馬鹿のようだ。

エアニスも、穏やかな表情で微笑んだ。

「・・・ありがとな」

本当の気持ちを話せる人のほうが、ずっと強いんだよ—————

自分で言った言葉が、チャイムの胸にチクリと刺さった。

本当の気持ちを言えていないのは、自分ではないか。

自分だって、強く有りたい。

力の強さでは無理でも、心の強さだけでもエアニスと並んでいたい。

自分の気持ちを、はっきりと言葉で伝えたい。

チャイムはエアニスの手を、強く握った。

「あ、あのね！」

「あれ・・・あそこに居るのトキとレイチェルじゃねえか？」

「うおあああああああああ————！！！」

まるで手に噛み付いた蛇を振り払うような勢いで、チャイムはエアニスの手を振り払う。そのまま脱兎の如く車から飛び出そうとガチャガチャとドアハンドルを引きまくるチャイムを、エアニスは慌てて捕まえた。

「馬鹿！ 暴れんな黙れっ！！」

「むっふう————ん！！」

エアニスに口を塞がれ、腰に手を回されたチャイムは更に暴れる。後ろから抱きつかれているような格好だ。さっきまでの穏やかな波面のような心が一転、地獄の釜の如く荒れ狂う。

エアニスは、二階のテラスに立つトキとレイチェルを見上げる。トキ達はエアニスの視線に気付いている様子はない。良く見ると、トキがレイチェルの手を取って、何か話をしているようだ。

「おおおー！ な、な—んかやらし—雰囲気じゃね？」

「やらしいのはアンタだクソロンゲ！！」

「ぐごっ！！」

エアニスに背後から抱きつかれたままになっていたチャイムは、頭突きで真上にあったエアニ

スの顎を粉碎した。



トキが目を覚ますと、部屋には誰も居なかった。

布きれで作った即席カーテンを隔てた向こう側にチャイムとレイチェルが眠っている筈だが、いつの間にか二人分の枕代わりの荷物と毛布だけが無造作に広がっていた。

「護衛失格ですね・・・」

自分の頭を小突きながら部屋を見回すトキ。しかし、悪意のある気配が近づけばトキは間違いなく目を覚ます。それが無かったと言うの事は、二人に良くない事が起こっている訳ではないと思うのだが。

テラスに続くドアが開いている。

その向こうで、レイチェルの淡い金糸の髪が揺れているのを見た。

トキは安堵の息を漏らし、窓に近づき、そっと壁をノックしようとする。突然声を掛けると驚かせてしまうと思ったからだ。

その手が止まる。

レイチェルは、テラスの手摺に手を置いて月を見上げていた。

月明かりのせい、体の調子が悪いのか、肌が青白く見える。

その姿が、輪郭が。

夜闇に滲むように、揺らいで見えた。

トキは捕まえるように、レイチェルの細い腕を乱暴に掴んだ。

「きゃあっ！」

夜中に声も掛けられず、いきなり腕を掴まれたのだ。レイチェルは驚き、思わず短い悲鳴を上げる。そして自分の腕を掴んでいる相手を見て、戸惑うようにその名を呼ぶ。

「と、トキさん？」

「・・・あ・・・」

トキは伊達眼鏡の下の目を擦る。目の前には、レイチェルが居た。何もおかしな事は無い、普段どおりの彼女が居た。

何だ、今のは？

彼女の姿が滲んでて見えたのは、単に寝惚けていたのか、旅の疲れが溜まっているのか。

ただ、それを見た瞬間、トキは怖くなった。

レイチェルが、目の前から消えてしまうような気がしたのだ。

「あ、あの、ちょっと・・・トキさん、近い、です・・・」

レイチェルはトキから目をそむけ、恥ずかしそうに身を引いた。気づけばトキはレイチェルの腕を掴んだまま、息が触れるほどまでに引き寄せていた。

トキはレイチェルの腕を離し、慌てて一歩後ろに下がった。

「！、ああ、すみません・・・」

「いえ、大丈夫、です・・・」

顔を真っ赤にして、消え入りそうな声で答えた。二人の間に気まずい空気が流れる。

まるで、トキがレイチェルに迫っているような格好だった。勘違いとはいえ、このような暴挙をエアニス達にでも見られていたらと思うと――

そう考え、トキが辺りに視線を巡らせると、トキの居るテラスの下、屋敷の玄関先に止められた車の窓から、エアニスとチャムがアホのように口を開けてこちらを見ていた。

見られていた。

ボガン！と轟音を響かせ、ボンネットに黒い影が落ちてきた。トキがテラスから飛び降りて来たのだ。フロントガラスの向こうから、黒い影が車の中を覗き込んでいる。その表情は夜闇と月明かりの逆光で見えず、眼鏡の無機質な光だけが影の中に浮かび上がっていた。

「・・・っっ！！」

二人は本能的な恐怖に襲われ、一瞬にして喉が干上がった。



真夜中の森の中、子供と呼ぶにはもう無理のある男女がぎゃあぎゃあと騒ぎながら走り回っている。

「見たか、今のレイチェルのリアクション！！顔真っ赤にしてたぞ！！」

「あの子にも恥じらって感情が芽生えたった事ね！！」

「でもでも、それってどういう事なのかな！！？」

「決ってるだろうが！！レイチェルがトキのうぼあぁっ！」

トキのドロップキックがエアニスの背中に突き刺さった。

弁解の言葉が思いつかないトキは、二人の記憶を実力で消す為に容赦なく襲い掛かる。レイチェルはその様子をテラスからぼかんとした表情で眺めていたが、不意におかしさがこみ上げクスクスと笑った。

口元に当てた右手に違和感を感じた。

「・・・っ」

違和感。

まるで自分の体じゃないような、感覚のズレ。

ここ数日、この違和感を感じる事が多くなっていた。

右の手のひらを握り込む。何もおかしな所は無い。

自分の右手。自分の体。

しかし、レイチェルは本能で感じる。

残りの時間は少ない。

「ごめんね。あとちょっとで終るから・・・

だから、もう少しだけがんばって・・・」

胸元のヘヴンガレットを握り、祈るようにそう呟く。

そうして、レイチェルはバイアルス山脈の方角を見据える。

旅の終点は、もう目前だ。

ファウストはバイアルス山脈の北に位置する、この国の最果ての町だった。

ここから南には6,000メートル級の山々が延々と連なり、太古の昔より文明の進入を拒み続けてきた。山脈を越えるには一般的には海路が使われ、国軍や一部の富裕層は魔導式の航空機を使う。因みに、全機械式の航空機でバイアルス山脈を越えたという記録は、今の所無い。

バイアルス山脈の北と南を空路で結ぶ貿易の要となる町であるため、最果ての町と呼ばれる割には活気のある栄えた街だ。

物資を運ぶ手段は馬車よりも自動車の方が多し、この街の特徴だった。行き交う自動車の殆どが軍の払い下げ車両である。色を塗り直し荷台に幌を着けたりしているが、戦場を走る事を想定して作られたいかめしさは、容易に拭い去ることは出来ない。大戦中も物資と戦力が集中する街であり、終戦後に大量の自動車がこの街に残された為だ。

皮肉な事に、ファウストは戦争によって栄えた街となった。

「戦争で栄えたと言っても、物資輸送の拠点になったと言うだけで、戦場が近いとか、傭兵が集まって治安が乱れた等といった事が無く、戦争特需の美味しい所だけにあやかっただけの街なんですよ、ここは」

「ふーん」

街についての知識をひけらかすトキに、エアニスは関心の欠片も無い声で答える。

「栄えていると言っても・・・少し賑やかすぎませんか？」

レイチェルが窓に張り付きながら言った。

エアニス達の車は街のメインストリートを走っている。家を並べて建てられる程に広い道を、何処かの商社の運送車と、作物を積んだ荷馬車が入り乱れるように走る。それはある程度大きな街であれば何処にでもある風景だったが、沿道を行き交う人々の様子が違った。

所狭しと露天が立ち並び、露天の庇と庇を繋ぐように雪の結晶を模した飾りが吊り下げられている。道行く人々も、着飾っている人が多かった。

まるでお祭りのようだ、レイチェルは思う。

「お祭りですよ。」

この地域の冬は厳しいので、この季節になるとみんなで山の神様にお願いするんですよ。今年の冬も何事ありませんように、とね。戦争のせいで暫くお祭りを行う事が出来なかったそうで、今年は数年ぶりの開催だそうです。だから、街の皆さんも気合が入っているんですよ。

全く、平和な世の中になったものです」

何故か肩を竦めるトキ。エアニスも白けた目で町の喧騒を眺めている。

「やれやれ・・・こっちは旅の終着点だと思って気合入れて来てるっつーのに・・・」

そうぼやいて、伸びをしながらシートに沈み込む。

彼ら4人にとって、戦争とは当たり前の事だった。物心ついた頃から世界は戦禍に飲まれており、戦争が終結したのはほんの一年半前なのだ。人生の大半を、戦争と共に歩んできたのだ。

だから、未だに"戦争の無い世界"に対して、違和感を覚えてしまう事があった。

ドン、パパン

突如響いた破裂音にエアニスは腰を浮かし、シート下に隠した銃に手を伸ばす。

苦笑いを浮かべてトキが言う。

「音花火ですよ」

抜けるような青空に、チカチカと瞬く光と白い煙が見える。

エアニスは口をへの字に曲げ、目元を手のひらで覆った。



バイアルスの山は、普通であれば人間が立ち入る場所ではない。人の足で踏破できる山では無いからだ。それでも麓で狩をする猟師や、山の中に畑を持つ人々の為に、申し訳程度の登山道が伸びている。しかしその登山道も、少し進むだけで無数の立て看板によって遮られてしまった。

赤字に黒い骸骨のマーク。

地雷原の印。

「これは・・・予想外の展開ですね」

トキは乱立する看板と、その間を結ぶように張り巡らされた有刺鉄線を眺め頭を掻く。

「他に山への入り口は無いのか？」

何と無く足元の土を踵で削りながら、エアニスがレイチェルに尋ねる。

「あるとは思いますが・・・神殿に続く道順は、一通りしか教えられてません・・・」

「そっか・・・」

削り取った地面から、グシャグシャに捻れたプラスチックの破片が幾つも見つかった。この辺りにも、以前は地雷が埋まっていたのだろう。

エアニスは辺りを見回す。夕方と呼ぶにはまだ早い時間だが、太陽は早々に山陰に隠れてしまい辺りは薄暗い。もちろん今から山登りを始めるつもりは無く、山の入り口の確認をするために立ち寄っただけだ。

明日一日を準備と休息に当て、明後日の早朝から山に入る予定だった。しかし、その予定もこの状況では後にずれ込んでしまいそうだ。

「とりあえず、一個くらいは地雷拾って帰りましょうか。どんなタイプの奴が埋まってるかによって何とかなるかもしれませんし」

何気ないトキの提案に、チャイムとレイチェルは目を剥いた。

「そうだな。面倒だが、暗くなる前にやっちゃうか」

エアニスは右脇に挿した小振りのナイフを引き抜く。

「ちょ、ちょっとちょっと！！」

まるで芋掘りでも始めるかのような気軽さで地雷原に踏み入ろうとする二人を、チャイムは慌てて止めようとする。

その時。

「お主達、そこで何をしておる!？」

それよりも早く、随分と古風な言葉使いの、しかし凜とした女の声が響いた。

少し離れた茂みに立っていたのは、金色の髪を長く伸ばした、背の高い女だった。髪は首の後ろで一つに結んでいる。厚手ながらも動きやすそうな、猟師のような服を着ていた。

猟師のような、ではなく、恐らく彼女は猟師なのだろう。彼女は大柄な散弾銃を構え、トキとエアニスに狙いをつけていたからだ。

銃は基本的に軍人しか持つ事を許されていない。しかし、民間人でも仕事の上で必要と判断されれば、軍から許可証を受け取る事で、特定の銃ならば持つ事を許されている。

「軍の関係者ではないな？地雷泥棒か？」

もうこの街には地雷を買ってくれるような奴などおらぬぞ！」

まるで老人のような言葉使い。もちろん女は老人ではなく、二十代前半、エアニスと同じか、少し上位のように見えた。

「待て待て、泥棒なんかじゃない。この山の奥に用事があって来たんだ」

エアニスはナイフを投げ捨て、両手を頭の上に上げ抵抗の意思が無い事を示す。

そしてさり気なく一步後ろに下がり、何食わぬ顔で銃を抜いたトキの右腕を、その背で女の視線から隠した。

それを見ていたチャムとレイチェルに緊張が走る。彼女が敵かどうかは分からないが、確かに、いきなり猟銃を向けられた以上ただ言うなりになる訳にもいかない。

「この山の事を知らぬ訳でもあるまい。この先は人の手も入らぬ未開の地、何も無いぞ。それに、大戦の後からは許可の無い者は立ち入る事は出来ぬ」

「そうなのか・・・この街には今日着いたばかりだから知らなかったんだよ。

というか、まずその物騒なモノを下ろしてくれ。落ち着いて話もできないだろうが」

「む・・・」

物静かなエアニスの言葉に危険は無いと感じたのか、女は渋々といった様子で銃口を下ろした。

同時にエアニスが身を翻す。

その後には腰だめで銃を構えたトキが居た。トキは女の持つ猟銃を撃つ。

銃身に当たった弾は女の手から猟銃を跳ね飛ばす。驚いた様子の女にエアニスが飛び掛った。

自分達がこの山の入り口に居たという事を誰かに知られるのは都合が悪い。情報が何処を伝ってルゴワールの耳に入るのか分かったものではないからだ。エアニス達が今日この場に居た事を他言しないように彼女を"説得"するか、場合によっては2、3日程監禁させて貰わなくてははいけない。

「悪いな」

猟銃を蹴り飛ばし、エアニスは女の手を掴み地面に組み伏せようとする。

スパンと、エアニスの足が払われた。同時に掴んでいた女の腕に、泳いだ上体を強引に引き寄

せられた。エアニスの視界は半回転し、背中と後頭部を硬い地面に叩きつけられる。

「ッ！??」

痛みより驚きが勝った。いや、驚く暇すら許されなかった。女が手にしたナイフが、エアニスの頭に振り降ろされようとしていたからだ。

唐突にナイフの軌跡が跳ね上がる。

女のナイフを蹴り飛ばそうと飛び掛ってきたトキを、彼女は迎撃しようとしたのだ。

踏み込みの足をエアニスの腹に打ち込み、女のナイフが一直線にトキの足を迎え撃つ。

金属の擦れ合う音を立てて、トキの右足が女のナイフを弾く。彼のブーツには靴底と爪先に鉄芯が入っていたのだ。トキのブーツはそのまま、女の右肩に食い込んだ。

その手応えにトキは目を剥く。まるで、岩を蹴ったような感触だったのだ。実際、トキの蹴りをまともに受けた女の体は、ピクリとも動いていない。

「甘いわッ！！」

まさに鉄拳。彼女の鉄のような拳が、トキの右頬を殴り飛ばした。

「・・・ぐ、おお・・・」

腹を踏み潰されたエアニスが腰の剣に手を伸ばそうとする。しかし意識がはっきりとしないのか、その動きは緩慢だった。

女は猟銃を拾い上げると、剣に指をかけたエアニスの右腕を踏みつける。

「いきなり襲いかかるとは・・・やはりロクでもない連中のようじゃな！」

手馴れた動作で、女が猟銃のボルトを操作した。

「待って！」

レイチェルが銃を構える女の元へ駆け寄る。

「動くな！！」

女は猟銃をレイチェルに向ける。しかし、レイチェルの足は止まらない。まるで素人のような行動が、女の判断を迷わせた。

猟銃は散弾を放つ事無く、レイチェルの手に掴まれ銃口を誰も居ない森に捻じ曲げられた。

「すみません！ ごめんなさい！！ これには事情があるんです！！！」

「その、ロクでもない奴ってのは当たってるんですけど、本当に！」

とにかくごめんなさい！！」

チャイムとレイチェルが女の前で頭を下げて謝り倒す。

女は目を白黒させて、2人と足元で伸びているエアニスを交互に見た。

「！！！」

彼女は目の前で頭を下げる少女、レイチェルの胸元の黒いガラス玉に気付いた。

そして、その髪と瞳の色、顔立ちに良く知る人間の面影を見る。

「お主ひょっとして・・・シャノンの娘か？」

「・・・！！」

不意に耳にした父の名前。

レイチェルは驚愕の表情で彼女を見上げた。



女の家は比較的街の中心にあった。家の中には街で売られているような家具は殆ど無く、荒々しく切り出された樹木で作られた手作り風のテーブルに、丸太で作られた椅子などが並ぶ。石で組まれた暖炉には火が灯っており、部屋の中は暖かい。電気を引いていないのか、明りは暖炉の火と白灯油のランタンのみ。オレンジ色の明りが室内を柔らかく照らしていた。

まるで市街地の中に現れた、山奥の別荘。

レイチェルが懐かしそうに部屋を見回す。エルカカの村も、このような雰囲気の家が多かったからだ。

「いい雰囲気のお家ですね」

「良いじゃろう？ わしの趣味じゃ」

女は食器棚から酒瓶を取り出す。

「どうじゃ、一杯？」

脈絡の無い誘いにレイチェルは戸惑いながら、

「い、いえ、私はお酒はちょっと・・・それにまだ17歳ですし・・・」

「気にするでない。この国の法律に飲酒の年齢制限は無いぞ」

「えっと・・・はあ、じゃあ、少しだけ・・・」

押しの弱いレイチェルは、何処か女に押し切られるような形で、グラスを受け取る。瓶の中身は葡萄酒のようだ。

「わしの名は、ティアドラじゃ。6つ目の石を封印する時、シャノンには世話になった」

女は名乗ると、懐かしそうにレイチェルの顔を見る。

「レイチェル・・・じゃったな？ シャノンの馬鹿からお主の話を嫌という程聞かされたぞ。自分に似ているだの、母親に似て優しいなど、な」

「・・・はい」

レイチェルは寂しそうに笑い、グラスに口を付けた。

「そうか・・・あ奴も逝ってしまったか」

ティアドラも目を伏せ、小さく息を吐いた。

ティアドラは、エルカカに縁のある者だった。

このバイアルス山脈に、"石"を封印する為にやって来たエルカカの民を、神殿まで導くのがティアドラの役目だという。

その素性を隠した上でファウストの街に住んでいる為、レイチェルはティアドラの存在を聞かされていなかったらしい。当然だろう。彼女の存在が"石"を狙う者達へ知られたら、彼らはまずティアドラを狙う。彼女の存在は、エルカカの中でもトップシークレットなのだ。

「お主もどうじゃ？」

ティアドラはチャイムに瓶を向ける。

「ん・・・頂くわ」

しんみりとした空気に飲まれたまま、チャイムはグラスを受け取る。

「チャイム=ブラスハートよ」

「お主が襲撃から逃れたレイチェルを助けてくれたのじゃったな。

ワシからも礼を言わせて貰おう」

これまでの出来事は、既にティアドラに伝えてあった。

「ううん、あたしとレイチェルだけじゃここまで来れなかったわ。

ここまで来れたのは・・・あのふたりのお蔭です」

チャイムが目を向けた先には。

顔を青くして腹を押さえるエアニスと、右の頬をパンパンに腫らしたトキが居た。

真面目な空気が白けてしまう。

「・・・お主らも飲むか？」

ティアドラの言葉に、

「俺は酒は下戸だ」

「あっはっは、僕も遠慮しておきます。

何を口にしても今は血の味しかしないでしょうからねー」

エアニスは無表情で、トキはギスギスした笑顔で答えた。

因みにエアニスは酒が全く飲めない。エアニスに限らず、エルフ族はアルコールに対する抵抗が人間に比べ弱いのだ。ハーフエルフであるエアニスにも、その体質は少なからず受け継がれていた。

以前チャイムは、エアニスに無理矢理酒を飲ませてしまった事があったのだが、その時は大変な騒ぎとなった。エアニスの酒癖は半端なく悪く、そして酒が抜けるまで3日を要した。

「二人がかりでわしを襲っておいてそのザマか。よくもここまでこの娘を守ってこれたのう」

ティアドラはカラカラと笑った。

エアニスとトキは、笑わない。不愉快そうな表情も見せず、ただ静かにティアドラの様子を伺う。

油断も、無かったといえは嘘になる。しかしそれを差し引いても、ティアドラは強かった。一瞬の攻防だったが、ティアドラの強さの鱗片を感じ取るには十分だった。

エアニスは席を立つと、レイチェルの肩に腕を回し、部屋の隅へと連れてゆく。

(おいレイチェル、なんだあの女は?)

エアニスは小声でレイチェルに話しかける。

(私も詳しくは・・・ティアドラさんの事は初めて聞きましたから)

(はあ!? 大丈夫なのか、正体も分からない奴にコッチの事情を話しちまっても!)

(正体は分かりませんが・・・)

ティアドラさんはエルカカの人間だという事は間違いありません)

(何で分かる?)

(それは・・・)

(それは?)

(・・・えっと。何となく、それっぽいというか・・・)

エアニスはいちの頭に思わぬチョップを入れた。今まで一緒に旅をしてきて、彼女の体に突っ込みを入れたのはこれが初めてかもしれない。旅の終盤においてようやく貰った初突っ込み。レイチェルは何となく嬉しかった。

「エルカカの民はの、同士である事が見ただけで分かるのじゃ。分かりやすく言えば、血に目印となる・・・そうじゃな、呪いのようなものがかけられておる」

部屋の隅でうづくまる二人にティアドラは話し掛けた。絶対に聞こえないような小声で、それなりの距離を取っていたのにも関わらず、二人の会話は聞き取られていたようだ。エルフ族並みの聴覚だなど、エアニスは舌打ちをする。

「エルカカの民として生まれ、"石"を探すという定めに従う以上、その呪いは親から子へと自然に受け継がれ、その者が定めを背いたり、定めを放棄し普通の生活を選んだりすると、呪いはおのずと消える。

百人を超える者が同じ目的の為に動いているのじゃ。仕方の無い事じゃが、誰もが皆、同じ思いでいる訳ではない。敵に寝返る者も居れば、民の定めから逃げ出そうとする者もおる。そういった者は自然と呪いが消えて、民の定めに従っている者から見ると、"違って"見えるようになるのじゃ。この呪いのお陰で、エルカカの民は見ただけで、同士だという事が判断出来る。これが今まで、エルカカの民が一枚岩として動く事の出来た秘密じゃ。

お主は今まで村の外に出た事は無かったのだから?

村の者と、村の外のと、違って見えるじゃろう？」

ティアドラの問い掛けに、レイチェルはハッとした表情で答える。

「・・・何が違うのか、言葉に出来ないけれど・・・分かります。村の外の人達は、明らかに私達と何が違うんです。

でも、ティアドラさんからは、エルカカの皆と同じものを感じます・・・」

「それはそうじゃろう。わしも、エルカカの民の血を継ぎ、定めに従っておるのじゃからな」

ティアドラの言う秘密を聞かされていなかったのか、長年の疑問が解けた、といった表情で何度も頷くレイチェル。

それに対して、チャイムは難しそうな顔をする。

「血に目印となる術をかけて、それを何世代にもかけて遺伝させるなんて事、出来るのかしら・・・？」

「ふむ」

チャイムの疑問に、ティアドラは満足そうに頷く。まるで物分りの良い教え子が、自分の期待した通りの疑問を抱いた事に喜んでいるようだった。

「今の世では無理じゃろうな。その術をエルカカの民にかけたのは、伝説にも名を残すエルカカの祖師、魔導師エレクトラじゃ。なおかつ師が存命していた250年前は今と違い、世界を満たす魔

力の量が遙かに多かった。今の世界では魔導式が起動する事も無い、失われた術の一つじゃ。

魔導式を今の世界の魔力量に合わせ、最適化して組みなおせば可能かも知れぬが、元の魔導式も、今となっては誰にも分からぬ。

ついでに言えば、その効果も永遠に続く訳ではない。印の遺伝は、せいぜい5世代と続かぬだろうな。故に250年経った今、その力も期限切れ目前という訳じゃ」

「はぁ・・・」

ティアドラの説明に、チャイムは何処か実感が沸かないと言ったような、曖昧な返事を返した。

理屈は分かるのだが、根拠が無く、胡散臭い。

「おい。何でもかんでもコイツの言う事鵜呑みにするのは危ねえぞ」

チャイムはともかく、レイチェルはティアドラの空気に吞まれ掛けていたので、エアニスはや水をかけるように口を挟む。

「そうじゃの。己の目で見て、己の耳で聞いた事しか信用しないというのは大事なことじゃ。しかし、自分が見聞きした事が必ずしも真実であるとは限らない事も覚えておくのじゃぞ。人間の五感は簡単に惑わされる物じゃからのう」

「五月蠅いよ。説教臭いよ。あとそのばあさんみたいな言葉遣いをやめろ。アンタ幾つだ？」

「レディに年を訊くとは失礼な奴じゃの。まあ、この言葉使いは・・・」

ここで初めてティアドラが言葉を詰まらせる。

「そうじゃの、キャラづくり・・・かしら？」

「作ってるのかよ！！！？今、語尾が変わったぞ！？」

「そう言うお主は、根暗そうな見てくれの割に騒がしいキャラじゃの一」

不意にティアドラの手が伸び、エアニスの顔の半分近くを隠す髪を指ですくった。

「ほほう、よく見れば綺麗な顔をしておるな。

ふふふ、嫌いじゃないぞ、お主のような奴」

「なっ！？」

「ちょーっ！！」

色目を使い見つめてくるティアドラに、エアニスは戸惑い、何故かチャイムが叫びながら席を立つ。

「きっ、気色悪い事をっ・・・！」

ティアドラは自身のプロポーションを主張するかのようポーズをとりながらエアニスに迫る。今のエアニスには彼女の大きな胸の谷間が見えているだろう。

「気色悪いとは酷い奴じゃの。こーんなイイ女に・・・お、お主煙草を持っておるな。一本貰えぬか？この街では税率が高くてなかなか手がだせんのじゃよ」

「！！・・・、って・・・！、話が飛びすぎだ・・・！」

話のテンポに付いて行けず、エアニスがガクリと肩を落とす。それでも面倒臭そうに胸元から煙草とライターを取り出すと、ティアドラに手渡した。

「ぬ・・・！」

チャイムが眉を吊り上げる。煙草を受け取る時にティアドラの指が、意識的にエアニスの手を触っていたように見えたのだ。というか、絶対、間違いなく、手が離れるまでティアドラはエアニスの指を絡めるように触っていた。

「ぐぬぬ・・・！！」

胸を反らす様に椅子にもたれかかり、ティアドラは煙草を啜って火をつける。足と腕を組み、ゆっくりと紫煙を吐き出す。腕を組んでいるせいか、もともと目立つ胸元が強調される。煙草を指で挟み、ゆっくりと灰皿に灰を落とす仕草も、いちいち色っぽい。

チャイムの大人のオンナ像を絵に描いたかのような姿だった。

それまで黙って事の成り行きを眺めていたトキが、ゆっくりと視線を巡らせた。

ティアドラ、チャイム、そしてレイチェルへと順番に、視線を巡らせた。

ネットリとしたその視線は、彼女達の胸に向けられているような気がした。レイチェルの背中に今まで感じた事の無い悪寒が走り、何と無くトキの視線から逃れるようにもぞもぞと体の向きを変えた。



チャイムは横目でエアニスを見る。
彼女の心配を他所に、エアニスはティアドラの色香など何処吹く風といった様子で不機嫌そうに足を揺らしている。

安心した。でも今に始まった事ではないけど、エアニスの女の子に対する関心の薄さは異常なんじゃないかな。トキと一緒に暮らしていたって言うしゲイなのかな。

ん、でも、前々からあたしよりレイチェルにばっか優しいし・・・レイチェルって実連年齢より若干幼く見えるから、ひょっとしてエアニスってロリコン！？

あ、でもあたしよりレイチェルの方が胸あるし・・・って、何考えてんだろあたし。

頭をぶんぶか振って、チャイムは憂鬱そうに溜息を吐く。

因みに。ティアドラのそれに比べると、チャイムの胸もレイチェルの胸もつつまじやかなものでしかない。

そっと、肩を叩かれた。

振り向くと、そこには優しく微笑みかけるトキが居た。

「大丈夫です。胸がちっちゃくても、チャイムさんならカタチで勝負が出来ますよ」

「心を読むなあァ！！あと何でそんな事を知っている！！！」

チャイムは丸太の椅子でトキを殴り倒した。更に問い詰めるように、「いつだ！？いつ何処であたしの胸のカタチを見た！！？」と、執拗にトキの腹部を丸太で殴打する。

二人の間にどんなやり取りがあったのかは知らないが、関われば更に話は脱線する。エアニスとレイチェルはそんな二人に少しだけ目を向けると、何も見なかったかのようにティアドラへと向き直った。

「それにしてもお主、とんでもない業物を持っておるの」

「あ、何だって？」

突然話を振られ、エアニスは思わず聞き返す。結局、話は脱線してしまったようだ。

煙草を灰皿に押し付けたティアドラは、楽しげに言葉を続ける。

「その腰の剣じゃ。今は、"オブスキュア"と呼ばれておったか」

イライラと揺さぶられていた、エアニスの足が止まる。

「歴史の中でも三指に入る魔法剣じゃ。いや、魔剣と呼ばれた時代の方が長いかもしれぬな。持ち主の魔力と命を食い潰し、この世に在らざる者さえも斬り裂く剣じゃろう？」

ティアドラは何か気付くと、右手の親指と人差し指で輪を作り、それを覗き込むようにしてエアニスを見た。その仕草にどのような意味があるのか分からなかったが、ティアドラはこう言った。

「おっと、お主はエルフ・・・いや、ハーフエルフじゃな？それだけの魔力を宿していれば、人間と違い剣に命まで喰われる事はなさそうじゃの。なるほど、それなりに相応しい使い手に渡ったという訳か」

エアニスはまだ、自分がハーフエルフだという事をティアドラに言っていない。言う必要も無いからだ。

エルフ特有の外見的特徴を持たない彼が、見ただけで自分の種を言い当てられたのは初めてだった。

「その剣の持ち主について聞いた噂だと・・・あの"月の光を纏う者"、ガード=ウォルサムが持つ

ていたという噂を聞いた事があるぞ」

チャイムも、レイチェルも、トキも、驚きを隠せなかった。エアニスは思わず思わず立ち上がり、ティアドラから離れた。まるで恐れるように。

「月の光を纏う者”の出鱈目な武勇伝も、”オブスキュア”があれば不可能な事ではないと思っておってあったが・・・ふむ、まさかとは思ったが、やはりそうか。

お主が、そうなのか」

ティアドラはそこで一度言葉を切ると、同情とも呼べる表情でエアニスを見上げた。

「二度も”石”に関わるとは・・・数奇な運命じゃの」

優しげとも呼べるその視線に、エアニスは呆気に取られたような表情で答える。

「何で、そんな事まで知ってるんだよ・・・？」

知り過ぎだ。ただの知識だけで、これだけの事を言い当てられる筈が無い。ティアドラへの不信感が再び強くなってゆく。

「わしが知っておるのはその剣の伝承と、その持ち主が2年半前にエルカカの協力者だったという事だけじゃ。それだけの事を知っていれば、お主をザード=ウォルサムだと思うのが普通であろう」

何でも無い事のようにティアドラは言う。確かに、その通りかもしれない。

「わしらは世界中に散らばった、たった7つの石ころを探しておるんじゃぞ？少しでも不思議な噂を聞きつければ、徹底的に調べ上げ、”石”との関連性を疑う。エルカカが長年培ってきた情報網を甘く見るでないぞ？」

「・・・っ、じゃあ何故俺にエルフの血が混じっている事が分かる！？

見ただけじゃ分からない筈だ！」

自分がハーフエルフだと言うと事は、二年前シャノン達に教えた覚えも無い。

「言い忘れてあったが、わしはこう見えても魔導が本職でな。相手の魔力の総量など、見ただけである程度分かるわ。お主の魔力は、人間のそれでもないが、純粋なエルフと比べると、僅かに劣る」

そう言って、再び指で作ったリング越しにエアニスを覗き見た。

レイチェルが恐る恐る口を挟む。

「魔力を持つ人なら、触れる事で相手の魔力量を計る事が出来ます。

でも、自分の魔力を周りの空間に流し込んだりする事で、相手の魔力に触れる事無く計る方法もあります・・・。

見ただけで相手の魔力量を測る方法なんて、聞いた事ありません」

レイチェルの疑問に、ティアドラはち、ち、ち、と指を振りながら舌を打った。

「それは魔力の無駄使いじゃな。わしは指で作った輪と、瞳を陣に見立て魔導式を流し込んでおる。輪っかで作った境界から、違う視点で世界を覗き込むのじゃ。

見えるものは魔力だけとは限らぬぞ。魔導式を組み替えれば、あらゆる目で世界を見通す事が出来る」

「・・・」

「・・・」

ティアドラの説明に、レイチェルと、そしてチャイムも表情を引き攣らせる。魔導の知識を持たないエアニスとトキには何の事か分からない。

「何なら、魔導式を教えてやろうか？」

「無理無理無理っ！！！」

「術式の複数同時起動のうえ、陣の媒体に自分の体を使うなんて危険過ぎます！！」

「そんな事もあるまい。それぞれの式はある程度腕のある魔導師なら扱えるものじゃ。それを確実に、一つ一つこなしてゆくだけじゃ」

「か、簡単に言うわね・・・」

エアニスはチャイムの肩を指でつつく。

「すごいのか、それ？」

「無茶苦茶すごいわ。魔導技術と、命知らずな所がね」

チャイムは感心したというよりは、呆れているようだった。人体を魔導式の一部に組み込むという事は、万一魔力の制御を失った場合、その身も魔力の暴走、又は崩壊に巻き込まれるのだ。

「とまあ、わしの言う事を信じて貰うために、わしの博識さをアピールしてみたわけじゃが・・・どうにも効果が薄かったようじゃの・・・」

「胡散臭さが倍増してるぜ」

エアニスは剣から手を離しているが、その目から警戒の色は消えていない。

「では、もう一つ知っていることを話してみるかの」

ティアドラは椅子に座り直し、空になったグラスに葡萄酒を注ぎながら言う。ぐびりと一口仰ぐと、

「その剣・・・オブスキュアの持ち主の話じゃ。恐らく、お主の前のな」

「・・・え？」

「確か 」

ガシャーーン！！

と、いきなりエアニスがテーブルにダイブしながらティアドラの口を塞いだ。その勢いのまま、エアニスとティアドラは床にもつれるように椅子ごと倒れ込む。

「分かった！ お前が博識なのは良く分かったよ！！」

「んっもっふっふー・・・」

慌てるエアニスに、ティアドラは意味ありげに微笑む。

「って、何どさくさに紛れて抱きついてんのよ！！！」

「いでででだああああ！！」

チャイムは、ティアドラに覆いかぶさるエアニスの背を踏みつけ、長いうしろ髪を思いっきり引っ張った。エビ反りになって床を転がるエアニス。

「もう！！ ティアドラさんもあまりからかわないでよ！！」

エアニスに制裁を下したチャイムは、押し倒されて仰向けになったティアドラを引き起こす。ティアドラは立ち上がったと思ったら、おぼつかない足取りでフラつき、そのままチャイムに抱きつくように倒れこんだ。ティアドラはチャイムの背に腕を回し、彼女の胸に顔をうずめる。

「うわぎゃあああああ！！！！」

「むっしっしっし、かーわいー胸じゃのー」

「いいいやああああっ！！ あたしそっちのケは無いんだからああ！！！！」

がっしりと両腕と体を固められ、身動きできなくなったチャイムはティアドラのセクハラ攻撃になす術が無い。

トキとレイチェルは呆気にとられポカンと眺めているだけだった。仕方なく、エアニスはチャイムからティアドラを引き剥がしにかかる。

「やめろエロババア！！ いい加減にしないとぶった斬るぞ！！」

「なひをなんばたんじゃがっ！！」

「！！？」

突然凄い剣幕で怒鳴られた。でも何を言っているのか分からない。

その威勢も一瞬で消え去り、今度はへろへろとエアニスに寄りかかる。思わず両肩を掴んで、体を支えてしまう。

「・・・こいつ、酔っ払ってるぞ」

チャイムは机の上に横倒しに鳴った葡萄酒瓶を見る。それほどの量を飲んだ訳でもない。

ティアドラはエアニスから体を離すと、フラフラと丸太の椅子を起こし、座った。机に突っ伏し、楽しそうに笑う。

「にやははは、今日はとても気分が良い！」

「何が楽しいんだ・・・コッチはいい加減付き合いきれねーぞ」

「ようやく最後の石が、この地に届けられたのじゃ・・・。

神殿の護り人として、この日をどれだけ待ち侘びたと思う？ 嬉しくない訳があるまい？」

ゆっくりと、目を閉じてティアドラは呟く。感慨深く、そして嬉しそうに。

「本当に・・・良くがんばったの・・・」

その言葉はレイチェルに向けられたものだったのか。

それを最後に、ティアドラは眠ってしまった。

「・・・ついていけねーな、コイツには」

「うん・・・何か、凄い人よね・・・いろいろ」

ティアドラを壁際のソファーに寝かせると、ドッと疲れた様子でエアニスは椅子に座り込む。

「で、どうするんですか？ ティアドラさんの言う事、信じるんですか？」

トキも戸惑っているようだった。エアニスは眉間にシワを寄せる。

「こんな馬鹿けた接触をする敵が居ると思うか？」

「・・・居たら嫌ですね」

「何というか・・・疑う気にもなれなくなってきたよ・・・。

一応、言ってる事もデタラメばかりじゃなさそうだしな」

「それも含めて全部演技、実は敵のスパイでした！という可能性は？」

エアニスは横目で、よだれを垂らしながら眠るティアドラを見る。

苦手なタイプだ。しかし、悔しいことにエアニスの本心は憎めない奴だなと感じていた。彼女の間の抜けた寝顔を見ているうちに疑心暗鬼に駆られるのが、馬鹿らしくなってしまった。

エアニスは肩を竦める。

彼女のこの振る舞いが全て演技だとしたら・・・

「・・・もしそうだと、もう俺の負けでいいよ」

「信じてもらえてなによりじゃ！」

「うおっ！！」

ビヨン！！と、ティアドラが跳ね起きる。バネ仕掛けの人形かと思った。

「そんな事より、腹が減ったぞい。今宵は祭りじゃ！外に食いにいくぞ！！」

「え、でも・・・」

そんな悠長な事をしていても良いのだろうか、と言い淀むレイチェル。

バシんと、ティアドラに背中を叩かれた。

「そんなに急いでも何も変わりゃあせん！今宵と明日は旅の疲れを癒すが良い！

どの道、わしの方とて色々と準備もあるしの」

エアニス達としては身構えてこの街へやって来たつもりだったが、案内人は随分とお気楽だった。確かに、ここ数日は野宿続きだ。休息や、武器の手入れに時間を掛けたいという思いはある。

しかし、旅の終着点が目の前にあるのだ。4人とも、何処かはやる気持ちがあった。

「・・・まあ、な。急いだ所で良い事は無いか」

エアニスが窓から夜空を見ながら言った。

天候も暫くは安定しそうで、急に雪が降り始め山に入る事が出来なくなるという事も無さそうだ。

それに、目的を達成し旅を終えてしまう事に僅かながらの名残惜しさもあった。こんな状況だが、もう少しだけ新しい仲間達と一緒に居たいと、エアニスは思ってしまった。

「おっ」

エアニスが見上げていた夜空に、一筋の光が昇ってゆく。

その光は夜空に大輪の華を咲かせると、一息遅れてドンと夜の空気を響かせた。花火だ。レイチェルが窓に駆け寄る。夜空に軌跡を残しながら消えてゆく火花を、ぽかんと口を開けて眺めていた。

「・・・すごい・・・すごい！すごい！！」

「あ、ちょっとレイチェルさん！？」

大きな打ち上げ花火など見た事が無かったのだろう。レイチェルは表情を輝かせ、表の通りに

飛び出して行く。その様子を見て、苦笑いを浮かべるトキに、エアニスとチャイム。

「やれやれ、仕方無いですね・・・」

「ま、俺も腹は減ってるしな」

「行こうよ、あたしも花火見たいな」

「よし、ついて来い！！わしのお勧めの店があるんじゃ。祭りで混んでいるかも知れぬが、わしなら顔パスじゃ！」

威勢良く腕を振り上げるティアドラは、4人を引率するように意気揚々と街へと繰り出す。

皆で表通りに出た時、チャイムがこっそりとエアニスの手を掴む。

「ね、エアニス」

「何だ？」

「さっき、ティアドラさんの口を塞いだのは何で？」

その剣の前の持ち主の事、あたし達に聞かれちゃマズイの？」

エアニスは視線を泳がせると、一つ咳払いをして真面目な声で言った。

「これから言う事は、誰にも言うんじゃないぞ？」

「え・・・う、うん。わかった」

その眼差しに、思わずチャイムは居住まいを正す。

「実は俺・・・エルフで一番権力を持った王族の、王子なんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」



「でも俺ってハーフエルフだろ？跡継ぎ争いとか、周りの目だとか、色々と軋轢がキツくてさ。ガキの頃にキレて、王家に伝わるこの剣を盗んで、城を飛び出したんだ」

「……」

「この剣の前の持ち主のを話されると、俺の実家の事から、俺の素性の話に繋がるだろ？
だから、ティアドラに話をされたくなかったんだよ」

「……………」

「それだけさ。トキ達には秘密だぞ？」

「……………えっ。まじ？」

「って言えば信じてくれるか？」

「信じかけちゃったじゃないのよ！！！」

「ふぐぐ！！」

チャイムはエアニスの唇を掴んで引っ張り倒した。

「何やってんですか、また夫婦漫才ですか？」

歩みの止まっていたエアニスとチャイムに、トキが声をかける。

「だだだ誰が夫婦よ！

っもう！ 本当にエアニスはっ！！ 先に行くわよ！！」

何故か顔を赤く染めながら、チャイムは駆け足でトキ達の元へ走ってゆく。

エアニスは立ち上がると、引っ張られた唇を親指でなぞる。

僅かに、肩が震えた。痛かったからではない。おかしくて、思わず綻ぶ口元を隠していたのだ

。

「……まあ、いいか」

すっかり癖付いてしまった溜息を吐くと、エアニスは仲間と共に喧騒の渦巻く夜の街へと繰り出した

レイチェルの瞳は、光り輝くファウストの街を映していた。

群青色だった空はすっかり夜の帳が降り、建物の軒先や屋台を繋ぐ様に吊るした雪の結晶の飾りがチカチカと光っていた。火や魔導ではなく、電気仕掛けの装飾灯のようだ。

ドン、とおなかに響く音に顔を上げると、夜空を赤と黄色の花火が彩っていた。山間で響く花火の音は冷たい空気の中で何度も何度もこだまして、とても心地が良かった。

輝いてるのは街だけではない。

街のメインストリートを着飾った沢山の人達が、とても楽しそうに、とても幸せそうに歩いている。家族や友人、そして恋人と。笑い合いながら、それぞれのお祭りを楽しんでいるようだった。

生まれてから17年間、人目をはばかる隠れ里に住んでいたレイチェルは、これだけ沢山の人々を見たのは初めてだった。そして、世界はこれほどまでに幸せが満ちているのだという事を、初めて知った。

慣れない人込みの中、レイチェルは石畳の段差に足を取られてしまった。思わず後へバランスを崩し、そこにいた恰幅の良い中年の男にぶつかってしまった。

慌ててすみません、と謝るレイチェルに、男は気にするなと楽しそうに笑って、レイチェルに雪の結晶の飾りを手渡した。良く見ると男の手には雪の結晶のほかにも月や星、町の周りに多く生えている杉の木を模した飾りを沢山持っている。祭りの関係者なのか、それを道行く子ども達に配っていた。

雪の結晶は町中にぶら下がっているものと同じ形で、原理は分からないが、発光塗料で自ら光っているようだった。初めて見る、不思議な光。

レイチェルは自分の服をキョロキョロと見回し、胸元のマントの留め具に、男から貰った光る雪の結晶を飾った。

似合ってるよと笑いかけてくれた男へ、レイチェルは嬉しそうに、"ありがとう"と言った。

何もかもが輝いていて、何もかもが優しい。

レイチェルは、世界はもっと冷たく、残酷なものだと思っていた。

「・・・平和な世の中になったもんだな」

そんな呟きにレイチェルは面を上げると、エアニスがとても不思議そうに、街の雑踏を眺めていた。場所は祭りを楽しむ人々でごった返すメインストリート。ティアドラを先頭に、エアニス達は食事の出来る店へと向かい歩いていた。

「ほんの少し前は、何処もかしこも戦争で・・・こんなに沢山の人が笑い合えるような世界なんて、想像もできなかった・・・」

エアニスは何年もの間戦場を渡り歩き、戦争が終結したと同時にミルフイストの山奥へと引き籠もってしまった。戦争が終わってからの世界を、肌で感じる機会が少なかったと言える。

これについては、トキもチャイムも少なからず同じ気持ちだった。彼らは生まれてからずっと

、戦争と共に生きてきたのだ。

平和な世界で生きていた時間より、戦争と共に生きていた時間の方がずっと長いのだ。

「こんな事を言うのも恥ずかしいですが・・・」

トキも雑踏に目を向けながら。エアニスから視線を外しながら、言った。

「これはエアニスをもたらした平和だと言っても、過言ではありませんよ」

「・・・はぁ？何言ってんだ？」

僅かな間を置き、エアニスは呆れたように言う。



まだ、ほんの2年半前の出来事。

世界中の権力者が欲しがり、世界大戦勃発の要因にもなったと言われる、世界に七つしか存在しない無限の魔力増幅機、"ヘヴンガレット"。

発見された6番目の"ヘヴンガレット"の争奪戦に巻き込まれたエアニスは、それを手に入れ、たった一人で世界を相手に戦った。

理由は世界への復讐。

たった一人で幾千という兵士を相手に戦い、

たった一人で幾千という人間を殺す近代兵器と戦った。

ヘヴンガレットによりもたらされる莫大な力と、失った仲間から引き継いだ情報網を使い、世界を"調律"し、誰もが勝つことの出来ない、不毛の戦場を演出した。

石の存在を見失い、エアニスの調律によって急速に疲弊してゆく国々が、20年以上続けた戦争の終結を選択するのにそれほど時間は掛からなかった。

それがエアニスの、"月の光を纏う者"が世界に残した功績。

そしてその事実はあまりに非現実的故に、表沙汰になる事は無く噂や都市伝説のように語り継がれていた。



「確かに、"月の光を纏う者"の噂は出鱈目なものばかりじゃが・・・それらが本当だとすれば、先の大戦に与えた影響は、少なくない。

戦争終結を早めた要因になっておるのは、間違いないじゃろう」

ティアドラは、横に並ぶエアニスを見ながら言った。エアニスは鬱陶しそうに舌打ちをする。

「じゃが、大戦中の"月の光を纏う者"の噂は、何処までが本当で、何処までが嘘か、わしの情報網でも判断が出来ないものばかりじゃ。

"月の光を纏う者"などという存在は出鱈目で、全ては都市伝説。戦争に負けた者が言うお決まりの言い訳だとも言われておる。

さて、実際の所はどうなのじゃ？」

「・・・さーな」

「ヴァルハラ平原で圧倒的優位に立っていたレオニール軍が一夜にして壊滅したというのは？」

「・・・一夜じゃない。破壊工作の仕込みも含めりゃ、二晩かかってる」

「ヴァノン島のアルストニア海軍の艦隊を沈めたのもか？」

「魔導式の新造艦何隻かと・・・何となく物騒な爆弾積んでた飛空艇もあったから沈めた・・・

。

というか、やめてくれ。あの頃の話は、したくないんだよ」

何だかんだで答えてしまったエアニスの答えに、トキとチャイムは目を泳がせる。スケールがやばい。

「ならば頼む、最後に一つだけ！」

「・・・なんだよ？」

随分と意気込んだ懇願に、エアニスは思わず先を促した。

ティアドラはゴクリと喉を鳴らし、どうしても確認しておきたかった質問を口にする。

「"月の光を纏う者"には超絶美男子の情報屋が付いており・・・

なんとその二人はできているという噂が・・・！」

「誰が流した噂だッ！！？」



それから暫くして、エアニス達はティアドラの馴染みのバーで食事をした。良い酒が揃っているという事で、チャムとトキも軽く飲んで行く事にした。やっぱり未成年ですからと自分を律したレイチェルと、アルコールに耐性が無いエアニスは生姜をベースにしたフルーツジュースを飲んだ。

野宿続きで数日振りにまともな食事をとった一行は、一人を除いて上機嫌で店を出た。

「ああ、クソ。頭痛え・・・！」

「あれ、エアニスってお酒飲んでたっけ？」

「飲むかよあんな気持ち悪いモン・・・飲んで無くても匂いだけでアルコールが回って来るんだよ・・・あとお前も酒臭い・・・」

「お酒の匂いだけで酔えるなんてお手軽よね・・・あたしなんてぶどう酒いっぱい開けちゃったわよあははははははははは！！！」

「お、お前何かテンション変だぞ・・・！？」

不思議なタイミングで笑い出したチャムにエアニスはどん引きする。

「ったく・・・じゃ、メシも食ったし戻るか・・・って、あれ？」

エアニスが振り返ると、そこにトキ達の姿が無かった。エアニスとチャイムの周りを、若干減ったものの祭りを楽しむ沢山の人々がどンドンと流れてゆく。

はぐれてしまったようだ。エアニスは頭を掻きながら、

「まあいいか。勝手にティアドラの家に戻って・・・」

「ふおあー」

いきなりチャイムが気の抜けた声と共に倒れ込んできた。チャイムの体に押された上、どういう体勢なのか足まで取られた状態となり、たまらずエアニスは石畳へ背中から倒れこみ、一段飛び出していた道の縁石に後頭部を打ち付ける。

視界が一瞬白く瞬き、声も無く悶絶するエアニス。

「あや、ごめーんエアニス・・・ちょっと飲みすぎちゃったかな・・・」

「こ、この野郎・・・」

チャイムの体を引き剥がし、エアニスは立ち上がろうとしたが、

「う・・・」

視界がフワリと揺れた。アルコールの匂いに当てられ、感覚が鈍くなっている。匂いだけでここまで酔ってしまうとは自分でも思わなかった。

エアニスは頭を振り、チャイムの腕を引っ張り立たせようとする。

「あああもう！！ほら、立て！！帰るぞもう！！！」

「あああああっちょっとまってよあああー」

「うおー！！」

エアニスとチャイムは、路上の端っこでグデングデンともつれるように転がった。



「あー・・・気持ちイイ・・・」

「ああ・・・もう酒のある場所にも近寄りたくねえ・・・」

場所は変わり、街のはずれの高台。

丘の斜面に張り付くように家々が並び、その間を階段のような道がジグザグに走っている。何故街の中心に近いティアドラの家でなく、こんな街外れに居るのかと言うと、単に迷子になっているだけだった。エアニスは帰り道を覚えていたが、チャイムがアッチに行きたいコッチに行きたいと寄り道を繰り返すうちに、いつの間にかこのような場所に辿り着いていたのだ。最早エアニスにも帰り道は分からない。

二人は階段の折り返された、踊り場のような広場に座り込んでいた。道の端には転落防止の杭と鎖で出来た柵が続いており、柵の向こうはちょっとした崖となっている。さっきまでの人混みが嘘のように、この辺りは人通りが全く無い。

柵の隙間から足を投げ出すような格好で、二人は目前に広がる街の明りを眺めていた。街の中央を横切るメインストリートを中心に、オレンジ色の沢山の明りが瞬いている。

「綺麗ねー・・・」

「・・・ああ」

チャイムの呟きに、エアニスは素直に頷いた。

世界で最も機械文明が進んでいるベクタの夜景も素晴らしいものだったが、ファウストの夜景も負けず劣らずの美しさだった。

何より、ベクタの夜景に比べると温かみを感じる。

エアニスは祭りに繰り出し、雑踏の中で笑いあう人々の顔を思い出す。

平和に満ちた、暖かな街の明り。

「エアニスは・・・何であまり人と関わろうとしないの？」

突然の問い掛けに、エアニスは僅かながら当惑する。

「なんだよ、唐突だな・・・」

「いいから」

「人間が嫌いだから」

考えるのが面倒だと言わんばかりの即答に、チャイムは笑った。

「じゃあ、エアニスはあたしの事も嫌いなの？」

「ああ！？」

いきなり何を言い出すんだこいつは。エアニスが言葉に詰まっていると、

「レイチェルや、トキも嫌い？」

「・・・いや・・・嫌い、じゃない」

ゴホンと咳払いをしてから、そう答えた。

どうやら、"そういう"話では無いようだ。

「エアニスが、戦争でどれだけ人間の嫌な所を見てきたのか・・・あたしには分からないけどさ・・・」

何処か寂しそうな声にエアニスが振り向くのを待ってから、言葉の続きを口にした。

「全ての人間が、そういうのじゃ無いでしょ？」

相手の目を見ながら優しく言うチャイムに、エアニスは口をつぐんだ。

もし許されるなら、俺の手でこの腐った世界を————

あれはいつの事だったか。

"石"の力を手に入れたエアニスは、このまま世界を壊し尽くしてしまおうかと思った事がある。

愚かで醜く愚鈍で醜悪な人間の姿を見てきたエアニスは、人と世界と自分に失望した。こんな世界など、初めから無い方が良いのだと思った。

戦争の中で、前回の"石"を巡る戦いの中で、そう思った。

誇大妄想も甚だしいが、絵空事ではない。"石"の力さえあれば、あの時のエアニスには不可能な事では無かった。

それをしなかったのは勿論、世界はそういった側面ばかりでは無いと分かってはいたから。

シャノンやゲイル、レナと出会えたこの世界の全てが過ちではないと分かっていたから。

いっそ、自分がそれすらも理解できなくなる程に壊れてしまえば楽だったのだろうが、幸か不幸かエアニスはこの世界を受け入れてしまった。妥協なのか、諦めなのか、諦観なのか。受け入れる事が出来てしまった。そして、世界を受け入れた自分を嫌悪し、受け入れざるを得ない世界に失望し、エアニスはひたすらに剣を振るった。

そして残ったのは、世界に対する失望と、人間に対する嫌悪。

嫌悪は時が経つにつれて無関心へと変わっていったが、エアニスが人間を嫌っている事に違いは無かった。

それは、今でも変わらない。

しかし、稀に出会うこのようなタイプの間人間達と言葉を交わすと、不意にその認識が変わってしまいそうになるのだ。

「もっと、この幸せな世界を楽しもうよ！ 勿体無いわよ？」

チャイムは両手を広げ、楽しそうに言った。エアニスは頬杖をつきながら彼女を見上げる。

「本当、お前は世界を・・・人生を楽しんでるよなあ」

「嫌な事の方が多いいけど。あ、でもやっぱり、戦争が終わってからは楽しいことの方が多いかもしれないわ。うん、きっとエアニスのお蔭だね！」

おどけるチャイムに、エアニスは鼻を鳴らす。

「はあ・・・そうだな。今の小屋結構傷んでるし・・・ミルフィストに戻ったら、もう少し人間の多い街中に引っ越すよ・・・」

「ダメよ引っ越すだけじゃあ！！ エアニス街にいた頃は準引き籠もりだったんでしょ？ 外に出なきゃダメよ。とりあえず働いてみたら？」

「それは嫌だ」

即答だった。

「・・・そうね。街で働くエアニスとかちょっと想像出来なかいわね・・・」

「ま・・・善処するよ」

「ありがとう」

抑揚の無い声で、大して感謝している様子も無かったが、突然エアニスがチャイムへ感謝の言葉を告げた。

キョトンと呆けた顔のチャイムに、エアニスは視線を夜景に向けたまま続ける。

「いつまでも、こんな事思っていたら・・・世界を、人間を拒絶していたら駄目だとは思ってたんだ。でも、お前とレイチェルのお蔭で、歩み寄れそうな気になってきたよ」

「トキが抜けてるわよ？」

「あいつは駄目だ。あれは世界や人間に対して感想を持ってねえ」

「ああ・・・」

苦笑いを浮かべるチャイム。彼はアレで良いのだろうか？

「まっ、あたし達のお蔭とかじゃなくて、あんたが戦争を終わらせたからじゃないの？
争う理由が無ければ、この街の人達みたいに、みんなで笑い会えるようになるわよ」
軽く言うチャイムに、エアニスは首を振る。

「いいや、違う。そうだとしても、お前が居なかったら、俺は自分を責め続け、人間が嫌いなままで・・・いずれまた世界を憎むようになっていたかもしれない。

お前の言葉に、俺は何度も救われてるんだ」

エアニスは、改まってこんな事を言う柄ではないが、これはどうしても伝えておきたい言葉であった。偶然にも二人きりとなり、この旅の最後の戦いを控えた今、この言葉を伝えるのは今しかないと思った。だからエアニスは、彼女に向き直って微笑みながら言った。

「お前と出逢えて、本当に良かったよ」

ボン！

とチャイムの顔が真っ赤に染まる。

「ああ・・・うん、いやあ・・・えへへへ」

「ニヤついてんじゃねーよ、気色悪いな」

「いひひひ・・・だってさー・・・」

礼を言ったエアニス自身も照れたように笑って、真っ赤になってグネグネと身をよじるチャイムを肘で突つつく。

「じゃあさっ、感謝の想いを込めてご褒美ちょうだいよ！」

エアニスは表情一転、チッと舌を鳴らしチャイムを睨む。しかしすぐに短く息を吐くと、軽く肩を竦める。

「図々しい奴だな・・・まあ、いいか。何か欲しいモンでもあるのか？」

エアニスにしては珍しく心が広がった。これまた柄ではないが、日頃の感謝を込めてプレゼントを渡すのも悪くはない。エアニスは笑いながら問い掛けた。

そして、チャイムは言った。

「キ、キスをしてちょうだい！」

「・・・・・・・・」

エアニスの笑顔が固まる。笑顔のまま、固まった。

顔を真っ赤に染めたチャイムは目を瞑ると、くいと少し上を向くように、エアニスに顔を寄せた。

チャイムの荒い吐息がエアニスの前髪を揺らす。ハッとエアニスが我に返り、

「何故そうなる！！？」

そのの唇を摘み、彼女の顔を思いっきり明後日の方向へと振り曲げた。不意に、ほんの少し前にエアニス自信彼女から同じような仕打ちを受けていた事を思い出した。

「ええええっ！！ そうなる雰囲気じゃなかった今の！？」

「ならねーだろ普通！ 流れを読め！！ 順番を守れ！！ 何考えてんだお前は！！？」

「き、昨日の夜の事！！何か曖昧なまま話が終っちゃったから、その続き！！」

「っ・・・！！」

エアニスは昨晚の夜、見張りをしながら車の中で彼女と話し合った事を思い出した。

「あああ、あれだけ言えばあたしがあんたの事どう思ってるのかわわわ分かるでしょ！？

分かってるわよね！！？」

「苦しい・・・襟首を掴むな！！なんで喧嘩腰なんだよ！？」

「いいから答えてよっ！！」

チャイムは乱暴にエアニスを押し押す。座った姿勢からとはいえ、エアニスはまた石畳に後頭を打ち付けてしまう。

「普通とか、嫌いじゃないとか・・・そんな言葉で誤魔化さないで」

チャイムは両手を仰向けに倒れたエアニスの頭の左右について、エアニスの顔を真っ直ぐ見下ろす。自らの感情に押しつぶされそうな、苦しそうで切なそうな表情。

そして溢れかえる感情を抑えきれず、震える声で訊いた。

「あたしの事、ひとりの女の子として・・・好き？」

「・・・俺もずるい奴だとは思うけど、お前も大概だな」

「・・・っ」

不満を漏らしながらも、エアニスの声は優しい。

「昨日の晩からどうした？急にこんな話を・・・」

チャイムは、エアニスから目を逸らす。

「だって、旅はもう終わりでしょ？

もうすぐ・・・あの魔族達と戦う事になるでしょ？」

そこまで訊いて、エアニスはチャイムの言わんとしている事が分かった。

あの魔族とは、無論イビスとアイビスの事だ。そして、彼らとの戦いが近づいてきたからという理由で、このような話をするという事は・・・

「何だ？あいつらに俺が殺られるとでも思ってるのか？」

「エアニスは負けないよ。強いもん。心配なのはあたしの方よね・・・」

「・・・」

つまり。

魔族との戦いの前に、今の自分の気持ちを伝えておきたかったという訳だ。万一、自分が殺されてしまってからでは遅いから。

顔のすぐ横にあるチャイムの腕が、震えていた。エアニスには良く分かる。この震えは緊張や筋肉の疲労等といったものではない。

恐怖による震えだ。

「・・・怖いか？」

「・・・っ」

「怖いのなら、街に残っててもいいんだぞ？」

「それは嫌！！治療魔法が使えるのあたししか居ないでしょ！？

あいつらとの戦いで大怪我したらどうするのよ！？」

その言葉にエアニスは一瞬呆気にとられたような顔で驚き、すぐに笑った。

「はっ、自分の心配より他人の心配かよ・・・」

「・・・」

「ホント、お前らしいな」

チャイムに押し倒される形になっていたエアニスが、体を起こす。チャイムは起き上がろうとするエアニスから身を引こうとしたが、不意にその腕を掴まれた。

「わ・・・」

チャイムが小さく驚きの声を漏らす。

起き上がったエアニスは、チャイムの体を引き寄せ、抱き止めたのだ。チャイムは驚いて、体を動かさずにいた。

「な、何・・・？」

「ん・・・何となく・・・」

エアニスは、チャイムの背に回した腕に、ぎゅっと力を入れる。

ただ、無性にチャイムの事をいとおしく感じ、抱き締めたくなった。普段ではチャイムに殴り飛ばされかねない暴拳だが、エアニスはごく自然に、こうする事が当然とでも言うように、チャイムを抱き締めた。

チャイムの体は思いのほか小さく、エアニスは少しだけ驚いた。呼吸をしているのが背中に回した手に伝わる。何よりも分かりやすい、生きている事の証。これを最後に感じたのはいつの事だったか。あの日、この息遣いが腕の中で失われてゆくのを感じた時、自分は何を考えていたのだろうか。嫌が応にも、思い出してしまいそうになる。

緊張していたかのように強張っていたチャイムの体からふっと力が抜ける。そして、チャイムもエアニスと同じ様に、彼の背中に恐る恐る腕を回して、ぎゅっと力を込めた。

「・・・エアニス」

チャイムがエアニスの肩に顔を当てて、小さな声でその名を呼んだ。

エアニスの胸に、何ともいえぬ充足感が満ちる。

これが、幸せなどと言うものだろうか。

エアニスは、この腕の中にある存在を絶対に手放したくないと思った。



街外れにわだかまる夜闇に。

その様子を見つめる三対の瞳があった。

「これは・・・非常にマズイですね」

「うむ・・・完全に姿を見せるタイミングを逃してしまったの・・・」

「だからダメですって言ったじゃないですか・・・！」

トキとティアドラ、そしてレイチェルは、身を隠して一部始終を見ていたのだった。

いや、一部始終という言葉には語弊がある。エアニスがチャイムを抱き止めた辺りから、一同は恥ずかしさと罪悪感のあまりその光景から目を背けてしまっていた。

彼らが居るのは、エアニスとチャイムが座る場所から殆ど離れていない。二人が居る踊り場から階段を少しだけ降りただけの、話し声も十分に聞こえてくるような場所だ。そのような距離にも関わらず何故見つからず覗きを成立させているのかということ、それはティアドラが光の屈折と空気の流れを魔導で操り、その姿をエアニス達から隠しているからだった。相手にこちらの姿が見える事は無く、多少の話し声も伝わらない。更には人の第六感にも干渉して気配までもを攪乱する、高度にして大人気なく、そしてこの用途においては極めて悪質な結界だった。

元はといえば、雑踏の中でエアニスとチャイムを意図的に置き去りにし、その慌てる反応を影から観察して面白がるという些細な悪戯が始まりだった。

トキが考えたそんなくだらない悪戯に食い付いたのがティアドラだ。彼女はその卓越した魔導技術でトキの悪戯を完全犯罪へと昇華させ、酒に酔ってぐだぐだになった二人を、ずーっと覗き見ていたのだ。

レイチェルはレイチェルで、悪いとは思いつつも二人と行動を共にした。普段はこのような事をする性格ではないが、一緒に悪戯をするという不思議な連帯感がレイチェルにとっては新鮮で、ワクワクしてしまったのだ。早い話が、普通に楽しんでた。

三人はエアニスとチャイムを付け回し、適当な所でクシャミでもしてエアニスに気付かれ、「お前ら何やってんだ！！」と蹴り飛ばされて終わり・・・というシナリオを何と無く描いていたが、三人は空気を読み過ぎてしまったのか、ティアドラの結界が完璧過ぎたのか、エアニス達の前に姿を見せる機会を完全に逃してしまっていた。

そして、今に至る。

全てが遅かった。今ここで姿を見せようものなら、蹴り飛ばされる位では済まないだろう。間違いなく斬り飛ばされる。

「ど、どうしましょう？」

「そりゃあ、このまま見学させて貰うか、黙ってここから去るかじゃろう？」

「・・・どちらも罪悪感が残りそうな選択肢ですが・・・でも、仕方ありませんねえ」

つまらなさそうにトキは言って踵を返し、階段を降りて行こうとする。何処か安堵するレイチェル。このまま立ち去るのかと思いきや、トキの足は階段を3段降りた所で止まった。

「・・・いや。でもどの道罪悪感が残るのであれば最後まで鑑賞させて頂くのも・・・」

「トキさん！！」

「！！・・・す、すみません・・・」

レイチェルに本気で怒られた。

「うごおっ！！」

そんなやり取りも何処吹く風、覗きを続行していたティアドラが突然驚愕の声を上げる。その声に二人はティアドラの方へ、エアニスとチャイムの方へと振り返る。

「んなあっ！？」

「んああっ！！」

二人もティアドラのように思わず奇矯な声を漏らす。

そこには少しだけ身を離して、俯き気味に見つめ合うエアニスとチャイム。

そして。

そしてそして。

チャイムは吐息が乱れるほどの陶然とした表情で。

エアニスは少し戸惑うように。

その顔を、その唇を寄せていく。

「あっ！！あっ！！んああああああああああ！！」

「ごああああああああああ！！！」

二人の様子に釘付けになるトキとティアドラ。興奮し過ぎの絶叫も、ティアドラの完璧な結界に阻まれ二人には届かない。

レイチェルは両の手で目元を覆いながらも、つい指の隙間からチラチラとその様子を見てしまう。しかしレイチェルは見たいという誘惑を断ち切るようにギュッと目を瞑り、ぶんぶか頭を振る。そして、

「や、やっぱり駄目ですよおおお！！」

『んがあっ！』

レイチェルは背後から、トキとティアドラの頭を目隠しをするように目元を掴んで仰け反らせた。

三人の足元は階段。トキとティアドラは突然頭を後に引っ張られてバランスを崩す。当のレイチェルも、倒れそうになる二人の体に押されて階段を踏み外した。

ガン！！

と、ティアドラが後頭部を階段の角にぶつけ、失神する。

そのままゴロゴロと派手な音を立て、もつれるようにして三人は石の階段を15段ばかり転がり落ちた。

「あいたたた・・・大丈夫ですかレイチェルさん？というか、何て事するんですか」

「でも、だって！」

「ティアドラさんは・・・ああ、駄目ですねこれは。白目剥いちゃってます」

クラゲのようにダランとしたティアドラの手を取り、トキは黙禱を捧げるように目を閉じる。

「・・・」

サッとレイチェルの表情が青ざめた。

術者の意識が無くなるという事。それは。

「なにやってるんだお前ら・・・」

背中を突き飛ばされるような分厚い殺気がトキとレイチェルを打ち抜いた。

がたがたと震えながら振り向いた先には、階段の上から三人を睥睨するエアニスの姿があった。

その左手には、既に魔法剣・オブスキュアが抜き身の状態で握られている。

ティアドラが意識を失った事で、三人の姿を隠していた結界が消えてしまったのだ。

「ああ・・・いや・・・これはですね・・・」

「ごめ・・・ごめ・・・」

レイチェルが泣きそうになって、トキは打撃か電撃どちらでエアニスの記憶を消すか考え始めた頃、失神していたティアドラがビヨン！と起き上がり、エアニスの前に立ち塞がった。

「いやあ、お主らを探しに来て見つけたは良いが、ちょーっとお取り込み中だった様での中。

慌てて退散しようとしたら足を滑らせ、思わず三人で階段オチをしてしまったんじゃよ」

これほどまでに正々堂々と嘘を言える人間も珍しい。ぬけぬけと、大したものだとトキとレイチェルが白い視線を送る。

「いやいやーホント、何も見とらぬよ。許し・・・っ」

プンッ、と小さく風を切る音が鳴り、ティアドラの言葉が途切れる。

エアニスがオブスキュアの切っ先を、ティアドラの頬ギリギリで当てていた。頬が切れていないのが不思議なくらいの俊敏な突きだった。

「本当か？」

目がマジだった。しかし、それは自分が優位に立っていると確信している者の目ではない。頬には汗が流れ、手元は僅かに震えている。全く逆の、自分が追い詰められていると思っている者の目だった。

「・・・あー・・・」

「・・・はあ・・・」

「・・・う・・・うえええーん！」

ティアドラが半笑いで視線を逸らした。トキは青白い顔で生返事をして、レイチェルに至っては泣き出してしまった。慌てるトキとティアドラ。

「い・・・いやあああああー！！」

呆然と立ち尽くしていたチャームが、両手で顔を覆い泣きながら街の外れに向かって駆け出した。

「お前らああああ！！いつだ！！いつから見ていたああああ！！！！」

エアニスも顔を真っ赤にして、今まで誰も見た事が無い程に取り乱す。

「待て！！最後だけは！！最後だけは本当に見ておらぬ！！」

「信用できるかあああ！！」

思わず叫んだエアニスの言葉に、トキが目ざとく反応する。

「！！・・・と、という事はッ、チ、チャームさんとキ、キス、したんですかッ・・・！？」

「がっ！！・・・う、がああああ！！！！」

激しく動揺したエアニスは、剣を放り投げ、半狂乱の呈を見せて飛び掛ってきた。階段の上からトキの腹に向けてドロップキックを突き刺し一撃で地面に沈めると、すぐ近くに居たティアドラの両肩をドンと突き飛ばす。

「おあっ・・・あー！！」

前述した通り、彼らの居る階段状の道の端には杭を鎖で繋いだ腰くらいの高さの柵があり、そ

の向こうはちょっとした崖になっている。ティアドラはエアニスに押されて鎖に足を取られると、そのまま崖の下へガラガラと音を立てて落ちていった。多分死ぬような高さでは無い。

ティアドラが闇の底へ消えたのを見届けると、今度はエアニスは泣いているレイチェルに向き直り・・・

「ご、ごめんなさいー・・・ひっく、こんな、大事な話っ・・・盗み聞きするつもり、無かったんです・・・ぐずっ、ひーん・・・」

「う・・・ぐぐぐ・・・！」

結局、子供のように泣きじゃくるレイチェルにエアニスは何もする事が出来ず、

「こ、この野郎オォー！！」

「なんでっ！！」

ボグッ！と、足元に転がるトキの脇腹を代わりに蹴り飛ばした。



その後、泣きながら失踪してしまったチャイムを皆で探し出し、（教会の尖塔にしがみついて泣いている所をティアドラに発見された。どうやってそんな高い所まで登ったのか本人も覚えておらず、結局分からず終いだった）ティアドラの家に戻り反省会が催された。最後の最後で、これまで一緒に戦ってきた仲間の絆が壊れてしまう所だったが、

レイチェルが泣いて、

ティアドラが土下座マシーンと化し、

トキがサンドバッグになる事によって、エアニスとチャイムから一応の許しを請う事が出来た

。

そしてようやく、エアニス達は長旅の疲れと、その十倍はあろうかという今晚の精神的な疲れを癒す為眠りに就く事が出来た。

空は、白じみ始めていた。

辿り着いた場所には、かなりの量の雪が降り積もっていた。

大人が足を踏み入れれば、膝近くまで埋もれる程の深さだ。さらにその下には圧縮されて固くなった氷の層がある。

しかしその男は、柔らかな新雪の上をごく自然に、ブーツを雪の中にもうずめる事無く歩いていた。

まるで固い床の上を歩くように。

まるで自分の重みを忘れていたかのように。

切れ長の目をした色白の男だった。黒地に銀の縁取りをした、軍服のようなロングコート。そして、後に撫で付けられた銀の髪。

男は何かを探しているように周囲を見回しながら歩き、垂直に切り立った山の斜面の前で足を止めた。

「見つけたぞ、アイビス」

銀髪の男、アイビスは、独り言のように彼女の名前を呼ぶ。

ぐずり、とアイビスのすぐ隣の空気が黒く滲んだ。

虚空に湧き出した不気味な黒い染みは、美しい白い肌と長い銀糸の髪をもつ少女の姿を形取る。

「なーんだ、コッチにあったのかぁ・・・」

まるで幽霊のように姿を現した少女、アイビスは、登場の仕方にそぐわぬ明るい声色で頬を膨らませる。とんとん、と軽い足取りで、彼女は目の前にある雪の壁の前に立った。

「じゃ、さっさと入り口ぶっ壊して"石"をいただきちゃおっか？」

その言葉の直後、彼女の周りの空気がチリチリと焼け始め、一拍の間の後、辺りの雪が、地面が、木々が、高熱と共に弾けた空気で吹き飛ばされた。

アイビスを中心に、ごく狭い範囲の雪は全て吹き飛んでいた。彼女達の足元の雪も消し飛んでおり、アイビスとアイビスは積もっていた雪の高さだけフワリと宙に浮く形となった。

ふたりの目の前に、雪の下から古びた石扉が姿を現した。

彫刻等の飾り気が一切無い、無骨な二枚の岩戸が、山の斜面に張り付くようにして埋まっている。

ふたりは剥き出しになった土の地面にストーンと降り立つ。アイビスが首を傾げた。

「あら、変ね。山肌ごと消し飛ばすつもりだったのに・・・」

アイビスは石扉の前に立つと、身の丈程もある大剣を取り出す。それはアイビスの姿と同じ様に、虚空から滲み出すように現れた。

力の抜けた構えから、鋭く大剣を石扉に叩き付ける。剣が扉を叩いた衝撃は辺りの空気を振るわせ、木々の枝葉をざわめかせた。その軽い予備動作からではあり得ない衝撃だった。

しかし、石扉はびくともしない。それどころか、脆そうな岩の表面に傷一つ付いてはいなかった。岩肌に張り付いた、手で払えば落ちてしまうような土くれや苔にすら変化が無いのだ。

「時間が止められている」

イビスは石扉を撫ぜながら独り言のように呟く。

「いや、この扉だけじゃない。この周りの地面、全ての時間が止められてる・・・どれ程強力な力をぶつけても、これでは無駄だ」

「・・・じゃあ、時間の止まっていない所から壊す？ この山まるごと吹き飛ばせば、どっかから入れるでしょ？」

無茶苦茶な提案をするアイビス。しかし不可能な事ではない。むしろ彼女にとってはそれが一番簡単な方法に思えた。しかし、イビスは首を振る。

「この術をかけたのは、時間と空間を操るエルカカの民だ。

ここはあくまで"入り口"で、空間を捻じ曲げ"中"を別の場所と繋げているという可能性もある。下手に手を出せば、ようやく見つけたこの入り口を壊してしまう事になりかねない」

「じゃあどうするのよ？ せっかく見つけたのにさ・・・」

イビスは大剣を手放すと、それは地面に落ちる前に水に溶かした墨のように虚空へと還る。そしてすぐ近くにあった丸い石に腰を掛けた。それきり、黙り込んでしまう。

「なにそれ・・・ひょっとしてあいつらが来るの待つつもり？」

「どのみち最後の石を持って、明日には奴らがここに来る筈だ。

扉は奴らに開けてもらえばいい。それが一番確実だ。

お前の案で神殿を探して先回りしてみたが・・・無駄だったな」

「だって悔しいじゃん！！ いつまでもあいつらの後を付いて行くだけなんてさ！！

最後くらいあいつらの前に立ち塞がって『フハハハ、待っていたぞ！』的な事しないとカッコ付かないわよ！！」

「・・・」

悔しそうに地団太を踏むアイビスを見て、イビスは溜息を吐いて疲れたようにうなだれる。

この場にトキとレイチェルが居たら、こう言ったかも知れない。

エアニスとチャイムを見ているようだ、と。

実際、エアニス達の動向は殆どイビス達に筒抜けだった。イビスとアイビスが身を置くルゴワールは、世界中に根を張る犯罪組織なのだ。たった四人の動向を追いつける事など彼らの情報網を使えば簡単だった。

にも関わらず、彼らが今までこの場所を特定できなかった理由は、単純に案内人であるレイチェルがエアニス達の前ですら、神殿の場所はバイアルスの山にあるという事以外、一切口に出さなかったからである。

バイアルスの山といっても広い。いくつもの国を跨ぐ、巨大な山脈だ。

レイチェル達が最後の街としてファウストに立ち寄ったという情報から、二人は街から歩いて行ける範囲で、レイチェルの目的地である神殿を自力で探し、ようやく見つける事が出来たのだ。

「組織の人間はもう用済みか・・・邪魔になる前に俺達と関わった者だけでも消してしま
うか・・・」

「ああ、それにらとっくに片付けてきたわよ。本部ごと」

アイビスがあっさりと言った。アイビスは深い溜息をついて眉間に指を当てる。

「・・・いつだ」

「さっき。この入り口さがしてる途中に、あ、あいつらもう必要無いなー、って思って、ベクタ
まで飛んで本部のビルに一発かましてスグ戻って来た。

「まだ世界中に沢山残ってるんだらうけど、本部がああなっちゃえば暫くは石探し所じゃなくな
るんじゃない？」

因みにバイアルスからベクタまで歩いて行けば何ヶ月もかかる場所である。

しかし、体という実体が希薄な魔族にとって距離という概念は大した意味を持たない。自分
の知っている場所ならば、己の存在を一瞬で移動する事が出来るからだ。

生物と違い、存在を物質に依存しない純粋な魔族だからこそできる事だった。

身体を脱ぎ捨て、自分の記憶を頼りに存在を目的地へと移す。身体は移動先に漂う魔力や物質
で再構築すればいいのだ。

存在は、質量を持たない。

純粋な魔族は己の意思次第で、いつでも何処にでも存在する事が出来る。言い換えれば、彼等
は何処にでも居るのだ。

在り方が、人間と根本的に違う。古典的な表現で表すのであれば、それはまるで幽霊のようだ
った。

アイビスの痛むはずの無い頭がズキズキと痛むような気がする。

「・・・勝手な事をするな。それに、思いつきで行動するな」

「だって、ルゴワールの間人達も"石"を欲しがってるんでしょ？邪魔されたり、万一横取りされ
たりしたら事じゃない」

「そうだが・・・」

まだ利用価値はあるかもしれないだらう。

と、言うのを止めて、それきりアイビスは口をつぐんだ。アイビスに言って聞かせる事は自分
には出来ないと分かっているからだ。

二人は並んで石の上に座り、時が経つのを待つ。頬に手を当てて、むくれた顔でアイビスが
呟く。

「ヒマじゃない・・・？」

「たった一日だ。一瞬だらう」

「魔族の時間感覚で言わないでよ。もうすっかりこっちの世界の時間感覚に慣れちゃってるんだ
からさ。

「あーあ。街にでも遊びに行っておようかしら？」

何気ない彼女の言葉にイビスは目を伏せる。そして、彼にしては珍しく言い淀むようにして口を開いた。

「・・・お前、何だかんだでこの世界が気に入ってるんじゃないのか？」

もし、そうだとしたら」

「そんな筈無いじゃん」

言葉を遮るようにアイビスは言う。

「あたしにとってこの世界なんでどうでもいいの。

あたしが居るべき世界は、イビス。貴方が選ぶ世界よ」

ごく当たり前のように。特別な感情など何も無いように。彼女は凜とした声でそう言った。

それを見たイビスは複雑な心境だった。罪悪感を、覚えた。

「すまない。付き合わせてしまって」

「そんな言い方しなくてもイイのに。別にあたしには"こっち"も"向こう"もカンケーないし？」

イビスが居れば何処でもいいの。イビスが居る場所があたしの居場所なの。あたしはイビスの言う事なら何でもするよ？」

そう言って、彼女は隣に座るイビスの首に腕を回す。

こういった仕草が、すっかり"こっち"の世界に毒されてしまっている証拠だと思いながら、彼女の腕を押し退ける。

「・・・じゃあもう少し大人しくしてくれ。お前が好き勝手するから今回の件も奴らに無用な警戒を与えてしまった」

「えー・・・だって単にルゴワールの人間達パシリにして成行き見てるだけじゃつまらないわよ。

船の上で直接やり合った時とか、観光都市で爆弾取り合った時とか、このあいだのエルバークでの戦争ごっことか・・・なかなか面白かったでしょ？」

「必要の無い事だ。それにエルバークの件は反省しろ。下手をしたらエルカカの娘は殺されていた。そうなれば、石の封印を解く事が出来なくなっていたんだぞ」

「死ななかつたわよ。どうせ」

妙に確信じみたように言う。そしてイビスも、自分で言っておきながら本心はアイビスと同じだった。

あの人間達は強い。能力も、そして存在も。

人間の身にして、魔族であるイビスやアイビスに並ぶ程の存在の力を持っている。

大きな存在の力を持つ者は、それだけで世界を、他人の運命を捻じ曲げる。身体を破壊してしまえば終りの脆弱な人間だと思って掛ければ、吞まれてしまうのはこちらだろう。戦う能力が高いとか、強靱な肉体を持っているとか、強大な魔導が使えるとか、そういった力は関係無いのだ。

あの人間達の身体に込められた存在の力がどれほどの物か。

彼らの存在が、この世界のどれだけを占めているか。

自分たちより、この世界に存在を認められているか。

魔族にとって戦う力とは、そういった物なのだ。

この世界にとって異物であるイビス達にとって、敵はエアニス達だけではない。

この世界そのものなのだ。

「・・・街に出るなら目立たないように姿を変えて行け」

「はい」

間延びした返事をする、アイビスの姿は現れた時と同じ様に空気へと溶け出す。身体を形作っていた墨のような何かは、虚空で渦を巻くと、再び人の体に形を変えてゆく。

それは、普段の彼女の姿では無かった。

頭の両側で結っていた銀髪は、濃い栗色の髪に変わり、真っ直ぐ腰まで垂れている。抜けるように白い肌や、華奢な体つきは普段のアイビスと変わらなかったが、顔つきは普段の彼女より少し大人びている印象があった。素朴というよりも質素な服を着た、街中に溶け込むありきたりな姿だ。しかし、瞳の色だけは姿の変わる前と同じ、吸い込まれるように深い紫色をしていた。

「ん。どうかしら？合格？」

長いスカートをふわりとなびかせながら一回転し、イビスにその姿を披露する。声も普段のアイビスのものと違う。容姿も口調も、全体的に大人びた印象に変わっていた。

「どうだろうな・・・大丈夫だと思うが・・・」

人間社会での"目立たない姿"というものが良く分からないイビスは、曖昧に答える。

「じゃなくてー！」

アイビスはふりふりと腰を左右に揺らし、普段の姿に比べると格段に大きくなった胸を反らせながらモデルのようにポーズをとる。

「綺麗？」

「・・・早く行け」

「ぶー」

当然、姿が変わった所で中身は変わらない。イビスはシッシと手を振ってアイビスを送り出した。

とんとん、とステップを踏みながら歩き出し、街まで空間を飛ばうと思ったその時。

「動くな！」

岩陰から突然伸びてきた長い銃口が、アイビスの身体に突きつけられた。

「・・・え？」

そこには、ボロボロの兵隊服を身に着けた若い男が居た。

ボロボロなのは服だけではない。顔も泥と油で汚れ、ブーツも壊れているのかベルトを不恰好に巻き付けていた。構えたライフルも傷だらけで、錆が浮いている。

まるで、長い間ジャングルの戦場で戦い続ける兵士のような姿だった。

「・・・だれ？」

「・・・」

イビスとアイビスは顔を見合わせ、首を傾げた。



山奥で人知れずそのような出来事があった翌日の夕方。

バイアルスの山頂付近に、登山道を登るエアニス達の姿があった。一行は山の中腹までエアニスの車でかなりの無理をして登って来た。車では登れない場所からは5人とも大きなザックを背負い、自らの足で山を登り、半日が過ぎようとしていた。

「なんか、最後の、最後に、すごい難関が待ってたわね・・・あたし、神殿ってトコに着くまでに力尽きるかもしれないんだけど・・・ぜえ、ぜえ、」

「そう思うなら無駄口は叩くな。息が乱れて余計に苦しくなるぞ」

「いやいや、会話を交わしながら進むほうが、気持ち的に楽しく山を登れるものじゃぞ」

「別に山登りを楽しみに来てるんじゃないよ」

エアニスとチャイム、ティアドラは空気の薄い環境下でもタフに雑談を続けていた。因みにトキとレイチェルは会話で呼吸のリズムを狂わせたくないのか、始終無言である。

足元には薄く雪が積もっていた。このあたりの気温は今の季節、氷点付近を前後しているため、解けかけた雪が凍り足場は最悪だった。足を滑らせないように全員がブーツにアイゼンを括りつけている。服装も普段の旅装束では凍えてしまうため、全員厚着をして革のマントを羽織り、ボアのついたフードを被っていた。

過酷な環境に思われるが、天候は良好で風も無く、気温も氷点下を下回っていない。この季節の登山としては恵まれた環境だった。

「そろそろ・・・日も傾いてきたしさ・・・ゼエ、ヒュー・・・早いうちに、この辺りでキャンプ張らない・・・？」

「・・・そうだな。この辺なら広いし平らな地面も多いしな」

チャイムの提案をエアニスは受け入れた。本当はもうすこし距離を稼いでおきたい所だが、疲れているのはチャイムだけでなくトキとレイチェルも同じで、顔を見ただけでも疲れの色が見て取れた。

エアニスも疲れてはいたが、チャイム達程では無かった。エアニスは体が疲れにくい動き方を熟知しており、また半分とはいえ人より優れたエルフの体質を持っているため、酸素消費量が人に比べて少ないのだ。それと不本意ではあるが、体も大柄ではなく体重が軽いと言うのも登山に適していた。

ティアドラもエアニスと同じく息一つ乱してはいないが、こちらは何故こうも平気な顔をしていられるか謎だった。

エアニスがザックを降ろそうとすると、

「いや、待て。もう少しだけ登ってみぬか？」

ティアドラは歩みを止める事無く、さっさと山道を進み始めてしまった。絶望的な表情を浮か

べるチャイム。トキとレチェルも、残念そうに肩を落とした。

「今日中に見せておきたい景色があるんじゃ」



頂上へ辿り着くと、その景色は突然山の反対側に現れた。

ティアドラを除く4人は息を呑む。感嘆の声さえ上げる事は出来なかった。

眼下に広がる白い雪山。

遥か遠く、地平線の彼方まで、どこまでも真っ白な山が幾つも幾つも連なっていた。

雄大で、とても美しい景色。

それでいて途方も無く、自分の存在の小ささを思い知らされる景色。

エアニスは後を振り向く。

そこには、今まで登ってきた山道が続いている。眼下にはだいぶ小さくなったファウストの街が見え、その向こうには目の高さと同じ位の位置に山々の稜線が見てとれる。山の中腹あたりには雪は積もっておらず、大地の大半は緑で覆われていた。自分の居る場所が、それ程標高の高い場所とを感じる事は無い。

そして再び山の向こう側に目を向けると、そこには眼下に広がるどこまでも続く雪山。山の上からの眺めというより、飛空艇から大地を見下ろした時の景色に近い。

自分の目前と背後で、別々の世界が広がっているような錯覚を覚えた。

「今わたしの立つこの場所が、標高4,200mじゃ。そしてこの先は大地が大きく沈んでおり、海拔マイナス500mから立ち上る2,500m級の山々が何処までも続いておる」

チャイムは自分の立つ地面が、それほどまでに高い場所にあるものだとは思っておらず、ティアドラの解説に驚いた。それほど高い山を登ってきたという感覚は無かったからだ。そこまで考え、チャイムはファウストの街がかなりの高地にあったのだという事に気づく。確かに、ファウストに至るまでの数日間は何度も山越えを繰り返していた。

「わたしが今居る山を境に沈みこんだ大地は、この先4,500km先で再び隆起を始め、今度は6,000m級の山脈が続く。それを越えたら、大陸の向こう側に抜ける事が出来る」

「・・・」

途方も無い話だ。

バイアルス山脈の事は、知識の上では4人とも知っている。

太古の時代より、人間を拒み続ける自然の城壁。

しかし、いざそれを目前とすると、圧倒的な存在感に一種の恐怖のような物を感じた。ただただ美しいばかりのその後光景に、何故恐怖を覚えたのか、自分の事だというのにエアニスにはその理由が分からなかった。

何も無い大海原に、小船で漕ぎ出した時の心細さに似ている。しかし、本能的に感じる危機感は、その比ではなかった。

「どうじゃ？ 壮観じゃろう？」

「壮観ってより・・・何か怖いわね・・・」

チャイムが答える。彼女もエアニスと同じ感情を抱いたようだ。トキやレイチェルも素晴らしい眺めに感動しているというよりは、底の見えない穴の淵に立たされたような、落ち着かない表情を浮かべている。

「・・・ふむ。正常な感想じゃな」

ティアドラは満足そうに頷く。

「とある見地の解釈によれば、この大地は徹底的に人間を排除しようとして、このような姿になったのだと考えられておる。じゃから、この世界に住まう者は本能的にこの大地を目にすると、

恐怖を覚えるそうじゃ」

ティアドラの解説にエアニスが不思議そうな表情を浮かべる。

「・・・何だその理屈は。この山が生きてるみたいな言い方だな」

「ガイア仮説という奴ですね？」

トキがここぞとばかりに口を挟んできた。

「ふむ、流石メガネじゃな。知っておるか」

「光荣です」

「何ですか、それ？」

首を傾げるレイチェルにトキは指を立て、自慢するように自分の知識をひけらかす。

「この世界も、僕達のように一つの生き物だと考える仮説です。

人間が怪我をすれば、いずれ傷口は塞がりますよね。それと同じ様に、大地が大きく裂けたら、水や風がそこに土を運び、いずれは元通りになるでしょう？」

「・・・はあ・・・考え方は分かりますが、突拍子も無い話ですね・・・」

「そして人間に意思があるように、この世界にも意思がある。

バイアルス山脈は、この世界の意思が人間を寄せ付けないために作った場所・・・という事ですか」

興味深いですね、とトキ。

「そうとでも考えなければ、この胸のざわつきは説明がつかんのじゃ」

「・・・」

馬鹿馬鹿しいと反論しようとしたエアニスが押し黙る。事実、エアニスの胸にも何とも言えぬ不安感が未だにわだかまっているからだ。

「わしもその論理は正しい物だと思っておる。確かに、この地は人が立ち入ってはいけない場所なのじゃろう」

ティアドラはレイチェルに向き直る。

「エルカカの魔導師ならば分かる筈じゃ。この辺りの空間は、非常に脆く構成されているじゃろう？」

「！・・・ええ、分かります。空間の結束が弱いというか・・・この場所なら、空間干渉の術を簡単に起動できると思います。

でも、その分制御が難しそうです・・・空間制御に失敗しても空間は元に戻ろうとする力が働きますが・・・ここはその力が弱い。失敗したらここでは何が起こるのかわかりません・・・空間の断裂を作ってしまったら、連鎖的に空間の崩壊を起こしてしまうかも・・・」

考えながら呟くレイチェル。空間の断裂とか崩壊とか、具体的に何が起こるんだろうと猛烈に不安になるチャムだったが、口を挟める雰囲気ではなかった。

「よしよし、この不自然さを感じ取る事が出来るなら合格じゃな。

そう、ここは世界で唯一、空間の、世界の境界線が曖昧になっておる地なのじゃ。魔導的な見地から見ても、何故このように異常な空間が存在しておるのかは分からんが・・・

とにかく、ここはエルカカの魔導師が最も己の力を振るう事ができる場所なのじゃ」

ティアドラは再び振り返り、眼下に広がる巨大な山脈を見渡す。

「じゃから250年前、エレクトラはこの地の空間結合の脆さを利用し、世界に穴を空けて魔族を別の世界へと追放した・・・」

「別の世界・・・」

何気なく出てきた言葉に、チャムは違和感を覚える。おとぎ話では"楽園"や、"レッドエデン"と呼ばれる世界。こことは違う、別の世界。

「追放・・・というには言葉が悪いか。彼らは元々この世界の住人ではないのじゃ。もう誰にも分からない程の大昔に、こことは違う世界からやってきたのだ。」

「言わば侵略者じゃ。この世界の者としては、お引き取り願うのが当然じゃろう」

「・・・そのくだけは初めて聞いたな。魔族は別の世界の存在だなんて、どんな言い伝えにも出て来ないと思うが」

そう言ってエアニスはレイチェルの顔を見たが、レイチェルもふるふると首を振った。エレクトラの直系である彼女も知らない話なのか。

「・・・あくまでも言い伝えじゃ。それにどう考えても、奴らの存在はこの世界の生物進化とはまったく別の概念で成り立っておるしな。そう考えたほうが自然というものじゃ。」

「機会があれば、お主らを狙っているという二人組みの魔族にでも聞いてみるがいい」

ティアドラはやや強引に話を打ち切ってしまった。何処かその様子に違和感を覚えたエアニスだったが、彼らが何処から来たのかという事など別にどうでも良かったので追求はしなかった。

魔族だろうが人間だろうが、そんな事は関係無い。敵である事が分かっているならば、こちらがやる事は変わらない。

「とまあ、それが"神殿"をこの地に選んで建てた理由じゃ。明日からは本格的に山に踏み入る。その前にこの景色を見て貰いたかったんじゃ。覚悟を決める為の」

「はっ、要らん気遣いだ」

「いやー・・・あたしはこの話を聞いておいて良かったと思うなー・・・。いきなりそんな話されたらビビるもん。・・・いや、これから一晩でこの話を飲み込めるかと言われれば微妙だけどさ・・・」

「いやいや、大変面白い話でしたよ」

「・・・この一晩でこの空間構成詳しく調べないといけませんね・・・空間干渉の魔導式も少し書き換えないといけないかも・・・はあ・・・」

そう言いながらも4人は降りていたザックを背負い、歩みだす準備をする。

シャノンの娘も、頼もしい仲間にも恵まれたものじゃな。

彼らの気負わぬ様子を見て、ティアドラは嬉しそうに笑った。

「さて、ここから少しだけ山を降りれば平地がある。浅い洞窟もあるからキャンプには丁度良い場所じゃ。もうひと頑張り頼むぞ！」

◆

山頂を越え山の反対側に回ると、途端に積もっている雪が分厚くなった。雪はガチガチに凍り付いていたが、アイゼンを履いていれば濡れて土と混ざり合った雪道よりむしろ歩きやすかった。

ティアドラの言う通り、頂上から半時も下らない場所で平坦な岩場を見つけた。

平らな一枚岩が水平に山の斜面へと突き刺さっているような場所だ。山の斜面には手掘りの浅い洞窟があり、何度か野営に使われた跡が残っていた。ティアドラや、神殿を訪れるエルカカの民がいつも使っている場所らしい。

5人は岩に降り積もった雪を落とし、洞窟の中で2つの簡易テントを張る。更に外気を遮断する為に洞窟の入り口にカーテンのようにシートを張って火を焚き、中の空気を暖めた。焚火の煙はティアドラが魔導を使い器用に煙だけを外へ吐き出していた。

持ってきた食材で作ったスープと、ブロック型の携帯食料を夕食として一行は早めに眠る事にした。

疲れたからといって仲良く全員で眠る訳にもいかないのだから、エアニスとティアドラが交代で見張りをすることにした。トキとチャムとレイチェルは、誰の目から見ても疲労の色が見取れたので、三人には気にせず良く休むようにと伝えた。

あの二人組の魔族に対しての警戒としては手薄過ぎたが、青年の姿をした魔族、イビスは、エルバークの街に現れ「石の眠る神殿で待つ」と言った。ならば、ここで寝込みを襲うような姑息な真似はしないだろう。

真夜中を過ぎた辺りまでティアドラが見張りをし、その後はエアニスが見張りを引き継いだ。今の時刻は早朝と呼ぶには少し早い時間。空は薄っすらと白じみ始め、山々の稜線が見えるようになってきた。

自分のマントを羽織り、さらにその上から毛布を被ったエアニスが白いため息を吐く。毛布の下の左手にはオブスキュアが立てかけられており、手を伸ばせばすぐ届く場所にショットガンが転がっていた。見張りをしてても結局何も起こらず朝を迎えそうだ。あの魔族二人組みと決着をつけるであろう今日くらいは、しっかりと眠って体を休めておきたかった所だが、まあ仕方ない。

エアニスが欠伸とともに伸びをしていると、洞窟の中からチャムが出てきた。

「ふっあああ〜〜〜ムチャクチャ寒いわねー・・・」

エアニスと同じように、マントと毛布を被り、両手で自分の肩を抱くようにして震えていた。

「おはよ」

「お、おお・・・早いな」

「ん、正直良く眠れなくてさ」

「・・・そうか」

チャムはぎこちなく笑った。エアニスの受け応えも何処かぎこちない。

彼女は今日がこの旅最後の日となる事に緊張しているのだが、エアニスは二日前の祭りの夜

以来、チャイムと二人きりになるのが初めてだったから緊張しているのだが。

「何も心配する事なんてねーよ。あの邪魔な魔族どもを黙らせて、レイチェルの仕事を、背負ってる運命とやらを終わらせてやろう」

「あてにしてるわよ。あたしやトキじゃ、あの魔族に対抗する手段が無さそうだからね・・・」

「任せとけ。さっさと終わらせて、ティアドラの家で打ち上げパーティーでもやろうぜ」

「そーね」

チャイムはにっこりと笑う。

すると山の稜線が輝き、その明るさに彼女は目を眇めた。大地に日の光が差し込み始めたのだ。

雪で白く染まった山々が日の光に照らされ、赤紫色に輝きだす。昨日はこの途方も無い景色に恐れさえ感じていたが、今目前で移り変わる景色は、素直に美しいと感じられた。

微笑みながら日の昇る方角を見つめるチャイムの横顔を、エアニスは見ていた。そして、彼女の横顔から視線を外す事が出来なくなっている自分に気づく。

「あのさ、」

エアニスが口を開きかけた。

チャイムがエアニスに振り向く。

「ん？」

「・・・この旅が終わったら、一緒に」

バスン、とくぐもった音と同時に、チャイムの体が見えない何かに突き飛ばされて、山の岩壁にぶつかった。

岩壁で跳ねたチャイムの体は、そのまま力なく地面に崩れ落ちる。それきり、ぴくりとも動かなかった。

「・・・」

目の前で起こった事が理解出来なかったエアニスは、すぐに行動を起こす事が出来ない。

ようやく遠くから、ターン、と銃声が響いた。弾丸よりも遅れて届いた、狙撃銃の発砲音。

チャイムが狙撃銃で撃たれたのだ。

「チャ・・・」

ゆらり、と腰を浮かすエアニス。

それは普段のエアニスからしたら有り得ない失態だった。撃たれた相手が仲間だからといって動揺してしまうなど、素人の反応だ。しかし、自失となったエアニスの緩慢な動きは狙撃手にとっても予想外のもので、それが幸運に繋がった。

エアニスの耳元で、背にしていた岩壁が弾けた。エアニスの頭のあった場所を弾丸が通り過ぎたのだ。弾丸が当たらなかったのは幸運以外の何者でもなかった。

「くそっ！！」

飛び散った岩の破片に頬を切られたエアニスは、頭から冷水を被せられたかのように本来の思考を取り戻した。

チャイムが撃たれてから銃声が聞こえるまで、かなりの間があった。狙撃手はかなり遠くに
いる。恐らく、向い側の山だろう。銃弾が流されない風の無い早朝、そして日の出の瞬間を狙っ
ていたのだ。

どのみち、こちらから手を出せる相手ではない。エアニスは反撃を諦め、自分の体を盾にしな
がらチャイムを洞窟の中へと引きずり入れた。

兵士達は己の存在を隠す素振りも見せず、草木を揺らしながら洞窟の入り口を包囲した。彼らの動きは一糸乱れぬ統率されたものだったが、訓練された機械のような兵士というより、集団で獲物を狩る動物の群れのような動きだった。

その印象を助長するように、彼らの装備は随分と野性味溢れるものだった。

元々は深い緑色だったであろう兵隊服は色落ちし灰色に変色してしまい、固い布地はほつれて破れてボロボロだった。全員が手にしている銃剣の付いた大柄なライフルも、銃身に錆が浮くほどに痛んでおり、銃を扱った事のある者なら間違いなく暴発を恐れ使わないような見てくれである。

使い込まれたそれらに身を包む彼らも、随分とくたびれた姿をしていた。髪も髭も伸びざらしで、長い間ジャングルで戦い続けている兵隊のようだった。

数は十人程。その中でも、鉄のマスクや防弾服を身につけた重装備の兵士が4人、ライフルを突き出して洞窟の中へと立ち入る。

洞窟は深く、奥まで光が届かない。彼らの見える範囲には、人間の姿は何処にも無かった。

兵士の一人が、暗闇の中、緑色に光る小さな明りを見つけた。

「――っ！」

それに気づいた兵士は他の兵に歩みを止めるよう左手を上げて見せる。

それと同時に、緑の明りは赤色に変わり洞窟内にけたたましくアラーム音を響かせた。



ズ・ズズズ・ン・ン・ン

地響きと一緒に、少し離れた山肌で雪煙が立ち上った。

トキはそれを双眼鏡を使って見ていた。

「仕掛けた爆弾、洞窟の入り口を塞ぎました」

「何人巻き添えにできた？」

「恐らく怪我人は居ません。起爆時にアラームが鳴るように設定しておきましたから。爆発直前に慌てて飛び出してきましたよ」

「お優しい事で・・・」

「敵の正体が分からない以上、無闇に殺してしまう訳にもいかないでしょう」

エアニスは不機嫌そうに舌打ちをする。

「こっちは殺されかけたんだぞ」

エアニスは、自分の背中の上で気を失っているチャイムの手を、ぎゅっと掴んだ。

エアニス達は全員、あの狙撃の後すぐ敵に気づかれないよう洞窟の外へと脱出していた。

洞窟の奥に別の場所へ繋がる通路が用意されていたのだ。先の爆発は、追撃を断つ為にトキが洞窟を出る際に仕掛けた感応式爆弾だった。

あの洞窟は、神殿を訪れるエルカカの使い達の宿泊場所であり、隠し通路は万一敵に襲われた時の事を考え、先人達を作ったものだという。

通路の出口は少し離れた森の中に繋がっており、そこからだと今まで自分達の居た洞窟の入り口が良く見えた。もちろん森の中なので、向こうからこちらは見えない筈だ。

「爆破してしまっても良かったのですか？ エルカカの人達にとっては大事な拠点だったのでは？」

「なに、最後の"石"を神殿まで持って行く事が出来れば、あの場所は今日でお役御免じゃ」

「と、そうでしたね。

・・・エアニス。チャイムさんの様子はどうですか？

「心配ない。銃弾の衝撃で突き飛ばされた時に少し頭を打っただけだ。

撃たれた左肩が脹れてるくらいだ。お前んとこのマントのお蔭でな」

「少々癢ですが・・・マスカレイド部隊の装備を回収しておいて正解でしたか・・・」

エアニス達が羽織っているボア付きのマントは、エルバークの旧市街で戦った特殊部隊の装備を仕立て直したものだだった。

刃物も銃弾も全く通らない魔導繊維、アダマンタイトで作られた、いわば飛び抜けて強度の高い防弾服だ。

エルバークでトキの古巣でもあるマスカレイド部隊と戦ったエアニス達は、倒した兵士から装備を奪っていた。彼らのマントに仕込まれた防弾繊維を剥ぎ取り、今回の雪山登山に着るボアの付いたマントへと移植したのだ。

軍隊で支給されているような銃では繊維に傷一つ付ける事もできず、着弾の衝撃すらも殆どゼロにしてしまう。しかし大型拳銃によるゼロ距離射撃や、大口徑ライフルによる狙撃などには流石に効果を発揮しきれず、装備者の身体には殴りつけられたかのような衝撃が伝わってしまう。

それでも、このマントを着ているだけで戦場での生存率は飛躍的に跳ね上がるだろう。トキには思う所があったが、背に腹は変えられぬと彼らの装備を使わせて貰っている。それがチャイムの命を救ったのだから、まあ良しとしようと考えた。

「何者だと思う？」

「さあ・・・全員落ち武者のような格好ですね。とてもルゴワールの兵隊には見えません。揃いの兵隊服を着ているようですが・・・何処の国の物かまでは分かりません」

トキから双眼鏡を受け取り、エアニスも敵の様子を伺う。トキの言う通り、何処かの軍隊の兵士のような。そして全員が全員、ひどく装備が痛んでいるように見える。標的を見失った彼らは警戒しながら崩れた洞窟の周りを見て回り、ほどなくして茂みの中へと姿を消した。エアニスは双眼鏡から目を離す。

「お前この山の案内人だろ？ なんだあいつらは？」

「・・・分からぬ。山の入り口にはかなりの広さでセンサー代りの薄い結界を張っておる。誰かが山に立ち入れば、わしが気づかぬ筈は無いのじゃが・・・」

常に余裕を見せているティアドラが、戸惑ったように襲撃者達の消えた方角を見ていた。その様子を見て、エアニスは溜息を吐いて首を振った。

「まあ、何者でもいいさ。俺たちの敵だという事が分かっていたらな。

で、どうする？ レイチェル？」

「え・・・？」

唐突に名を呼ばれ、彼女は戸惑うようにエアニスを見る。

「奴らを排除してから神殿に向かうのか、このまま無視して行くかだよ」

「・・・」

レイチェルは押し黙る。これから神殿で行う事は、レイチェル達エルカカの民が250年もの歳月をかけて成してきた事の総決算なのだ。ただでさえ、あの魔族たちの事を懸念しているというのに、これ以上不安要素を抱えたまま事に当たりたくは無い。取り除ける問題は事前に排除しておきたいという思いはレイチェルにもあった。

「・・・今ならまだ間に合う。あの人数と装備なら、俺とトキの二人で十分片付けられる。お前が決める」

何処か厳しいと思えるエアニスの言葉に、レイチェルは森の奥の敵を見据えながら言った。

「・・・御願ひ、します」

予想外の答えに、エアニスは意地悪く笑った。

「へえ、また見逃せとか甘い事言うかと思ったが・・・」

「・・・」

レイチェルの渋面を見れば、それが彼女自身の思いを押し殺した苦渋の選択だった事は想像できる。彼女も自分の背負っているものがどれだけ大きい物か分かっているのだ。

意地の悪い言い方をしてしまったな、と反省したエアニスは、レイチェルの帽子をポムポムと叩く。

「まあ、出来るだけ死人は出ないようにはするよ。余裕があれば、けどな」

「・・・お願いします・・・。気をつけて」

エアニスは背負っていたチャームを、地面に敷いたマントの上に寝かせた。

「ティアドラ、あんたはこいつ達と一緒に居てくれ。俺とトキで片付けてくる」

ティアドラは無言で頷く。自分が管理する、このエルカカの聖地で何が起きているのか分からず当惑しているのか。普段のふざけた様子が無かった。

「行けるか、トキ？」

「ええ、いつでも」

エアニスは右手にライフルを、左手に愛用の剣"オブスキュア"を。

トキは右手に大口徑の銃を、左手には麻酔弾の込められた銃を持つ。

マスカレイド兵から奪ったマントを羽織り、ボアのついたフードを深々と被る。

「いくぞ」

エアニスが短く言うと、二人は雪の斜面を滑り落ちるように降りていった。



事の始まりは前日の昼まで遡る。

一機の航空機が雪と木々に埋もれるようにして墜落していた。機体の右翼は根元からへし折れ、機首も右半分が削ぎ取られたかのように無くなっている。墜落時に炎に包まれたのだろう。損傷の激しい部位は黒い煤で汚れており、誰がどう見ても再び空を飛べるような状態ではなかった。

機体は死んでいたが、乗り組み員の何人かは助かったのだろう。降り積もる雪を防ぐように、穴の開いた外壁にテントのようなシートが張られている。機体の周りには簡単な小屋が幾つも建ち、入り口と思われる場所では火が焚かれている。人が歩く場所は雪かきがしてあり、ぬかるむ地面の上には床板代わりに木材が敷かれていた。

それはまるで、墜落した航空機を使った砦のようだった。その様子から、多数の人間による生活の跡と、そして墜落してからかなりの時間が経っている事が伺えた。

その砦に住む者達のリーダー、ローウェンは、航空機の中の自室で耳を疑う報告を聞いた。

狩りに出ている仲間が、森の中で遭難者を見つけたと言うのだ。

発見されたのは栗色の髪をした少女と、軍服のようなコートを着た青年。二人とも寒さを凌ぐ為の装備すらなく、着の身着のまま、この世界の最果てへと放り出されたかのような有様だったという。

報告を受けたローウェンは二人を保護し、砦へ連れて来るようにと指示を出した。



「ぐずっ、本当に、ありがとうございました・・・！」

皆さんに見つけてもらえなかったら、あたし達二人とも凍え死んでるところでした・・・っ」

保護された栗色の髪の少女は毛布を肩に掛け、泣きじゃくりながら礼を言った。対して軍服を着た連れの男は、壁を背にし無表情で彼女とローウェンを見ている。部屋には他に、ぼろぼろの兵隊服を着た男が二人、入り口を見張るように立っている。

ローウェンは彼女達が何故このような場所に居たのか話を聞く為、航空機の貨物室を鉄板とシートで区切っただけの一室へと招き入れたのだ。

「何があったのか分からないが、災難だったね・・・まあ、ここにいれば暫くは安心だよ。

・・・とは言っても、我々も君達と同じ遭難者なんだがね」

彼はそう言って、髭だらけの口元を歪め自嘲気味に笑った。ローウェンは二十代後半だが、一見すると実年齢より相当老けて見える。髪を切り、髭を剃り、黒くなってしまった肌を綺麗に洗えば、年相応の容姿ではあるのだろう。

「名前は？」

「あ・・・えっと、アイ・・・アイシャ、です。こっちは・・・」

「イビスだ」

名乗った青年に、アイシャはキッと非難するような視線を向けた。その反応を訝しむローウェンに、彼女は取り繕うような笑顔を見せる。

「あ、あはは・・・えっと、それで、この飛空艇は一体何なんですか？」

アイシャは至極全うな疑問を口にする。雪と氷に閉ざされたバイアルス山脈の中に墜落した航空機。その中に住まう人々。普通の出来事ではない。

「我々はレオニール空軍の者だよ。

もう二年近くも前になるかな・・・

バイアルス越えの最中に敵軍の攻撃を受けてね・・・ここに墜落してしまったんだ」

「に・・・二年も前に、ですか!？」

「ああ・・・だが幸いこの航空機は補給物資の輸送機でね。食料や燃料、武器に弾薬、生きていく為に必要なものは沢山積んでいたんだ。

その間我々は救助を待ちながら、自分達の力でこの山を脱出できないか模索しているのだが・・・この深い渓谷から出るのも一苦勞でね・・・」

彼らの飛空艇は運悪く、三つの山に囲まれた渓谷へと墜落した。徒歩で渓谷を抜ける事は可能であったが、過酷な自然環境に阻まれ周りの調査すら満足に出来ない状態だった。軍の回線を使い常に救難信号を発信してはいたが、それに答えがあった事は今まで一度も無い。

「無線も届かないから、ここ二年近く戦況の情報も得られないんだ。

レオニール国について、何か知っている事は無いかい？」

「・・・？」

ローウエンの質問に、アイシャは言葉を詰まらせる。しかし、すぐにその言葉の意味に気付いた。

「いえ・・・国が違いますので・・・あまり・・・」

彼女は言葉を詰ませた事を不自然に思われぬよう、申し訳なさそうにたどたどしく答える。そうか、と、アイシャの言葉にローウエンは肩を落とした。

その後、ローウエンは航空機に積んでいた補給物資が乏しくなっている事や、砦の周りを囲む渓谷の地形がどれだけ入り組んでいるか、など自分達の置かれている状況を説明した。

「・・・そして、狩に出ていた仲間の一人が君達を見つけた訳だが・・・君達はどのようにしてここまで来たんだ？」

アイシャを心配して聞いているかのような言葉だが、もちろんこれは山から脱出できるかもしれないという、期待の込められた質問だった。こんな軽装でこの山に人が入れる筈は無い。何らかの移動手段を使わない限りは。

「・・・私達は、ヴァルハラ軍に捕まって、首都に連れて行かれる途中だったのです・・・」

ヴァルハラと聞いて、ローウエンは苦虫を噛み潰したように口元を歪める。ヴァルハラントはレオニールの敵対国家である。開戦時から何万という民間人がヴァルハラ兵に殺され、そして人身売買の対象としてヴァルハラや、その同盟国へと連れ去られるケースが横行しているのだ。

「ヴァルハラの船が故障して、ここから山を一つ越えた場所に着陸して・・・私はその隙に、彼の協力を得て逃げ出したんです」

「!」

いきなり話を振られたイビスは何を言えばいいのか分からず、口を開きかけたまま固まってしまった。しかし、彼が余計な事を口走る前に、アイシャはどんどん話を進めてしまう。

「彼はヴァルハラ兵でありながらも、軍の暴虐的な行為に反発を感じていたそうです だから、逃げ出した私を守る為に、仲間を撃ってまで一緒に逃げてくれてっ」

ううう とアイシャは俯き、嗚咽を漏らす。



《よくもそう簡単に 作り話を考えられるものだな、アイビス》

たまらずイビスは、アイシャに 町娘風の姿に化けたアイビスの頭の中へと語りかける。

《話しかけないでよ！！いま必死にシナリオ考えてるんだから！！！！》

「……」

何故そこまで躍起になって人間を騙す事に執心するのか。普段の彼女に言わせれば、ただ単に楽しいからという理由だそうだが。アイビスとの付き合いは長いが、イビスは未だにその思考が理解出来なかった。

「ヴァルハラ軍の船は、まだ君の知ってる場所にあるのか？」

「え、あ、はい、多分……」

「故障と言ったな。イビス君、どれくらいで修理が終わるか、聞いていないか？」

「……」

《技師は簡単な修理だと言っていた、明日には出発してしまうだろうっ て言って！！》

「……技師は簡単な修理だと言っていた、明日には出発してしまうだろう……」

イビスはウンザリとした表情でアイビスの言葉を繰り返す。棒読みになっていないだけ、まだ協力の意思が見て取れた。

「仲間の数は？ 戦える者は何人乗っている？」

「……」

イビスはアイビスに視線を移す。

《ちょっとは自分で考えなさいよ！！》

理不尽に怒られた。シナリオを考えているのなら、何故半端に人任せにするのだろうか。流石のイビスも何か言い返したい気持ちになったが、そこはやはり流石のイビス。喉元まで出かかった文句を飲み込み、溜息に変えた。

仕方なくイビスも、アイビスに合わせて作り話を考える。

「……乗組員は10人だ。全員銃を持たされている」

「10人、か」

ローウエンの心に、歓喜にも似た闘争心が生まれる。

10人なら、勝てる。こちらは20人以上居るのだ。半数は元々非戦闘員だが、この二年間、共に過酷な環境で生き抜いてきた男達だ。全員に持たせるだけの銃器もある。

ヴァルハラ軍の船を奪い、ここから脱出するのだ。ローウエンの口元は自然と綻ぶ。

全員で、故郷に帰るのだ。

ローウエンは共に話を聞いていた兵士に命令する。

「ヴァルハラ軍の船が飛び立ってしまう前に連中の船を奪うぞ。

時間が無い、皆を集めろ！」



「あはははっ、簡一ん単っに騙されたわねーアイツら！」

ローウエン達との話を終え、イビスとアイビスは砦の外に出ていた。といっても、砦から少し離れた茂みの奥……などではなく、二人は空間を渡り、遠く離れた溪谷を見下ろせる峯の上に

居た。ここからだと言った航空機と、周りの切り開かれた森が辛うじて見て取れる。しかし、偶然上空を飛空艇が通過したとしても、それに気づく事は出来ないだろう。

因みにアイビスの姿は栗色の髪の子に化けたままだった。

「馬鹿よねー！がんばって溪谷から出て、3日も山を登れば人里に出れるってのに・・・それに気づかず二年間もこんなトコにっ・・・」

アイビスは腹を振りながら笑いを堪える。しかし、彼女は簡単そうに言うが普通の人間にとって、それは難しい事だろう。何の成果も出せず諦めて引き返す事を考えれば、この山で3日以上かかるような場所まで足を伸ばすのは自殺行為に等しい。もし彼らが、命を顧みる事のない片道切符の調査を行っていたら、幾つか山を越えた先にある緑の大地と、ファウストの街を見つける事が出来たかもしれない。

それが出来ぬまま2年もの歳月が流れてしまったのは、食料を始めとする大量の補給物資や、雪を防げる頑丈な航空機の残骸という安心材料があった為だろう。この場から動かなければ暫く生き延びることが出来る。その思いから危険を伴う調査に踏み切る事が出来ず、救助を待つという消極的な姿勢に繋がってしまったのだ。

「それと、気づいてる？」

「何がだ？」

「あいつら多分、戦争が終わってる事、知らないわよ」

「！・・・」

アイビスの常に無気力な無表情が、珍しく動いた。20年にも及ぶ世界大戦が終結したのは、ほんの一年半前だ。

「ここに墮ちたのが2年近く前と言っていたな・・・」

「戦争終わってるのに、自分の国を心配するような事言ってたでしょ？」

「滑稽・・・というより、哀れだな」

「あら、珍しいわね。あんたが同情するなんて」

アイビスはクスクス笑いをやめて珍しがる。何事に対しても感心の薄いアイビスが、他人に、ましてや人間に対して何かを思う事など滅多に無い。

アイビスの疑問に、彼は目を伏せながら言う。

「俺達だって似たようなものだろう。こちらの世界にとり残されて250年だ。

彼らを笑う資格などない」

「・・・」

へらへら笑っていたアイビスが、白けたように表情を曇らせる。頭をがりがりと搔いて、面白く無さそうに息を吐いた。

二人の間に、暫しの沈黙が落ちる。

「それで、こんな事をしてどうするつもりだ？」

「・・・決まってるじゃない。彼らを、あの連中にぶつけるのよ」

無論、あの連中とはエアニス達の事だ。彼女の考えに大方の見当が付いていたアイビスだが、その狙いまでは分からなかった。

「相手になると思うか？」

「ならないでしょうね。でも、あの連中は彼らに手を出せるかしら？」

「ただ生きようとしているだけの、自分と同じ人間達を、殺す事ができるかしら？」

「・・・連中ならやるだろうな。甘い所はあるが、特にザード＝ウォルサムとトラキア＝スティンブルグは、自分の中でさえ割り切れてしまえば容赦をしない性格だ。仲間の女達を守る為なら、敵の事情を詮索するまでもなく、ただの障害物と看做して斬り捨てるだろう」

「まあ、そうですね。で、あいつらがその後に彼らの事情を知ったらどう思うかしら？」

「・・・」

「遭難者を扇動したのがあたし達だって知ったら、あたしたちの事をさぞかし憎むでしょうね・・・」

「・・・連中の"憎悪"を喰うつもりか？」

「そういうコト。いいかげん遊び過ぎちゃったからね・・・」

「ここで確実にあいつらを潰す為に、改めてあたし達の事を"認識"してもらわないと」

実体を持たない魔族は、他の存在から"認識"される事で自らの存在を形取っている。

恐怖、憎悪、畏怖に嫉妬、そして崇拜。それらの感情を強く向けられる程に、彼らの存在はより強固に、大きくなってゆく。

そして憎しみは、もっとも手早く生み出すことの出来る感情である。

だからアイビスは、あの遭難者とエアニス達を争わせる事により、最終的には黒幕である自分に向けられるであろう憎しみを、自分の糧としようとしているのだ。

自分達の存在を、より強固で強大な物とする為に。

憎まれる程に、恐れられる程に。

彼等は強くなる。



ローウェン率いるレオニール軍の遭難者達、総勢24人は、不時着したヴァルハラ軍の飛空艇を奪う為、アイシャに教えられた着陸場所へ向かっていた。

そろそろ今日の移動はやめてキャンプを張ろうかと思いかけた頃、反対側の山の中腹に小さな明りが灯っているのを見つけた。双眼鏡で確認すると、そこにはヴァルハラ軍関係者と思われる5人の人間の姿があった。

アイシャとイビスを連れ戻しに来たのだろう。しかし、双眼鏡を使い遠目で確認しただけだが、彼らはどうみても軍人には見えなかった。揃いのマントは着ているものの、その装いは軍服ではない。5人の中の3人が女だという事にも違和感を感じたが、だからと言って全く別口の第三者だとも思えない。二年近くもの間、このバイアルスの山の中で人間と遭遇する事が無かったというのに、この一日で立て続けに二組の人間と遭遇するという偶然は考えにくい。

彼が判断に迷っていると、案内のために同行しているアイシャが、船の中で髪の長い軍人を見

たと言った。確かに、5人組の中には髪が異様に長い男の姿が混じっている。

ローウェンは、彼等をヴァルハラ兵とみなし、ここで叩いておく必要があると判断した。

もしそれが間違いだったとしても、彼には考えられる方法中で自分達の生き延びる可能性が少しでも高い方法を選ばざるを得なかった。脱出のために残された時間は少なく、このチャンスを逃す訳にはいかなかいのだ。

彼らは夜明けと共に彼等を襲撃する為、その夜の休息時間を削り準備に割り当てた。

しかし結果は、襲撃に気づいた彼らが洞窟内に立て籠もり、自ら洞窟を爆破してしまうという不可解な結末となった。

崩落した洞窟から一旦退き、ローウェン達は森の中へ身を隠す。

「・・・彼らは本当にヴァルハラ軍の人間なのか？」

「はい。昨晚も話しましたが、入り口を見張ってた長髪の男・・・船の中で見た覚えがあります」

ヴァルハラ船に捕らえられていたアイシャが言うのだから、間違い無いだろう。ローウェンはイビスにも視線を送ると、彼は同意するように頷いた。

「洞窟を爆破して自害したとは考えにくいな・・・。洞窟の奥に抜け穴があり、我々の追撃を断つ為に洞窟を崩した・・・か？」

我ながら苦しい説だとは思ったが、5人全員で土砂に埋まり自ら命を絶った、と考えるよりは現実味があった。

とにかく今考慮すべき事は、彼らが生き延びてヴァルハラ船に戻り、ローウェン達の存在を報告される事だろう。

もしそうなれば奇襲は失敗に終り、最悪自分達が着陸場所に到着する前に船が飛び立ってしまうかもしれない。それだけは避けなければいけない。この地から脱出する最期のチャンスかもしれないのだ。

ローウェンは黙考した後、決断をする。

「・・・戦えない者はここに残れ。今の連中を探すぞ。

もし抜け道があったとしたら、まだ近くに居る筈だ」

ローウェンの判断で戦闘要員の兵を3人ずつ、3つのグループに分けて、周囲の搜索を始めた。待機を命じられた残りの10人程の遭難者とアイビス達は、森の中でローウェン達が戻るのを待っていた。昼を過ぎても戻らない場合、ヴァルハラ船の飛空艇への襲撃は止めて、大人しく砦に戻るようにとも言われている。

「暇になったわね・・・」

「お前がこうなるように仕向けたんだろう」

「そーだけどーさー・・・」

残された遭難者達と共に岩場に座り込みながら、イビスとアイビスはぼそぼそと言葉を交わす

。

「石を・・・連中を見失ったらどうする？」

このままこいつらを有りもしない飛空艇まで案内するつもりか？」

無論、その場合でも彼等が向かう先は既に分かっているのだ。遭難者達の事は忘れて、あの石扉の前まで戻ればいい。

「あーん・・・どうしよっかー？」

なーんか辻褄あわせが面倒になってきたわね・・・」

「お前が用意した茶番だろう」

イビスの常に平坦な声が僅かに荒れた。温厚なイビスも、アイビスの我侭と身勝手さに苛立ちを感じ始めていた。

「そーなんだけどさー・・・んーむー・・・」

エアニス達との戦いの上で、遭難者達との遭遇が演出の一環となるよう上手く話を纏めたアイビスだが、想定外がひとつ増えただけで途端にやる気を失ってしまったようだ。

呆れたようにイビスは息を吐くと、不意に何かに気づいたように空を見上げた。

ビリビリと伝わる二つの敵意。

「来たぞ。2人・・・男どもだ」

端的なイビスの言葉に、アイビスはキョトンと目を瞬かせる。

「・・・あはっ！」

思わずこみ上げた笑いを押し殺し、アイビスは岩場の上で勢い良く立ち上がった。

「なあーーによ何よおーーー！！！」

なーんか色々メンド臭くてダレてきちゃったってのに、わざわざ向こうから来てくれるなんて・・・

ホント退屈させてくれないわよね、アイツらってさ！！！」

よほど嬉しいのか、上がってしまった声のトーンを押さえようともせずアイビスは笑うようにして言った。さっきまでの無気力さは消し飛び、嬉々とした表情でアイビスは事の展開を楽しむ。遭難者達の前で装ってた、大人しい村娘の姿はそこには無かった。

一緒にローウェン達の戻りを待っていた遭難者達は、突然人が変わってしまったかのようなアイビスを何事かと見上げる。

そんな彼らの注目を集めるように、アイビスは高々と右手を空へと突き出した。

「んじゃ、予定よりちょっと早いけど、始めちゃおうか！」

パチンと指を弾くと、アイビスを見上げていた遭難者達の瞳から一斉に光が消えた。



「動くな！！！」

森の中で身を隠していたレイチェル達の前に、銃を構えた3人の男が現れた。

エアニス達を探していた、ローウェンをリーダーとするチームだった。

周りの枝葉や雪の音すら立てず、彼らはレイチェルの前に突然現れた。ティアドラを含め、全

く気配を察知する事が出来なかった。戦いに慣れているというよりは、まるでこの自然環境と一体化しているようだった。

「・・・洞窟で私達を襲った人ですね？」

レイチェルは男の、ローウエンの言う通り、その場に座ったまま首だけを動かして言った。ティアドラも啜っていた煙草をそのままに動こうとせず、チャイムは未だ気を失ったままだ。

ローウエンは引き金を引く前に、聞いておかなければならない疑問を口にする。

「・・・お前らは、本当にヴァルハラ軍の者なのか？」

ローウエンはやや自信無さげな口調で問いかける。やはり間近で見ても、彼女達の姿や物腰は、軍人にもそれに関わる者にも見えなかった。

「ヴァルハラ・・・？」

彼の問い掛けにレイチェルは眉をひそめるだけで、ローウエンの迷いは一層大きくなる。

「ヴァルハラの間人じゃないなら、お前は何者だ！ どうやってここまで来た！？」

ローウエンの部下が興奮気味に怒鳴った。ローウエンはともかく、部下の二人には落ち着きが無かった。少しでもレイチェル達がおかしな真似をすれば、本当に発砲しかねない。それだけ彼女達の存在は、この場では不自然で得体の知れない、異常なものなのだ。

「私達は、この山にある古い神殿に用があるんです。ファウストの街から、車と徒歩で来ました」

「・・・歩いて・・・だと！？」

男達が顔を見合わせる。

「何か誤解されているのかもしれませんが。私達の話聞いて下さい。

銃も、下ろして下さい・・・」

「・・・」

静かに説得するレイチェルに、男達も危険は無いと感じたのか。それとも、落ち着き払った少女に対し、大の大人が恫喝するような真似をしてしまった事を恥じたのか。銃口をゆっくりと下ろした。

レイチェルは静かに安堵の息を吐く。

『！！』

突然、辺りの空気が変質した。魔導師であるレイチェルとティアドラには、何者かの魔力によって、あたりの空間が支配されたという事が分かった。

「おい！？」

ローウエンが叫ぶ。男の一人が、一度は下ろした銃を再びレイチェルに向けたのだ。男の表情は虚ろで、瞳から意思の光が消えているように見えた。

「傀儡の術じゃ！」

ティアドラが叫ぶ。

レイチェルが状況を理解するよりも早く、男が引き金を引いた。

しかし発砲の直前、男の銃口が跳ね上がり弾丸は蒼い空へと突き抜けて行った。

今まで気を失い横になっていたチャイムが、仰向けのまま男のライフルを蹴り飛ばしたのだ。彼女は跳ねる様に起き上がる。

「なあにすんのっ、よっ！」

そのままライフルを奪い取り、立ち上がりざまに銃床で男の顎を真下から突き上げた。仰け反った男は背中から新雪の中に倒れこみ、そのまま動かなくなる。

「なに今の！？・・・っつーか誰よあんた達！！

ってというかそんな事より結界か何かに取り込まれなかった！？」

周囲の魔力の変化に気付き目を覚ましたのだろう。事態を全く飲み込めていないチャイムは奪ったライフルを片手に慌しく辺りを見回した。

「がっ・・・！？」

ローウェンが頭を押さえた。頭が痛むのではない。身体に入り込む強烈な違和感。まるで、頭の中に手を突っ込まれ、そこから手足に繋がる糸を強引に引っ張られているような感覚。体中の筋肉が強張っているのに意識が遠のき始めた。

ここで、異変を感じ取ってから呪文詠唱を続けていたティアドラの術が完成した。腰に刺していたナイフを地面に突き立て、そこを中心に自分の結界を作り出した。

じゃあああっ！と、焼き石に撒いた水が爆ぜるような音が響いた。周りの様子に変化は無かったが、レイチェル達が感じていた圧迫されるような魔力の流れが消えていた。ローウェンの体の異変も嘘のように消え失せた。それでも彼は、頭を押さえがくりと膝を付く。

「かはっ・・・な、何だ、今のはっ・・・お前の仕業か？」

「違うわい。誰かが人間を意のままに操る術式を使いおった。

お主も一瞬じゃが意識を捕まれておったぞ？」

助けた相手に敵意を向けられてもティアドラは気を悪くした様子も見せず、突き立てたナイフの周りに追加の魔導式を書き込みながら答えた。

「どうせ・・・あの魔族達の仕業でしょ？ イビスと、アイビスって言ったっけ？」

「やっぱこの山に来てるのね・・・」

警戒の色を強めるローウェンは、チャイムの何気ない呟きに聞き覚えのある名前を見つけた

「イビス・・・？ 君達はやはり、彼らの知り合いなのか？」

『・・・！？』

ローウェンの呟きに、チャイム達は一斉に彼へと振り向いた。



ざざざざ、と、かりかりに凍った粉雪と木々の枝を掻き分け、エアニスとトキは急斜面を滑り下りる。

エアニスの目が崖の下で動く人影を捕らえた。

「見えたぞ、この先の崖の下。10人くらい。崖を飛び降りて連中のど真ん中に飛び込む！」

「雑な作戦ですねえ。まあ、いいですけど！」

そう言葉を交わしているうちに、足元の地面は途切れる。崖の先端で二人は思い切り踏み切って、茂みの外へと飛び出す。眼下にはエアニスの言った通り、10人程の人影。ずだん！と雪煙を巻き上げ、二人はその中心へと降り立った。

「っ！？」

ずぐん、と、エアニスの首の後ろが疼いた。

まるで"頭の中に手を突っ込まれ"、中身を鷲掴みにされたような感覚。何とも言えない不快な違和感に、彼はぶるりと身を震わせた。

「・・・？」

「どうしました、エアニス？」

「・・・ん、いや、何でもない」

トキに変わった様子は無い。首の後ろをさすりつつ、エアニスは一瞬感じた違和感を忘れる事にした。

「まあ、そんな事よりエアニス。これはどういう事ですか？」

「あ？・・・ああ？」

遅まきながら、エアニスはようやく自分を取り巻く状況を把握した。

二人が飛び込んだのはボロボロの兵隊服を着た10人程の男達のだ真ん中。エアニス達の洞窟を襲った連中・・・の筈だった。しかし兵隊服に身を包んでいたのは人間ではなかった。

血の気を失ったひび割れた肌に、白く濁った眼球。異様に痩せ細った四肢。

「生ける屍・・・あの野郎だな・・・」

エアニスの言うあの野郎とは、言うまでも無く魔族の少女、アイビスの事だ。

アスラムへ渡る船の上で、彼女が作り出した"生ける屍"と戦ったのはそれほど前の事ではない。

「・・・洞窟を襲撃した兵隊さん達は間違いなく人間でしたよ。双眼鏡ではっきりと確認しました」

「・・・そいつらが、あの野郎とカチ会ってこんなにされちゃったって事か？」

「さあ、どうでしょうね？」

ロクに考えた様子も無くトキは適当な相槌を打つ。エアニスは肩を竦めた。

「まあ、こうなっては事実を知る事も出来ないし・・・別に、知る必要も無いか」

エアニスは腰の剣を引き抜く。"生ける屍"にされてしまった者を救う方法は無い。エアニス達が彼らの為に出来る事は、いつまでも動き続けるその体を破壊し、普通の屍として土に還してやる事くらいだ。生きてはいても、彼らはもう"屍"なのだ。

エアニスは心に引っかかる罪悪感を振り払い、彼らへ剣を向ける。

「何処の誰かは知らねーが・・・巻き込んで悪かったな・・・。

俺達を恨まず、大人しく成仏してくれよッ！」

そう言って、エアニスは手近な"生ける屍"へと斬りかかった。

深い新雪に取られる足を必死に動かして、レイチェルは茂みの中を駆け下りる。

人が歩く為の山道など無いので、目的の場所まで一直線に走った。もちろん木々の生い茂る雪山の斜面を駆け下りているのだから、自分が思っているよりも速く走れてはいない。

それでも焦る思いに急ぎ立てられるように、レイチェルは力の限り走る。

「わっ！」

足元を滑らせる。体勢を立て直そうと、滑らせた足とは反対の手足で身体を支えようとしたが、その先には急な斜面があった。レイチェルはそのまま短い距離を落下して、背中から地面に落ちる。息が詰まった。

「ちょっと、レイチェル！？ 大丈夫！？」

少し遅れて、チャムとティアドラ、レオニール兵を名乗る3人の男達が追いついてきた。

仰向けになったまま、ぜいぜいと息を切らし、彼女は手を振って平気だと告げる。落ちた地面が柔らかい雪で覆われていた事と、ちゃんと受け身を取るようにして落ちたという事もあり、レイチェルは無傷だった。そのかわり、この悪路を全力で走り続けてきた疲れがドッと吹き出してきた。呼吸が苦しく、起き上がる事が出来ない。

チャムとティアドラが斜面を滑り降りて、レイチェルの元に駆け寄る。

「まったく、折れた木の枝が上を向いて落ちていただけでも大怪我をしておったぞ。急ぐ気は分かるが、もっと注意せんか！」

「はあ、はあ、す、すみません・・・でも・・・」

「それに、ここは標高が高く酸素も薄い。お主らのような高地に慣れておらん人間が全力で走れば意識を飛ばすぞ」

「・・・」

そんな当たり前の事すら失念していた事に気づき、レイチェルは冷静になろうと呼吸を落ち着ける。

でもそれは、走っている間は幾らか紛れていた、彼女の胸にわだかまる不吉な予感を呼び戻してしまっただけだった。

レイチェル達は、レオニール軍を名乗る遭難者から全ての事情を聞いた。

彼らがレイチェル達の洞窟を襲撃したのは誤解であった事。そして同時に、エアニスとトキが彼らの仲間の襲撃に向かっている事も、誤解である事が分かった。

レイチェルが心配しているのは、誤解のままにエアニス達が彼らの仲間を傷つけてしまう事ではない。エアニス達が向かった先に居る遭難者達は皆、非戦闘員だという。エアニス達ならば相手の様子や物腰を見て、それが剣を向けてよい相手かどうかはすぐに分かる筈だ。レイチェル達と同じように、話し合ってお互いが誤解していた事に気付くだろう。

心配なのは誤解の原因となっている、遭難者達と行動を共にする二人の男女。

男の方はレイチェル達を狙う魔族の一人、イビスだ。名前も特徴も、レイチェルが知るものと

一致している。

女の方は分からない。最初は少女の姿をした魔族、アイビスかと思ったが、ローウェンから聞いた名前と容姿は、別人のものだった。それが誰かは、今の情報で判断する事は出来ない。

そして、ローウェン達が何者かの術に操られ、レイチェルに銃を向けた事。これはどう考えても、あの魔族達の仕業だろう。幸い、ティアドラのお陰でローウェン達を操ろうとしていた術を打ち破ることが出来たが、今のエアニス達にはその対抗手段が無い。

エアニスとトキが遭難者達と遭遇すれば、どちらかがローウェン達の様に操られ、誤解を解く暇もなく戦いが始まってしまうかもしれない。

それは容易に想像できる、最悪の結末だった。

その前に、エアニスとトキを止めなければならない。

「見えたぞ！」

レイチェルの隣を走るローウェンが指を指した。

見れば、幾重にも重なる木々の向こうに、幾つかの人影が見て取れた。

「エアニスさん！！トキさん！！」

レイチェルは二人の名を呼びながら、森を抜けた。

パタパタッ、とレイチェルの顔や髪に生暖かい雫が降り注いだ。

それが何かはすぐに分かった。目の前で、見知らぬ兵隊服の男が、胸元から血を吹きながら立ち尽くしているからだ。

「ああ？」

すぐ真横から、聞き覚えのある粗暴な声がした。

エアニスだった。左手には、赤い血に塗れた、紅い刀身の剣が握られている。目の前で斬られた兵隊服を着た男の血だろう。斬られた男は力ない足取りで一步、二歩と歩くと、レイチェルのやや後ろに居たチャイムの足元へ倒れ込んだ。チャイムもティアドラも、倒れた男に構う事が出来ずその場で立ち尽くした。

「エアニス・・・さん・・・？」

呻くように、レイチェルはエアニスの名を呼ぶ。しかし彼の目は、まるで見知らぬ他人を見るような・・・いや、まるでモノを見るかのような目で、彼女を見下ろしていた。

「レイチェル！！」

本能的な危険を感じ、チャイムがレイチェルを突き飛ばした。その間を紅い剣閃が行過ぎる。二人はもつれるように雪の地面へと転がり、地面にあった柔らかい何かへとぶつかった。

それは、倒れていた人間だった。足から血を流し、血の気を無くした怯える顔でレイチェルを見ていた。周りを見回すと、4、5人の男達が血を流して地面に横たわっていた。全員が剣によって斬り付けられた傷のようだ。

雪を踏む鈍い音が近づいてくる。血の滴る剣をぶら下げたエアニスが、まるで塵箱に捨て損ねた紙屑を拾いに来る様な、そんな様子で近づいてくる。

レイチェルの予感は的中してしまった。

もしそうってしまったとしても、せめて操られているのがローウェン達の仲間の方であれば・・・。

そんなレイチェルの希望にすぎた願いも、ことごとく裏切られた。

操られていたのは、エアニス達の方だった。

「このっ、馬鹿エアニス！！」

チャイムが背中に背負った剣を抜いて、エアニスに飛び掛った。

人を傷付ける事を善しとしない彼女の剣は、ボーンクラッシャーと呼ばれる刃が潰された模造刀だ。これならば、当たり所が悪くない限り、相手を殺してしまうような事は無い。チャイムは本気でエアニスを倒すつもりで剣を振るった。

耳をつんざく破裂音と共に、いきなり真横から殴りつけられるような衝撃がチャイムを襲う。たまらずバランスを崩して膝を突くと、羽織っていたアダマンタイトのマントがブスブスと燻っていた。少し遅れて、脇腹に鈍い痛みが広がり始める。

「油断しないで下さいよ、エアニス」

岩場に退屈そうに座り込んだトキが、大柄な銃をもてあそびながら言った。

チャイムを襲ったのは、トキが放った銃弾だった。

「うるさい。余計な手を出すな。一人で片付けてやる」

「はいはい。すみませんでしたね」

「・・・・っ！！」

何気ない二人のやりとりを聞き、チャイムは今まで感じた事の無い種の恐怖を覚えた。

今の銃撃も、アダマンタイトのマントを着ていなかったら間違いなく死んでいた。フードを被っていない頭を狙われていても、死んでいた。

この旅の途中、自分が死んでしまう可能性を考えなかった訳ではない。自分がどのような死に方をするのか考えた事だって、当然ある。

だが、エアニスやトキに殺されるなんて考えた事も無かった。

それはあまりにも、あんまりだ。

エアニスが怖いと感じた。

トキが恐ろしいと感じた。

全身が今まで感じた事も無い恐怖に支配され、片膝を着いたまま立ち上がる事が出来ない。

心が折れてしまいそうだった。



エアニスがチャイムに視線を戻し、ふわりと、無造作に剣を振り上げた。

動けないでいるチャイムとエアニスの中に、今度はレイチェルが割って入った。恐怖で弛緩した身体を無理に動かし、ハンマーロッドを両手で握ってエアニスの薙ぎ払うような剣閃を真っ向から迎え撃つ。

ティアドラが魔導式の起動言語を叫んだ。

ローウェン達にかけられた傀儡の術を打ち破った、あの言葉だ。

あの時と同じように、水が弾けるような音が回りに響き渡る。

しかしティアドラは悔しそうに舌を打つ。僅かに遅かった。

ガァイン！

想像以上の衝撃がハンマーロッドに打ち付けられ、レイチェルはチャイムと一緒に弾き飛ばさ

れた。ハンマーロッドは回転しながら空へ舞い上がり、レイチェルとチャイムはもつれあうように雪の地面を何度も転がった。



エアニスの剣は振り抜いた形のまま止まっていた。

突然、目の前に居た筈の"生ける屍"が、チャイムの姿を形作ったからだ。

「・・・な・・・なんだ!？」

気付けば、生ける屍の姿は何処にも無くなっていた。代わりに、エアニスが斬った生ける屍と同じ数だけの男達が倒れている。

エアニスは雪原に倒れるチャイムとレイチェルを見た。

真っ先に疑ったのは何者かによる幻術の作用。

誰かがエアニスを惑わす為、生ける屍をエアニスの知る者の姿へ変えたのだという可能性を考えた。

しかし、それは全く逆の勘違いであった。

エアニスは今まで何度も命を賭けた戦いを経験し、その都度瞬間的な命の選択を迫られてきた。この判断も、これまで通り自分が生き延びる為の本能に準じたものだった。だから戸惑いを無視し、剣を振り抜いた。

だが今の自分は、数年前の自分とは違う。守るのは自分の身ひとつだけではない。守らなくてはいけない、仲間が居るのだ。昔の自分と同じつもりではいけないのだ。

これまでの自分では、仲間を守る事は出来ない。

それを、ほんの2年半前に痛感したばかりだというのに、自分はまた同じ過ちを繰り返したのか。

喉の奥が一気に干上がった。

「おい・・・嘘だろ？」

剣を投げ捨て、二人の元へ駆け寄ろうとする。しかし、二人がどうなっているのか確認するのを恐れたのか、足が竦んでしまい最初の一步目を踏み出す事が出来なかった。

2年半前、目の前で大切な人を失った事が脳裏を過ぎる。

クソッと自分の膝を叩き、覚束ない足取りで二人の下へ駆け寄った。

二人は、レイチェルがチャイムを庇うような格好で倒れていた。エアニスが駆け寄ると、レイチェルがゆっくりと身を起こす。

「・・・エアニスさん・・・術が解けたんですね・・・？」

脳震盪でも起こしているのか、レイチェルははっきりとしない意識でエアニスを見上げた。

その様子を見て、エアニスは思わず膝から崩れ落ちる。

「は、は・・・良かった・・・」

震える息を吐き、エアニスは地面に膝を着き、レイチェルの手を握って頭を垂れた。

言葉もなく、ただエアニスは震える手で彼女の手を取り、頭を下げ続けた。

「や、やめてください、私は大丈夫ですから・・・！」

ほら、チャイムも！」

エアニスは、レイチェルの下でうずくまるような格好のチャイムを見た。頭を腕で守るように覆っていたチャイムが、ゆっくりとエアニスの方を見た。

「・・・っ！」

エアニスは思わず立ち上がり、一歩、二歩と二人から距離を取った。

チャイムの顔に張り付いていたのが恐怖の表情だったからだ。

自分に対する恐怖の感情。その表情がエアニスの心を深く抉った。

その時、エアニスは自分がどのような顔をしていたのか分からない。

チャイムはその顔を見て、自分が酷い事をしてしまったという事に気付く。

「！・・・違うの、エアニス！私も、大丈夫だから・・・」

気丈な姿を振舞おうと思ったのに、その声は震えていた。

エアニスは唇を噛んで、チャイムの視線から目を背ける。



その後、エアニスとトキは、ティアドラから事の経緯を聞いた。

この山で遭難していたローウェン達の事。彼らが出会った二人の男女の事。その二人が、あの魔族達であろうという事。

「ご迷惑を掛けたようですね」

普段の調子を取り戻し、トキは怪我をして倒れている遭難者に魔導で治療を施しているティアドラに声を掛けた。

「よい。仕方の無い事じゃ。気に病むな」

「ええ、すみませんでした」

トキはどこか冷たいとも感じられる、端的な返事をする。

エアニスに斬られた遭難者達は奇跡的に全員が命を取り留めていた。エアニスが幻術に惑わされ、人間ではなく生ける屍を倒すつもりで戦っていたからだろう。

相手が人間だったら、エアニスは的確に人の急所を斬り裂いている。しかし、急所を斬っても死なない相手だと認識していたために、動きを止める事を目的に足等を狙っていた事が幸いした。トキも銃はあまり使っていない。生ける屍にはあまり意味を成さない武器だからだ。殲滅はエアニスに任せ、彼はサポートに徹していた。

とはいえ、全ては偶然の産物だった。運が良かっただけで、エアニス達は無関係の人間を、自分達の仲間を、殺してしまう所だったのだ。

怪我を負った遭難者は7人。今はティアドラとチャイムが中心となり怪我人の傷を塞いでゆき、ローウェンも二人の手が回らない怪我人達の止血をして回っていた。ここに留まっている遭難者は10人程だと聞いていたので残りの者は森の奥へと逃げてしまったのだろうか。

そして、ここに居る筈の魔族とおぼしめき二人の男女の姿も無かった。

「大丈夫ですか、エアニス？」

「あ、ああ・・・」

心配するときに、エアニスはあまり大丈夫には見えない顔で頷いた。

「分かっているとは思いますが、これが連中の狙いですよ。心理攻撃です」

「分かってるさ・・・お前は・・・」

「ええ、今チャイムさん達に謝ってきましたよ」

そう言ってトキは指で眼鏡のブリッジを持ち上げる。

「・・・そうか」

相当キレてるな。

エアニスはそう思いながら、投げ捨てたままの剣を拾い上げる。

作り笑い以外の表情を滅多に見せないトキだが、エアニスは彼の感情がこれまでの付き合いの中で何となく読めるようになっていた。こうして淡々と会話を交わしている時は、相当頭に来ている筈だ。それこそ、"昔の顔"を覗かせる程に。

「予想以上につまらない結果ね。

もっとあの子達にアンタ達のドロドロした所見せ付けてあげたかったのにさー」

エアニスの耳元、すぐ後ろから声を掛けられた。聞き覚えのある女の声。

彼は拾い上げた剣をそのまま振り返りざまに背後の影へと叩き付ける。

しかし、その刃は相手を斬り裂く事無く、エアニスの背後に立っていた見知らぬ女の首筋で止まった。

長い栗色の髪を伸ばした、この雪深い山には似つかわしくない村娘風の少女。

見知らぬ少女だった。

エアニスの全身から冷たい汗が吹出す。

「そうそう、ちょっとは学んだみたいね。

気をつけないと、さっきみたいに自分の仲間を手に掛ける事になるかもしれないわよ？」

少女は首筋に刃を突き付けられながら、怯える様子も見せず、笑いながらそのような事を言った。

魔族・アイビスの声で。

怪我人の手当てをしていたローウェンが飛び上がった。

「アイシャ!？」

ローウェンは少女の名前を呼ぶと、彼女の首筋に剣を突き付けたエアニスの腕を引っ張った。エアニスは特に抵抗もせず、アイシャから引き剥がされる。

「何やってんだあんた!!この娘は俺達の仲間だ!!」

一部始終を見ていたレイチェルとチャイム、ティアドラは、ローウェンの言葉を聞いて状況を理解した。

ローウェンから聞かされた、昨日出合ったと言う、男女二人組みの遭難者。魔族・イビスと一緒に居たという少女。

イビスが片足を踏み出し、そう宣言した。

普段はアイビスばかりが動き、傍観者とも言える立ち位置にいるイビスだが、今の彼の言葉には明確な目的意識が感じられた。エアニスは剣を構えながら一歩、前に出る。

「・・・そいや、あんた達の目的をまだ聞いてなかったな」

エアニスの問いかけに、イビスは何を今更とでも言うように目を眇めた。

「お前達の考えている通りだ。"石"が・・・ヘヴンガレッドが本来何のために使われていたか知っているな？」

ヘヴンガレッドによって閉ざされた"レッドエデン"への扉を開き、この世界を在るべき姿に戻す」

「在るべき姿、ねえ・・・」

確かに250年前まで、この世界には人間と魔族と一緒に存在していた。しかし共存する事は叶わず、人と魔族は幾度と無く争いを起こしていた。

その争いに終止符を打ったのが、レイチェルの先祖であるエレクトラと呼ばれた魔導師だ。彼が"ヘヴンガレッド"の力を使い、この世界とは別の世界への扉を開き、魔族の殆どを"レッドエデン"と呼ばれる異世界へ追放したと伝えられている。

イビス達は、その追放から逃れた者達なのだろう。

「そう言われると聞こえがいいが、お断りだ。

俺達人間の都合から言わせて貰えば、お前らは害悪でしかないからな」

「だろうな」

まるで話にならない、といったような面持ちでイビスはエアニスとの会話を打ち切った。エアニスとしても話し合いの出来る相手では無いと思っていたが、このような反応をされるのは思いの他不愉快だった。

「・・・どうして、どうしてこんな事をした!？」

怪我をした遭難者の傍らで、ローウェンが叫んだ。

「ん? ああ、ごめんね。こいつらを揺さぶる為にあなた達にはエサになって貰ったの。

もういいわよ消えて。お礼に逃がしてあげるわ」

「エサ、だと! ?・・・馬鹿にっ・・・!!!」

「そうそう、もう一ついい事教えてあげるけどさ、」

「何がっ・・・」

「戦争。あんた達が迷子になってるうちに、とっくに終わってるのよ?」

「・・・ッ! ?」

激昂するローウェンが息を詰まらせる。

エアニス達は一瞬、二人の会話の意味が分からなかった。しかし、すぐに遭難者であるローウェン達が終戦の事を未だに知らなかったのだと気付く。

人生の殆どを戦争と共に生きている者にとっては、この事実は衝撃的だろう。

「もう一年半も前の話よ？」

ついでに言うと、あんたの国、もう無いわよ。

「!？」 「!？」 「!？」

結局口を突いて出た言葉はこんなものだった。

エアニスとトキ、レイチェルは、突然場違いな事を口走ったチャイムをポカンとした顔で見る

。

しかし、そんな安っぽい挑発にアイビスは思いのほか動揺した。

「バ、バ、バカですってえっ!？」

「そうよ!! 超絶バカよ!!」

あたし達2ヶ月以上も一緒に一緒に旅してるんだからっ!!

すっっっごい仲がいいんだからっ!!」

両手を振るい熱弁するチャイム。エアニスはポカンと口を開けていた。

「どこがよ!! いつも喧嘩してるし、さっきも涙目だったじゃない!!!」

「めっ、目にゴミとかが入ったのよ!!!」

「お・・・おいチャイム」

突然始まった子供のような口喧嘩に、エアニスは控えめに静止を促す。正直反応に困っていた。だがエアニスの言葉が聞こえなかったのか聞くつもりが無いのか、チャイムとアイビスはぎゃあぎゃあと喧嘩を続ける。チャイムの精神年齢がやや低い事は理解していたが、魔族・アイビスも似たような物だとは思わなかった。チャイムはともかく、少なくとも数百年は生きている筈のアイビスは何故こんななのだろうか。エアニスが魔族の片割れ、イビスに目を向けると、彼は表情をピクリとも動かさず彼女達の応酬を見ているだけだった。

「そ、それにあたしは、エアニスに剣を教えて貰ってるんだから!!

毎日毎日アイツに剣を向けられてるんだからこんな事でビビる訳ないでしょうが!!」

「そ、その割にはアナタもその男も随分と凹んでるように見えたけど・・・!？」

「そーんな事無いわよッ!! あたしとエアニスはすごい仲いいんだからっ!!!

この山に入る前だってXXX」

「バカ野郎言うなアアアアア!!!」

どごしゃあああああ!!! と。

エアニスはチャイムの口を塞いで雪深い土手に投げ飛ばした。

「何よッ!？」

ボゴッと雪の中から顔を出し、チャイムが抗議の声を上げる。

「何って、何を言うつもりだったんだよッ!？」

「何って・・・!」

言いかけて、チャイムは顔を真っ赤に染める。チャイムのその顔を見て、思わずエアニスも顔に血が上るのを感じた。

呆然とするローウェンに、呆れるティアドラ。そして硬直するトキとレイチェル。

アイビスは舌打ちをする。

エアニス達から向けられていた敵意や憎悪が、あっという間に霧散してしまったからだ。

あのバカ女のお陰で、これまでの茶番が殆ど無駄になってしまったと言ってもいい。

悔しかったが、彼女の言う通り、この位では彼らの仲を崩す事はできないのであろう。それだけ仲が良いのか、それだけ頭が悪いのか、アイビスには判断が出来なかったが。

「あわわわわ、どうしようあたし、変な事口走っちゃった？

マズかったかな！？」

「ま、マズイと言えばマズイが・・・お前のお陰で体が動くようになったよ・・・」

「え？」

「いいや、何でも無い。ありがとうな、チャイム」

「！？・・・う、うん」

さっきまで竦んでいた足や、指先の震えが、チャイムの起こした騒ぎを見ているうちに消えてしまっていた。今は普通に、互いの目を見て会話が出来ている。

何だ、俺達の仲はこうも単純なものか。

離れてしまったら、どちらかが歩み寄ればいいのだ。

今回はチャイムが歩み寄ってくれた。またいつかこんな事があつたら、今度は自分から歩み寄ろう。エアニスには心の中で密かに誓った。

やはり、仲間というものは心地がいい。

「とんだ道化だな」

アイビスはアイビスの横に並び、表情も無くそう言った。

「・・・笑いたかったら笑いなさいよ・・・」

「別に。どうでもいいさ。

奴らの敵意や感情の揺らぎを糧としなくても・・・これは勝てる戦いだ」

「まあ、そうなんだけどね・・・」

アイビスが剣を構え直し、アイビスはふわりと地面から浮き上がる。

「・・・さて、茶番は終わりか」

それを見てエアニスも立ち上がり、トントンとその場で体の調子確かめるように跳ねてから、剣を構えた。心なしか、いつもより体が軽い。

「チャイムはティアドラと一緒に怪我人の手当てを」

「・・・分かった」

チャイムは素直に頷く。エアニスは無造作に二人の魔族に歩み寄りながら、

「行くぞ、トキ。レイチェルも手伝ってくれ。今回の戦いはお前が要だ」

トキは普段通り静かに立ち上がり、

「はいっ！」

戦いの中でエアニスに頼りにされるのが嬉しかったレイチェルは、力強く頷いてハンマーロッドを構えた。

エアニスは剣を肩に担ぎ、首を傾けながら笑う。

「さっさと終わらせて、仲良くメシでも食いに行こうぜ」

第70話 途切れた真実

固く凍る雪原を蹴って、エアニスはアイビスへ斬りかかる。

相手が丸腰であろうが関係無い。彼女達魔族は人間の常識が通用しない相手だ。

彼女は嬉しそうに笑い、その右手を振り上げる。その左手にどのような力があるのかは分からなかったが、エアニスは長剣の長さを活かしアイビスの間合いの外から彼女の喉元を狙い切っ先を突き出した。

しかし、その間に大剣を携えたイビスが割り込み、エアニスの剣を上段から叩き伏せた。エアニスの鋭い踏み込みは一瞬にして静止する。

「邪魔をするな！」

イビスはエアニスの目を睨み、何も言葉を発しない。

睨み合う二人の脇をレイチェルの放った術が行き過ぎ、アイビスの体の直前で見えない壁にぶつかり消し飛んだ。それと入れ替わるように、両手にナイフを構えたトキがアイビスに斬りかかる。息の合ったトキとレイチェルの攻撃を視界の端に収めたまま、エアニスは目の前の魔族に言う。

「・・・なんだ、俺の相手はお前になるのか？」

「女の姿をしているあいつと戦うよりは、幾分やり易いだろう？」

お前は平気で人を殺せるのに、女子供には極端に甘い偽善者だ聞いているぞ」

「なっ！・・・どこのどいつだ、ソレ言ったの！」

イビスとアイビスが身を置いている犯罪組織、ルゴワールから得た情報だろう。

自分でも自覚していた凶星を突かれ、エアニスは乱暴にイビスの剣を払い退ける。

「迷惑なんだよ、お前ら魔族は！！」

人間に迷惑掛けないように向こうの世界で大人しく暮らしてろ！！」

「勝手だな。我々から見れば、お前達人間の方が迷惑だ」

「何だって！？」

「お前達は俺達にとって・・・侵略者だ」

「・・・ッ！？」

常に無表情なイビスの顔に、僅かに感情が浮かんだ。上段から振り降ろされた斬撃からエアニスは剣を引き後ろに飛ぶと、転がるようにして間合いを取った。

イビスの剣は、そのまま凍った雪原を深々と切り裂く。

何も変哲の無い、ただの斬撃。しかしエアニスは、本能的にその刃を受けるのを拒んでしまった。

何故だかは、分からない。

「昔は我々だけでなく、様々な種族がこの世界で共存していた」

「・・・？」

「だが、歴史を重ねる度にお前達人間は増え続け、自分達と姿形や在り方の違う存在を迫害する

ようになった」

「何の・・・話だ？」

剣を振るい、がなり立てるエアニス。しかしエアニスの剣はなかなかイビスには届かない。この時点で、単純な力押しでは勝てないと感じた。

「我々は、お前達人間の感情を糧にして存在する事を知っているか？」

「糧？」

話しながらも二人は剣を振るう。エアニスはイビスの手の内を探るような一歩引いた剣戟を。イビスは攻めに転じるつもりがないのか、さっきからエアニスの剣を捌くのみだった。

「お前達人間が"認識"する事で、我々の存在は強固な物になるという事だ。

最も分かりやすいものは、"崇拜"という行為だ」

「はっ！ 何でお前らみて一な害悪を崇なくちゃいけないんだよ！？」

イビスはエアニスの反論に失望するかのように目を伏せた。剣を弾く反動を利用し、大きく間合いを取り、静かに雪原へ降り立つ。その一挙手一投足には余裕すら感じられた。

「人間達の歴史にも残らない、遠い昔の話だ。

お前達が我々を崇める事によって、我々はこの世界に存在していた。

お前達の祈りが我々の力となり、我々はその力を使いお前達を救ってきた」

イビスは構えを解いて、エアニスを見下ろすようにして話を続ける。

「・・・だがいつの頃からか、お前達人間は、我々を恐れるようになった」

エアニスも攻撃の手を止める。イビスの言葉の先が少しだけ気になったのだ。

「お前達の感情を糧に存在する我々としては、"崇拜"が"恐怖"へと変わっただけだ。

認識の違いはあっても、同じ感情である以上特に問題は無い。

むしろ"恐怖"は、"崇拜"よりも大量の人間に伝播する。個々の質はともかく、これまでよりも多くの力が我々の元へと集まるようになった」

イビスの話はエアニスだけでなく、チャイムとティアドラの耳にも入っていた。

怪我人の手当を続けながら、ティアドラは唇を噛んだ。

「だがお前達が俺達を崇め称えないのであれば、その代わりに恐怖と畏怖の念を抱き続けて貰わねば、俺達はこの世界に存在できない」

「・・・！」

エアニスは息を呑む。

「これが今も続く、俺達とお前達の関係だ」

「最初に裏切ったのはお前達人間だ」

イビスは告発するかのような口調で言った。

「我々の仲間がこの世界から追放されて250年だ。この世界の間人達は、我々の存在を忘れつつある。お前達が我々の存在を忘れてしまえば、人間の"認識"や"感情"を糧に存在している俺達は消えてしまうだろう」

イビスは下ろしていた剣を構え直し、エアニスに歩み寄る。

「この世界にに残っている我々では数が少なすぎる。僅かな人間にしか認識されない。十分な恐怖や畏怖を抱かせる事が出来ない。

だから"石"を使い、追放された仲間達をこの世界に呼び戻さなくては、いずれお前達は我々の存在を忘れ、俺達は本当に消えてしまう」

イビスの言葉を、世界の仕組みの一端を理解し、エアニスの心は揺らいでいた。

そして、彼等の戦う理由も、理解出来た。

「我々もお前達と同じだ。生きるために、存在するために戦っている。

生きる為には、その"石"が必要だ」

二人の間に沈黙が落ちる。

イビスはエアニスの反応を伺うかのように、剣を止めて彼の瞳を覗き込んでいた。

「・・・ははッ、崇められて存在していたなんて、まるでお前ら魔族は神様みたいだな？」

からかうように言ってみたエアニスだが、震わせた喉が乾いている事に気付く。イビスの途方も無い昔話に動揺しているのか。

「神などこの世界には存在しない。

だが、お前達が俺達を崇めていた頃は、我々はお前達に神と呼ばれていた」

事も無げに発せられた言葉に、エアニスは絶句する。

エアニス自身も"神"などという存在は信じていない。しかし、振舞い次第ではそれと誤認されかねない力を持つ者が、目の前に存在する。

魔導の概念すらも超越した力を持つ魔族。それが人間達に未知の力、神の奇跡だと認識されていたとしても不思議ではない。

神話や伝説に登場する"神"という存在は、今の"魔族"の事を指しているとでも言うのか。

今の世界へと伝わる事無く途切れてしまった、この世界の真実。

エアニスは喉を鳴らす。

根拠など無い。全てはイビスの作り話かもしれない。しかし、何故かイビスの口から語られた言葉が、嘘だとは思えなかった。

イビスの話に飲まれそうになっていたエアニスは、頭を振って剣を構え直す。

「興味深い話ではあるが・・・悪いな。

だらとって、俺たちがすべき事は変わらないんだよ」

「だろうな。

だが覚えておけ。

我々は太古の昔から変わらない。

変わったのは、我々に対するお前達人間の認識だ」

これ以上イビスの話を聞いていたくはな無かった。自分達の戦う理由が彼等と同じだと、認めたくなかった。

エアニスは急ぎ立てられるようにイビスへと斬りかかる。

「はっ！正義は我に有りとも言いたいのか！？

正義なんてモンはこの世界には無いんだよ！ その言葉はエゴイストどもの妄言だ！」

甲高い金属音が響き、イビスはエアニスの剣を正面から受け止める。噛み合った刃がチリチリと空気を焼く。声を張り上げたら、失せかけていた闘争心が再び昂ぶって来た。

「それに、勝手だぜ。

お前の言う事が本当なら、たしかに人間側がお前達との共存関係を崩す切欠になったのかもしれない。

だがお前達は、俺達を本当の意味での食べ物にする事で、それを善しとした！

それも人間が望んだ事だとでも言うのか！？」

噛み合った剣をイビスは振り払う。火花と、可視化した魔力の余波が飛び散った。

「・・・お前ならば我々の事を理解して貰えるかとも思ったのだから」

「あ？ 何だと！？」

「お前達エルフも、この世界から迫害された歴史があるだろう。事実、今も人間と共存出来ているとは言い難い。いずれお前達の種は、人間達に追いやられる様に消えてゆくだろう。

今のお前の存在は、人間のそれよりも我々に近い」

イビスの言葉にエアニスは気分を害する。左手で握る"オブスキュア"へ魔力を押し込み、一際乱暴な一撃をイビスへと叩き付けた。

「生憎、俺は種とか同族とか、そんな面倒臭いモンに囚われるつもりは無いんだよ」

エアニスの力が弾ける。魔力で増幅された分厚い剣圧を受け止め切れず、イビスは雪原をブーツで削りながら後退する。

エアニスの剣に赤く淡い光がまとわり付いていた。魔法剣・オブスキュアが魔導的側面への干渉力を高めている時の特徴だ。この間、エアニスの魔力もオブスキュアに食われ続ける。だから、長々と剣を交える気は無い。

「御伽話は終りだ。人間だとか魔族だとか関係ねえ。

結局、誰であろうと価値観が違う者同士は潰し合うしか無いんだよ」

「・・・そのようだな」

純然たる事実。その理に従い、この世界はいつまでも愚かな争いに明け暮れている。そしてエアニスは、それに従う事は過ちでは無いと思っている。

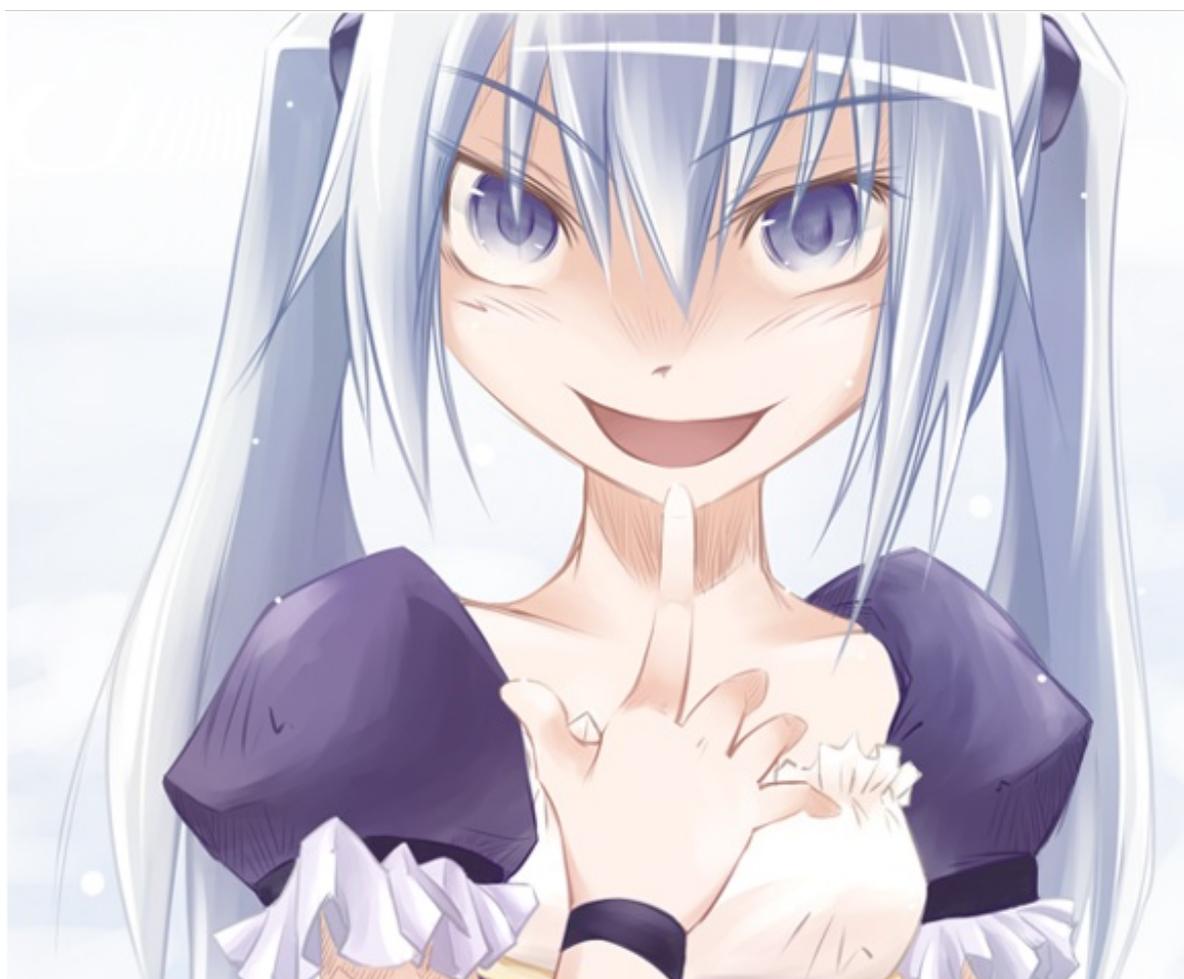
イビスはこの話をする事で、エアニスに何を望んでいたのだろうか。

彼はそれきり口を噤んでしまい、それが何だったのかは分からず終いだった。

◆
文字通り火花を散らしながら戦っているエアニスとイビスを、アイビスはまるで微笑ましい子供の喧嘩でも見るような目で見ていた。

その横顔に容赦無くトキは9mm貫通弾を撃ち込む。しかし、アイビスがトキの方へ視線を向けると、その直線上にあった貫通弾は虚空中で静止し、バラバラと雪原へと落ちた。どういう理屈かは分からないが、とにかく正面からでは銃は役に立たないらしい。トキはナイフを右手にアイビ

スへと駆け出す。





アイビスは、はぁ、と溜息を吐いて、
「あんた達じゃ役不足じゃないかな？」
パチンと、指を地面に向けて鳴らした。
ボゴリと地面が泡立つ。

足場を乱され、トキがバランスを崩す。隆起した地面に足を取られたのかと思ったが、トキの足首は地面から生えた細く白い腕に掴まれていた。

背中をぞわりと寒気が走る。しかし、すぐにオーランドシティで彼女が土塊でゴーレムを作っていた事を思い出した。

ネクロマンシー。死体や魂を操って自分の手足とするのが彼女の戦い方だ。魂を集める力さえあれば、死体が無くても土や雪でゴーレムを作り出す事は可能なのだ。

トキは掴まれていない反対の足で、地面から生えた白い腕を蹴り飛ばす。雪で出来たそれは思いの外脆くバラバラに碎ける。しかし、雪の地面から生えてくる腕は一本二本ではなかった。腕に繋がる肩が形作られ、人の頭部を模した雪の塊が雪原を次々と突き破る。雪原に埋まる下半身を引きずり出し、今まで何度か見た生ける屍のように、生気の無いゆらゆらとした動きで立ち上がる。

ほんの数秒でトキは真っ白なマネキンのようなゴーレムに囲まれてしまった。トキの頬が強張る。魔力で操られる人形は急所といった概念を持たず、倒すには身動きが出来ないほどにその体を破壊するしかない。しかしトキの持つナイフと銃は、派手な破壊を目的とする武器ではなかった。

そして何より、自分とエアニスが犯した過ちがトキの動を鈍らせる。

この雪像は、本当にただのゴーレムなのか。さっきのように、アイビスの幻術で人間をゴーレムとして認識してしまっているのではないか。

トキが躊躇っていると、彼後ろに控えていたレイチェルが即席で作った魔導式を雪で出来たゴーレム達へ発動させた。ゴーレム達に囲まれていたトキを巻き込む形で。

「ちょっ!？」

瞬間的にトキの周りの空気が焼けるように熱くなる。遂にレイチェルまで、エアニスやチャイムのように敵を味方ごとぶっ飛ばすような見境の無い子に育ってしまったか、と慌てたトキだったが、

「あちちっ!・・・と？」

熱くはあったが、我慢出来ない程の熱気ではなかった。しかし、出来損ないの炎の術は、雪で出来たゴーレムの動きを鈍らせるには十分だった。ゴーレム達には有効で、トキには害の無い加減で術を発動させたのだ。トキは知らない事だったが、炎などの激しい性質の魔導をここまで正確に加減出来る魔導師はそう多くなく、それが出来る者は天才的な魔導のコントロール力を持っていると言っても良かった。

トキは目の前の崩れかけたゴーレムに肩からタックルする。ばぐしゃっ、と溶けかけたゴーレムは濡れた音を立て崩れる。トキは立ちはだかるゴーレムを次々と粉碎し、6、7体目の体を突き破ったその時。

突き破ったゴーレムの体のすぐ向こうにアイビスが立っていた。彼女の顔には不意を突かれたような驚きが浮かんでいる。トキと彼女との距離は5歩と無い。トキは突進を緩めず、腰だめに構えていたナイフを、魔動的な干渉力を高めた銀のナイフを彼女の腹へと突き立てた。

アイビスの表情が歪む。

トキはそのまま躊躇う事無く、刃が上を向いたナイフを、腹部から喉元まで真上に走らせ彼女の体を縦に引き裂いた。

耳を覆いたくなるような女の悲鳴。

トキはアイビスの喉にナイフを残したまま、バックステップで距離を取る。

「レイチェルさん！！」

トキが呼びかけた時には、レイチェルの魔導は完成していた。

彼女のハンマーロッドに寄り添うように、一条の光の槍が出現していた。レイチェルがハンマーロッドを地に打ち付けると、それが引き金であったかのように、光の槍はアイビスに向かい虚空を一閃する。

「なによ、こんなものっ！」

人間が数秒の呪文詠唱で作りに上げた術など大した威力を持たない。実際、今アイビスに向かい来る光の槍からも大した力を感じなかった。アイビスは光の槍を無視し、トキの腕を掴もうと手を伸ばす。

しかし光の槍はアイビスの体ではなく、彼女の喉に刺さったままのナイフに突き立った。

アイビスの喉元で魔力が膨らみ、銀のナイフが強烈な閃光と共に爆散した。

彼女の上半身はバラバラに吹き飛び、黒焦げた下半身は何度も地面を跳ねて転がり、ゴーレム達の群れにぶつかって止まる。

その体が濡れた墨のように黒く染まる。やがて彼女の体は衣服と共にぐずりと形を崩すと、雪原に吸われる様に消えていった。

レイチェルはハンマーロッドを杖のように持ち、力が抜けたかのようにぺたりとしゃがみ込んだ。

「・・・上手くいきましたね」

「甘く見られていた所が救いだっただとは思いますがね・・・」

トキは薄っすらと浮かぶ冷や汗を拭い、そう答えた。

エアニスやティアドラから聞いた話の限り、魔導に縁の無いトキには魔族と戦う術が無いかと思われていた。事実、オーランドシティでアイビスと対峙した時、トキは全くの役立たずだった。

トキはそれ以来、レイチェルやチャイムと相談し、彼女達に魔導的な干渉力を持つ武器や道具について知識を乞い、自分なりに出来る事を研究していた。

そして辿り着いたのが、魔力を持たないが故に軽視される自分の立場を最大限に利用する事。そして、レイチェル達には難しい近接戦を介して、彼女達の術の"楔"を、この手で打ち込む事だった。

トキがアイビスに突き立てたナイフは、爆弾のようなものだったのだ。

強力な魔導を詰め込んだ爆弾を用意しておき、詠唱の短い術でそれを起爆させる。戦いの中、長い詠唱時間が必要となる強力な術を使える機会は少ない。しかし、あらかじめこういった物を用意出来れば、瞬時に同等の威力を持った魔導を発動させる事も出来るのだ。

それをレイチェルが遠距離から打ち込んだとしても、当てる事は難しかっただろう。だから一見魔導的な力を持たず、魔族達から軽視されているトキに楔となるナイフをアイビスの体に直接打ち込んで貰ったのだ。

暫くの間、遠くでエアニスとイビスの剣の触れ合う音だけが響く。

トキとレイチェルは背中を合わせ辺りの様子を静かに伺う。イビスの気配は何処からも感じられない

「・・・あれで本当に死んだと思いますか？」

「見た目は地味な爆発ですけど、魔導的側面への破壊力を命一杯強化した術です・・・。

それをあのナイフに詰め込めるだけ詰めました・・・

あれで倒せてなかったらもう・・・」

確かに、爆発と共にアイビスの気配は霧散した。しかし、始めから生きているとは言い難い存在である彼等の死の定義とは何なのか。体が破壊され、気配や魔導的な存在感が消えれば、それで死んだ事になるのだろうか。

トキは腰に差したもう一本の銀のナイフを抜いて、恐る恐るアイビスの体が消えた場所へと歩み寄る。そこには彼女の体の欠片も衣服の切れ端も残っておらず、ただ踏み荒らされた白い雪だけがかった。

突然、一瞬にして気配とも魔力とも違う、強烈な存在感が生まれる。

アイビスが消えた雪原から、巨大な氷の刃が飛び出した。

「っ!？」

トキもエアニス並に人間離れした反射神経を持っている。単調で直接的な動きの刃は、体を捻るようにして避けたトキの背中を行き過ぎる。しかし、彼女にはトキ達の常識は通じなかった。

かわした刃の腹から、まるで木の枝が伸びるかのよう、トキの背中めがけて細い錐が飛び出した。

トキは背中に鈍い違和感を感じると、そのまま固い氷の地面へと叩き付けられていた。

「トキさん!!」

悲鳴のようなレイチェルの呼びかけに応えようとトキは起き上がろうとしたが、右肩に痛みが走り、体の自由が利かない事に気付いた。そこでようやく自分の肩を氷の錐が貫き、体が地面へと繋ぎ止められている事を知った。冷たい氷に傷口を抉られているせいか、痛みよりも違和感が勝っている。

『ねえ、今の、本気であたしを倒したと思ってたの？』

何処からともなくアイビスの声が響く。

『全然痛くないって言ったら嘘になるけどさあ・・・』

あれであたし達を倒そうだなんて、全く話にならないんだけど？』

「・・・！」

退屈そうなアイビスの言葉に、トキとレイチェルは絶望にも似た衝撃を受けた。

トキは自分の体に突き刺さる氷の錐にナイフを当てると一息にそれを切断する。傷口が広がるのを覚悟で右肩から錐を引き抜き、立ち上がった。

「ははっ、良く言いますね・・・？」

あれだけ派手に体を吹き飛ばされておきながら平気だって言うんですか？」

トキは傷の止血をしながら、何処にいるかも分からぬままアイビスに挑発する。自分達の攻撃が全く効いていないなどと認めたくなかった。

『なに？ 本気にしてたの？』

あれは演出よ、演出。

相手を撃ったら肉が抉れて血が流れる方が、あんたも殺り甲斐があるんじゃない？

殺られたフリしてあげてたのよ？』

アイビスの答えにトキは黙り込む。おかしいとは思っていた。何の魔力も籠っていない、ただの鉛の塊を魔族がその身に受けた所で全くダメージにはならないという理屈は以前から聞いていた。煙や霧を撃つようなものなのだという。

しかし、トキの銃弾はアイビスの下顎を吹き飛ばし、銀のナイフは彼女の胸と腹を裂いた。彼女の体は普通の人間の肉体と同じように傷つき、赤い血肉と白い骨を露にしていた。目を背けたくなるような生々しい傷口を、晒していた。

だが、それはアイビスの演出、余興だったのだ。

ふざけた言い方をすれば、魔族にしか出来ないようなりアリティのある死んだふりである。

そして、アイビスは本当にふざけているのだ。

彼女に遊ばれているのだ。

「本当に貴女は悪趣味ですね、何から何まで・・・」

『あらそう？ じゃあ、もっとご期待に応えてあげようかしら？』

アイビスの嬉しそうな声にトキが身構えると、地面から飛び出した氷の刃や辺りの雪がキラキラと氷の粒に姿を変えて、一所に寄り集まって再び少女の姿を作り出す。

しかし、そこに作り出されたのはアイビスの姿では無い。

緩くウェーブの掛かった黒髪に、白衣に眼鏡といった知的な印象の少女だった。

突然現れた少女の姿に、レイチェルは見覚えが無かった。怪我人の手当てをしながら遠巻きに事の成り行きを見ていたチャイムにも、見覚えは無い。

しかし二人とも、その少女が誰かに似ているような、何とも言えない引っ掛かりを覚えた。

その姿を認めて、トキはよろめく様に一步引いた。

「あ、アリシア……」

「!？」

トキの震える声で、レイチェルとチャイムは状況を把握した。

エルバークの街で聞いた、トキの過去。

アイビスが化けたのは、トキが死に別れた双子の妹、アリシアだった。

「あなたの事を調べた時に知ったのよ、一年半くらい前かしら？」

あなたが無力なせいで死なせてしまった、あなたの妹よね？

どう？似ている??」

クルリとターンをして、その姿をトキに見せつけるアイビス。アリシアのトレードマークでもあった白衣とポニーテイルがふわりと揺れる。姿だけでなく、声までもアリシアのものだった。

「やめろ……」

トキは震える手で自分の髪を掴む。瞳の焦点は合わず呼吸は乱れ、今にも気が振れてしまいそうな様子だった。しかし、彼はそれでもアリシアの姿から目を離す事が出来なかった。その姿を網膜に焼き付けようと、瞼は瞬きする事すらも拒んだ。

「懐かしいでしょ？」

そうだ、抱いてあげようか？この機会を逃したら、もう二度と妹と触れ合う機会は無いかも知れないわよ？」

そう言って、アリシアはそっと両手を広げる。

「ほら、トキ。こっちに来て……」

レイチェルは警戒するように、アイビスに向かいハンマーロッドを構える。そして、横目でトキの顔を見上げた。

トキの顔から表情が抜け落ちていた。今見ているのか夢か現実か分かっていないような、虚ろな目をしている。

「トキさんっ!!!」

レイチェルはトキの服を掴み、目が覚めるような大声で彼の名を呼ぶ。しかし、トキは無言で彼女を振り払うと、夢遊病者のような足取りで、アリシアの元へと歩み寄った。

「アリシア……アリシア……！」

トキは自分の胸の位置にあるアリシアの頭を右手で抱き、左手を背中に回して、その身体を強く抱きしめた。アリシアも両腕をトキの腕の下から、彼の背中へと回す。

アリシアはトキの腕の中で優しく笑い、トキの背中に回していた手を、そっと彼の心臓を抉り出すために、広げた。

「アリシアを汚すな」

トキの喉から、ぞっとするような冷たい声が漏れた。

アイビスの背中に硬い物が押し付けられた。彼女の背中に回していたトキの手には、古めかし

いりボルバーが握られている。

トキは躊躇い無くその引き金を引く。オモチャの銃のような、アナログな感触が指先に伝わり、ハンマーが薬莢を叩く。

ハンマーの先端には小さな文字が彫られている。それは弾層の中に一つだけ収まっていた、魔導式が刻まれた特別製の薬莢を叩く。弾に刻まれた式は未完成だったが、タイプライターが文字を打つかのように、ハンマーが最後の一文字を刻み込んだ。

ガチリと魔導式の歯車が噛みあい、薬莢の中に押し込められた秩序が世界に顕現する。

空気を引き裂く音と共に現れたのは、トキの両腕で抱えられるような丸い漆黒の闇。

闇は辺りの空気を吸い込み、トキは巻き込まれないよう思い切り後ろへ身を反らす。

レイチェルの空間転移の術だった。レイチェル本人でも制御の難しいこの術を、威力を半分以下に抑えてあるとはいえ、弾丸を模した魔導石に封じ込める事に成功したのだ。

巨大な魔導式を暗号化し、小さな魔導石に収まる大きさまで圧縮する作業が予想以上に手間だった為、たった一発しか作る事が出来きなかったトキの切り札。

そして切り札は、これ以上無いという場面で活かされた。

自分の背中で生まれた黒い闇に、アイビスは胴体の大部分を飲み込まれていた。遅れて状況を理解したアイビスは、驚きと憎悪の込められた表情で、目の前のトキに手を伸ばす。

「絶対に許せない事って、僕にとってはそうそうある事では無いんですよ」

そう呟いて、トキはアイビスを蹴りつける。

未だにその場に留まり空間を抉り続けている黒い闇へ、グイグイと彼女の体を押し付けた。

耳をつんざく金切音が空気を震わせる。人の声を模す事が来なくなったアイビスの悲鳴だ。

「ですけどね、」

苦痛に歪むアイビスの顔。未だにアイビスはアリシアの姿を装っていたため、彼女の体と同じ様に、それを見ているトキの心も抉られる。しかし、今はそのような事を言っている場合では無い。

トキは一度、彼女の体から押し付けていた足を離す。

「お前は俺の一番大切な思い出を汚したッ！！」

再び彼女の胸元を蹴りつける。アイビスの顔は黒い闇へと完全に飲み込まれ、手足だけがとり残される様に地面へ落ちた。

取り込んだ空間をこの世界とは違う場所へと放逐する空間転移の魔導。

普通の魔導と違う点は、どのような手段を講じても、この術を防ぐ手立てが無い事だ。

それは魔族達にとっても例外では無い。

体を半分抉り取られれば、その存在の半分を失い、体の全てを飲み込まれれば、この世界での存在を失う。

アイビスは体の殆どを黒い闇に飲まれ、それと同じ割合だけ、この世界での存在の力を失った。

。



「！！」

エアニスと斬り結んでいたイビスが、アイビスの異変に気付く。イビスはエアニスを無視し、アイビスの元へと駆け出した。

「余所見してんじゃねえよ！」

エアニスは容赦なく、背を向けたイビスの足の腱を斬りつける。しかし、一瞬体をぐらつかせただけで、イビスはそのまま走り出す。手応えの無さに一瞬呆気に取られてしまったエアニスは、舌打ちをしてイビスの後を追う。



空間転移が生み出した闇が消えると、取り残された彼女の手足が砂のよう崩れて風に舞う。それらは空中で寄り集まると、再びアイビスの姿を形取った。

しかし己の姿を再構築した彼女は力なく雪原に倒れこみ、その輪郭をまるで幻のように滲ませた。時折、砂嵐のようにその姿は激しく乱れる。雪原に額を押し付け、苦しそうに身をよじり今にも消えてしまいそうだった。

「・・・効いてる！」

レイチェルは胸元の"ヘヴンガレット"に手を当てて、空間転移の術の詠唱を始める。トキの銃弾に込めたサイズの術ならば、"ヘヴンガレット"の魔力増幅を利用すれば30秒もあれば術を組み立てる事が出来る。アイビスの動きが止まっている今なら、とどめを刺す事が出来る。

しかし詠唱を始めてすぐ、レイチェルはトキに突き飛ばされた。何を、と聞くまでも無かった。レイチェルの居たその場に、真上から飛び掛ってきたイビスの大剣が打ち付けられたのだ。地響きと共に雪煙が舞い上がる。

「くそっ・・・！」

トキはレイチェルを守るように、銀のナイフをイビスへと向ける。それが気休め程度の役にしか立たない事は分かっていたが、トキの持つ武器はこれしかなかった。イビスは雪原に突き刺さった剣を引き抜き、一足飛びでトキに向かって斬りかかる。

「させるかよ！」

二人の間にエアニスが割り込んだ。エアニスは向かってくるイビスにオブスキュアの切っ先を突き出し、その胸を貫いた。

そこで、想像もしていない事が起きた。

エアニスの剣は切っ先から刀身の付け根まで確かにイビスの体を貫き、彼のこの世界における存在を削った。その手応えは、エアニスの両手へはっきりと伝わっていた。しかしイビスの体に剣が柄まで潜り込むと、スルリ、と剣はイビスの体を"すり抜けた"のだ。

剣だけではない。まるで幽霊が壁を通り抜けるように、イビスがエアニスの体をすり抜けたのだ。

「――なッ！？」

自分の身に起こった事が理解できぬまま、戸惑いながらエアニスが後ろを振り向くと、丁度イビスの大剣がトキの腹を刺し貫いた所だった。

「が・・・こ、のっ・・・おオオッ！！」

本能が痛覚を遮断したいたのか、アドレナリンがどうにならなかったのか、トキはまだ腹を貫かれた痛みを感じていなかった。数秒後に訪れるであろう激痛と死の恐怖を無視し、彼は自分の懐に潜り込むイビスの頭にナイフを振り下ろす。しかし、銀のナイフは彼の頭をまたしてもすり抜けてしまった。

ぐん、と、イビスが剣を捻る。傷口を抉られトキの体が跳ねると、彼の意識はここで途切れた。

レイチェルの目の前で、トキの体を貫いた大剣の切っ先が止まっていた。トキの背中から噴出す鮮血を浴びて、思考が止まる。手にしていたハンマーロッドを取り落としても、彼女はそれに気付いた様子も無い。

イビスが大剣から手を離すと、それは空中で墨の様に溶けて消えた。支えを失ったトキの体が雪原に倒れ、詮を失った傷口からおびただしい量の血が流れる。

イビスはトキに目もくれず、呆然と立ち尽くしていたレイチェルの腹部へ拳を沈ませる。

喉の置くが詰まり、耳の後ろから広がってゆく痺れのようなものを感じた所で、彼女はがくりとイビスにもたれるようにして気を失った。その小柄な体を、イビスは軽々と抱え上げる。

「行くぞ、アイビス」

そう一言だけ呟くと、イビスはレイチェルの姿と共に輪郭をじわりと滲ませる。空間を渡り姿を消すつもりだ。

「なっ！！？ 待てッ！！」

エアニスはイビスのコートへ手を伸ばしたが、まるで煙を掴んだかのようにそれはフワリと吹き消える。そのまま二人の姿は虚空に溶けて消えた。

エアニスは再び後ろを振り向くと、雪の上に倒れ込んでいたアイビスも、いつの間にか姿を消していた。

その場にはエアニスと、体を貫かれ横たわるトキだけが残される。

一瞬の出来事に、何も出来なかったエアニスは呆然と立ち尽くす。

「・・・ッ！ クソがあっ！！」

自分の不甲斐なさに腹を立て、怒声と共に剣を地面に剣を叩き付けた。

その叫び声は虚しく氷の大地に響き渡る。

エアニス達の前から姿を消して空間を渡った二人の魔族は、再びあの場所へと舞い戻る。2日前、レオニール軍の遭難者と最初に遭遇した、山肌に石扉が埋め込まれていた場所。エルカカの民が集めた"石"を保管する、聖域への入り口へ。

「! ?、ここって・・・」

イビスに抱えられたままのレイチェルが意識を取り戻し、辺りを見回す。何かの術でもかけられているのか、手足が動かなくなっていた。首から上が辛うじて動くのみだ。

その場所はレイチェルの父シャノンから聞かされていた、エルカカの民の聖地だった。

この場から見える山の形に、辺りに生える樹木の種類。全てが聞いている話と一致している。何より、土で埋められ隠されていた筈の石扉。そこに刻まれた、エルカカに古くから伝わる紋章。

いつか、お前も"石"を持って、あの地を訪れる事になるだろう。

シャノンの言葉が頭の中で繰り返された。レイチェルは唇を噛む。まさか、このような形でこの地を訪れる事になるうとは思ってもみなかったからだ。

「扉を開ける」

イビスはそう言って、レイチェルを雪の上へと放り出す。イビスの体から離れた途端、動かなくなっていた手足が自由を取り戻した。

それに気付くと、レイチェルはうつ伏せに倒れ込んだまま呪文の詠唱を始める。数秒で構築できる風の術。周りの雪を吹き飛ばして姿を隠し、この場から逃げ出すのだ。

突然体が浮き上がり、目の前の景色が反転した。

腹を下から蹴り上げられたのだ。

意識を失う事は何とか堪えて、レイチェルは雪原の上に仰向けに転がる。胃の中のもの喉元までこみ上げ、息が出来ない。

「何するつもりよ」

余裕を失った、冷徹な女の声。レイチェルを蹴りつけたのはアイビスだった。

トキに打ち込まれた空間転移の術が効いているのか、顔色を失い、息を切らし肩を上下させている。時折乱れた映像のようにその姿をブレさせ、おぼつかない足取りでレイチェルへ近寄る。

「調子に、乗ってんじゃないわよ！！」

あんた、一人でっ、何か出来るってえのよッ! ?」

ヒステリックに叫びながら、蹲るレイチェルを硬いブーツで何度も何度も蹴り付けた。当然呪文の詠唱は中断され、レイチェルは靴底から頭を守るように蹲る。

アイビスはレイチェルの束ねられた髪を掴み、無理矢理立ち上がらせて言い放った。

「人間ってみんなそうよね。無駄だって分かっているのに行動する・・・ほんとバカみたい、どうあがいたって、結果は変わらないのが分からないの! ?」

足に力も入らず、髪を引っ張られる事で無理矢理立たされている状態のレイチェルは、アイビ

スの顔を下から睨みつける。

その瞳には恐怖の色の欠片も無い。

それがアイビスの癢に障る。

「・・・開けなさい、扉を」

「イヤ、ですよ・・・殺されたって開けたりしませんから・・・」

「・・・あたし達があなたを殺せないってのは分かってるんでしょ？」

そうでなければ、レイチェルをここまで連れて来る意味は無い。忌々しげに、アイビスはレイチェルを睨む。

魔族の力を持ってしても、この扉は開けられないのだ。エルカカの民であるレイチェルにしか解除できない魔導が、この扉には仕掛けられている。

「逆を言えば、生きてさえいればアンタなんてどうなってもいいんだからね？」

その言葉と共に、パチン、とレイチェルの右人差し指の先が跳ねた。

見れば、指の爪が剥がれて垂直に起き上がっていた。途端に電撃のような痛みが全身を突き抜ける。

「あぐうううっ！！」

思わずうめき声を上げて、レイチェルは指先を押さえる。爪は剥がれず皮一枚で繋がっている為、痛みがより伝わりやすくなっていた。

「爪を一枚つつ剥がそうか？ ぜんぶ終わったら次は指の骨で、次は足の指ね。

あ、虫歯とかってあるかしら？ 良かったらそっちを先に治療してあげてもいいけど？」

お医者さんごっこ好きなのよね、とアイビスは楽しそうに笑った。

その嗜虐的な笑みに、レイチェルは恐怖を感じる。

恐怖して、そして諦めた。

これからの人生の色々を。いや、人生そのものを、諦めた。目の前の魔族は、本当に今口にした事を実行するだろう。全てを終わらせて、五体満足無事に帰れる事を願っていたが、やはりそれは無理なようだ。

そこまで考えて、ふと思い出す。

(いや・・・どのみち私には、"この先"なんてものは無いんだっけ・・・)

それに気づくと、気が楽になった。一瞬にして自分の事を割り切ってしまったレイチェルは、それがまるで他人事のように溜息を吐いて、醒めた目をアイビスへ向ける。

痛みを耐えながら、はっきりと宣言するように言う。

「好きにすればいいわ。でも、無駄よ。

私は何をされても、絶対に扉を開けないから」

でも本当は、今すぐエアニス達が助けに来てくれる事を期待していた。

いつかのように、絵に描いたヒーローみたいに。でも何処か粗暴で正義など感じさせない、カッコいいダークヒーローみたいに。エアニスさんの性格だと、今の状況を見たらキレちゃうんだろうなあ、トキさんも、チャイムも、何だかんだで沸点低いし・・・私の為に怒ってくれるのは

嬉しいけど、それ以上に申し分ない気がするかな。エアニスさんに、トキさんに、チャイムに頼りっぱなしで、私は何もできないのにな。

そんな事を考える。

だが、神殿の場所はさっきの戦いの場所からかなり離れている筈だ。助けは期待できない。

だからレイチェルは、今の全てを自分ひとりで背負い込む。

「私達の一族が250年かけて守ってきたものを、私の身一つの都合で手放す訳にはいかないのよ」
額に脂汗を浮かべ、いつの間にか目には涙が溜まっていたが、レイチェルは揺ぎ無い瞳でアイビスを睨み返す。

「あたしが背負ってるものは、あなたが思ってるより重い」

怒りで吊りあがっていたアイビスの目がすっと細くなり、表情が消え失せた。

アイビスが腕を振り上げた。レイチェルは思わず目を閉じ、身を竦める。

だが、暫くしても何も起こる気配が無かった。

「無駄だ。そいつは喋らない」

男の声にレイチェルは目を開けると、アイビスがアイビスの振り上げた腕を掴んでいた。

「・・・そんな事無いわよ。指の先から寸刻みにしてやれば、どうせすぐに言いなりになるわ」

「時間があればな。だがそう時間も経たないうちに、奴等もここに来るだろう」

「じゃあどうやって扉の開け方を吐かせるのよ!？」

アイビスは捕まれていた腕を振り払う。

「簡単だ。お前のような人間は、自分の痛みよりも他人の痛みの方が辛いんだろう」

そう言って、アイビスはレイチェルの額へ、自分の右手を押し当てた。

「!？」

冷たくも暖かくも無い、無機質な体温。レイチェルはビクリと身を震わせる。だが、触れられた事に驚いたのではない。

「見えるか？」

アイビスが問いかける。

レイチェルには、目の前にあるアイビスのコートの袖の他に、もう一つの風景が見えていた。二つの眼球で別々のものを見ているような感覚とも違う、レイチェルの目を通さずに頭の中で直接再生される映像。不思議な感覚だった。

レイチェルはまるで鳥にでもなったかのように、空から雪に覆われた森を見下ろしていた。森の切れ目に、数人の人影が見える。徐々に視界はその人影へとズームしてゆくと、そこには胸から大量の血を流しているトキを必死に治療しているチャイムとティアドラが見えた。

「トキさん・・・!!」

レイチェルも気を失う直前、トキがアイビスの剣に胸を貫かれたのを見ている。レイチェルの脳裏に映ったトキの顔は血の気を失い、生気の欠片すら感じられなかった。

トキの傷口を押さえながら、エアニスが何かを叫んでいる。しかしその映像には音声が伴っておらず、さながら無音劇のような虚しさを演出していた。

「奴の傷口には、まだ俺の存在の残滓が残っている」

「・・・！？」

「俺の力は、まだ奴の体と繋がっている。

つまり、ここからでも、奴の息の根を止める事が出来るという訳だ」

「！、いや、やめて！！」

イビスがレイチェルの額に当てた手とは逆の手を、捻り込むようにして握った。

レイチェルの脳裏で、トキの傷口と血の跡がみるみる広がってゆく。びくん、と大きく仰け反ると、トキは口からも血を吐き出した。

「いやあああっ！！」

レイチェルは頭を抱え両目を覆う。しかし目を閉じていても、トキの傷口が見えない何かに挟られている様子が、レイチェルの頭へ直接流れ込む。

「もう一度だけ言う。この扉を開き、"石"が保管されている場所へ案内しろ」

「分かった・・・分かったから・・・お願い、やめて・・・！」

レイチェルは力なく、その場にうなだれる。



その出来事があった数分後。

「・・・何とかかなりそうじゃな・・・」

ティアドラはトキの傷口の治療に全神経を注ぎながら呟く。

「本当か！？」

「エアニス、もう血は止まったから・・・止血はもういいわ」

「あ、ああ」

ティアドラと同じようにトキの傷跡に手をかざして魔力を送り続けていたチャイムが言った。

エアニスはそっとトキの傷口から布を離した。ベリベリと乾いた血の剥がれる感触が伝わる。トキの傷跡は完全には塞がってはいなかったが、胸の真っ赤な傷跡からはもう血が流れ出すようなことは無かった。

「肺と気管、心臓に近い太い血管はあらかじめ修復出来ている・・・まだまだ予断はできんが・・・治療さえ続けていれば悪化する事は無いじゃろう」

「・・・そうか」

エアニスは長い長い、安堵の息を吐く。

そして、もう一つの心配事を片付けるため、勢い良く立ち上がり気持ちを切り替える。

「よし、それじゃあ俺は先に行く。トキを頼むぞ」

「ま、待ってよ！」

チャイムが慌てて引き止める。

「レイチェルを助けに行くの！？」

「それ以外に何がある」

「一人でなんて無茶よ！もう少しだけ待って・・・！」

「これでも時間を食いすぎている。それに、ここから神殿までまた距離があるんだろ？」

「神殿の場所はレイチェルとティアドラしか知らないじゃない！」

あたしもティアドラも、まだ治療で手が離せないわ！」

「・・・その場所なら、恐らく俺も知っている」

部下の介抱をしていたローウェンが、その手を休めて言った。幻術に惑わされたエアニスとトキに傷付けられた彼の部下達も、チャイム達の治療のお蔭で大事に至る者は居なかった。

「あの二人と初めて会った時、彼らは岩肌に埋め込まれた石扉の前に居たと聞いている。その場所なら報告も受けているし、我々の装備の中には2台だけだがスノーモービルもある。10分もあれば、その場所まで案内出来るだろう」

「本当か・・・！？」

エアニスの口元に笑みが浮かぶ。願ってもいない事だった。

ティアドラは少し考えるように目を伏せてから、チャイムを見た。

「チャイムよ、エアニスと共に行くがいい」

「え、でも！」

「なに、ここまで治療が済めばわし一人でも何とかなる。

エアニスとそこの人間だけでは不安じゃからの。付いて行ってやれ」

「分かったわ・・・トキを、お願いします」

チャイムは立ち上がり、ティアドラへ深々と頭を下げる。

ローウェンはティアドラに自分の知っている場所が本当に神殿への入り口かどうか確かめる為、周りの地形やここからの方角を伝え、間違いないという事を確認した。

少し離れた場所に停められていた2台のスノーモービルに、エアニスとチャイムはタンデムで跨り、案内役のローウェンを先頭に雪原を走り出した。



三人が去った後には、ティアドラと気を失ったトキ、ローウェンの部下達が残された。

「とは言ったものの・・・あやつ等に本当にあの魔族が倒せるのかの・・・」

治療を続けながら、ティアドラはひとりごちる。

「まあ、わしのような存在が、今の世界に干渉出来るのはせいぜいここまでじゃろうな・・・」

ティアドラは、レイチェルやチャイムよりも、強大な魔力と技術を持っている。自分が戦えば、彼等の戦いの大きな手助けになるだろう。

だが、ティアドラにはそれが出来ない"理由"があった。

「・・・この時代を救うのは、この時代に生きる者であるべきじゃ」

そう呟いて、小雪の舞う青空を仰いだ。



まばらに生える灌木の間を縫うように、2台のスノーモービルが雪原を駆け抜けた。

ローウェン達が持っていたスノーモービルは完全な機械式で、耳障りなエンジン音と振動の代わりに魔導式のエンジンには無いピーキーなパワフルさを持っていた。様々な乗り物の運転方法を知っているエアニスも、スノーモービルに乗るのは初めてだったが、知識とカンだけで何とかなっている。感覚的にはオフロードバイクに近いが、車体の挙動は四輪車のそれに近かった。前を走るローウェンを見失わないよう、ぴったりと後をついて走る。

雪を掻き毟るように急斜面を登り、落ちるようにして谷を下る。タンデムシートに座るチャイムは振り落とされないように、エアニスの背中とシートにがっちりと掴まる。



「ねえ、エアニス」

「あんま喋るな、舌噛むぞ」

「勝てそう？」

「勝たなきゃ帰れないだろ。さっさとレイチェルを連れ戻して、ついでにあの遭難者達も連れて、街に戻ろうぜ」

いつもの調子で応えるエアニスだったが、その言葉はチャイムの心に影を落とした。いつものエアニスならば自信たっぷりに、「当たり前だろ」とか、「お前が足を引っ張らなきゃな」などと言う気がする。なのに、今のエアニスの応えは、チャイムの質問をはぐらかしたような回答だった。

エアニスにも、勝てるという明確な自信が無いのだろう。

途端に心細くなったチャイムは、エアニスの体に回していた腕に、ぎゅっと力を込めて言う。

「・・・絶対死なないでね」

「・・・」

今の一言だけで、自信の無さを見透かされてしまったエアニスは、ばつが悪そうに口元を歪める。

会話に気を取られ集中力が途切れたせいか、スノーモービルが横滑りしてしまった。

大きく降られたタンデムシートに乗っていたチャイムはスノーモービルから投げ出されそうになったが、エアニスが自分の体に回された彼女の腕を掴み事なきを得た。

「悪い」

短く詫げるエアニス。捕まえたチャイムの手を握ったまま、

「死なねーよ。俺もお前もレイチェルもトキも。

この2ヶ月間で、あれだけの戦いを切り抜けてきたんだ。

魔族だろうが神様だろうが、俺達には敵わねえ。

全部終わらせて、みんなで帰るんだ」

エアニスはチャイムの手を強く握り、誓うように言う。

「うん・・・そうだね」

エアニスの背中に額を当てて、彼女は小さく頷いた。

「・・・着いたみたいだぞ」

ぐん、とスピードが落ちて、スノーモービルは切り立った崖の麓で止まる。



「じゃあ俺は仲間達の所に戻る。男の怪我の治療が済んだら、あの女魔導師を連れて来ればいいんだな？」

ローウェンはスノーモービルを転回させながら言った。

「まあ、当人にその気があればな。無理に連れてくる事は無いさ」

「・・・分かった。悪いが一晩待っても戻ってこなかったら、我々は先に山を越えさせてもらうからな」

「ああ。すまなかったな、巻き込んでしまって」

「謝るなよ。我々こそ、奴等にいいように利用されてしまった・・・お互い様さ」

ローウェンはエアニスに手を差し伸べる。

「死ぬなよ」

エアニスはハイタッチでもするかのようにローウェンの手の平を叩いた。握手と呼べるようなものではなかったがエアニスは悪戯めいた笑顔を見せ、ローウェンも苦笑いを返す。

来た道を引き返す為、彼はスノーモービルのスロットルを握る。急な斜面を駆け上り、その姿はあっという間に見えなくなってしまった。

ローウェンを見送り、エアニスが振り返ると、そこにはぽっかりと口を開いた洞窟があった。

「扉・・・開いてるね」

チャイムが呟いた。エアニスはその場にしゃがみ込み、踏み荒らされた地面の雪をざっと撫でた。薄く降り積もった雪の下には、点々と血が染み込んでいる。

「・・・レイチェル!？」

「どうかな。とにかく、急ぐか」

二人は洞窟の中へと踏み入る。洞窟の通路は下向きに伸びていた。魔導式の灯りでも無いかと期待したが、洞窟内にそれらしい設備は見当たらなかった。人間の手が入った形跡は殆ど無く、ゴツゴツした壁や天井は天然の洞窟かと思わせる。少し進んだだけで辺りは真っ暗になってしまい、エアニスは腰のポーチに入れていたライトを取り出しスイッチを入れる。

突然、目の前が真っ白になった。

立ち眩みでも起こしたのかと思ったが、違う。実際目の前に、真っ白な空間が広がっているのだ。

広大な雪原に放り出された訳でも無い。それにしても、何も無さ過ぎる。目の前に広がる異常を正しく認識する前に、ぐわん、と平衡感覚が逆転した。

「な・・・・・・・・!？」

「な、何よこれ!!」

エアニスが上を見上げると、真っ白な空間の中、チャイムが仰け反るような格好でフワリと浮かんでいた。まるで海の中を漂っているような感覚だ。

あらためて周囲を見回すエアニス。しかし自分の周りにはチャイムの姿が見えるだけで、上下左右すべてが真っ白だった。何処が床で何処が壁なのかも分からない。それどころか、今自分は地面に立っているのか、それとも重力に引かれて落ちているのか、それすらも判断出来なかった。訳の分からない恐怖がエアニスの背筋を震わせた。

「普通の空間じゃない・・・魔導で作られた世界か・・・それとも幻覚でも見せられてるのか・・・？」

「幻覚ってセンは無いと思うわよ・・・そんな干渉も予兆も無かったわ」

「おいチャイム」

エアニスはやや硬い声で、頭上に漂うチャイムを呼ぶ。

「な、なに？」

「かぼちゃパンツがまる見えだ」

チャイムは自分の真下に仰向けで漂うエアニスの頭を思い切り踏みつける。ガードの固いかぼちゃパンツだとしても制裁に容赦は無かった。

「いや、流石にかぼちゃは無いだろお前・・・もうちょっと何と言うか・・・」

「うるさいわね！寒いよ！！」

場違いな言い合いを続ける二人の体は宙をクルクルと回る。エアニスは自分の体がチャイムと同じ向きになった時に彼女の手を捕まえた。

無重力の中、二人の体は並ぶようにしてゆっくりと静止する。

「いや・・・無重力ってワケじゃないのか・・・？」

僅かだが自分から見て下の方に重力を感じた。実際、ついさっきまでひっくり返っていたエアニスの長い髪は、重力に引かれてその肩口に掛かっている。

二人はゆっくりと、下に落ちているのだ。

「エアニス！！あれ！！」

チャイムが下を指差して叫ぶ。

見ると、チャイムの指差す先には3人の人影が見えていた。

「レイチェルと、それにあの二人の魔族か・・・」

遠目で見るとレイチェルは無事のように、エアニスは胸を撫で下ろす。

向こうも、宙に浮かびゆっくりと落ちてくるエアニス達に気付いているのだろう。じっとこちらを見ていた。

エアニスとチャイムは、魔族とレイチェルの居る場所へふわりと降り立った。二人の魔族からやや距離をとった位置だ。

靴が地面に触れた途端、体にずしりと重みがかかった。ゆっくりと宙を落下している間は自分の体が羽毛のように軽かったのに、足が地面に触れた途端、普通の重力が体にのしかかってきたのだ。

この真っ白で不思議な空間にも、当然かもしれないが一応地面があった。地面も周りの景色と同じく真っ白なので、足が地面を踏む感触を捉えていても地面と空の境界線が見えないせいで、まるで曇りの中で浮いているかのような感覚に陥る。

よく見ると、汚れ一つ無い真っ白い床にうすぼんやりと自分の影が落ちていた。それだけが唯一、地面の存在をエアニス達の視界に訴えかける物だった。

目に映る物も少なければ空気の流れも無い。匂いも無ければ音が反響する物も無い。感じ取る事の出来る情報が極端に乏しいこの空間は、まるで自分の五感の幾つかを失ったかのような感覚に陥る。

やりにくいな、とエアニスは思った。

エアニスは乱れた髪を払いながら、二人の魔族とその足元に座り込むレイチェルを見た。レイチェルの頬には血が滲み、口元には青痣が出来ていたが、大きな怪我は無さそうだった。エアニスと目の合ったレイチェルは、申し訳なさそうに、でも自分は大丈夫だと言う様に、困ったよ

うな顔で笑った。

それでも自分の手の届かない所で仲間を傷つけられたという事実がエアニスの頭から思考を奪い、覚めた怒りが体を支配する。御し難い衝動を抑え、平静を装いながら彼女に声を掛けた。

「よう、レイチェル。悪いな、遅くなって。大丈夫か？」

「はい・・・それより、トキさんは？」

「命に関わる傷は全て塞いだわ。今はティアドラが見てくれてる。もう心配は無い筈よ」

チャイムの答えを聞いて、レイチェルは安心したように息を吐き、よかった、と呟いた。

「で、なんだこのイカレた場所は。こうしているだけでも気が狂いそうになるぞ」

冗談めかして言ったが、実際エアニスはここに1週間もいれば頭をおかしく出来る自信があった。ただただ広いというだけで、これでは何も無い部屋に閉じ込められているのと変わらない。

「私の先祖にあたる、大魔導師エレクトラが空間制御の術で作り出した聖域だそうです・・・。

私達の世界の外れにある、時間の流れから切り取られた空間・・・それ故、別の世界との境界線が何処よりも薄い場所・・・とされています」

「ふうん」

エアニスは踵でガツガツと真っ白な地面を蹴る。艶の無い石灰岩のような質感で繋ぎ目が一切無い。そしてどういう理屈か、どれだけ靴底を押し付けても白い地面は汚れ一つ付かない。エアニスはもう一度、自分達が落ちてきた何も無い白い空を見上げた。

「驚いたな・・・空間制御に時間制御・・・俺達が上からゆっくり降りてこれたのは、気流じゃなくて重力の制御か？・・・お前のご先祖様は何でもアリだな」

感心したというよりは呆れた様子で腕を組み、そのでたらめな空間を見回した。

「ちょっと・・・なに暢気に世間話なんてしてるのよ？」

「アンタ達、自分の状況分かってんの！？」

そのやり取りを見ていたアイビスが、痺れを切らして会話に割り込む。まるで自分達が見えていないようなエアニスの態度に腹が立ったのだ。

「うるせえよ。黙ってる負け犬が」

エアニスのにべも無い罵倒にアイビスは顔を赤く染める。

「ッ！、馬鹿にっ・・・！！」

「カリカリするなよ、器の小ささがバレるぞ」

「うっさいわねこの男女っ！！」

「ンだとこの野郎オォ！！」

余裕すら見せていたエアニスが一瞬でキレた。

危うく始まりかけた漫才を止めるため、チャイムはエアニスの膝裏に蹴りを入れて黙らせる。こほんと咳払いをして、彼女は二人の魔族を見据えた。

「それが・・・これまで集められてきたヘヴンガレットなの？」

「？」

チャイムの言葉に、エアニスは眉をひそめる。

よく見ると、二人の魔族の後ろには胸の高さ位の祭壇があった。この真っ平らな空間に唯一存在する人工物。大きな岩から削り出されたような祭壇は精緻な細工が施されている。材質は白い地面のそれと同じ物だろう。艶の無い真っ白な色で、細工の凹凸が淡い影を落として見事な造形を控えめに主張している。周りの景色に溶け込んでしまい、エアニスはチャイムの言葉を聞くまでその存在に気付かなかったのだ。

そして台座の上には無造作に、小石程度の大きさからこぶし大までの大きさの、不揃いな紅い6つの石が無造作に転がっていた。

それにイビスが手を伸ばす、エアニスは驚き、反射的に剣の柄に手を掛けた。

しかしイビスの手は、見えない壁に触っているような形で止まる。手を離し拳を作り、その見えない壁をノックするように小突いた。まるでパントマイムでも見ているようだった。

「この祭壇と石の周りの空間は時間が止められている」

イビスは淡々と語る。

「この台座も、この地面も全てだ。時間が止められ、どのような手段を講じても傷ひとつ付ける事が出来ない。

この女が空間制御の術で、空間凍結を解除しない限りはな」

「・・・へえ」

にやり、とエアニスが笑う。

「だからレイエルに解除の為の術を使わせるため、お前等はレイチェルをいたぶってた訳か？」

「・・・そうだ」

何の感情も込めず、イビスは言う。エアニスの掌にじわりと力が入る。

「よく耐えたな、レイチェル」

「あ、えっと・・・はい・・・」

レイチェルが受ける筈だった痛みの大部分はイビスの思惑によってトキの方へ行ってしまった訳だが、今それを言うと話がややこしくなると思ったレイチェルは敢えてエアニスの言葉を受け流した。トキには申し訳ないと思ったが。

「この女を拷問にかけようにも殺してしまっても元も子も無いからな。

"人質"を使って扉を開けさせたが、ここは全ての力が外界から隔絶されているらしく、俺の力でも"人質"に手を出す事が出来なくなって困っていた所だ」

「人質？」

イビスの言う"人質"とは、もちろんレイチェルの事ではなくトキの事だ。エアニスは、彼がイビスの力によって治療中も痛み付けられていた事を知らないなので、その言葉の意味を理解出来ない。

イビスは右手を上げると、その手に彼がいつも使っている大剣が現れた。それを握ると一步踏み出し、エアニスに剣を向ける。

「この女が言う事を聞くまで、代りにお前を痛みつける事にしよう」

その言葉にエアニスは鼻を鳴らして、腰の剣を引き抜く。

「痛め付ける？

はっ、舐めるなよ。殺すつもりで来い」

イビスと対峙して、エアニスは改めて感じる。

これが最後の戦いになると。

彼等にとっても、これ以上退く事は出来ない筈である。

エアニス達にとっても同じだ。だから、この戦いはどちらかが倒れるまで終わらない。

そう思うと、すう、と感覚が冴えて来るのを感じた。大戦中の戦場では、よくある事だった。緊張か恐怖か、それとも全力で戦える事に対する歓喜か。この感覚の正体が何かは知らないし、知ろうと思った事も無いが、とにかくこうなるとエアニスはすこぶる調子が良い。

戦う事が楽しくなるのだ。

あまり褒められたものではなく、かつてレナと交わした約束とも相反する感情だ。

大戦が終わってから自ら封印したつもりの意識だが、今だけはこれを解き放とう。

自分の全てを力に変えよう。

全てを捨ててでも、彼女達を守らなくてはならないのだ。

エアニスの纏う空気が変わり、チャイムはゆっくりとその背から遠ざかる。自分が手出し出来る様な戦いでない事は分かっている。アイビスも、二人の戦いに手を出すつもりは無いのか、跪くレイチェルを見張るように、彼女の側から離れようとしなかった。

エアニスの思考は次第に暗い深みへと沈んでゆく。

やがて意識が心の裏側へと突き抜けると、全ての不要な思考が頭の中から消え失せた。

脳は心を排除し、ただ相手を倒す事だけに全ての力を発揮する。

思考よりも本能に従い、エアニスは言葉も無くイビスに向かって飛び掛った。

暗闇の中、遠くで僅かに輝く光にトキは必死で手を伸ばしていた。

その光は少しづつ小さくなってゆく。光が遠ざかっているのではない。自分の体が暗い海の底へと沈み込んでゆくのだ。

何故自分が海の中を漂っているのか、何故水の中で呼吸ができるのかといった疑問すら感じず、トキは鉛のように重い手足を動かし、少しでも光に近づこうともがいた。

しかし海の底から闇と同じ色をした腕がずるずると伸びて、トキの体を闇の底へと引きずり込もうとする。

肩越しに闇の奥を覗き込む。

そこに沢山の人影を見たような気がした。何処かで見たような顔から、憎しみを募らせ忘れる事の出来なくなった顔。かつて毎日のように見ていた仲間の顔まで。

地獄。

ああ、お前達、やっぱり地獄に堕ちたか。闇の底を見下ろして、トキは苦笑いする。

当然自分も死んだら地獄行きだろうとは思っていたが、地獄といえどそこにかつての仲間が居るのであれば、そう悪い場所でも無いのかも知れない。

トキは遠くに見えるかすかな光から目を逸らし、体に絡みつ়く黒い腕に引かれるまま闇の底へと沈んでいった。

走馬灯、というものだろうか。

トキの脳裏にはいつの間にか、これまでの思い出がコマの飛んだフィルムのようにパタパタと再生されていた。

人を殺す道具として生かされていた子供時代。アリシアと再会し、マスカレイド部隊として仲間の為にな戦えるようになった少年時代。そしてツヴァイの裏切りにアリシアの死。 奇妙な縁が今も続く、エアニスとの出会い。彼と出会ってからの生活はなかなか愉快だった。そして、チャムとレイチェルとの出会い。こんな事を言ったらレイチェルに悪いが、彼女達と出会って始めた旅は、本当に毎日が充実していた。

アスラムへの船旅。オーランドシティでの束の間のバカンス。エルバークでの戦いは、トキの心を再び深く抉ったが、それで自分の過去を清算する事が出来た。

そして旅の終着点の山奥で

自分は魔族の剣に刺されて

レイチェルが、目の前でさらわれた。

トキの走馬灯は、魔族にさらわれるレイチェルの姿を映したまま止まる。

誰かが「これでいいのか」と訴えかけるように、その映像はトキの脳裏へジリジリと焼き付く

。

トキの閉じかけていた瞼が開いた。

声を張り上げ、自分の体に絡みつ়く黒い腕を掴み、筆り取るように引き剥がす。

もう何年も声を発していないような錆付いた喉を、力の限り震わせた。

「これで、いい訳っ、ないだろうッ！！」

闇の奥へと沈み行きながらトキは暴れる。自分を捕まえようとする黒い腕を踏みつけながら、上へ上へと、光の差す方へ登る。

脳裏に焼きついた少女の顔を思い浮かべ、トキは彼女の名を叫んだ。

すると突然、襟首を誰かの腕に捕まれた。

闇の底から伸びる不気味な黒い腕ではない。

白くて細い、人間の腕。

『さっさと目を覚まさぬか！！』

「・・・え？」

それが何か理解する間もなく、トキはぐいんと胸倉を引き上げられた。



「うわあああああッ！！」

トキは飛び上がる様に身を起こした。

こんなに腹の底から悲鳴を上げたのはどれだけ振りだろう。恥ずかしい。

息も絶え絶えに視線を周りに這わせると、目の前に馬乗りになってトキの襟首を掴むティアドラの顔があった。寝ている間に貞操を奪われてしまったのかと思いトキは青ざめる。

「な、何してるんですか・・・？」

「やれやれ、ようやく目が覚めたか。お主、せっかく傷を治してやったのに、心の方が死にかけておったぞ？」

安堵の息を吐いて、トキの襟を離すティアドラ。

「き、傷・・・？」

思い出したようにトキは自分の胸元に手を当てる。ズキンと、体の芯に引き攣るような痛みが走り、身を起こしていたトキは再びマントの敷かれた雪の上へ倒れこむ。苦悶の声をあげた後、彼はいつもの笑みを浮かべる。

「ははっ。ああ、そうか。僕は、死にかけていたんですね・・・」

「凄い、地獄も見たし走馬灯も見ました。本当にあるんですね死後の世界って・・・」

「傷の具合はどうじゃ？」

「喋るのも辛いくらい痛いですね・・・もう少し何とかありませんか？」

「これ以上の治療は無理じゃ。時間が経ち魔導の治癒力に肉体がある程度追いつくまではな」

「・・・エアニス達は？」

「レイチェルを助けに向かった。まだそう時間は経っておらぬ」

「・・・じゃあ、こんな所で寝ている訳にはいきませんか・・・」

トキは懐から小さな金属製のケースを取り出す。

中を開けると、粒状の錠剤が幾つか入っていた。

「なんじゃそれは？」

「僕が兵隊やってた頃に支給されていた魔法のお薬です。痛覚を殺してそれ以外の感覚を過剰に鋭くする事ができます」

「お主、それは・・・」

「分かってます。僕だってあまり使いたいモノじゃないですよ。

実際、もう2年以上使った事ありませんし。

ですが、今はそんな事を言ってる場合じゃ無いでしょう？」

そう言うと、トキは錠剤を口に放り込み、奥歯で噛み砕く。暫く何かに耐えるように体を震わせ、やがて大きく息を吐いた。

「別にハイになったりするクスリじゃないですよ。

ま、翌日の倦怠感といったら半端ないですがね。

クスリを止められなくなる様な軟弱な神経をしている訳でも無いのでご安心下さい」

すくりと立ち上がるトキ。傷の痛みも大量に失った血も気に留める様子の無い、ごく普通の振る舞い。その普通さがあまりにも異常で、ティアドラは乾いた笑みを浮かべる。

「一番まともそうに見えたが・・・お主が一番イカれておるのかもしれない・・・」

「心外ですね。仲間の為に身を削り、こんなにも頑張ってるというのに」

血で汚れた伊達眼鏡を拭きながら、トキは慫然として言い返す。

丁度森の奥から、ローウェンがスノーモービルに乗って戻って来た。



エアニスの剣が、イビスの刀身を削りながら滑る。

イビスは剣を引くと後ろへ飛ぶ。エアニスは執拗にイビスの首元を狙って剣先を突き出す、刃は彼のコートの際を引っかけてただけだった。

イビスはボロボロに削れた大剣の刀身を見下ろすと、軽く剣を振った。すると、まるで手品のように削れた刀身は元通りの鋭利な刃に戻る。

破れたコートの際も、親指で少し擦っただけで元通りに直ってしまった。

彼ら魔族にとって、手にした武器も身に纏った衣服も自分の体の一部なのだ。

イビスは蔑むようにエアニスを見る。

「・・・剣に魂まで喰われるつもりか？」

「ギリギリの所まで"コイツ"に頼らないと、お前に届かないみたいだからな」

エアニスの持つ魔法剣、"オブスキュア"は、持ち主の魔力を喰らい、切れ味と魔導的側面への干渉力に変える。

剣が処理できる上限の魔力量いっぱいまで、エアニスは自分の魔力を注ぎ込んでいた。

これほど"オブスキュア"に依存する戦い方は大戦後期以来だった。とはいえ、当時のエアニスは"石"の力を使い、"オブスキュア"の力を極限まで増幅して戦っていた。あの頃の力に比べれば

、今のエアニスの力は十分の一以下といったところか。

イビスはエアニスの間合いの僅かに外側から大剣の斬撃を繰り出す。エアニスは中段の突きを横に身を翻す事でかわしたが、突きはそのまま斜め上方に振り抜かれる。それを剣で押さえ込み、火花を散らしながら刃を滑らせイビスの懐へ潜り込む。

両手はイビスの大剣を押さえるのに塞がっているため、爪先に鉄板の入ったブーツをイビスのみぞおちに叩き込む。イビスの体に人間と同じ様に内臓が収まっているか疑問だったが、イビスの体の軸は大きくぶれて大剣からふっと力が抜ける。

大剣を押しつけたエアニスは剣を逆手に持ち替えて、イビスの喉を切り裂いた。

「・・・ち！」

人間が相手ならばこれで勝負はついていただろう。

喉を切られたイビスは僅かに動きを止めただけで、再びエアニスに向けて剣を振りかざす。エアニスはもう一度、イビスの大剣をギリギリの所でかわして肉薄する。すれ違い様に、彼の右脇から延髄を結ぶよう背中を斬り付ける。

それでも、イビスは斃れない。

だが、エアニスはイビスと斬り結ぶうちに、勝機を見出していた。

人間離れした力やスピードに圧倒されていたが、何度も剣を交えるうちにそれにも慣れてきた。その上で気付いた事だが、イビスの剣技は思いのほか拙いものだった。

純粋な力のみで、今まで殆どの敵を圧倒してきたのだろう。それだけで相手を倒す事が出来るのであれば、剣技に巧妙さや狡猾さは必要ない。

つまり、イビスのパワーとスピードさえいなすことが出来れば、彼の強さのアイデンティティは瓦解する。

事実、イビスの剣は一度たりともエアニスの体に触れていないのだ。

だが問題が無い訳ではない。

エアニスも、イビスに対する決定打が放てずにいるのだ。

これまで幾度となくエアニスの剣はイビスの体を斬り裂いている。人間ならば即死するような斬撃も見舞ってきた。しかし、その全てに手ごたえが無い。まるで幽霊と切り結んでいる気分だ。

(アレをやるか・・・)

イビスの切っ先を紙一重でかわしながら、エアニスは剣を握る手に力を込める。

横薙ぎの斬撃が繰り出されると、エアニスは無理を承知でイビスの懐に飛び込んだ。身のこなしだけでイビスが剣を握る腕の外側、彼の背後に近い場所まで踏み込む。踏み込みの際、エアニスは防御行動をとらず、イビスに自分の肩口を斬らせた。それをチャンスと見取ったのか、イビスは背後に回られても守りに入らず執拗にエアニスへ刃を繰り出す。

エアニスの口元に笑みが浮かぶ。

「素人が！」

エアニスの剣がイビスの右脇腹から左胸に抜けた。体の軸を串刺しにされて必然的にイビスの

剣はエアニスに届かなくなる。イビスがエアニスの喉元を貫こうと、届かない剣を逆手に持ち替えた次の瞬間。

イビスの体の中に、エアニスの魔力が叩き込まれた。

「・・・！！」

今まで何度斬り付けられても変わらなかったイビスの顔に、苦悶の表情が浮かぶ。

エアニスが魔法剣"オブスキュア"を介し、自分の魔力をイビスの体内に叩き込んだのだ。例えるならば型の違う血液を一気に自分の体内に押し込まれたようなものだ。イビスはエアニスに叩き込まれたのと同じ分量だけの力が、体の中で焼き尽くされるのを感じた。

「・・・はあっ、！」

エアニスの額にドッと汗が浮かぶ。彼はエルフの血を引くにも関わらず、魔力を操る才能が無い。だからエアニスにとって魔導を使った攻撃といえば、こうして魔法剣を介し、ありったけの魔力を相手に叩き込む事しか出来ないのだ。

以前アイビスが召還した"デーモン"と呼ばれる化物を、これと同じ方法で倒した事がある。しかし、イビスはまだ立っている。

ガチャリ、とエアニスの剣が振るえた。イビスが自分の胸から生えるエアニスの切っ先を掴んだのだ。エアニスは舌打ちをする。

「しつこいぜ、さっさとくたばれ！！」

もう一度、残っているありったけの魔力でイビスの体を焼いた。つづけて2度、3度と、エアニスは力任せに魔力を叩き込む。捕まれた剣から力が抜けるのを感じると、一気に剣を引き抜きイビスから距離を取った。

足を小刻みに震わせ、激しく息を乱すエアニス。

イビスはおぼつかない足取りで背後のエアニスに向き直ったが、剣にもたれかかるようにして、膝をついた。

ざざざ、とノイズが走るように姿が黒ずみ、乱れた。空間転移の術を受けて傷付いたアイビスと同じ様に。

輪郭のはっきりしない自分の手を見下ろして、イビスは眉間にしわを寄せる。

「・・・効いてる、効いてるよエアニス！！」

戦いを見ていたチャイムが歓喜の声を上げた。アイビスに捕らえられているレイチェルも、口元に笑みが浮かんでいる。

エアニスは再びイビスに向かい剣を向ける。急激な脱力感が体に残っているが、魔力を使い果たした訳ではない。肩口の傷も無視できる程度のものだ。これを何度か繰り返してやれば、イビスを倒せるかもしれない。

イビスはゆらり、と立ち上がるとおもむろに剣を手放した。剣は地面に転がるよりも早く、墨のように空中で溶けて消える。

「剣ではお前に勝てそうないな」

事も無げに言うイビスにエアニスは戸惑い、軽い緊張を覚える。

「何もそいつの得意技に付き合っやる事なんてないでしょ、さっさと片付けちゃいなさいよ」
「・・・！？」

アイビスも、緊張感の無い声でそんな事を言う。イビスの事をまるで心配していない様子に、エアニス達の感じた不安はどんどん大きくなる。

「はっ、剣以外に何かエモノがあるのかよ・・・？」

「何でもあるさ。我々魔族は只の存在であり、概念でしかない。

存在する形や力には、囚われない」

そう言うと、イビスは剣を持っていた右手で自分の顔を覆った。

「そうだな、お前のような奴には・・・この姿がいいか」

ゆっくりと、イビスの姿が黒い霧へと変わってゆく。虚空へ溶け出したイビスの体はどんどん膨らみ、渦巻く霧は黒い砂嵐のようにザラザラと音を立て始める。

「な、・・・！？」

砂嵐は大きく間合いを取っていたエアニスの目前にまで迫る。砂嵐に飲まれぬようエアニスは後ろへ跳び、チャイムの手を引いて駆け出した。

「な、何よあれ！？何が起こってんの！？」

「俺が知るか！！」

イビスが巻き起こした現象が何か分からず、二人はとにかく黒い砂嵐から逃げる。

不意に、頭上に影が落ちた。

エアニスが見上げると、二人の真上に巨大な手が、鋭い爪の生えた獣の手のような手が見えた。

「や、べえ！！」

エアニスはチャイムを抱きとめると真横に飛んだ。

それまで立っていた場所に爆発的な衝撃が炸裂し、二人はその風圧に押されて白い地面を転がった。

「クッソ！何だ、今のは！！」

うつ伏せに倒れたエアニスは辺りを覆う黒い砂煙を振り払い、チャイムの姿を探す。

チャイムはエアニスのすぐ横で、尻餅をつくように座り込んでいた。視線は空を見上げた角度で固まっている。瞬きを忘れ、恐怖に固まった表情で。

それに気付いたエアニスは、彼女の視線の先に目を向ける。

そこには、まるで御伽噺に出てくるような、巨大な黒い竜がいた。

「は、・・・」

現実離れも甚だしい光景に、エアニスは言葉を失う。

黒竜の大きさは、三階建ての建物にも匹敵するだろうか。艶の無い大きな鱗で身を覆い、その巨体を四本の足で支えている。

そして、七つの頭。

体躯の芯が通る場所に一際大きな頭があり、その左右にやや小さな頭が三つづつ、並んでいる

。神話に出てくるヒドラと呼ばれるものに似ていた。

ゴァァ、と、中央の首の顎から、白い蒸気と紅い炎が漏れ出す。

「おい、まさか、！」

エアニスが腰を浮かすと同時に、黒竜の顎が目も眩むような炎を噴き出した。軍隊が使うような火炎放射器の比ではない。その火線を十本も束ねたような、まさに炎の海が迫り来る。

逃げられない。

その思いに囚われ、どうすればいいのか分からなくなったエアニスは足を動かす事が出来ない。

しかし、怒涛の勢いで迫る炎は見えない壁にぶつかり吹き散らされ、大量の水蒸気になる。

目の前の出来事についていけないエアニスの隣で、チャイムが呪文を口ずさみながら右手をかざしている。チャイムの構築した防御壁が二人の身を守ってくれたのだ。

「・・・すまねえ・・・大丈夫か、チャイム」

自分より早く硬直から脱した彼女にエアニスは本気で感謝していたが、まだ思考が正しく回っていないのか、気の利いた言葉は出てこなかった。

「うん、平気・・・。今の炎も、魔導的な現象じゃなくて、単なる物理的な炎だから、ちょっとした防壁で簡単に防げるわ。

レイチェル、平気！？」

チャイムはレイチェルに呼びかけると、視界を遮る水蒸気の向こうから、いつも通りの控えめな声で大丈夫だと返事が返ってきた。

チャイムは安堵の息を吐き、エアニスは呆然と、頭上の黒竜の顎を見上げる。

「どうするんだよ・・・これ・・・」

恐怖でも絶望でもない。あまりの出鱈目さに呆れ、戦意が吹き飛んでしまった。

ゴルル・・・、と、黒竜は低く喉を振るわせると、

『この姿も今までの人間の姿も、世界に具現している俺の存在量としては同じものだ』

やや聞き取りにくいものの、黒竜はイビスの声で喋った。

『この世界に対する魔力的な干渉力や、人の姿というこの世界で活動する上での有用性、その他様々な力や存在価値を全て破棄し、物理的な力へ形を変えただけだ』

確かに今のイビスの姿は、今までの人間の姿と比べると、この世界の存在として価値あるものの多くを切り捨てているのかもしれない。その切り捨てた価値を全て、この暴力的で分かりやすい形へと作り直したというのか。

イビスの言葉の意味を、エアニスは漠然と理解する。

『だが、人間とばかり戦ってきたお前は、このような姿の相手と戦う事に慣れていないのではないか？』

「・・・ッ！！」

当然である。様々な姿形の魔物が跋扈していたと伝えられる250年前ならいざ知らず、今の時代、竜と戦った事のある人間など多分居ない。エアニスだって、人外の敵と戦う事など滅多に無い。ましてや相手は三階建ての建物に匹敵するような巨体。どう立ち向かえばいいのか分からない

。エアニスの剣では、この巨大な竜の鱗を剥がす程度の役にしか立たないだろう。魔力的な干渉力を全て放棄したというのであれば、自分の魔力を相手の体内で炸裂されるという手も、効果があるか疑問だ。

エアニスはすぐに、自分ではイビスに勝てないと結論付ける。

(こいつは、レイチェル向きの相手だな・・・)

レイチェルの魔導は、エアニスの剣と違い広範囲の破壊を目的としたものが多い。今のイビスには、自分の剣よりもレイチェルの魔導が有効な筈だ。ならば、イビスより先にレイチェルの自由を奪っているアイビスを叩くべきだ。

「チャイム、なるべく遠くまで下がってろ！！」

「！？エアニスっ！！」

方策を定めたエアニスは黒竜の足元へ向かい駆け出す。体の真下に潜り込めば、黒竜もエアニスに手を出し辛い筈だ。

しかし、その目論見はあっさり和外れる。それほど俊敏とは呼べない動きで、黒竜は一步、エアニスから遠ざかるように移動する。

それは、エアニスにはとても追いつく事の出来ないスピードで距離を取られた様に見えた。歩幅が違い過ぎるのだ。黒竜にとってゆっくり踏み出した一步が、人間にとっては全力で走り抜けても稼ぐ事の出来ない距離なのだ。

『最後の敵が巨大なドラゴン・・・お前達人間好みのシナリオじゃないのか？』

「クソが、もう時代後れだッ！！」

イビスの軽口にエアニスは怒鳴り返す。

エアニスを押し潰すかのように、黒竜の前足が迫る。これも、ゆったりした動きに見えたが、いざ前足の爪が目前に迫ると、そのスピードは猛烈な勢いを伴っている事に気付く。

相手の体が巨大過ぎて、目測が全く当てにならない。それに気が付き、エアニスの焦りは加速する。

それでも前足の一撃を避けて、エアニスは反対側の前足へと斬りかかる。岩のような鱗を切り裂き、エアニスの剣はその下にある黒竜の肉を抉る。持ち上げられた前足とは逆の足の腱を断ち、黒竜の姿勢を崩そうという狙いだったが、一般的なロングソード並の長さしかない"オブスキュア"ではそこまで刃が届かない。剣を突き立てた前足が振り払われ、エアニスは空中に投げ出される。それでも剣を手放す事無く足から着地した。

姿勢を立て直す間もなく、竜の首の一つが、エアニスに向けて迫る。

エアニスを噛み砕こうと広げられた顎に、エアニスはポーチから取り出した手榴弾のピンを抜き、投げつける。

手榴弾は竜の口元で爆発し、何本かの牙を吹き飛ばした。鱗と肉片がバラバラと散らばり、竜の首は痛みに苦しむかのように咆哮する。硬い鱗に覆われた外皮と違い、口内は生物として普通の強度しか持ち合わせていないようだ。

エアニスの口元が笑みの形に歪む。

イビスは魔力的な干渉力を全て捨て、物理的な存在へ姿を変えた、と言っていた。つまり、今のイビスには魔力の込もっていない剣も、銃弾も、爆弾も、全て有効だという事だ。

「こんな事になるなら、もっと沢山爆薬を持って来ればよかったな！」

手榴弾の爆炎は大量の煙を巻き上げ、エアニスの姿を隠している。その隙に黒竜の死角に潜り込み、レイチェルを開放するためにアイビスの姿を探す。

「っ！」

自分の正面、薄くなった煙越しに黒竜の首の一つと目が合った。警戒するようにゆっくりと近寄る首に向かいエアニスは剣を構え、ポーチの手榴弾に手を伸ばす。

そして、全くの予感すら感じる事も出来ず、

爆炎の向こう、自分の背後から飛び出してきた巨大な黒竜の顎に、エアニスの体は喰い付かれた。

いきなり体を突き飛ばされたのかと思った。しかし、すぐに自分の腰から胸までが巨大な竜の顎に噛み付かれ、そのままの勢いで体をさらわれてしまった事を理解した。

ぐわん、と、エアニスは浮遊感に襲われる。

黒竜の首が捕らえた獲物を掲げるように、その首を高々と持ち上げたのだ。

「がっ・・・！」

巨大な顎に挟まれ骨の軋むような猛烈な圧迫感を感じるが、胴に深々と食い込む牙の痛みは、無い。あまりの非現実さに脳が対処しきれず、痛みまで処理ができていないのだろうか。

エアニスの判断ミスである。

目の前の首だけと向き合っている、黒竜の首は7つもあるのだ。一つの首に見つかったのなら、他の首にもエアニスの位置が伝わっていたとしても不思議ではない。無意識のうちに、竜の首を別々の生き物として認識していた事がいけなかった。

まさに、イビスの狙い通りだった。人外の存在と戦う事に慣れていないエアニスの弱点を突いたのだ。

痛みは無いのに意識が朦朧とし始める。

エアニスの右手には手榴弾が握られたままだった。片手で器用に安全ピンを引き抜き、手を離す。手榴弾はそのまま黒竜の口内へと転がり落ちてゆく。

体のすぐ真下で手榴弾が炸裂する。爆音と、地鳴りのような黒竜の呻き声がエアニスの傷口から骨を伝い、脳髄を揺さぶる。爆発によりエアニスの体も無傷ではいられなかったが、体に喰い込む牙の力が緩んだ。追い討ちをかけるように、大きな牙の付け根に剣を突き立て竜の顎から体を引きずり出す。

不意に、人の頭ほどもある黒竜の瞳と、目が合った。エアニスには爬虫類の表情など読めないが、その瞳はエアニスを睨み続けているような見えた。

「・・・くそっ」

諦めが、エアニスの闘争心に影を落とす。

手榴弾で顎をずたずたにされた竜の首は、力を振り絞るように身を震わせると、エアニスの体を、一息に噛み砕いた。



ぼたぼたと、チャイムの周りに赤い雫が降り注ぐ。

チャイムの居る場所からは、エアニスの両腕と、垂れ下がる長い琥珀の髪だけが見えた。竜の顎の縁から、エアニスの腕の先から、エアニスの髪から、真っ赤な液体が溢れるように伝う。

ぱた、とチャイムの頬に生暖かい雫が落ちる。人の体温。エアニスの、体温。

チャイムはその場で膝を折ると、両手でくしゃりと自分の髪を掴む。

「・・・いや、」

震え、消え入りそうな声が漏れる。視界の端で、周りの地面がどんどんエアニスの血で染まってゆくのが見えた。

頭が、おかしくなりそうになる。

喉が張り裂けんばかりの声で、チャイムはエアニスの名を叫んだ。

レイチェルはその場に立ち上がり、ヘヴンガレットが封印されている祭壇へと向き直る。

「あら？ 仲間が死んでようやくその気になった？」

皮肉るようにアイビスが言う。

レイチェルは額に玉の汗を浮かべ、こくりと喉を鳴らすと祭壇へ手をかざした。

「分かったわ、あなた達の望み、叶えてあげるわよ！」

その宣言に、アイビスは僅かに驚きの表情を見せる。

レイチェルは乱暴に胸元の護符を塗り取ると、そこに埋め込まれた黒い石を、その細い右手で握り潰した。魔力に反応して砂のように砕けた石はバラバラと地に落ち、中から真っ赤な血の色にも似た"石"が姿を表す。

レイチェルが持つ7つ目のヘヴンガレット。それが外気に触れた途端、周囲の空気にむせかえるような魔力が満ち溢れる。

それを使い、レイチェルは目の前にある残り6つの石が安置された祭壇、いや、この真っ白で何処までも続く空間全てに施された時間停止の術の解除を始める。

術式の解除法は父であるシャノンに教えられている。魔導師エレクトラの直系にあたる者にしか伝えられない、封印されたヘヴンガレットを開放するための術式。

レイチェルは術式の最後の一節を唱え、右手で祭壇に触れた。

ビシリ、と黒竜の踏み締める白い地面に亀裂が走った。今までどれだけ暴れても微動だにせず、傷ひとつ付かなかった地面が、だ。

見た目は変わらないが、この何処までも続く真っ白で異様な空間に、少しだけ現実味を帯びた空気が流れ始めた。

変化に気付いたアイビスが周囲を見回す。

「この空間の時間が・・・流れ始めた？」

アイビスは祭壇へ視線を戻す。いつの間にか6つの"石"は互いが共鳴し合い、脈打つように光り輝いていた。まるで人間の心臓のようだった。

レイチェルは祭壇に祭られたヘヴンガレットの一つを手を取った。

「ヘヴンガレットは自分が存在する世界に干渉する力があります。私達が使う空間や時間を操る術も、この力を研究した結果、作り出されたものです。

一つならただの魔力増幅器でしかありませんが、同じ場所にヘヴンガレットが2つ以上存在すると、それだけでヘヴンガレットの力は共鳴し合い、世界に影響を与えます。

時間の流れを乱したり、空間に穴を開けたり、世界をの法則を乱したり・・・。もっとも、その変化の大半は、世界に内包される私達に認識できる物では無いと考えられています」

レイチェルの言葉に、アイビスは肩を揺らして笑う。

「あはっ！ 認識出来ないならいいじゃない？」

誰も気付く事無く、世界は250年前に戻る！ 誰にとっても幸せで最高な結末じゃないの！！」

「ヘヴンガレット自体の時間を止める事で世界への干渉を防いでいますが、見つけてきたヘヴンガレットをこの神殿に封印する時は、どうしても神殿の封印を一度解除しなければなりません」

しかし、レイチェルはアイビスの言葉を見做すように、自分の説明を続ける。

まるで、手にした石へ語りかけるように。

「私達が知っている限りでは、約10分。それ以上ヘヴンガレットを通常空間に晒し続けると、共鳴した力は世界に穴をあけて、この世界の隣の世界、レッドエデンと繋がってしまいます。

実際、250年前、私のご先祖様が魔族たちをレッドエデンに追放した時は、その現象を利用したのだと伝えられています。

もしこの世界とレッドエデンが繋がれば、250年前に追放した魔族達はこの世界に雪崩れ込んで来るでしょう」

まるで自分を相手にしていないレイチェルの不可解な独白に、気分を害したアイビスが掴みかかる。

「ちょっと、アンタ、何ひとりで……！」

「照れくさいから敢えて今まで言葉にはしてきませんでしたけど……」

これは、私達の戦いは、掛け値なしに世界を守る戦いです。

だから、力を取り戻したとしてもいつもみたいに調子に乗らないで下さいよ、

エアニスさん！」

「っ！？」

レイチェルは、笑いながらその名を呼んだ。

アイビスはレイチェルの不可解な言動に説明出来ない猛烈な危機感を覚える。だが、遅かった。

レイチェルはアイビスの手を振り払うと、ヘヴンガレットを掴んだ右手を大きく振りかぶり、そして思いきり投げた。

黒竜に噛み付かれ、レイチェル達の頭上でその身を晒されるエアニスに向かって。

「エアニスさんっ！！」

レイチェルは喉が裂けるほどの大声で、彼の名を呼ぶ。

「レナさんの石です！！！」

その声に、闇の底に沈みかけていたエアニスの意識が覚醒する。

暗く淀んだ視界の中、レイチェルが投げた赤い石が輝きながらゆっくりと行き過ぎようとしていた。

巨大な顎に噛み潰され、もう動かないと思っていた体は、メシメシ、ブチブチと音を立てながらもしぶとく動く。そして、すっかり感覚の無くなった右手が、レナのヘヴンガレットを辛うじて掴み取る。

エアニスは体に食い込む黒竜の牙に、オブスキュアの柄に埋め込まれている魔導石をぶつけて叩き割った。魔法剣であるオブスキュアのエンジンとも呼べる物だが、魔導石は高額ではあるものの吊るし売りされている量産品だ。未練は無い。

そこに空いた穴に、レイチェルから受け取ったヘヴンガレットを押し込む。

歪な形をしたレナのヘヴンガレットは、ずるりと液体のように形を変えて、オブスキュアの柄へ

綺麗にカットされたルビーに姿を変え納まった。

すぐさまヘヴンガレットの力は、エアニスと繋がる。

ずぐん、　　ずぐん、　　ずぐん、

石は心臓が脈打つかの様に輝く。エアニスの中の消えかけていた魔力が、生命力が増幅され、体内で無限の循環を始める。

同時に、石に蓄積されてきた記憶がエアニスの脳内に怒涛の勢いで流れ込む。その莫大な情報量は、常人ならば耐え切れず脳と精神を壊しかねないものだ。しかしエアニスは、それを当然のように受け入れる。二年半前、初めてヘヴンガレットと繋がった時に一度はその身に宿した記憶である。苦痛では無かった。

それに加え、エアニスの知らない記憶が新たに脳に刻み込まれる。戦争が終結した後、彼がヘヴンガレットをエルカカに返した後の、石の記憶だ。

そして、その記憶の中には、さっきのレイチェルの独り言も含まれていた。

レイチェルが石に向けて語り掛けていた話は、こうしてエアニスへと伝えられた。

「10分、だな？」

ざふっ！

突然、エアニスに噛み付いていた黒竜の上顎が、縦に割れた。鼻先から眉間までぱっくりと裂けて、噴水のように血と臓物を撒き散らす。

鼻先だけでなく、竜頭の付け根からも血が吹き出した。ホースに開いた小さな穴のような傷口は時計回りにみるみると広がり、黒竜の首の一つを輪切りにしてしまう。

竜頭は首の先からゆっくりと離れ、地に落ちる。それはまるで果実を叩き付けたように砕け散り、真っ白な大地に赤く爆ぜた跡を残した。

その中心に、剣を携えた男の姿があった。



チャイムはゆっくりと立ち上がり、巻き上がる血霧の向こうに浮かぶ人影を見る。
「・・・エアニス？」

その姿を見て、自信なさげにその名を呼ぶ。

もちろん、それはエアニスの姿だ。しかし、長い琥珀の髪は、いつの間にか鈍く輝く銀髪へと色を変えていた。まるで印象が違っている為、チャイムが戸惑うのも無理は無かった。

元々エアニスの髪は銀髪だ。彼は戦争が終わってから、その目立つ容姿を世間に溶け込ませる

ため、魔導で髪の色を染めていると言っていた。それが体の中の異物として判断されたのか、ヘヴンガレットの力で消失してしまったのだ。

身に纏ったローブは所々破れたままだが、竜の顎に噛み砕かれた筈の体は、傷ひとつ付いていない。服に染みていた血の汚れすら、消えていた。流れ出した血液は全てエアニスの体へと還っていったのだ。

ヘヴンガレットから流れ出す力は、持ち主の体が傷ついてもたちどころに治してしまう。

このヘヴンガレットの前の持ち主、レナ=アシュフォードの力が強く宿っているからだ。彼女は有能な魔法医で、石の力を使って幾人もの人命を救ってきた。その意思が、このヘヴンガレットにも宿っているのだ。

エアニスは力の具合を確かめるように、左手のオブスキュアを見下ろす。

「もう二度とこの力を振るう事は無いと思っていたが・・・命には変えられねえか・・・」

石の力をその身に宿すのは、1年半ぶりだった。石に魂を食われることも無く、あの時と同じように、エアニスはその力を従える。むしろ懐かしさすら覚え、心は落ち着いていた。

この力と繋がっている間は、"彼女"の存在を、感じる事ができるのだ。

エアニスは剣を捧げるように突き出し、独り言のように呟く。

「許されるのなら、もう一度だけ・・・お前の石の力を借してくれ、レナ」

そして、エアニスは真っ赤に染まる大地へ一歩、踏み出す。

血霧の中にも関わらず、銀糸の髪は一筋の汚れもなくフワリとなびいた。

かつて世界の全てを拒絶し、たった一人の勢力として大戦を戦い抜いた剣士。

"月の光を纏う者"は、再びこの世界へと降り立った。

第73話 神の血を継ぐ者

エアニスの異質な存在感は、その場にいる全員が感じていた。

人の姿をしていながらも、それは彼の目の前に立ちはだかる巨大な黒竜よりも重く、分厚く、そして途方もなかった。全てを飲み込む暗く深い穴を覗き込んでしまったような気分。本能的に落ち着きを無くしてしまうような、得も知れぬ空気。

桁外れ。規格外。そのような問題ではない。在り方が、違うのだ。

今のエアニスは、この世の理から外れている。

そして、同じく理から外れた存在である黒竜、イビスは、その力の正体にすぐ気付いた。

『・・・貴様、自分が何をしているのか分かっているのか？』

黒竜の姿のイビスは、くぐもった声で苦々しく呟いた

エアニスは言葉も無く、「？」と首を傾げるのみだ。

『貴様は石を介し己の力を増幅するだけでなく、石そのものを自分の体の一部に組み込んでいる。人間に、それを受け入れるだけの器など無い。

・・・耐えられる筈が無い』

黒竜は、まるで自分に言い聞かせるように言った。

ヘヴンガレットは通常、何らかのエネルギーを注ぎ込んだ後、それを増幅して取り出し、力を行使するものだ。

あくまで使用者にとっては"道具"にしか過ぎない筈の物を、エアニスは自分の内に取り込み、自分の存在そのものの増幅に使っているのだ。

膨れ上がったエアニスの存在は、この世界に様々な力へと姿を変えて化現する。身体能力であったり治癒能力、魔族への魔導的な干渉力としてだ。

イビスはエアニスが、かつて石の力を使っていたという事は知っていたが、まさかこのような使い方をしていたとは思ってもいなかった。

「・・・お前の言う存在とか在り方とか・・・難しい事は分からないな。

でも、現に俺は石の力を使いこなしている。これ以上の証明は無いだろ？」

黒竜のまるで告発するような言葉も、エアニスにとっては何処吹く風。全く意に介した様子は無い。

黒竜は、イビスはらしくもなく口ごもる。そして、言葉を捻る事も無く素直に自分の疑問を口にした。

『貴様は本当に、この世界の人間なのか？

我々と同族、あるいは近いものではないのか？』

一言一言、噛んで含めるように、そう問いかけた。

「人間だよ。ただ、純血のエルフの血が混じってるらしいけどな」

何気ないエアニスの答えに、竜は目を細める。

『・・・そういう事か』

イビスはエアニスがハーフエルフだという事は知っていたが、純血の血を継ぐ者だとは知らなかった。

やはり、エアニスは自分達魔族に近い存在だったのだ。

人間とエルフの違いは、一般的にその長い寿命と強大な魔力が比較対象として挙げられるが、無論それだけではない。その"存在"の大きさも、人間とは大きく違う。

この世界の伝承では、エルフとは太古の昔に神と交わった人間の末裔だと言い伝えられている。人間達の間では半ば眉唾もののおとぎ話として伝わっている事だが、それが事実である事をイビスは知っている。

イビス達は今でこそ魔族と呼ばれる存在だが、遥か昔には人間と共存し、神として崇められていた存在だ。そしてイビス自身、そう呼ばれていた頃に人間と交わった事がある。

神と人の間に生まれた、いわば神の子は、姿形や存在の在り方は人間に近いものだったが、存在の大きさは神に近いものであった。寿命や魔力の多さは、その存在の大きさがこの世界に現れた一つの形である。

そして神が魔族と呼ばれる存在に変わった時代。神よりも人に近い価値観を持つ彼等は、人間と共に魔族と対立した。

半分とはいえ神の力を持つ人間達は、魔族にとって大きな脅威であった。それ以降、魔族は自分達の脅威となりうる存在をこれ以上増やさないため、人と交わる事を禁じた。

そして幾千年もの月日が流れ、神の子達は普通の人間達と交わり、時の流れと共に次第に神の血は薄くなっていった。神の子の子孫は、人間と大差ない平凡な存在へと成り下がっていった。

しかし、この世界には太古から神の血を薄める事無く脈々と伝え続けている部族が居る。只の人間と混じる事無く、神の子同士で交わり続けている種族。純血の神の子。

今では、純血のエルフと呼ばれる存在。

エアニスの父親は、純血のエルフだった。

エアニスは、エルフが人と神の間に生まれた存在の末裔であるという伝承を信じてはいなかったが、ふと雪原でイビスと剣を交えながら聞いた話を思い出した。

魔族はかつて神として人間に崇められていた、という話。

・・・って事は、俺のご先祖様はコイツ等って事になるのか？

はっ、馬鹿馬鹿しい。

辿り着いた真実を、エアニスはあっさりと斬って捨てた。

間違いであればそれでよし。

たとえ真実であったとしても、それはどうでもいい事だったからだ。

「お喋りはもういいな？」

こっちは時間が無いんだ。早めに終わらせよう」

大した感慨も持たず、エアニスは"オブスキュア"を構える。赤く薄い刀身に、赤黒い光が宿る

その言葉に応えるように、イビスは自分達の子孫へと巨大な爪を向けた。



エアニスが剣の間合いの遥か遠くで剣を振るう。振るった剣の軌跡はそのまま赤い風となって、エアニスに飛び掛る黒竜を迎え撃った。

大戦中、一夜にして数百、数千という数の兵隊を屠った力。空気の断層を生み出し、目の前にあるものを無差別に斬り刻む紅い風。

黒竜の頭が赤い風に突っ込む。分厚く硬い鱗を傷つけ、剥ぎ取り、その体躯を引き裂く。が、その傷は浅かった。

エアニスの攻撃を突破した黒竜は、そのままの勢いで巨大な爪をエアニスに向けて叩きつける。しかしエアニスは真上に飛び、黒竜の爪をやりすごした。

「へえ、至近距離なら戦車だってバラすことができるのにな」

尋常じゃない跳躍力で宙を舞うエアニス。体を捻ると黒竜とは反対側に紅い風を解き放ち、その反動を利用して黒竜の鼻先に斬りかかる。

そのタイミングを見計らったかのように、黒竜の首の周りの鱗が逆立った。

鱗の一枚一枚が形を変え、先端の尖った細長いシルエットを作り出す。黒竜の頭の一つが、まるで針鼠のように姿を変えた。その鱗の剣の全てがエアニスに切っ先を向けたと思うと、一斉にエアニスに向けて撃ち出される。

さながら、剣の雨のように。

「・・・ッ！！」

エアニスは口元を強張らせる。さすがにこのような攻撃まで予想できなかった。

実体を持たない魔族は姿形に囚われない。何でもアリだと分かっているけど、やはり自分で想像できる範囲は限られてしまう。

エアニスは再び紅い風を巻き起こし、剣の雨を吹き散らす。しかし、剣の何本かは勢いを殺せず、エアニスに向けて突き進む。それでも石の力で身体能力が増幅されているエアニスにとって、自分に向かって突き進む剣を直接オブスキュアで叩き落す事など造作も無かった。

しかし、同時に同じ事を別の竜頭から繰り出された時点で、エアニスの手は回らなくなってしまう。

いくら石の力を身に宿していても腕は二本、剣は一本しか無いのだ。

人の形をした者と竜の形をした者とは、どうしても埋められない差があった。

剣の一本がエアニスの身体を貫いた。姿勢を崩したエアニスに次々と黒い剣が突き立ち、地に落ちた身体を縫いつけた。剣の雨は、そのままエアニスの身体に降り注ぎ、その姿は完全に剣の山で覆い隠される。

やがてそこには何百本もの剣を重ねて突き立てたような針山のオブジェが出来上がった。

離れた場所からそれを見ていたチャイムが息を呑み、身を震わせる。

しかしチャイムがエアニスの名を呼ぶより早く、そのオブジェは内側から真横に切断され砕け散る。その中心には剣を真横に振り抜いたエアニスが居た。あの剣の檻の中では身体は原型を留めないほどに切り刻まれていてもおかしくないのに、エアニスは何事も無かったかのようにその場に佇む。

『・・・化物め』

イビスが人の姿を形取っていたなら舌打ちの一つでもしていただろう。想像以上に、エアニスの再生力は凄まじかった。その糧となる存在の力は、最早魔族であり神でもあったイビスのそれに迫る。

「自分でも気持ちが悪いと思うよ。

こんな力に頼っていたら、身も心も人間じゃあなくなる。

だから戦争が終わってスグに手放したんだ。いつまでも持っていていい力じゃねえ」

胸に手を当て、自嘲気味にエアニスが言う。

エアニスが石の力に頼っていたのはほんの1年ばかりの間だった。それでもエアニスは、石のせいで人の心の幾ばかを失ったと思っている。

「それと、人を化物呼ばわりするな。今のお前の姿なんて化物そのものじゃねえか」

エアニスは若干乱れた襟元を正しながら言う。

「いくら化物じみていても、心が欠けていようとも、俺は人間だ」



若干の膠着状態。

石の力を得ても、力技ではイビスには勝てない。レイチェルが人質に取られている事、更には10分というタイムリミットがある事を考えると、エアニスの劣勢は明らかだった。

エアニスは次の手を考えながら黒竜に向かい駆け出すと。

ドン、

と、どこからともなく低い衝突音が聞こえた。

「!？」

エアニスの前に、バラバラと石くれや金属片が落ちてきた。その場に立ち止まり、黒竜を警戒しながら空を仰ぐ。

空中に、自動車の車体のようなものが浮いていた。

奇妙な事に、車体の半分だけが虚空から生えているように宙に浮いているのだ。

「あれは、・・・ローウエンのスノーモービル？」

チャイムがその正体を言い当てた。スノーモービルは空中でキャタピラを空転させ、乱暴に虚空から石くれを撒き散らしている。

その場に居る全員が注視する中、引っかかっていたものが外れたかのようにスノーモービルの車体が虚空から飛び出した。

一瞬見えたのは、運転席に座るトキと、その身体に捕まるティアドラの姿。

エアニスはやうやくこの奇妙な現象を理解する。自分達も、あのよう虚空から姿を現して、この真っ白な世界へと現れたのだろう。

だが、あの二人の登場はいささか乱暴過ぎた。

二人はスノーモービルに乗ったまま洞窟の入り口に、この真っ白な世界の入り口へと突っ込んできたのだろう。

放物線を描くようにスノーモービルが煙を噴きながら落ちてくる。その先には、アイビスとレイチェルの姿があった。

「・・・っ!？」

アイビスがその場を離れるのは簡単だった。しかし、人質として価値のあるレイチェルをどうすればいいのか、一瞬の迷いが生まれた。

結局アイビスはその場から動かず、自分に向かい落ちてくるスノーモービルを手の平から生み出した魔導で破壊した。二人には爆発と一緒に幾つもの破片が降り注ぐが、アイビスとレイチェルの前には見えない壁があるように全ての破片が弾かれる。燃料が燃え広がり、辺りは真っ黒い煙に包まれた。

「っち、何考えてんのよ・・・!!」

安い挑発をされたような気分だった。アイビスは魔導で風を巻き起こし、辺りの黒煙を吹き散らす。

その先には、ヘヴンガレットを捧げた台座の前に立つ、金髪の女の姿があった。

「悪いの。あのバカのせいでレイチェルに怪我をさせるところじゃったわ。守ってくれた事には礼を言わせて貰おう」

金髪の女、ティアドラはヘヴンガレットの一つを手を取った。アイビスだけでなく、レイチェルも息を呑んだ。

ティアドラは何処から持ち出したのか、古びた大きな杖を持っていた。古木の枝が捻子くれて寄り集まって出来たような、無骨な杖だ。その先から、五本の枝が人の指のように伸びていた。

「これは"心咬みの枝"と呼ばれておってな、エアニスの持つ"オブスキュア"程ではないが、古の時代にお主ら魔族と戦う為に作られた武器・・・いや、今時に言えば、兵器じゃ」

無造作に、ティアドラは掴み取ったヘヴンガレットの一つを杖の先端に添える。すると、杖の先から伸びていた五本の枝がヘヴンガレットを握り締める様に絡み付く。

「"石"の力を使うのは随分と久しぶりじゃから、加減は出来ぬぞ！」

ティアドラが杖を振るう。杖を形作る木の枝がほつれ、それは爆発的に膨張し意思のある触手のようにアイビスへと襲い掛かる。

「な、何なのよアンタっ!!」

アイビスは触手に向かってレイチェルを突き飛ばす。しかし触手は一本一本意思を持っているかのようにレイチェルの体を避けて、全てアイビスに向かい突き進んだ。アイビスはその隙に組み上げた魔導を目の前に迫る木の枝に向かい解き放つ。レイチェルはそれに巻き込まれぬよう、

咄嗟に結界の術を組み上げ、展開した。それと同時にアイビスの両手から火の海が生み出される。結界が間に合ったからいいものの、完全にレイチェルごと焼き尽くそうとした攻撃だった。

炎に飲まれた枝は動きを鈍らせ、みるみる炭へと変わる。アイビスは口元を笑みの形に歪ませた。

しかし、それはすぐに苦悶の表情へと変わる。

枝の一本がアイビスの腹を貫いたのだ。

ティアドラの放った枝の全てがアイビスの術によって焼き払われた。しかし、枝の数本は地面の中に潜り、アイビスの足元から地表に飛び出したのだ。

枝はそのままアイビスの体に絡みつき、地面へと縫いとめる。先の戦いで既に力を失っているアイビスに、それを振りほどく力は残っていなかった。そうでなくとも、ティアドラの操るそれは暴力的なまでの力を持っている。

「ふむ、思いのほか体や感覚は戦いというモノを覚えておるものじゃな」

枝を弄び、ティアドラはアイビスの元へ歩み寄る。

「ふざけんじゃ・・・ないわよ・・・心咬みの枝の魔導師って、そんなワケないでしょ・・・？ アンタは・・・」

枝に四肢を封じられ地面に這うアイビス。ティアドラはその背中に、心咬みの枝を突き立てた。もはや弱々しいとすら言える短い悲鳴が上がった。

「なんじゃ、わしの事を知っておるのか。

ならば、もう少しだけ口をつぐんでおるがいい」

枝に手を掛けたまま、ティアドラは暴れる巨竜に目を向ける。



『・・・アイビス！』

黒竜の姿をしたイビスは、ティアドラに囚われた同胞に意識を向ける。

その側頭部が、見えないハンマーに殴り飛ばされたように弾かれた。続いて巨体を支える4本の足に同じ衝撃が走る。たまらず黒竜はバランスを崩し、その巨体が膝を突く。

地響きと砂煙の舞い上がる中を、トキが飛び出す。その肩には巨大なライフルが担がれている。ローウェン達の装備から借り受けた対戦車用の長距離砲である。本来、人間が手に持って使う物ではない。それをトキが無理矢理ベルトやグリップを取り付けて持ち運びできるように改造したのだ。

トキは黒竜の身体の下に潜り込むと、真上にある竜頭の一つにライフル弾を撃ち込む。

巨大な弾丸は鱗の薄い下顎から竜頭の中へと入り込み、硬い頭蓋の中で滑り跳ね回る。

「へえ、今なら普通の弾丸が効くんですねえ！」

トキは割れた眼鏡と瞳を輝かせ巨大な銃口を振り上げる。遠距離からでも分厚い鋼を打ち抜く弾丸が何発も黒竜の腹へと撃ち込まれた。

痛みに苦しむかのように黒竜は咆哮を上げる。

瞬間。

僅かに残った砂嵐が螺旋を描き、猛烈なスピードでエアニスの元へと飛び込んできた。

「!？」

再び剣を構え直そうとするが、それすらも間に合わない一瞬の出来事。螺旋を巻く砂嵐はエアニスのオブスキュアに当たり、それが強い力で後ろに引っ張られた。

「・・・ッ！」

エアニスは焦りの色を浮かべ、引かれる剣を軸に身体を半回転させて振り向く。

そこには黒い砂嵐は無く、再び人の姿へと戻ったイビスが、オブスキュアの切っ先を素手で掴んでいた。

黒竜の姿の間に負ったダメージが蓄積しているのか、後ろに撫で付けられていた銀髪は乱れ、表情にも余裕が無くなっている。

エアニスは掴まれたオブスキュアを引き抜こうとするが、万力にでも挟まれているかのように剣はびくともしない。刃を掴むイビスの手の平はまるで焼きごてを掴んでいるかのように、肉の焼けるような音と黒い霞を撒き散らしている。

手の平を焼かれながらも、イビスはオブスキュアをねじり伏せる。

オブスキュアの柄を握るエアニスにとっては関節を逆方向に曲げられるような形だった。

「・・・ぐっ！」

短いうめき声と共に、エアニスは自分の握る剣柄にあっさりとなじ伏せられてしまう。普段のエアニスならば、すぐに剣を捨てて、腰に差したもう一本の短剣で相手に斬りかかっていただろう。それが、今に限っては躊躇われた。

「剣を手放せば、ヘヴンガレッドとの繋がりが絶たれるからか？」

「・・・ちっ！」

「こんな単純な弱点を抱え、よくもあの戦争を戦い抜く事が出来たな」

イビスがオブスキュアを掴む手と逆の手に、黒い霧が集まる。そして現れる、もはや見慣れてしまったイビスの無骨な大剣。

硬直から脱したトキが至近距離からイビスの頭と、剣を持つ腕を撃った。しかし弾丸は強烈な射撃音でトキとエアニスの耳を打っただけで、イビスの身体を素通りした。

彼の身体は再び物質に頼らない存在へと変質しているのだ。魔導的な干渉力の無い剣や銃弾では傷付ける事は出来ない。

「下がってろ！！」

エアニスはトキに言いながらオブスキュアに力を送り、それを掴んだイビスの手を焼き続ける。剣を引き抜いて、その手の指を全て斬り落とすつもりでいるが、剣は全く動かない。

イビスは自分の大剣を振り上げた。

「この腕を切り落としたり、どうなるのかな？」

「てめえ・・・！」

オブスキュアを握る腕を斬り落とされれば、ヘヴンガレッドからの力の供給は断たれ、エアニスは腕を無くしたただの人間になる。剣を捨ててイビスの間合いから逃れれば、エアニスは魔族

に何も対抗する術を持たない、ただの人になる。

どの道を選んだとしても、その次の攻防がエアニスの死へと繋がるだろう。

イビスはようやく勝利を確信する。



今度は迷う素振りすら見せず、エアニスは剣を手放した。同時に跳び退がるエアニスへイビスは斬攻を放つが、紙一重の所でかわされる。

イビスは奪い取ったオブスキュアをエアニスとは逆方向の背後へと投げ捨てた。

「終りだ」

「・・・」

傲然と見下ろすイビスを、膝を着いたエアニスは睨み返す。

イビスは口元を歪め、丸腰のエアニスに向けて大剣を振り下ろす。

砂埃が舞った。

膝を突いていたエアニスが、爆発的な瞬発力でイビスの懐へ飛び込んできたのだ。

それは人間の動きではない。"石"の力を得ている時と同じ、化物じみた身体能力。
イビスは目を剥く。一度振り下ろした斬撃は止める事が出来なかった。
そして自分の左胸に、他者の"存在"が深く潜り込むのを感じた。

イビスは地面に食い込む大剣の切っ先を見て、自分の左胸を見た。
そこには、何も変哲も無い黒塗りのナイフが突き立っている。
エアニスが普段から腰の後ろに隠し持っているナイフだ。
本来ならばイビスを傷つける事の出来ない何の力も無い鋼の塊。
それが、魔族であるイビスの"存在"に深々と突き刺さっていた。

「な……に……、！？」

イビスにナイフを突きたてたエアニスは、笑いながらナイフを握る逆の手を見せる。
その手には紅く輝くヘヴンガレットが握られていた。

イビスは目の前の相手に命を握られていると言うのにも関わらず、背後を振り向く。

そこには自分が奪い、投げ捨てたエアニスのオブスキュアが地面に突き立っている。しかし、その柄にはさっきまで収まっていた筈の赤黒い宝石が無い。

エアニスはオブスキュアを手放す瞬間、ヘヴンガレットを取り外したのだ。

「オブスキュアが無いとヘヴンガレットの力を引き出せないとでも思ったか？」

「……っ！！」

エアニスはオブスキュアを手放しながらも"石"の力を失ってはいなかった。手にした"石"から直接力を引き出し、魔導的な干渉力を持たない只のナイフに力を宿らせていたのだ。そのナイフは今、オブスキュアと同じ様にイビスの存在を傷つける。

そして、この一撃は今までのものと決定的に違う所があった。

「驕ったな」

「……！？」

「たかが人間の俺に、驕り高ぶったな？」

「！……貴様っ……！！」

ここぞとばかりに、エアニスはその言葉をイビスへ突き刺した。

人間よりもずっと高度な存在である魔族が、只の人間に存在を脅かされたという事実が、イビスのプライドを、自我を、価値を、この世界における存在を、揺るがした。

慢心からの左胸への一撃。

天上の神が大地を這いずる人間に矢で撃ち墮とされたようなものだ。

魔導的な干渉によるダメージよりも、その事実がイビスの存在を傷付けた。

魔族は人を遥かに凌駕する存在でなければならない。

それが魔族にとっても、人間にとっても、そして世界にとっても常識であり前提だった。

しかしその前提が覆されたり、世界から否定されたり、そして忘れられることがあれば、彼ら

はこの世界での存在価値を失う。

言い換えれば、彼らのプライドや自尊心を打ち砕いたり、また彼らに対する脅威、畏怖といった認識を周りの環境に改めさせる事が、魔族に対する最も有効な攻撃になるのだ。

「貴様・・・全て、知っていたな・・・？」

石の使い方も、魔族がどのような存在であるのかも・・・！！」

エアニスはナイフに力を込めたまま笑う。

「一年以上も"石"に命を預けて戦っていたんだ。欠点があればその備えをするのは当然だろう。魔族と戦うのも、お前が初めてじゃない。

戦争の末期にお前らのお仲間と戦った事があってな、それから魔族がどういった存在なのか、色々調べた事がある」

「・・・・・・・・っ！」

純血のエルフを親に持つエアニスにとって、その辺りの事を調べるのに苦労は無かった。今やその目的さえ忘れ去られつつあるが、元々純血のエルフは魔族に対抗する為にその血を絶やさずにいるのだ。純潔のエルフが集うエアニスの故郷には、多くの知識が書物や伝承として伝わっていた。

魔族としての強さを否定されたイビスは、その存在の力を今やエアニスのそれより小さなものへと変質させていた。力の殆どを失い片膝を突いたイビスは、苦悶の表情を浮かべナイフを握るエアニスの腕を掴む。

「世界の理に縛られた人間が・・・

刹那の刻しか生きられぬ、生に囚われた分際で・・・！

俺達を滅ぼせると思っているのか！」

イビスはこの期に及んでも、未だにエアニス達の存在を蔑視していた。

あるいは、そうとでも認識しないと自分の存在が消滅してしまうが故に口にした言葉だったのかもしれない。

それをエアニスは冷めた目で見下ろした。見苦しかったのだ。

「思い上がるなよ。

この世界に生きる者達は、お前らが思うほど

ちっぽけな存在じゃあない」

エアニスはイビスに突きたてたナイフをより深く潜りこませると、一息で真横に薙ぐ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イビスの姿が黒い霞のように黒ずみ、その輪郭を虚空に滲ませる。何か言葉を口にしたようだが、壊れた通信機から聞こえるようなブツブツと途切れた雑音しか聞こえなかった。力を失い過ぎて、この世界に化現する事すら難しくなっているのだ。

辛うじて立てていた片膝も地に突く。

少しづつその目は光を失い、やがてゆっくりとエアニスの足元に崩れ落ちた。

第74話 星空の中 別れの時

エアニスは白い地面に突き立ったオブスキュアを引き抜いて、腰の鞘に納めた。

深く溜息をついて、荒れ果てた神殿内を見回す。真っ白で何処までも続く床はすっかり荒れ果ててしまった。

チャムと目が合った。砂埃にまみれた彼女は、頬を拭いながらエアニスに笑いかける。

トキはらしくもなく、地べたにへたり込んだまま額に手を当てていた。死んでもおかしくない傷を強引に塞いで駆けつけてくれたのだ。相当の無茶をしたのだろう。

ティアドラとレイチェルはヘヴンガレッドが鎮座する祭壇の前に並んで立ち、エアニスの方を見ていた。

エアニスは肩をすくめ、右手で握ったままのヘヴンガレッドを見た。

レナ=アシュフォードの形見を見つめた。

また助けられちゃったな。

"石"を胸に当てたエアニスは、ほんの一瞬だけ目を閉じて心の中でレナに別れの言葉を贈る。

ありがとう。俺はもう、大丈夫だから。

エアニスは目を開けると、ヘヴンガレッドをレイチェルに向けて放り投げる。レイチェルは慌ててそれを受け止めた。非難するような視線を向けられて、エアニスは悪戯めいた笑顔を返す。

ティアドラも自分の杖に嵌め込んでいたヘヴンガレッドを慣れた手つきで取り外し、レイチェルへ手渡す。

「・・・さあ、我らエルカカの民が250年以上掛けて成しえてきた事の総仕上げじゃ。頼んだぞ」

レイチェルはエアニスとティアドラと、そして自分の胸元に光るヘヴンガレッドを見つめる。するとレイチェルは胸元のヘヴンガレッドを外し、手にした2つのそれと一緒にティアドラへに渡した。

「最後の役目はティアドラさんが行うべきじゃないですか？」

そんな事を、言った。

エアニスはレイチェルの意図が読み取れず、言葉を発する事が出来なかった。

「いえ、ティアドラさん、

恐らく貴方の本当の名前は、エレクトラ=アラスティア・・・」

「はあ？」

硬直から脱したエアニスは呆れたように声を上げる。

「エレクトラってお前のご先祖さんだろ・・・？」

250年も昔の人間で、もう・・・」

人間で、もう。

死んでいるのか？

もし、エレクトラという伝説に残るような魔導師が、エアニスと同じエルフの血族だったらどうだ？

250年以上生きるエルフ族など、いくらでもいる。

そうだとしから、ティアドラの・・・エレクトラのでたらめな魔力やずば抜けた魔導技術は納得出来る。

その思いに至り、エアニスは言葉を詰ませた。

「心咬みの杖の伝承は知っています。

それこそ御伽噺、きっと口伝のみですが、その杖はあなたの持ち物だという事は聞いた事があります」

「はて・・・そんな伝承は聞いた事が無いの」

ティアドラはレイチェルの頭の上を見ながら、とぼける様にそう言った。

「歌ですよ、村に昔から伝わる童謡に、あなたとその杖の事が出てくるんです」

「歌じゃと！わしの歌があるのか！？」

「・・・」

「・・・」

思わぬ所に食いついて来たティアドラを、エアニスとレイチェルは眉の間に皺を入れながら見つめた。呆れの表情だ。ティアドラはコホンと咳をして、

「・・・・・・・・うむ・・・いかな、ついうっかり・・・」

ポン、と自分の後ろ頭を叩く。ティアドラはこうしてレイチェルの推測を正解だと認めてしまったのだった。

「ふむう・・・流石にヒントを出しすぎてしまったかの。

いかにも。

わしはおぬし達が言う所の、御伽噺の魔導師、エレクトラ=エルカトレじゃ。隠しておって、すまなかった」

ティアドラは一礼とともに、改めて本当の自分の名を名乗った。

「あんた、エルフだったのか？じゃあエルカカの民ってのは・・・」

「いいや、違う。確かにわしは250年以上・・・もう300年以上生きておるが、エルフではない。人間じゃ」

「なら・・・」

「"石"のカじゃよ。せっかくこんな便利なものがあるんじゃ。使わねば損じゃろう？」

あっさり、と言って退けた。

「とはいえ・・・あまり威張れる事をしておる訳じゃないがな。

無論、わしの身体は250年も前にとうに朽ち果てておる。

じゃから今は、この人間の体にわしの魂を憑依させておる。身体を入れ替え続け、生き長らえておるんじゃ。

この娘で、6人目じゃな」

「憑依・・・」

人の意識が他人の体を乗っ取り、奪う事。

「損傷の少ない遺体を捜して、それを使わせて貰っておる。身体は無事でも心が死んでしまった者など、な。

・・・人の道から外れた愚行じゃという事は理解しておる。

が、わしがこの世界に留まり続けるにはこの方法しか無かったのじゃ」

やや声のトーンを落として、ティアドラは告白する。

しかしエアニスが気になるのはそんな事ではない。

「別に、人の命の倫理観について議論する気はねえよ。

それよりもアンタ・・・男じゃなかったのか？」

心苦しそうに告白するティアドラに対し、エアニスが最も疑問に感じたのはそこだった。彼女は毒気を抜かれたように笑う。

「そうじゃ。

その時使える身体などそう自由に選べるものではないからの。この身体に移る時には、この娘の身体しか無かったという訳じゃ」

エレクトラは自分の手の平を見つめながら神妙な面持ちで呟き、

「それに、男の身体よりも若い女子の身体が良いにきまっておるじゃろう！！」

「うっわあ・・・」

はっはっはと、豪快に笑うティアドラをエアニスは蔑んだ目で見下ろす。

「いいですねえ、僕も少なからず女の子になってみたいと思った事がありますよ」

「・・・乗っからなくていいわよ、このエロメガネ・・・」

エアニスが振り向くと、トキとチャイムも、エアニス達の近くに来ていた。いつの間にかエアニス達の話聞いていたようだ。

ティアドラはこの場にいる全員が自分の言葉に耳を傾けている事を確認すると、不意に豪快な笑みを沈ませる。

「じゃがまあ、この身体も・・・いや、わしの存在そのものも、もう限界のようじゃ」

「・・・え？」

突然変わった彼女の声色に、その場に居た全員の胸に、何とも言えぬ不安がよぎった。

「わしは既にこの世界から去っていなければならぬ存在じゃ。

"石"の力を使い、なんとか250年間この世界にしがみついて来たが、その中でこの世界のルールを一つ、知る事が出来た」

淡々と、ティアドラは自分の事を語る。まるで、他人事のように。

「ただ生き長らえてるだけならば、わしの存在はこの世界に認められるようじゃった。

じゃが、本来死んでいる筈のわしの行動が誰かに影響を与える程、世界に歪みが生じてゆく。

その歪みは、この世界にとって許されぬ物だったようじゃ。

すると世界の意思は、その歪の原因を、わしを淘汰しようとする。

まるで人の体の中で悪さをする病原菌を退治するように、な」

突拍子のない理屈だった。だが、まるで理解出来ない事ではない。世界を人間の体に例えた説明は、すんなりとエアニス達の理解を促した。

それと、世界を一つの生き物のように扱うティアドラの話に既視感を感じた。

ガイア仮説。

この山に入る時、エアニス達は山脈の向こう側の景色を前にして、そんな話をした。この世界を一つの生物として定義する考え方。もしこの世界にそんな意思めいたものがあるのだとしたら、それこそ本物の神ではないか。古の時代の魔族や、その血を引く純血のエルフなど、ただ単に人間が祭り上げただけの偽者だ。

そのような、本物の神の意思が存在するのか。

「・・・分かりやすく言ってくれ」

思考の巡らせながら、エアニスは結論を促す。

「お主達をここまで導いたり、魔族との戦いに手を出したりしたせいで、わしの命は風前の灯火というわけじゃ」

「・・・」

予想通りの答えに、エアニス達は愕然とする。

「まあ、命というか、わしの命を繋ぐ"石"の力が、じゃがな。

この世界に干渉するほどに、わしの命を繋ぐ"石"の力は薄れてゆくようなのじゃ。

わしの事を"異物"と認識した世界が、わしを排除しようとしておるのだろう。

これまでは最後の"石"の封印を見届ける為この地に住まい、己の正体を隠してエルカカの民にほんの少しだけ力を貸し、導いているだけじゃった。

世界の流れに、極力干渉せぬようにな。

しかし、今ここでわしに力を与えている"石"は封印され、その力はこの世界から消え去る。そうなれば、どの道わしもこの世界に留まり続ける事は出来ぬ。同じ事じゃ。

ならば最後は思いきり力を振るって見たかったというだけの話じゃ。

楽しかったぞ」

十分だと言わんばかりに、ティアドラはにこりと笑った。

「いいのかよ、それで・・・」

「いいんじゃよ。もう十分生きた。それに、流石に少し疲れたわ。

思い残す事は無い。わしの子供達のおかげでな。

本当によくやってくれた」

そしてティアドラは、レイチェルに渡された"石"をそのまま彼女へ返す。

「というわけで、わしじゃ封印が終わる前に存在が消えてしまうかもしれぬ。

レイチェル、お主がやってくれぬか？」

ティアドラに"石"を渡されたレイチェルは、呆然とした面持ちで自分の手元を見つめ続ける。

その表情は、何故かチャイムを不安にさせた。

「・・・どうしたの、レイチェル？」

「！、うん、大丈夫・・・」

チャイムに顔を覗き込まれ、レイチェルはその顔を無理矢理笑みへと変えた。



チャイム達に背を向け、レイチェルは祭壇の前へ立つ。

祭壇の上に薄く積もった砂を払うと、その下には7つに分かれたヘヴンガレットの力を一つに結合する為の魔導式が描かれていた。

レイチェルはその式を読み取り、ヘヴンガレットを並べてゆく。

「待て」

その声に全員が後ろを振り向く。

声の主は、エアニスによりその存在を否定され、力の殆どを失ったイビスだった。その両腕には地面から伸びた木の枝が絡みつき、その動きを封じていた。ティアドラの持つ、心咬みの枝の力だ。

すぐ後ろには、アイビスも全く同じ様に自由を奪われ、その場にしゃがみ込んでいる。

「向こうの世界との繋がり、これで完全に無くなってしまおうのか・・・？」

言い伝えに従うままのレイチェルには、イビスの問い掛けにはっきりと断言できる答えを持ってはいなかった。口ごもるレイチェルの代わりに、ティアドラが答える。

「・・・"石"の封印を行えば、この世界とレッドエデンを繋ぐ"門"は二度と開かなくなる。・・・いや、"門"自体が無くなる、といった認識の方が近いの。

「今までのように、周期的に門の力が弱まり稀にこちらの世界に魔族が迷い込む事も無くなるじゃろう」

「向こうの世界に居る連中はどうなる？」

「それは誰にも分からぬ。

この世界の法則・・・いや、"意思"によって、世界に都合が良い様に処理されるのじゃろう」

この世界の意思。言い換えれば、それは神の意思なのかもしれない。

レイチェルは先の話を出し、そんな事を考えていた。

「ならば、"門"を消してしまう前に、俺達を向こうの世界へ行かせてくれ」

イビスの申し出に、アイビスを含むその場の全員が驚いた。

「イビス！ それじゃあ・・・！！」

アイビスが非難するように声を上げる。

「俺達の目的は、250年前に離れ離れになった仲間と再会する事だ。

本当は向こうの世界に追いやられた仲間達をこの世界に呼び戻したかったが・・・それが叶わないというのであれば仕方無い。

俺達が、向こうの世界に行くまでだ」

「向こうの世界が・・・どうなってるのか分からないのよ？」

「この場で完全に滅ぼされたり、この世界に置き去りにされるよりはマシだ。

ならば、俺達も向こうの世界に行かせてくれ。

仲間の元へ行かせてくれ。

お前達にとって、何の問題も無い筈だ」

「・・・」

イビスの言葉は、僅かながらレイチェルの心を打つ。

平坦で感情の 声だったが、何処か懇願するかのような切実さを感じた。

彼らは、その目的の為に"石"を求め、沢山の人間を傷付け、殺してきた。

だがそれは、ただ仲間の元に帰りたいという、人間にも理解できる想いが動機なのだ。

彼らは、純粋な悪ではないのかもしれない。

ただ、人と魔族に価値観の違いがあっただけだ。それは人間同士にもあるものだ。

だからと言って、彼らのした事がレイチェル達、この世界の住人にとって許されるものではないが、憎みきれものでもなかった。

イビスの言葉を聞き、アイビスは浮かしかけた腰を落として俯いて下唇を噛む。

悔しそうに、諦めきれないといったように。

「すまない、アイビス。」

二人で皆の元へ帰ろうと言った約束、こんな形でしか叶えられそうにない」

「・・・もう、いいわよ。あなたのせいじゃないわ。」

あーあ・・・私が遊び過ぎずに、もうちょっとマジメにやっていたらこんな事にならなかったのかな・・・」

「そうかもな」

「っ！？、ちょっとお！！そういう時は"そんな事ないよ"とかさあ・・・！！」

「冗談だ」

レイチェル達は、その時初めてイビスの笑顔を見たような気がした。

毒気を抜かれたような気分になるレイチェル。

「こいつらはルゴワールを操り、間接的にはいえお前の故郷を軍隊に襲わせた張本人だ」

その耳元に、エアニスは冷たい声で囁く。

「お前の父親の、エルカカの仲間の仇だ。そんな奴を見逃せるのか？」

エルカカの村を直接焼き払ったのは、ルゴワールのマスカレイド部隊達だ。それについては数日前、エルバークの一件でレイチェルにとっても心の整理が付いていた。

だが、その黒幕とも呼べる相手は彼等魔族なのだ。

エアニスはその事実を、はっきりと言葉で示す。

しかし、レイチェルは静かに首を横に振った。

「エアニスさんは、そうやって全ての敵を憎んで、戦争を戦い抜いたんでしたよね？」

「・・・」

エアニスは大切な人を殺した軍隊を、皆殺しにした。

その軍隊を指揮していた国の要人も殺した。

その国と繋がりを持ち、裏から操っていた帝国の王を殺した。

エアニスを憎む者達を皆殺しにした。

憎しみの連鎖は、何処までも続いてゆく。そして、今でもその連鎖は終わったとは言えない。

「私には、そこまで人を憎み続けることはできません。」

許す事とは違いますが、何処かで折り合いを付けなければならないと思うんです」

それがイビス達の追放であるのなら、それで構わないと思った。

レイチェル達にとっても、イビス達にとっても、最良の落とし所なのかもしれない。

「言ってくれるじゃねーか・・・」

まあ、お前がそう言うなら俺はいいんだ。

後悔さえしてくれなければ、な・・・」

「すみません、生意気な事言って」

レイチェルは笑って、再び祭壇へと向き合う。両手をかざし、父親から教えてもらった封印の呪文を唱え始める。

「・・・よく見ておくといい。門が開くぞ」

ティアドラがそう呟いた直後。

腹に響く、重々しい音が響いた。

まるで巨大な石門が開かれたような音。そして、エアニス達の目の前に広がる真っ白な空間が、黒く塗りつぶされた。

「うわっ・・・」

チャイムは思わず、近くにいたエアニスの手を掴んだ。

辺りを見回す。目が痛いほどに明るかった空間は、今や光源ひとつ無い。魔導で明りを作り出そうかと思った時、エアニスの横顔がうっすらと見えてきた。完全な闇という訳ではないようだ。徐々に、暗闇に目が慣れてくる。

「こいつは・・・驚いたな・・・」

薄闇の中、エアニスは天井を仰ぎ、目を見開いていた。

「な、何何？、何が起こってるの・・・！？」

「大丈夫・・・慌てることは無い・・・目が慣ればお前にも見えてくる筈だ・・・」

エアニスがチャイムの手を握り返す。チャイムはその言葉に少しだけ安心し、エアニスと同じように、目を眇めながら天井を見上げた。

やがて。

「・・・これって！」

それは漆黒の闇に輝く、無数の光点。

満点の、星空だった。

いや、星空とは少しニュアンスが違うのかもしれない。

チャイム達は、その星空の中に居るのだ。

大気による揺らぎの無い透明感のある空間に、幾千、幾万もの星が、輝いていた。

それはチャイムの頭上だけでなかった。

星はチャイム達の足元にも、何処までも続くように輝いていた。地面を踏みしめる感触は残っているが、チャイム達は上下左右見渡す限りの、無限の星空の中に居たのだ。

「・・・宇宙空間・・・」

トキが乾いた声で呟く。

「それって・・・空のずっとずっと上にあるとされてる世界の事ですか？」

この状況を作り出したレイチェル自身が、戸惑いながらトキの呟きに反応する。

「ええ・・・雲の上には天国や神々の住む天界がある・・・というお話とは別の側面から唱えられている学説です。つまり、魔導師や宗教家ではなく科学者による、割と近年から考えられるようになった説ですね。

眉唾ものの学説なので、僕もあまり詳しくは知りませんし、覚えてもいないのですが・・・」

トキは一度言葉を切ると、指でこめかみを叩きながら記憶を絞り出す。

「この世界は丸い球体の上に成り立っているとされてますよね？」

その球体は、宇宙という真っ黒な海の中に漂っているのだ・・・とか何とか・・・。

漂っているのはこの世界だけじゃなく、幾つもの別の世界が丸い球体として存在しているそうです。黒い海の中央には太陽があり、海に浮かぶ無数の世界はその光に照らされて輝いて見える・・・つまり、僕たちにはそれが星として見えていて・・・とか・・・」

「・・・?? 良く分からんな・・・」

「まあ、正直僕もイメージできません」

首を傾げるエアニスに、断片的な説明しか出来なかったトキはメガネを直しながら言った。

「イメージも何も、今おぬしらの目の前にあるのがそれじゃろうが」

ティアドラが苦笑交じりで言った。

「その学説は大方当たりじゃ。

そしてこの空間に幾千、幾万も輝く星の一つ一つが、ひとつの世界として成り立っておる。我々の世界も、この数え切れない星々の、ほんの一つに過ぎないんじゃよ」

「・・・」

途方も無い話に、全員が黙り込んだ。

「そして、レッドエデンもその一つじゃ」

ティアドラがエアニス達の後ろを指差した。反射的にエアニスが後ろを振り向くと、そこには巨大な赤い大地が、淡く光り輝いていた。



その大きさに、エアニス達は言葉を失う。飛空艇でひたすら空を昇ってゆけば、このような景色が見られるのではないだろうか。地平線は丸く弧を描き、その両端は繋がっていた。地平線が円を描いているのだ。

「これが、レッドエデンじゃ。我々の世界も、こうして丸い形でこの漆黒の宇宙に浮かんでおる。レッドエデンとは違い、我々の世界は綺麗な青色をしておるがな」

エアニス達は呆然と、その壮大で途方も無い光景を、見つめ続けた。

「これが・・・世界を外から見た姿か・・・」

ぐらりと。

祭壇が傾いた。

今、エアニス達の足元に地面は無い。エアニス達の姿と、祭壇だけが黒い海の中に浮かんでいるような状態だ。

その見えない地面の中に、祭壇がゆっくりと沈み始めたのだ。まるで砂に飲み込まれるように、ゆっくりと足元に広がる漆黒の海へと沈んでいった。

もちろん、祭壇の上のヘヴンガレッドも一緒に。

その先には、レッドエデンの赤い地平線があった。

「・・・・・・・・」

エアニス達はそれを黙って見守る。

それから少し遅れて、イビスとアイビスの体も、同じように黒い海の底へと沈み始めた。イビスは落ち着いた様子で、アイビスは不安そうに、不思議な重力に引かれる己の体を見る。

沈み行くイビスが、エアニス達を見上げて言った。

「礼を言う」

それに対して、アイビスは口元をわざとらしく歪め、舌を出すのみだった。

二人の姿は、祭壇と同じように、レッドエデンの赤い地平線へと消えてゆく。

その姿が小さくなって見えなくなるまで、エアニス達は彼らの姿を無言で見送った。



「・・・全部、終わったんだな」

ヘヴンガレットの魔力が感じられなくなった頃、確認するかのようにエアニスが呟いた。

「うむ・・・」

この空間もヘヴンガレットの力で維持されておるが、その力の残滓が消えれば、我々も元の場所に、バイアルスの雪山へと戻れる筈じゃ」

そう説明したティアドラに声を掛けようとして、エアニスは絶句した。

「・・・お前・・・その体・・・！」

ティアドラの体が、霞みがかかったように薄く透けていたのだ。まるで幻術や光の魔導で作りに出した幻のように。

「おっと・・・わしに残された時間も、もう終わりのようじゃな」

ティアドラは透けた自分の手を見やる。殆ど透明になってしまった指先から、サラサラと光る砂のようにその体が虚空に溶け出す。

「おい！」

思わずエアニスはティアドラの肩を掴むが、その触れた肩も霞む様に揺らぎ、光る砂が舞った。触れれば壊れ、かき消えてしまいそうで、エアニスは慌てて手を引く。

「さっき話したじゃろう。

この世界から"石"が失われてしまえば、わしはこの世にとどまる事が出来なくなってしまう」
少し寂しそうに、ティアドラは言った。

「わしとていつまでも生き永らえておるつもりは無いわ。

わしの子供達は、成し遂げてくれたからの。

250年前にわしがやり残してしまった事を、未練を、断ち切ってくれた。

何も思い残す事無くこの世を去れるわい」

ティアドラはレイチェルに向き直り、その柔らかい金の髪を撫ぜた。

「お主達には本当に辛い運命を課してしまったと思っておる。

すまなかったな・・・」

その言葉に、レイチェルの瞳から涙がこぼれた。レイチェルは慌てて目元を拭い、すん、と鼻を鳴らしてから、笑いながら首を振った。

そうしているうちに、レイチェルの頭を撫ぜていたティアドラの腕が、完全に透けて見えなくなってしまう。

「そろそろ時間のようじゃ」

未練は無いと言いつつも、やはり寂しいのであろう。ティアドラのその口調に、普段の元気は無かった。

ティアドラはエアニスに向き直り、

「お主達にも礼を。レイチェルを助けてくれた事、感謝しておく。

特に月の光を纏う者よ、お主にはシャノンも助けられたという話じゃったな。

本当に、世話になった」

別れの挨拶を始めたティアドラを、エアニスは辛そうな顔で見つめる。何とかしたい、彼女をこの世界に引き止めたい。

最後まで足掻きたい衝動に駆られるエアニスだったが、その思いを押し殺し、その顔に無理矢理笑みの形を描いた。笑って、別れようと思った。

「気に、するな。今回もシャノンの時も好きでやった事だ。

それに、なかなか楽しかったぜ」

「はっ」

ぎこちない笑みのエアニスを見て、ティアドラは苦笑する。

「よし、餞別がわりにキスをしてやろう」

「えっ。

いや、待てやめろ！！ 貴様の中身は300歳越えたジジィじゃねーか！！」

「・・・エアニス、今少し惑いましたよね」

「黙れクソメガネ！！」

「かかっ」

最後の最後にエアニスをからかえた事に満足したのか、ティアドラは大きく息を吐いた。心なしか、ティアドラの体が消えてゆくスピードが速くなった。

「そうじゃ、礼という訳じゃないが、わしの家は自由にして構わぬぞ。

売れば結構な金になる物もある筈じゃ。

おっと、世に出すにはマズイものも幾つかあるが、それはお主らで判断して処分してくれ」

最後の最後にエアニス達にとっては割とどうでもいい事を言った。確かに、ティアドラに出来る実益的な礼はそのくらいの事しかなかったのだろう。

「ではな。

"石"の無き世界にも、神の加護があらん事を」

そんな言葉を残して、ティアドラの姿は完全に、消えた。

耳を打つほどの静寂が、その場に訪れる。

ティアドラを見送り、その場にはエアニス達だけが残された。

いつもの4人だけが、そこにいた。

「なあ、レイチェル・・・

あいつの墓とかってあるのか？」

「・・・はい。エルカカの村から少し離れたところに。

村は焼かれてしまいましたが、お墓は今もある筈です」

「そっか。まあ、気が向いたら墓参りくらいでもしてやるかな・・・」

250年も前に死んだ相手の、でもほんの今まで言葉を交わしていた相手の墓参りとは奇妙な感

じだったが、何と無くエアニスはそこに訪れておきたいと思った。



パキン、と、エアニスの目の前にガラスがひび割れたような亀裂が走った。

ひび割れはピキピキと音を立てながら、エアニス達を囲むように広がり始める。

「ヘヴンガレッドで維持されてるこの空間が崩れようとしてるんです。

じきに私達も、元の世界に送り返される筈です」

レイチェルが周りを見回して、落ち着いた声で言った。少し焦りを感じたエアニスだったが、彼女の声色に落ち着きを取り戻す。

「この素晴らしい光景を目に出来た事は嬉しいですが・・・名残惜しいですね」

トキは自分達を包み込む満点の星々を目に焼き付けながら、残念そうに言った。

「んー。でもいつまでもこんな所に居ちゃ生きた心地がしないわ。早く帰りましょ」

「そうだな。街に戻ったらティアドラの家を借りて、パーティーとでもいくか？」

「あ、いいわね！ パーツとやろうよ！！」

エアニスの提案に、チャイムは小躍りして喜んだ。

「もちろん主役はレイチェル、お前だからな」

おもむろに話を振られ、きょとんと呆けるレイチェル。エアニスが、トキが、チャイムが、優しくレイチェルに微笑みかけていた。

それを切っ掛けに、不意に全ての使命を果たしたという喜びが、実感として沸いてきた。

レイチェルは胸いっぱい息を吸い込んで、

「はいっ！」

胸の奥から湧き出したその喜びを押さえきれないといったように、満面の笑みとともに頷いた

。

その笑顔を横切る様に

空間のひび割れが、エアニス達とレイチェル達を分かっように、走り抜けたのだった。

「え・・・？」

レイチェルは反射的にエアニスに向かい手を伸ばした。

だがその指先は、ひび割れの走った見えない壁にぶつかる。

「レイチェル！？」

エアニスは慌てて彼女の手を取ろうとする。だがやはり、エアニスの手のひらも、見えない壁を掴むだけでレイチェルの体には届かない。

レイチェルの顔から、表情が抜け落ちる。

「何よ、これ！！どうなってるの！？」

チャイムは周りを見回す。周りに現れた空間のひび割れは、彼女達を包むように丸く広がって

いた。まるで、ひび割れたガラスの球体に包まれているかのようだ。

しかし、レイチェルだけが取り残されたかのように、その球体の外側に立っていた。

トキが言葉も無く、手にしたライフルをひび割れた壁に向かい撃った。しかし弾は透明な壁に潰れて食い込んだだけで止まってしまう。ひび割れだらけで今にも崩れ落ちそうな壁だというのに、弾が食い込んだ場所にヒビが増える事は無かった。

強烈な焦燥感に襲われるエアニス達。

現状を正しく理解する事は出来なかったが、本能的に、このままではレイチェルと離れ離れになってしまうと直感した。

エアニスは剣を抜き、目の前にある見えない壁を切りつけた。しかし、まるで硬い粘土を叩いたかのような手応えがあるだけで、刃は止まってしまう。ヘヴンガレットを失った彼の剣は、今や何の力も持たない。エアニスの中で焦りが加速する。

「・・・っ、レイチェル！！」

エアニスは剣を手放し、見えない壁に喰らい付く。何処かに穴でも空いていないかと、両手で壁をまさぐる。レイチェルとトキも、同じように周りの壁にとりついた。

「あ、あはは・・・」

やっぱり、駄目みたいですね・・・」

レイチェルが笑いながら言った。空っぽで虚しく、乾いた笑い声だった。

「駄目って、何がだよ！？」

エアニスが壁越しに叫ぶ。

「私も、ティアドラさんと同じだった、という事です」

「同じ・・・？」

「私も、ヘヴンガレットの力で、命を繋ぎとめている存在だという事ですよ・・・」

立ち尽くすエアニス達へ、レイチェルは静かに語りだす。

「私は、エルカカの村から逃げ出して、力尽きて倒れている所をチャイムに助けられました」

3ヶ月前の話。まだチャイムが一人で旅をしていた頃の話だ。街道の外れに血まみれで倒れていたレイチェルを見つけた時の事は、当然ながら今でも良く覚えている。

「チャイムの治療のお陰で、私はあの時一命を取り留めたと思っていたけど・・・」

私はチャイムに見つけて貰う前に、多分死んでしまっていたのよ」

「・・・うそ・・・それって・・・」

チャイムの言葉は続かない。レイチェルは軽く首を振って、話を進める。

「チャイムは何も悪くないわ。

チャイムと出会ったあの場所で意識を失った時、私はもう駄目だと思ったわ。

その時、死にたくないって、誰か助けてって、お願いをしたの。

・・・ねえ、チャイム。今まで聞くのが怖かったんだけど、私の右のお腹に、銃創はあった？

」

「・・・・・・・・」

チャイムは黙り込む。あの日街道の外れで倒れていたレイチェルは、傷だらけだったものの命に関わる怪我は無かった。内臓を傷付けているような傷など無かった筈だ。

「私、村から逃げる時におなかを撃たれていたの。きっとその傷が原因で、あの時私は命を落とした。でもきっと、その間にヘヴンガレッドは私の願を叶えてくれたのよ。

傷を治してくれたか・・・あるいは時間操作で無かった事にしてくれたのか。ともかく、私は"石"に命を救われた。

そしてその後、チャイムに助けられたのよ」

「それで、"石"の力が失われたら、お前の助かった命も無かった事になるのかよ！！

お前もティアドラと同じで、"石"が封印されたらそうなるって分かってやってたのかよ！！
分かっていてこの旅を続けていたのか！！

何でもっと早く俺達に言わなかったッ！！」

エアニスは怒りにも似た感情をレイチェルにぶつける。理不尽だとは思ったが、言わずにはいられなかった。

ティアドラもレイチェルも、自分の事を考えていない。自分が犠牲になればなどという考えは、卑怯だ。それがどれだけ他人を傷付けるのか、分かっているのか。

もう沢山だった。エアニスの周りは、そんな人間ばかりだ。

叫ぶエアニスを見て、レイチェルは胸を詰めつけられる。ひび割れた壁に叩き付けられたエアニスのこぶしに、彼女は自分の手を重ねる。無論、その間には壁があり、直接触れる事は出来なかった。

「・・・ごめんなさい。

私も、自覚が無かったんです・・・。

自分の命が"石"の力で保たれてると気付いたのも、結構最近なんです。

体の調子を崩す事が多くなったり、魔力が不安定だったり・・・

自分の体が時々霞んで見える事もあるんですよ？

自分のそんな姿を見た時に、はっきりと気付いたんです・・・」

トキの体が凍りつく。

ファウストの街に入る前日、森の中の廃墟で野営をした時。

トキは闇夜の中に溶け消えてしまいそうなレイチェルの姿を目にしていた。

あれは、目の錯覚などでは無かったのだ。

「でも、それは私の思い違いで、"石"の封印が済んでも私は何も変わらずに街に戻って来て、エアニスさん達と旅の終わりの打ち上げパーティーをして、エルカカの村に帰るんだ・・・って。

なんて思ってたんですけど、やっぱり、駄目・・・みたいですね。

現実から、目を背けてしまったんです。

こうなってしまう事を、認めたく、なかったんです」

えへへへ、と、レイチェルは笑って見せる。

「だったら！！ そんなふうに諦めたような事を言わないで下さい！！」

トキは見えない壁を拳で叩く。

「レイチェルさんが帰りたいと思っているなら！！

僕達はどんな事をしてでも、あなたを元の世界に連れ戻します！！

僕やエアニスと一緒にここまで来たのは"石"なんかのためじゃなくてレイチェルさんの為なんですよ！！」

「・・・ああ、そうだ！お前が帰って来られないんじゃあ、俺達は何の為にここまで一緒に戦い続けてきたのか分からねえだろ！！」

「やっと運命から開放されるってのに、こんなのって無いわよ！！

旅が終わったら色々な所にいっぱい遊びに行こうって、約束したじゃない！！

こんな形でお別れなんて許さないから！！」

叫びながら、トキとエアニス、チャイムは見えない壁を叩き続ける。その拳に、血が滲み始めた。

「トキさん、エアニスさん、チャイム・・・」

から元気を装っていたレイチェルだが、自分の事を想ってくれる三人を見て、思わず瞳から涙がこぼれた。

レイチェルはエアニス達に歩み寄り、ヒビだらけの見えない壁に手を当てる。そして、嗚咽交じりの声で、本音を口にする。

「帰りたい・・・

そして、レイチェルやエアニスさん、トキさんと、もっと色々な所を旅したい、世界を見て回りたい！！

もっとみんなと一緒に居たいよ！！」

ぼろぼろと涙をこぼし、彼女は叫んだ。

エアニス達は、見えない壁越しにレイチェルの手と自分の手を合わせる。

僅かだが、レイチェルの温もりが伝わった。

エアニス、トキ、チャイムを囲む壁のひび割れは、既に透明な壁というより、三人を包む白い繭のように、細かく縦横無尽に広がっていた。

壁の向こう、レイチェルの背後に広がる幾千幾万もの星々が、不意に輝きを増し始める。その光は猛烈な光の奔流となってエアニス達を包み込む。まぶし過ぎて、目を開けていられないほどだった。隣に居るトキやチャイムの姿すら見えなくなる。

「レイチェルっ！」

エアニスは薄く目を開けて、彼女の姿を捉える。その輪郭は、光に浸食されるように曖昧に滲み始める。判然としない影は、レイチェルの声で、言った。



「ごめんなさい、そして、ありがとう・・・」

「・・・ッ!!!」

エアニスが何かを叫んだ。だが世界から音が失われたかのように、その叫びは誰にも届かない。目に映るもの全てが真っ白な光に飲み込まれ、いつの間にかエアニスは五感の全てを失っていた。

そして、意識が暗転する。

第75話 私の知らない優しい人達

時は遡り、約3ヶ月前。

何処にでもあるような、ある農村での出来事。

「そっか、今日なのね」

少女は壁に掛けられたカレンダーを見上げて言った。

「何がだ？」

机に向かい分厚い本を読んでいた少年は、文字を追う視線を休ませず少女の呟きに反応する。

少年と少女は、さほど広くも無い部屋に二人で居た。部屋には二段ベッドと机が二つ。そして大きな本棚。両親から二人の兄妹に与えられた子供部屋である。ただ、本段から溢れ床に積み上げられた分厚く古めかしい大量の本は、子供部屋の雰囲気には似つかわしくなかった。

少女は少年の向かう机に腰かけながら言う。

「エルカカの村が焼き払われる日よ」

少年の文字を追う視線が止まった。少年は面を上げると、床に積み上げられていた本の山に読んでいた本を放り投げた。何と無く窓の外を見る。月明りに照らされた草原から晩夏の虫達の声が聞こえた。

「そうか・・・今日か。

今日、この日から始まるんだな」

「さあ、どうだかね。何が"始まり"だったのか、今となっては分からないけどさ」

「・・・そうだな。まあ、今の俺達にとってはどうでもいい事だ」

少年は椅子の背に身を預け、そのまま窓の外を眺めていた。読書に戻ろうとする様子は無い。その物腰は、少年の容姿に見合わずひどく大人びて見えた。

少女には、少年が何を思っているのか手に取るように分かった。

少年がそれを口にしないだろうという事も分かる。ずっと一緒にいるのだから、これくらいの気持ちは通じるのだ。

だから、少女は少年の思いを代弁する。

「ねえ、行ってみない？ バイアルスへ」

少年は顔を曇らせる。少女がそう言い出す事を予想していたからだ。だが、それが少年の事を思っている言葉だという事までは気付かなかった。少年は昔から鈍感なのだ。

「"あの日"、あの後、どうなったのか。知りたくない？」

「・・・危険だ。やめておけ」

「そうかもしれないけど、でも、私は知りたいわ。

それに、"あの日"の事を客観的に見届ける事で、気持ちに区切りが出来ると思うの」

少年の思いは、少女の思いと、そして少女の予想と同じだった。

彼は目元に手を当てて考える。言い訳を、考える。

「・・・オランダとアルザニアでしか手に入らない魔導鉱石がある。バイアルスに行くなら、

その調達も出来るか・・・」

少女はにこりと笑う。まるで事のついでだとでも言わんばかりの少年が可愛く思えたのだ。

「列車と船を使っても、3ヶ月近くかかる。山越えも必要だ」

「3ヶ月弱・・・それじゃ、すぐに出発すれば、ギリギリ間に合うって事よね？」

「ああ。だが、今の俺達にとっては大変な旅路になるぞ？大丈夫か？」

「当然！今更何言ってるのよ！？」

あたしたちは、この世界をずーっと旅してきたんじゃない！！」

「ふん・・・そうだったな」

少女の宣言に少年は笑って、一瞬だけ昔に思いを馳せる。自分達にとっては失われた過去。しかし、それはこれから始まる事でもあった。

「行こう、バイアルスへ」

少年は立ち上がり、少女は頷く。

ここでも、一つの冒険が始まろうとしていた。



日が昇り始めて間もない頃、エアニスは玄関のドアを空けて外へ出る。

屋敷の中も寒い、一層冷えた朝の空気が玄関の中へと流れ込む。ティアドラの屋敷の前には芝生の生えた小さな庭がある。通りと屋敷の境界には背の高く手入れの行き届いた植え込みがあり、道行く通行人からの視界を遮っていた。

不意に、芝生に散らばる落ち葉が気になった。

玄関の隅にホウキとチリトリを見つけたので、エアニスは何と無く庭の掃除を始める。

間借りさせて貰っているのだから、この位の事はしておきたいと思ったのだ。

通りに面した門の前で、自転車だろうか、キイツ、と短いブレーキ音が聞こえた。

「おはようございまーす」

帽子を被った男が挨拶と共に顔を出した。手には小さな牛乳缶が下げられている。

帽子の男はエアニスの姿を認め、訝しげな表情を浮かべた。恐らく、エアニスも同じような顔をしていただろう。

「・・・ああ、牛乳屋か？そこに置いといてくれ」

「は、はあ・・・」

帽子の男は掃除を続けるエアニスの横を通り過ぎ、玄関先に牛乳缶を置いた。

「あの、ティアドラさんはどうかされたんですか？」

「・・・ああ、」

この男はティアドラと知り合いなのだろうか。そいえば、昨日もその前も、玄関の前には牛乳缶が置かれていた。特に気にしていなかったが、毎朝この牛乳屋の男が届けに来ていたのだろう。

「ティアドラさんは用事があって数日留守にするよ。」

俺達は旅行でこの街に来てて、留守番としてこの家を間借りさせてもらってるんだ」

「ああ、そうでしたか」

エアニスの出任せに、帽子の男は安堵の表情を見せた。

「ファウストは良い街でしょう？楽しんでいって下さいね」

「ええ、どうも」

帽子の男は表通りに止めた自転車で、牛乳缶の積まれた重そうな台車を引きゴトゴト音を立てながら走り去った。

それを見送ったエアニスは小さく息をつく。

「妙な噂が立つ前に、この街を出た方がいいな・・・」

街に戻ってから既に3日が経過していた。

あの後、エアニス達は遭難していたレオニール軍の兵士達と一緒に2日掛りて山を降りた。戦争の終結を知らず山に籠り続けていた兵隊達が見つかったというニュースは、この最果ての街を騒がすには十分な出来事だった。レオニールの兵士達はファウストの街の役人達に保護され、治療や療養の場を提供して貰っている。レオニールはファウストの属している国にとっては敵国にあたるが、直接戦火を交えるような関係でも無かったため、戦争の終わった今、彼らを敵視するような者達は居なかった。

その騒動に紛れるようにして、エアニス達はティアドラの屋敷へと戻った。

そして、何をするでもなく、今に至る。

まだ無理は出来ないが、チャイムのお陰で体の傷は大方治った。

しかし、心の傷は当分治りそうに無い。

「うわっ、寒っっ！！」

なにドア開けっぱなしにしてんのよ！」

寝巻き姿のチャイムが自分の両肩を抱きながら玄関から庭を覗き込む。

「空気の入替えだよ。っつーかお前、どれだけ着込んでるんだよ・・・」

「アンタは何で雪が降る中タンクトップと半パンなのよ」

「雪？」

気付けば、細かく雪が舞っていた。さっきまで降っていなかった筈だが、エアニスがぼんやりと考え事をしているうちに降ってきたようだ。自分の気の緩みに、呆れた。

「・・・暖炉に火、入れるか」

エアニスは暖炉の火が落ち着いたのを確認すると、側に置かれた椅子へと腰を下ろす。

「ねえ・・・髪」

「ん？」

チャイムに声を掛けられて、エアニスは振り向いた。

「髪はもう染めないの？」

「・・・ああ、」

自分の肩口に流れる銀の髪をすくい、面倒そうに答える。

琥珀色だったエアニスの髪は、あの戦いで"石"の力を使った途端、銀色へと変ってしまった。
いや、エアニスの髪は元々銀色なので、変ってしまったと言うよりは元に戻ったと言うべきか

。髪の色は単に薬品で髪の色を染めているだけでなく、ちょっとした魔導を使い、伸びてくる髪にも色が付くようになっていた。少なからず体内に魔導式を取り込む方法を取っていた為、"石"がその術を異物として認識したのだろう。髪染めの術式が消し飛んでしまったのだ。

「いや、染めるよ。もう必要な薬品や、色の配合は済んでるんだけど、面倒臭くてやってないだけだ」

「ふうん。じゃあさ、あたしがやってあげよっか？」

椅子に腰掛けるエアニスは、背後から突然チャイムに髪を触られる。

ビクッと飛び上がるエアニス。他人に頭を触られる事などあまり無かったからだ。

「うわあ。エアニスの髪ってホント綺麗だよー・・・羨ましいわ」

「あ、ああ、」

「銀の髪も綺麗だけど、あたしはやっぱり、あの髪色のエアニスの方が見てて落ち着くかな？」

「・・・そっか。ありがとな」

はにかみながら笑いかけるチャイムに、チャイムは照れ臭そうに言った。



エアニスはそのまま暖炉の前の椅子に腰掛け、チャイムに髪染を頼んだ。

魔導を使うといっても、その手順は普通の毛染めと大して変わらない。琥珀色をしたクリームを、エアニスの長くて多い髪へ、ひと房ずつ馴染ませてゆく。

「うわー・・・安請け合いしたけどコレ超面倒だわ・・・やっぱ止めていい？」

「こんな中途半端な状態でか？ ふざけんなよお前・・・」

「冗談よ」

そう言いながらも、ハケと櫛を使い丁寧に作業を進める。

「そいや今日のゴハン当番って誰だっけ？」

「お前だろ？」

「うわっ、ホントに！？」

ますます毛染めの手伝いなんて買って出るんじゃないかなあ・・・」

「いいよ、礼に今日は俺が代わってやる」

「ホント？ いいの？ それはそうと、最近エアニス料理の腕上げてきたわよね？」

「この旅の間、野宿が多くて食材も現地調達だっただろう？ イヤでも料理は上手くなるさ。バ

リエーションや味付けの幅もかなり広がったぜ。

余った携帯食料や腐る寸前の食材があるから、それで豪華な朝飯でも作るか？」

「・・・んー・・・ど、どうかなソレは・・・」

「嫌なら手っ取り早く、パンピザと牛乳だ」

「あ、あたしパンピザ大好き！それでいいや！」

「いいのかよ」

そんな、他愛ない会話。

暖炉の火がエアニスの体を温めているように、エアニスの心も、チャイムと言葉を交わしているだけで、暖かくなってくる。いつまでも続いていてほしい、安らかな時間だった。

柄にも無い事を考えていると、不意にチャイムがこう言った。

「そいえば、レイチェルってまだ起きてないのかな？」

その名に、エアニスは喉を詰まらせる。

そして、極力普段と同じ声色を意識して、答える。

「・・・さあな、今日はまだ、見てない」

戸惑うように、目を伏せた。



レイチェルは生きていた。

あの星空の世界から帰って来たエアニス達は、気付いたらあの洞窟の入り口で気を失い倒れていたのだ。

一番最初に目を覚ましたエアニスは、その隣にレイチェルの体が横たわっているのに気付いた。

彼女の血の気を失った肌に触れると、予想通り、冷たかった。

見ると、彼女の右の脇腹はいつの間にか真っ赤な血で染まっていた。

エアニスは彼女があの日、村から逃げ出す時に脇腹を撃たれたと話していた事を思い出した。今まで石の力で"無かった事"にされていた彼女の傷。それが石の力を失った事で、再び彼女の体に現れたのだ。

青白い顔で目を瞑るレイチェルを見る。乾いた唇が、一層生気の無さを感じさせた。

「・・・はっ、ぐ・・・う、ううお・・・」

思わず喉の奥から嗚咽が漏れる。人間の死に慣れているエアニスだが、親しい人間の死というものには慣れていなかった。これまでの人生で、エアニスと親しい人間関係を気づいた者は数える程しかしない。心の整理など、できそうにない。

喉の奥からせりあがる感情の塊を唾を共に飲み込み、エアニスは硬い雪の大地をこぶしで殴りつける。傷だらけのこぶしが、また擦り切れた。



「ん・っ」

小さな呻き声が聞こえた。

最初は気のせいだと思った。レイチェルの声が聞こえたのは。しかし、俯いていたエアニスが面を上げるとレイチェルの体は僅かに身じろぎするように、動いた。

「レイチェル……？」

エアニスは身を乗り出し、レイチェルの頬を軽く叩くと、

「こほっ！ っうあ・っ あ・っ ！」

僅かに血を吐き、身をよじらせた。

エアニスは驚き、後ろに転ぶように尻餅をつく。

「はっ、ははっ……！」

引き攣った笑みを浮かべるエアニス。レイチェルの傷は内臓を抉り、血を吐く程に深い、命に関わる傷だ。笑っているような状況では無い。

だが、レイチェルは生きていたのだ。

「チャイム、起きろ！！」

エアニスはレイチェルの体を飛び越え、その向こう側で気を失っているチャイムを乱暴に叩き起こした。

それからレイチェルの傷の治療は半日も続いた。

弾丸が抜けた時に出来た大きな傷と、それに伴う内臓の損傷。大量の出血。

治療の魔導で傷を塞ぐ事は容易だったが、魔導では内臓の損傷を正しく治す事は難しい。だから、魔導による治療と、内臓や血管を縫合する直接的な外科手術を同時に行った。 トキやチャイムにとっても内臓に直接手を付ける類の治療は専門外だったが、レオニール軍の遭難者に軍医が居たため、魔導では治療しにくい内臓の傷も塞ぐ事が出来た。

本来なら輸血が必要な程の出血だったが、レイチェルの"血"の特異性を考え、輸血はしなかった。魔導師にとって血のバランスが崩れるという事は自分の魔力の性質が変わってしまう事を意味するからだ。しかも、レイチェルはあの大魔導師エレクトラの直系の子孫である。エルカカの民しか使えない空間や時間制御の術が使えなくなってしまう可能性さえある。それはきっと、レイチェルにとってアイデンティティの喪失とも言えるだろう。

当然、それが命よりも大事な事かと言われれば決してそうではない。しかし、可能な限りエアニス達はそれをしたくなかった。そして、その必要が迫られる前に、レイチェルの容態は安定したのだった。

しかし意識がすぐに戻る事はなく、エアニスとトキが交互にレイチェルの体を背負いながら、バイアルスの山を降りた。結局レイチェルの意識が戻ったのはほんの2日前、ファウストの街に戻ってからだった。

チャイムと、そしてレイチェル自身の推測によると、3ヶ月前あの日、"石"はレイチェルの願い

を叶え、命を落としかねない彼女の右脇腹の傷を”無かった事”にしたのだという。

傷を”治した”のでも、命を”蘇らせた”でもない。そういったレイチェルの体を軸とした願いが叶えられていればこのような事にはならなかつただろうが、”石”は人間が干渉する事の出来ない、”事実”を捻じ曲げるといふ形で、レイチェルの願いを叶えた。だから、石の力の喪失が、このような形でレイチェルに襲い掛かつたのだ。

しかし、でも、それでも。レイチェルは助かつた。

全てが、丸く収まつた。彼女は理不尽な運命に連れ去られる事無く、エアニス達の元へと歸つてきた。

誰もが、そう思つた。



「よっし、終りっつ」

チャイムはテーブルに広げた紙にハケと櫛を置いた。そして、その横にある手帳を開く。

「ふうん、この魔導式を動かせば、エアニスの髪に薬が定着するのね？」

「できるか？」

「当然。っていうか、すこしでも魔導をかじつた事のある人なら誰でも出来るレベルよ」

そう豪語して、チャイムは手帳の式を組み込んだ呪文を唱え始め、

「・・・これでミスつたら、エアニスの頭が漫画みたいなアフロになつたりするのかな？」

「・・・おい。おいやめろよ！ふざけるなよ！！」

手帳に書いてない事は絶対にするなっ！！！！」

「冗談よ」

何処かワクワクしたような表情を見せながら、チャイムは右手の指をパチンと鳴らす。

ぽんっ、

と、軽い破裂音が鳴り、エアニスの頭からホワワ〜ンと煙が立ち昇つた。

チャイムの口元がムズムズ動く。

「・・・なかなかシュールな魔導ね。気に入つたわ」

もう一回指を鳴らそうとしたチャイムを、エアニスは全力で止めた。

エアニスはチャイムの右腕を捻り上げながら、髪の色と具合を確認する。以前と全く変わらない色味で、ムラもない。壁に掛けられた鏡をのぞいて前髪をかき上げてみる。銀の髪は根元まで、なめらかな琥珀色へと変わつていた。

「よし、大丈夫そうだ。ありがとなチャイム」

笑顔で礼を言うエアニスに、チャイムは全力でタップしながら、

「腕抜けちゃう！！腕抜けちゃう！！ミシミシ言つてるって！！！！」

半泣きで抗議してつた。エアニスが手を離すと、チャイムは流れるような動きでエアニスの真下に潜り込み、その顎を狙つてパンチを繰り出し反撃に出る。それをエアニスは「こいつの動き

も見違えてきたなあ」などと思いながら適当にあしらう。普段どおりの二人のやりとりだった。

こつ、と床を鳴らす音が聞こえた。

取っ組み合ったエアニス達が音のした方を見ると、そこには普段着に身を包んだレイチェルが立っていた。

レイチェルは右手で杖をついていた。右脇腹の傷の影響で、右足の動きが鈍くなってしまったのだ。これも少し時間をかけて治療すれば治る筈だ。

レイチェルは、掴みあうエアニスとチャイムを見て固まっていた。口元をキュッと結んでから、勇気をふり絞るかのように言う。

「あ、あの、喧嘩はよくないです！」

「……」

「……」

レイチェルの的外れな言葉に、エアニスとチャイムはキョトンとする。そして、すぐに彼女が何を思ったのか理解した。

「あ、ああ、違う違う。喧嘩じゃないよ」

「そ、そうそう！ あたしたちって、いつもこんな感じじゃん！？」

笑いながら言う二人に、レイチェルはハッと驚いた様子で、

「あ、そう、だったんですか。すみません、余計な事を……」

「う、うん」

三人の間に気まずい沈黙が落ちる。

不自然で、ぎこちない会話。

レイチェルは俯き、視線を泳がせる。そして、チラチラとエアニスの顔を見ていた。

「あ、ああ、この髪の色か？」

今チャイムに染めて貰ったんだ。俺、普段はこの色に染めてるんだよ。

目立つだろ？ 銀髪って」

「そう、だったんですか。……その髪の色も、綺麗ですね」

レイチェルは、にこりと笑う。その表情を見て、エアニスの浮かべていた笑みが、寂しさに沈んだ。小さく、息を吐く。

「まだ思い出せないのか？」

俺達の事……」

ティアドラの屋敷でようやく意識を取り戻したレイチェルと喜び抱き合ったのも束の間、エアニス達は愕然とした。

レイチェルは記憶を失っていたのだ。

全て、ではない。エルカカの村がルゴワールの軍隊に襲われ、それから逃れたあの日。それ以降の記憶が彼女から全て失われていた。

つまり、その直後にチャイムに助けられた事も、ミルフィストの街でエアニスやトキと出会っ

た事も、自分の使命をまっとうした事も、全て忘れてしまっていた。

これも、石の力が失われた為だろう。

石はレイチェルの願いを叶え、彼女の右脇腹の傷を”無かった事”にした。それと同じだ。その願いの上に成り立っていたレイチェルのこの3ヶ月間は、彼女の記憶の中から”無かった事”になってしまったのだ。

「ごめんなさい・・・まだあの日以降の事は、思い出せないんです」

「そうか・・・」

「また、旅の話聞かせてください。何か、思い出す切っ掛けになるかもしれませんし」

「ああ、うん。そうだな。昨日の続きから、また話させてくれ」

そう言って、エアニスは笑った。

だが、それも恐らく無駄だろう。

エアニスはそう思っている。

まだ言葉にはしていないものの、エアニスは自分の経験からそのように感じ始めていた。そのような認識を持ちながら旅の思い出話をするという事は、まるでレイチェルの為ではなく自分自身を慰める為の行為にさえ思えた。

エアニスはパンにチーズとベーコン、薄く切ったトマトとピーマンを載せてオーブンへと放り込む。それだけでは寂しいので簡単な野菜のスープを作り、今朝届けられた牛乳と共にテーブルへ並べた。その間にオーブンの中のパンピザは焼きあがり、エアニスの朝食は完成する。

そいえば、レイチェルはトマトもピーマンも牛乳も嫌いだったな、とココに至ってようやく思い出したエアニスは、テーブルに座る彼女の顔色を伺う。しかしレイチェルは嫌な顔をせずになんか大人しくエアニスがテーブルに着くのを待っていた。

記憶を失ったと言っても、その辺りの事まで忘れてしまった訳ではない。恐らく朝食を作ってくれたエアニスに気を遣っているのだろう。偏食の多いレイチェルは、普段なら自分の嫌いな食べ物が出てくると、いつも言葉にはしないものの困った顔を隠そうとせず、でも少しづつエアニスの料理を食べるのだ。我慢しながら、残す事無く。そのような些細なレイチェルの素顔まで、今の彼女は隠してしまっている。エアニスは、それが寂しかった。

「トキはまだ起きてこないか？」

「起きてこないって言うより、また地下の書庫に籠ってるんじゃない？」

「・・・だろうな。呼んでくる、先食ってろ」

エアニスは妙に似合うエプロンを外して、ティアドラの寝室へと向かう。

エアニス達も帰って来てから知ったのだが、この屋敷の下には地下室があった。恐らくこの家の敷地よりやや広いくらいの地下室が、それも5フロアも存在していた。そこにあったのは大量の本や魔導書、あらゆる媒体で記された古文書など、計り知れないほどの価値がある蔵書だった。

トキはレイチェルの記憶喪失が判明したその日にこの地下室を見つけ、以来そこに寄り憑かれ

たかのように本を読み漁っている。

もちろん、レイチェルの記憶を取り戻す方法を探す為だ。

初日はエアニスやチャイムも手伝ったが、解決の糸口も無いその問題は一日二日で解決出来るような物では無いという事が分かっただけで、資料探しは中断した。二人に関しては長期戦の構えである。急いだところで仕方がない問題だ。それよりも、傷付いた心と体を癒す方が先だろう。

しかし、トキは資料の調査を止めなかった。少しの時間も無駄にしたいくないとでも言うように、トキはずっと資料を読み漁り続けている。

エアニスはティアドラの寝室へ這入ると、四角く切り取られた床の穴へと身を滑らせる。縦穴に立て掛けられた梯子を降りて、地下の大きな空間へと降り立つ。

床に着いたブーツの音が反響する。床も壁も天井も味気ないコンクリートで固められている。魔導師が作った建造物にしては、近代的な匂いがした。その空間に等間隔で背の高い本棚が整然と並んでいる。天井に明りとなるような器具が貼りついているが、電気やガスを使った機械式の明りではなく魔導式の明りだった。色々と弄ってみたが、結局明りを点ける方法が分からなかったので、結局この地下室での明りはカンテラを使っている。

トキの姿は他のフロアを探すまでも無くすぐに見つかった。一階の入り口から一番奥、さらに下のフロアに繋がる石階段の手前で、トキは本が大量に積み上げられた机に向き合い、ノートに何かを書き込んでいた。

エアニスの足音はフロア中に反響しているのに、こちらに気付いた様子も見せない。エアニスは溜息を吐いた。

「おい、トキ。もう朝だぞ？」

エアニスの短い言葉が、コンクリートで囲まれた室内でわんわんと反響する。ここはあまり会話をするのに向いていない空間のようだ。ティアドラ一人の為の書庫なのだからその必要は無いのかもしれないが。

トキはペンを動かす右手を止めると、初めてエアニスに気付いたといった様子で、顔を見上げた。

「ああ、そうですか。駄目ですねこの部屋は。時間感覚が完全に狂ってしまいますよ」

「寝たのか？」

「いえ、暫くは覚えるべき地の知識が沢山ありますからね」

エアニスはトキのノートを覗き込むと、そこには魔導式がびっしりと書き込まれていた。

「お前・・・魔導師にでもなる気か？」

「まさか。僕には素質も魔力がありませんからね。ですが、僕でも魔導を理解する事は可能です。ノキアさんの薬を作った時にも、科学の知識と組み合わせる事が出来ました。まだまだ分からない事だらけですが、僕に出来る事もありますよ」

そう言うと、トキは再びペンを握り、ノートに魔導式を書き写し始める。この書庫を見つけてから、トキはずっとこの調子だった。睡眠も、食事もまともにとっていない筈だ。

そんなトキに、エアニスは伝えておかなければならない事があった。気が進まないが、黙っているのも良くはない。唇を湿らせ、エアニスは口を開いた。

「レイチェルの記憶は、戻らないかもしれない・・・」

おもむろに、エアニスは話を切り出した。

しかし、その声が聞こえていないかのように、トキのペンの動きは止まらない。

「・・・何故ですか？」

「俺も、石の力に触れた事があるから何となく分かるんだ」

エアニスは、チャイムやレイチェルの推測と、己の経験談を元に、自分の考えを話し始める。

「"石"と繋がると、アタマの中に膨大な記憶が流れ込んでくる。今までの石の記憶の全て、かつての石の持ち主の記憶の全てが、だ。その間は、その知識を全て自分のものに出来る」

トキは見向きもしない。エアニスは構わず話を続ける。

「だが、ひとたび"石"の力を切り離すと、アタマの中に押し込まれていた"石"の記憶は綺麗さっぱり消えちまう。"石"と繋がっている間は当たり前のように使えていた知識が、全く思い出せなくなるんだ。

どんな些細な記憶も、"石"から得た記憶は絶対に俺の中に定着する事は無かった」

「・・・」

「多分、今のレイチェルも石の力を手放した俺と同じだ。

レイチェルがチャイムと出会い、俺たちと出会い、使命をまっとうした記憶は『石の記憶』であって、『レイチェルの記憶』ではないんだ。

レイチェルは記憶を失ったんじゃない。俺達と一緒に旅をしたレイチェルは、"石"がレイチェルという人間を元に作り出された仮初の存在でしかなかったんだ。

だから、今のレイチェルは、俺達と一緒に居た記憶を失った訳じゃない。初めから、持っていないんだよ。持っていない物を失う事は出来ないし、呼び戻す事も出来ない。厳密な意味で言うならば、レイチェルは記憶喪失じゃないんだよ」

そこでエアニスの話は終わる。書庫の中にはトキがペンを走らせる音だけが暫く続いた。

気のせいだろうか、トキは耳元でチリッと何かが焼けるような音を聞いた。思わず、言葉が口を突く。

「だから？ レイチェルさんの記憶は諦めろと？」

「記憶を失っちゃったが、レイチェルは生きて帰ってきた。

あの状況からの結末としては、十分じゃないか？」

その言葉に、トキの苛立ちは許容を超えた。

トキは椅子から立ち上がると、エアニスの胸倉を掴み、その体を壁に叩き付けた。

「何故そう割り切った事が言えるんですか！？」

何故この理不尽を受け入れているんですか！！？」

それはまるで、記憶が無くても生きてさえいればそれでいいと言っているように聞こえた。

この3ヶ月間のレイチェルの努力など、あっても無くてもよいと言われたような気がした。

確かにレイチェルにとって辛い事は沢山あった筈だ。だからといって、それは忘れてしまって良いというものでは、決して無い。

記憶自体失い、そう思う事すらも出来なくなってしまったレイチェルの代わりに、トキ達がそ

れを理解しなければいけない筈だ。

それを、エアニスには理解していない。

トキにはそう感じられた。

「今の彼女にとっては、自分の知らないうちに背負っていた使命が全うされてしまったようなものなんですよ？」

知らない誰かに、自分の役目を奪われてしまった事と同じです。

生まれた時から決まっていた自分の使命を必死で果たそうとしてきた結末がそんなものだなんで、どんな気分だと思いますか？」

言葉遣いこそいつも通りだったが、エアニスを掴むトキの腕は怒りに震えていた。エアニスに向ける怒りとしては、それはやや過剰なものだった。行き場の無い怒り、というものだ。エアニスは抵抗する素振りも見せず、トキの射抜くような視線を受け止めながら応える。

「そりゃあ、やるせないだろうな。

だがな、それはあいつのこれからの人生に、必要なものか？

あいつの戦いは、もう終わったんだ。何処かの街で普通の女の子として暮らせるんだ。

この三ヶ月間の出来事は、これからの生活には邪魔だ。むしろ忘れちゃったままの方がいい」

「ッ、それはエアニスが決める事じゃあ・・・！」

「あいつは、俺やお前のしがらみに巻き込まれ過ぎてる。この先、俺達に何かあったら、あいつの性格上きつと首を突っ込んで来るだろうよ」

そう言ってから、チャムと一緒に、と思い出したかのように付け加えた。

トキは言葉に詰まる。エアニスの懸念が納得出来るものだったのだ。

そのような考え方も、あるのかもしれない。レイチェルの事を思うのであれば。

怯んだトキの心の内に、エアニスは容赦なく切り込む。

「お前、レイチェルの為だとか言いながら結局は自分自身の為じゃねえか。

レイチェルに、自分を忘れて欲しくないだけじゃねえのか？」

「・・・っ！」

エアニスの言葉はトキの想いの本質を突いた。

トキはエアニスの胸倉を離すと、力なく椅子にもたれかかる。

くしゃりと髪を掴み、机に広げられた古文書とノートに視線を落とす。全く光の見えない調べ事に、正直トキの心も折れかけていた。

「エアニスにとって、人の生き死にとは何ですか？」

トキはエアニスにそう問いかけた。エアニスには問いかけの意図が読めない。

「心臓が動いていれば生きていますか？」

心臓が動いていて、脳が死んでいたらどうですか？」

「さあ。どうだろうな・・・」

「僕にとっての人の生き死にはですね、エアニス。

非常に独善的でエゴい考え方であると自覚した上で言わせて貰うと、相手の中に僕がいるかどうか、なんです」

エアニスは黙ってトキの言葉を聞く。

「僕の事を知らない人間なんてどうでもいいんですよ。僕の事を知らず、僕と関わりの無い人間は、僕にとって居ない事と同じなんです」

確かに大多数の人間は、相手の存在の認識を、どちらかと言えば肉体などといった物理的な物ではなく、魂や記憶といった物に対して行っている。その理屈を突き詰めれば、トキのその考え方も理解出来る。

「だから今のレイチェルさんは、僕にとっては死んでしまっているんですよ。

僕を知るレイチェルさんは、僕が知るレイチェルさんは、もう居ない。

エアニスのように、生きていればそれでいいなんて考えは出来ません」

「・・・」

「だから、僕は僕の為に、レイチェルさんの記憶を取り戻します。

放っておいてください」

そう言って、トキは再び机に向かい、ペンを取った。

エアニスは大きく溜息を吐き首を振った。何を言っても無駄なようだ。

「・・・好きにしろよ。気が済むまでそうしてればいい。

だが縛られ過ぎるなよ。レイチェルも・・・お前が知っているレイチェルも、それを望んでいるとは思えないからな」

そう言い捨てて、エアニスはトキの元を離れた。

エアニスが地下室から出ようとする時、出口にはチャイムとレイチェルが立っていた。二人はエアニスと目が合うと、気まずそうに視線を逸らす。

「聞いてたのか？」

「・・・ごめん、声かけるタイミング逃しちゃって」

「いいさ別に。レイチェルも、あまり気にするなよ」

「・・・あ・・・、・・・」

レイチェルはエアニスに何かを言おうとして、口ごもり、そして視線を床へと落とした。

今の自分の言葉は、エアニス達にとって何の意味も無いのだと思ってしまったのだ。いくら自分の事で気を病まないで欲しいと言っても、どれだけ気丈に振舞っても、今のレイチェルは、エアニス達の知るレイチェルで無い以上、それは何も知らない他人の戯言でしかないのかもしれない。

そう、思ってしまったのだ。

何となくレイチェルの考えている事が分かってしまったエアニスは、俯く彼女の髪をポンポンと叩く。

「・・・俺が言った事も、何の確証も無いただの推測だ。やっぱり、何かの拍子に記憶が戻るかもしれないしな。

・・・たとえ戻らないとしても、俺達はお前の事を、よく知ってる。いい奴だって事もな。だから、とことん付き合ってやるぜ」

「・・・」

励ますつもりで言った言葉に、レイチェルは困ったように顔を曇らせた。エアニスハッと
して、その手を離す。

「・・・そんな言葉、今のお前には重荷にしかならねえか・・・すまん」

ただでさえ相手の気持ちになって物を考えるのが苦手なエアニスに、今のレイチェルの気持ち
など容易に理解出来る筈も無い。気を遣わせてしまったと思ったレイチェルはぶんぶんと頭を
振り、

「いえ、エアニスさん達には親切にして貰って・・・本当に、感謝しています」

「・・・」

レイチェルが他人行儀な口ぶりで話す度、エアニスの心はズキリと痛む。元々彼女の言葉遣い
は丁寧で他人行儀な所はあったが、やはり、何処かが違う。

互いの言葉が、全てすれ違っている感じ。何をしても、何を言っても互いが傷付き、ままなら
ない。

記憶を失ってしまったのなら、思い出せばいい、それが出来なくても、何があったのか教えて
やればいい。そんな風に思っていたエアニスだったが、事はそんな単純な物では無いのだと少し
ずつ理解してきた。

どうして、こうなってしまったのか。



その後、エアニスは散歩に行くと言って、逃げるようにティアドラの屋敷を出た。

ファウストの街外れは緑の多い丘になっている。バイアルスの山に登る前、チャイムと一緒に
街中に灯る祭りの明かりを見た所から更に高い場所。周りには舗装された歩道も民家も無く緑が
広がっていた。そこからエアニスは街を見下ろす。

ぎるる、と腹が鳴って、朝食を作るだけ作って食べずに出てきてしまった事に気づき頭を抱
える。

「何やってんだよ・・・動揺してるのバレバレじゃねーか・・・」

恥ずかし紛れにゴンゴンと丘の縁をなぞる鉄柵に頭をぶつける。戦争中、戦場に出ている間は
数日程度なら何も口にせずとも戦い続ける事は出来たというのに、緊張の糸が切れていると体は
正確な時間に3食の食事を要求してくる。

力なく柵にもたれかかり、大きく溜息をついた。

「どうする・・・これから・・・」

エアニス達の旅は終わった。

レイチェルの目的は果たされ、エアニスが2年半前から抱え続けていた、"石"の存在に対する不
安も、これで無くなった。あとは旅の始まる前の生活に、平穏で怠惰な生活に戻ればいだけだ
。

いや。しかし、レイチェルには戻るべき場所が無い。それについても考えなければならぬと

思いながら、まあ旅が終わってから考えればいいやと後回していた。

今がその時なのだが、とてもそんな事を考えられる状態ではなかった。

「忘れられるってのは・・・結構辛いもんだな・・・」

もちろん、レイチェルが命を取り留め自分達の元へ戻ってきてくれた事は、それこそ涙が出るほど嬉しかった。が、それと同じ位の喪失感をエアニスは感じていた。

邂逅と別れが同時に訪れたような、そんな気持ち。

そこに在るのに、そこに居ない感じ。

そんな事を考えて、エアニスは舌打ちをする。

「そんな考え方こそ、レイチェルの事を考えていないエゴの表れじゃねえか・・・」

自己嫌悪を感じながら、エアニスは鉄柵に寄りかかる。

エアニスは一度大きく息を吸い込むと、空を見上げて伸びをする。懐から煙草を取り出し、口に咥えて火を点ける。空気の薄いバイアルスの山に登るという事もあり、ここ数日控えていたので一層煙草が美味しく感じられた。

胸の奥に溜まった煮え切らない思いを、重い煙と共に吐き出す。

そして、弛みきった思考を切り替える。

「隠れてないで出て来いよ。今、気分が悪いから存分に相手してやるぜ」

鉄柵を背にし、森の奥に向けて言い放った。

ずっと、視線を感じていた。

山を降りて、ファウストの街に戻ってからだ。敵意とは違う、しかし好意に類する感情は欠片もない視線を、エアニスはずっと感じていた。気配を潜ませている様子もあったが、慣れていないのかいまひとつ隠し切れていなかった。恐らくトキも気付いているだろうが、そのような細事に構っている暇は無いのだろう。話題にも上らなかったし、エアニス自身取るに足りない問題だと思っていた。暫く放っておいて消えないようなら適当な時に燻り出さなければいけないなと思っていた程度だ。

苛立ちの捌け口にでもなって貰うか。そう思って試しに屋敷から離れてみたら、視線はエアニスを追うように付いて来たのだ。

エアニスの呼び掛けに、森の奥から感じていた気配がざわりと蠢く。エアニスに気付かれ動揺しているのだろう。その反応だけで、相手の底が知れた。早くも興が冷めてしまったが、やるべき事はやらなければならない。どんな小物でも、邪魔者は排除しておくべきだ。

暫しの間の後、視線の主が、森の奥から姿を見せる。

白けた目でそれを見ていたエアニスの口から、まだ少ししか減っていない煙草がポロリと落ちた。

驚愕。戸惑い。そして絶望。そんな感情が入り混じった表情で、エアニスは森から表れた相手を見る。

それは、二人の少年と、少女。

少女は怯えながら敵を警戒する猫のようにエアニスを睨む。

対して少年は、落ち着いた様子で少女を守るように立っていた。

少年が口を開く。

「久しぶりだな・・・とでも言うべきか？」

「・・・」

エアニスは言葉を返せない。

その声の主は、エアニスの良く知る顔だった。

第76話 未来を紡ぐそれぞれの道

エアニスはゆっくりと腰の剣を引き抜く。

しかしその切っ先は相手に向けられる事なく、エアニスの足元で戸惑うように揺らいでいた。「別に・・・久しぶりって程でも無いけどな・・・」

エアニスは少年に、この世界から追放された筈のイビスに、笑いながら答えた。

視線をずらし、イビスの後ろにいる少女を見る。見間違う筈も無い。エアニス達を散々振り回してくれた魔族、アイビスだ。

本当なら今すぐにでも斬りかかるべき相手だが、エアニスは動く事が出来なかった。

それは、イビスが"少年"の姿をしていたからだ。アイビスも、イビスと同じ年頃の"少女"の姿をしている。

エアニスの知るイビスはエアニスよりやや年上、アイビスはチャイムと同じ年頃の姿をしていた。しかし今は二人とも精々14、5歳といった容姿だ。

それでもその顔立ちは、エアニスの知るイビスとアイビスがそのまま若くなったものだ。特長的な青みがかった銀髪も、そのままである。

その容姿が、エアニスを戸惑わせた。

しかし、エアニスは思い出す。容姿など魔族にとってはどうにでもなる物だと。事実、バイアルス山の戦いでは、アイビスはその姿を街娘に変えて遭難者を装い、レオニール軍を騙し、利用した。イビスに至っては巨大な黒竜に姿を変えたではないか。

戸惑いを振り払い、地に向けていた切っ先を二人の魔族へと向ける。エアニスの剣、"オブスキュア"には既にヘヴンガレットの力は無く、以前から使っていた金で買える最も高価な魔導石も、戦いの中で失ってしまった。剣の柄には魔導石を嵌め込む為の穴がぽっかりと空いている。おそらく魔導的な干渉力も、刀身の強度も、今のオブスキュアには無いだろう。ヘタに剣を交えると折れてしまう恐れすらある。魔法剣は、魔力が込められていなければ、ただの古いなまくら刀である。

ジワリと、手のひらに汗が滲む。

今のエアニスには魔族に対抗出来る術が無いのだ。

(ハッターリで斬りかかって、一旦森に身を隠すか)

心を決めると同時に、エアニスは懐に隠していた短銃を抜き放つ。

「待って！！あんたとやり合う気は無いわよ！！」

慌ててアイビスが叫ぶも、エアニスはその声に被せるように銃声を鳴らす。魔族の彼等にとって何の魔力も込められていない銃弾など全く脅威ではない。それでも、僅かながら物質に依存してこの世界に体を具現させている以上、小石をぶつける程度の牽制にはなるだろうと思った気休めの行動だった。

しかし、銃を向けられた二人は予想以上に慌て、真横へ転がるように身をかわす。エアニスは銃を投げ捨て剣を構えると、片膝を突くイビスに向かい駆け出す。あくまでも目的は彼の後ろに広がる森の中に飛び込む事だ。

エアニスに気付いたイビスは腰に下げていた剣、彼が普段使っていた無骨な大剣ではなく、細身のサーベルを抜き放った。

サーベルの刀身をエアニスはオブスキュアで弾く。強度を失っているオブスキュアに負担が掛からぬよう、刀身の根元で突き飛ばすように刃をぶつけた。

すると、イビスはあっさりエアニスの一撃に押されて、バランスを崩す。

「！？」

思わずエアニスの森へ向かう足が止まる。そして、相手の隙を見逃せない性が反射的にイビスへの追撃を繰り出した。

背中から仰向けに倒れたイビスの胸元へ、オブスキュアを突き下ろす。

「やめてえっ！！」

エアニスとイビスの間に、アイビスが割り込んだ。アイビスはエアニスの剣を掴んでその軌道を捻じ曲げようとする。そして、勢い余ってエアニスの体にぶつかった。

アイビスのあまりに短絡的かつ稚拙な行動にエアニスは驚き、判断を鈍らせる。そしてアイビスの体に押される形で、もつれるように草原の上へと転がった。

慌てて彼女の体を押しのけて、エアニスは二人から距離を取る。

「・・・アイビス！」

倒れていたイビスは剣を手放し、うずくまるアイビスに駆け寄る。

エアニスの剣を掴んだ拍子にだろう。アイビスの手の平は深々と裂けて、血が滴っていた。イビスは息を呑み、自分の荷物から布を取り出すと、アイビスの傷を押さえて止血を始める。

その様子を、エアニスは呆然と見ていた。アイビスの血が付いたオブスキュアの切っ先は、再び地面を向く。

「おい・・・何の芝居だ？」

「・・・芝居じゃない。今の俺達には、もう魔族の力など残ってはいない」

イビスがエアニスを睨みつけながら言った。あのイビスにしては、随分と感情的な視線だった。

「イビス、大丈夫よ・・・ちょっと切っただけだから」

「だが・・・」

アイビスは自分で手の平の傷口に布を巻き付け、きつく縛った。

「あいかわらずせっかちなね・・・まずは人の話を聞こうって気にはならないのかしら？」

「・・・どういう事だ？」

「何で、お前達がここに居る？ 向こうの世界に・・・レッドエデンに行ったんじゃないのか？」

アイビスは立ち上がり、ふんと鼻を鳴らす。いつもの高慢な態度に見えたが、その目には深く沈んだ感情の色が見て取れた。

そして、話すと長いわよ、と前置きしてから、自分達の身に起きた事を語りだした。



「確かに、あたし達は、あの星空の世界からレッドエデンに落とされたわ。そして、250年ぶりに仲間達と再会した。

でも、そこに居たのは・・・かつて私達の仲間だった魔族の、なれの果てだった。

あの世界はね、私達魔族の記憶や人格を崩壊させて、まっさらな"存在"に作り変えるための世界なのよ」

「・・・？」

エアニスには出だしからアイビスの言葉が理解出来なかった。

「あんた達人間が信じてる天国や地獄のようなものよ。死んでこの世界を去り、アッチの世界に行くと、そしてまたこの世界に生まれ変わる・・・。

あたし達魔族には、基本的に死という概念が無い。力を奪われ滅ぼされても、この世界から消える事も無い、消える事も出来ない、永遠の存在・・・。

だからあの魔導師は、石の力を使って私達魔族の為の死後の世界を作ったのよ」

「世界を、作る・・・？」

「あの魔導師がそれを意識して世界を創造したのか、それとも"石"が勝手にそんな世界の仕組みを作り上げたのか、どちらかは分からないわ。

でも、あの魔導師の口ぶりからすると、後者なのかもしれないわね」

確かに、ティアドラがレッドエデンの事を語る時の口ぶりには、そのようなニュアンスは含まれていなかった。単に魔族を追いやる為の、こことは違う世界という認識でいたように感じられる。

「ともあれ、私達がレッドエデンに辿り着いてからそう時間も経たないうちに、レッドエデンは消えて無くなったわ。・・・石の力が失われたせいね。

で、住む世界を失った私達は怎么样了と思う？」

そんな事、分かるはずも無い。そもそもアイビスの話は、出だしの段階でエアニスの理解を超えている。世界を作るだけの生まれ変わりだのと語られた所で、何の知識を元に合いの手を入れればいいのか。

「さあな・・・」

面白みの無いエアニスの返事に、アイビスは肩を竦めながら答える。

「生まれ変わったのよ、人間にね」

「レッドエデンに居ると、魔族としての力や人格は、少しずつ分解される。いずれ魔族だった存在はひとつの魂へと形を変えて、それはこの世界に別の命として転生する。それが、レッドエデンの仕組みなの」

アイビスはエアニスが大層しく聞き姿勢を取っている事を確認すると、言葉を続ける。

「あそこに居た存在は、レッドエデンの消滅と共に全てこの世界へと転生したわ。ひょっとしたら、人間じゃなくて犬猫やお花に生まれ変わった奴も居るのかもしれないわねえ・・・」

ご愁傷さまと言わんばかりの、皮肉めいた言い方。

「レッドエデンの魔族達は、まっさらな新しい存在になって、この世界に生まれ変わった。

でも、あたし達は力や人格を分解される前に、レッドエデンから追い出されたの。だから、魔族だった時の記憶や力を失う事無く、この世界に転生する事が出来たのよ」

アイビスは自分の手の平を見下ろしながら、

「まあ、人間の体じゃ、存在の仕方が全く違う魔族の力は殆ど使えないから、力は失ったも同然なんだけどね」

見下ろす手に巻かれた布には血が滲んでいた。それでも出血は止まったようだった。

「でも、生まれ変わったって・・・じゃあその体はどういう事だ？」

「体・・・？ ああ、私達の年齢の事ね？」

アイビス達の体は14、5歳といった容姿だ。その体のまま、この世界に生れ落ちたとでもいうのか。だとしたら、既に彼らは普通の人間ではない。

アイビスはどう説明しかものかと口元を捻じ曲げ空を仰ぐ。そんな彼女の代わりに、イビスが説明を始めた。

「俺達が転生したのは、今から15年前の世界だ」

「・・・何だって？」

アイビスの端的な言葉を飲み込めず、エアニスは眉を寄せる。

「この世界は転生後に生まれ落ちる時代が、自分が死んだ後の時代とは限らないようだ。

俺達は今から15年前、何の変哲もない農村で、人間の女から双子の兄妹として生まれた。

そして少しずつ自分が魔族だった頃の記憶を取り戻し、物心付く頃には明確に理解していたよ。自分は魔族の生まれ変わりで、過去の世界に転生した事をな」

エアニスは言葉を失う。

「そんな事が・・・」

「興味深いだろう？」

この世界には生まれ変わりというものが確かに存在し、そしてそれは未来へと続く時間の流れに従っていない。これがどういう事か分かるか？」

「分かるかよ・・・」

ろくに考えもせず即答するエアニス。イビスといいアイビスといい、分かったような物言いが気に入らない。

「我々にとってこの世界は無限に続いているという事だ。

たとえ世界が滅ぶ未来があるとしても、転生する命は時間の流れに囚われる事無く様々な時代へと転生し、転生先の歴史を作り直す。その都度新たな歴史が作られ、様々な世界が生まれる。それこそ、無限と言ってもよい程の、だ」

エアニスはイビスの言葉を心の中で反芻し、理解する。

「そいつは・・・嫌な話だな。

俺達は、この世界の初めから終りの間をグルグル回っているってのか？」

この世界を観測する者が、生まれ変わる事の出来る人間達であるとすれば、その視点から見ると世界に終りは無いという事になる。観測者自身が終りと始まりの間を何度も何度も繰り返し生きて、死ぬのだから。

パンパンと、アイビスが手を叩きながら二人の間へと割り込んできた。

「はいはい。世界の仕組みの話なんてどうでもいいわよ。

とにかく、私達は魔族だった頃の記憶を持ったまま、15年前の世界に生まれ変わって、今まで普通の人間として生きて来た・・・理解出来る？」

アイビスがイライラとした様子でイビスの話を遮った。エアニスも興味のある話だったが、彼女にとってはどうしてもよい事のようにだ。

「途方も無い話だが・・・分かった事にしておくよ。

で、ただの人間に生まれ変わったお前達が、ココに何をしに来た？」

エアニスの返事に、話を促した彼女自身が言い辛そうに言葉を詰まらせる。そしてまた、続きをイビスが話し出す。

「別に、何もするつもりはない」

「あ？」

「ただ、あの戦いの結末を、この目で見届けに来ただけだ。

そして、お前達に詫びに来た」

「詫びる、だと？」

その言葉に、エアニスは自分の耳を疑った。

「20年間続いたあの戦争・・・無論、直接的な原因は人間達による国家同士の諍いだが、我々魔族が戦乱の世になるよう扇動していた事は間違い無い。

俺やアイビスも人間の社会へと紛れ込み、沢山の人間を踊らせ、操り、殺し会いをさせた」

イビスの話に、エアニスは驚かない。イビス達が世界中に根を張る犯罪組織に肩入れをしていたように、かつてベクタという大国にも一人の魔族が入り込んでいたのをエアニスは知っている。彼らはきっと、人の姿で様々な所に潜んでいるのだろう。そして人々を操り、自分達が動きやすい戦乱の世の中を作り出した。

「つまり、生まれ変わる前の自分達が引き起こした戦争で、人間に生まれ変わった今の俺達は散々苦しめられた訳だ」

イビスは自嘲めいた笑みを浮かべて、そう言った。

「・・・はっ」

エアニスもつられるように笑う。滑稽な話だった。

「ははッ、可笑しいだろう？」

随分と身勝手だという事は分かっているが、人間の身になって良く分かった。魔族がこれまでして来た事がな。人間の命の価値など、全く分かっていなかった。だが、今なら理解出来る」

「・・・そう思うなら、これからは世の為人の為、清く正しい真人間として生きて、死ぬまで前世の罪を償え」

「そのつもりだ」

真面目な顔で彼は答える。冗談かと思ったが、彼の目は本気だった。エアニスは毒気を抜かれる。

「もっとも、人の身の一生を費やしても、償い切れる物でもないがな」

イビスの言葉にエアニスは大きく溜息を吐いて、頭を搔く。剣を握っていた左手に力が入りっ放しだった事に気づき、馬鹿らしくなって剣を鞘に収めた。

イビスとアイビスが安堵の息を吐いたのが分かった。平静を装ってはいたものの、力を失った彼等はエアニスを恐れていた。

「それと、もう一つ」

イビスが何かを言いかけたその時、

「エアニス！！」

エアニスの背後からチャイムの声が響いた。振り向くと、そこにはチャイムとレイチェル、そしてトキが居た。

一番最初にエアニスが撃った小銃の音を聞き付けて彼を探しに来たのだ。チャイムはエアニスの小銃とライフルの発砲音を聞き慣れている為、すぐにエアニスが何処かで戦っているのだと分かった。エアニスにとっても、イビス達に銃を撃ったのは、攻撃や牽制の為というより、チャイム達に自分の状況を知らせる為の行動だった。

『！！』

三人はエアニスの対峙する相手を認め、硬直する。そして、エアニスと同様戸惑いながら身を構える。

「やめろ、手を出すな」

エアニスはチャイム達を遮るように腕を伸ばして言った。

「でも、こいつらは・・・！」

「どういう事よ！！？」

混乱の様相を見せるチャイム。トキも同じ様子である。どう説明したものかと、エアニスは頭を悩ませた。

「・・・ふん、丁度いい。あんたに土産だ」

イビスは荷物から大きめの布袋を取り出すと、レイチェルの足元に放り投げた。レイチェルは驚いて後ずさり、袋は彼女の目の前にドサリと落ちた。その拍子に袋の口が緩み、中から歪な形をした白い塊が転がり出た。

「・・・何だこいつは？」

やや遠巻きにそれを覗き込んだエアニスは訝しげに呟く。それは形も大きさもバラバラな、白い石だった。何処かで、見たような気がした。

「ヘヴンガレットだ」

「！？・・・何だって？」

エアニス達の知っているヘヴンガレットは、赤黒く輝く、宝石の原石のような歪な石だった。しかし目の前にあるそれは、形こそ似ているものの、まるで石灰で出来たような真っ白な石だ。

「警戒する必要は無い。もうそいつには魔力を増幅する力も、人の願いを叶える力も無い」

「何でお前達が持ってる・・・これは封印された筈だろう？」

「知らないわよ。ただ、あたし達はあの時、ヘヴンガレットと一緒にレッドエデンに放り込まれたわ。だから、あたし達は目の前に転がっていたそれを、何と無く持って行く事にした。もう用無しだったけど、あたし達にとっても因縁深いモノだからね。ホント、何となく、よ。」

そしていつの間にかレッドエデンが消えて、あたし達は気付けば人間の姿に。

持ってたヘヴンガレットも、どういう訳か初めからそこにあっただけのように、あたし達が生まれた家に転がってたのよ」

アイビスがいい加減な説明を付け加える。エアニスにはどういう理屈かさっぱり分からない。「俺達がそうだったように、この石もレッドエデンの消滅とともに、この世界に現れた。たまたま向こうの世界で持っていた俺達の近くに・・・な。」

この世界の法則に従った結果じゃないのか？

どういう法則かは知らないが、"そういうモノ"らしい」

アイビスもアイビスと同じ様に確信を持っていないのだろう。彼の言葉も曖昧なものだった。そして、彼はレイチェルを見ながら言う。

「ヘヴンガレットは力は失っているが、石に蓄えられた"記憶"や"知識"は、まだ健在だ」

事も無げに言われたその言葉が、エアニスの頭に引っ掛かる。

「・・・！！」

そして、何かに気付いたかのようにエアニスは驚いた様子で面を上げた。

「悪いが盗み聞きさせてもらった。」

その女は、記憶を失っているのだろうか？」

エアニスは舌打ちをする。アイビスたちの視線は感じていたが、話を聞かれる程まで接近を許したつもりは無かったからだ。

エアニス達はレイチェルの方へと振り向く。

するとレイチェルは、警戒する様子も無く袋の中から"石"の一つを取り出し、その手で握っていた。

形を見れば分かる。それは、レイチェルが肌身離さず持っていた最後のヘヴンガレット。

「・・・あ、ああ・・・！！」

レイチェルの様子がおかしかった。とても怖い出来事を思い出してしまったかのように、肩を震わせていた。瞬間的に意識が途絶え、その場にガクリと膝を突く。今にも倒れてしまいそうな彼女を、トキが慌てて支えた。

「と、トキさん・・・？」

「レイチェルさん！大丈夫ですか！？」

レイチェルはトキの顔を見上げる。そして彼から視線を外し、暫くの間真上に広がる空を不規則に揺れる瞳で見つめていた。彼女の乱れていた呼吸が、少しずつ静かになる。

「わ、私、なんでこんな・・・こんな大事な事を、忘れて・・・！」

「・・・！？」

彼女の言葉に、エアニス達は息を呑んだ。

レイチェルの怯えた顔は、次第に歓喜の色に変わってゆく。

「は、はははっ、そっか、私、助かったんですね・・・

思い出しました・・・トキさん、チャイムに、エアニスさん・・・！！」

『・・・！』

エアニスはレイチェルの元へと駆け寄る。涙を浮かべる彼女の目は、はっきりとエアニスを見ていた。あの知らない人を見るような瞳の色は、もう無い。

チャイムがレイチェルにぶつかるようにして抱きついた。

「お帰り！！レイチェル！！！」

「は、ははっ・・・」

泣き笑いをしながら抱き合うチャイムとレイチェルを見ながら、エアニスは乾いた笑みを浮かべる。レイチェルを支えていたトキも、そのままレイチェルの体を抱き締めていた。いつもならチャイムにセクハラと言われて殴られている所だろうが、今だけは見逃されているようだ。三人は恥も外聞もなく涙を流し、ただただ純粹に喜んでいた。

エアニスの足は震えていた。嬉しくて足が震える事など今まで経験した事が無かった。

「石を持っていた間の記憶と現在の記憶が混濁して、暫くは混乱があるだろうが、暫くすれば自分の身に何があったのか理解出来る筈だ。

石を使っていたお前なら分かるな？」

その様子を見ていたイビスが無表情で言った。エアニスは彼に振り向き、

「ありがとう。礼を言わせてくれ」

「・・・お前達に礼を言われる資格など俺達には無いさ。

だが、気をつけろよ。"石"の力は失われたとは言え、それに蓄えられた知識は危険な物も沢山ある。

エルカカの民であるその女が責任をもって管理するんだな」

「・・・いいのかよ。お前達なら"石"の知識を利用すれば、魔族だった頃みたいに好き放題出来るんじゃないのか？」

エアニスの疑問に、イビスは笑いながら答える。

「もう用済みだ。何年も前に、必要な知識は全て書き写させて貰った」

エアニスの眉が跳ねた。

"石"の記憶は、使い手が"石"と繋がっている間しか引き出す事はできず、それを手放すと自分の中にあった"石"の記憶は綺麗に消え去ってしまう。どんな些細な記憶でさえ、"石"の記憶が使い手の記憶に残る事は無い。

だが、その記憶を何らかの形ある物として残し、それを知識として再び吸収する事によって、"石"の記憶は本当の意味で自分の物に出来るのだ。だからイビスは"石"の記憶があるうちに、それを紙に記録してしまったのだ。"石"の記憶を、自分の知識とする為に。

「・・・その知識で何をするつもりだ？」

一度納めた剣に、エアニスは再び手を掛ける。

「人間達の害になるような事はしないさ。

信用出来ないというのなら、今ここで俺達を拷問にでもかけて写本の在り処を吐かせ、本を焼きに行けばいい。俺達には抵抗する力も止める力も無いぞ？」

エアニスの心に迷いが生まれる。この二人が"石"の記憶を持つという事に危機感を感じるのは、魔族であった頃の二人を知るエアニスにとって当然の危惧だった。

しかし、もし人間に対して悪意を抱いているならば、馬鹿正直にそんな事をエアニスに告げる筈は無い。

エアニスの葛藤に構う事無く、イビスはエアニス達に背を向ける。

「俺達の用はこれで全てだ。もう行かせて貰う」

エアニスの沈黙を容認と受け取ったのか。イビスは荷物を手にし、その場を去ろうとする。



「ま、待て！」

エアニスは思わず二人を呼び止める。

「母には半年以内には帰ると言っているんだ。既に予定が押しているな、すぐにでも帰路に就かなくては約束の日までに帰れない。母を心配はさせたくはない」

イビスはとても信じ難い、まるで普通の人間のような言葉を吐いた。エアニスは呆気にとられる。

アイビスが、二人の間に割り込む。

「今の私達は、多分あんたが思ってる以上に、普通の人間なのよ。」

お父さんは戦争で死んじゃったけど、私達は母さんとおじいちゃん、小さな妹って家族が居るの。3ヶ月後には畑のお仕事があるから、それまでには帰らないといけない……。家族にも村の友達にも心配掛けたくないのよ」

アイビスは真面目な顔で、そう話した。エアニスは立ち眩みを起こしそうになる。馬鹿けている。しかしエアニスにはそれを笑い飛ばす事は出来なかった。

「……良い家族に恵まれたみて一だな」

「まあ、ね」

100%信用した訳ではないが、彼らがわざわざリスクを犯してまでエアニス達の前に現れた理由も分からない。

何より、エアニスは彼らが嘘を吐いているとは思えなかったのだ。

肩の力を抜き、諦めにも似た溜息を吐く。

「分かったよ、行っちまえ……。またな」

「……もう、お前達の前に姿を見せるつもりは無いさ」

そう言い残して、イビスは背を向けた。

「ありがとう。それと、ごめんなさい」

アイビスは、最後の最後までらしくない言葉を吐く。

「止めろ、気持ち悪い」

「……いひひひっ」

ようやく、アイビスらしい、ひどく意地の悪い笑みを見せる。

こうして、魔族だった二人の少年と少女は、エアニス達の前から姿を消した。

イビスの言った通り、それ以後エアニスは彼等の姿を見る事は無かった。



エアニスは木漏れ日の差し込む森の中を歩いていた。

足元は石畳で舗装されて、その脇には幾つもの墓標が並んでいた。つまり墓地にいる訳だが、周りに生い茂る木々の密度から墓地と呼ぶよりは森と呼んだ方が、この場所を表す言葉としては近かった。半年近くも手入れがされていない為、地面から伸びる雑草が背の低い墓石を覆い隠し始めていた。これがなければ、まだ"森"ではなく"墓地"と呼ぶ事が出来たのかもしれない。

エアニスの探していた墓標はすぐに見つかった。

他の墓標と比べてひときわ大きく、そして古い。大きく名前と生まれた年、没年が刻まれている。没年は今から250年も昔の年号だ。

エルカカの民の始祖、エレクトラ=アラスティアの墓標。

ここはエルカカの村の墓地。エアニスは今、レイチェルの故郷、エルカカに居た。



エアニス達は、飛空艇を使いファウストの街を後にした。

イビスとアイビスとの邂逅の数日後、バイアルス山で保護された遭難者達の迎えにレオニール本国から船が来たのだ。ファウストからレオニールまでは相当の距離があり、車や鉄道を使っても何十日もかかる。その事や遭難者達の人数を考えれば、決して大袈裟な事では無かった。

そしてエアニス達も、彼等の恩人として、レオニールに招かれたのだ。

だが王宮に招かれたエアニス達は早々にレオニールを後にし、エルカカの村へ向かった。

チャイムやトキは先を急ぐ理由も無いのだからもてなしを受けようとぼやいていたが、レオニールでは"月の光を纏う者"の悪名は高く、エアニスが長居する事を拒んだのだ。結局、その事情を聞いたチャイム達はエアニスを引っ張って逃げるように街を去った。

レオニールの首都から、エルカカの村までは車で10日とかからずに着く事が出来た。

もし彼等の飛空艇を使わず、バイアルスからエアニスの車でエルカカに向かっていたら2ヶ月以上はかかっていただろう。レオニール兵を助けたのは偶然の成行きであったが、お陰で予定を大幅に繰り上げる事が出来た。



「いいざまだなあ・・・ティアドラ」

エアニスは墓標に絡みついた蔓草を引き剥がしながら笑った。ティアドラの墓標は特に自然の侵食が激しく、汚れていた。

エアニスは、エレクトラの事をティアドラと呼ぶ。彼が知っているのは、あくまで自分と歳の変わらないのに、やけに尊大な古臭い言葉使いをする、あの達観しきった金髪巨乳女である。エレクトラなどという知り合いは、エアニスには居ない。そういう認識だった。

墓標を覆う落ち葉と土を足で適当に退けてから、エアニスは墓石の正面に座る。何の手土産も無い事に気づき、とりあえずエアニスは煙草に火を着けて墓標の上に転がした。自分も口に啜えて、火を着ける。

「・・・ずーっと言いたかった事があるんだけどよ・・・」

紫煙を吐いてエアニスは恨みがましく言う。

「今回の戦いは、全部お前のヘマの尻拭いじゃねーかっ」

思い切りエアニスはティアドラの墓石を蹴りつける。

「いや、そもそもあの戦争だってヘヴンガレッドなんてモノがあるから起きたんだ。シャノン達エルカカの間人も、250年間ずーっとお前の尻拭いしてきたんだろ？」

あああ、とんでもなく迷惑な話だ・・・250年前にオマエがどんなヘマをしたか知らんが、しっかりと魔族どもを向こうの世界に押し込んで、用済みのヘヴンガレッドも封印出来てさえい

れば、こんな事にはならなかったんだろ？

レイチェルもこんな苦勞しなくて良かった。

シャノンも死なずに済んだなあ……。

それに、俺の連れのゲイルと、そしてレナもだ……。

死んで詫びても済まねーぞ」

もう死んでるけどよ。と付け加えて、墓標にもたれかかる。

「でも、まあ。この戦乱が無ければ、俺はゲイルにもレナにも出逢う事は無かった訳だ。

そしてトキやチャイム、レイチェルやお前とも、な」

エアニスは笑う。

「それについては感謝してるよ。不幸の上に成り立った幸福を肯定する気は無いが……今、俺はあいつらと一緒に居て楽しいし、レナやトキ、チャイムやレイチェルと出会って、俺は良い方向に変わったと思う。感謝しきれない程に、感謝してるつもりだ。

……ああ、ゲイルは別だ。あいつからは悪い影響しか受けてねえ気がするし……。ま、"エアニス=ブルーゲイル"の名を譲ってくれた事には感謝してるけどな。それがなければ大戦後の穏やかな生活は無かった訳だし……」

エアニスはふと思い出し、雑草だらけの墓地を見回す。

「そうそう、ゲイルの奴もエルカカの墓に入れて貰ってる筈なんだが、何処に居るか知らないか？

……まあいいか。いずれココも綺麗に掃除される筈だし、今度来た時にでも探すよ」

エアニスは立ち上がり、短くなった煙草を足元に落としブーツで踏んで火を消した。ティアドラの墓標に転がした煙草も全て灰になっている事を確認すると、墓標に預けていた背を離し、彼女と向かい合う。

「……とまあ、そんな事を思った訳だ。

くたばって口も利けなくなったお前にだからこそ話せる事だ。少しは気が晴れたぜ」

付き合わせて悪かったな、とエアニスは笑った。

「そろそろ戻るよ。あまり長い間サボっているとチャイムやトキがうるせえからなあ……」

エアニスは少しだけ名残惜しそうにティアドラの墓標を見つめ、そして踵を返して歩き出す。

「じゃあな」



エアニスがエルカカの村を見て抱いた印象は、大戦中にいくつも見てきた、戦火に焼かれて打ち捨てられた廃村と同じものだった。

違う所と言え、所々で2年半前に訪れた在りし日の面影が垣間見えてしまい、陰鬱な気分になせられる所か。

エルカカの村に着いてから暫くの間、レイチェルはよく泣いた。

村にルゴワールの刺客が押し寄せたあの日から、彼女は村の住人全ての意思を引き継ぎ、ここ

まで戦い続けて来たのだ。気丈に振舞い続けてきた彼女だったが、旅を終えてタガが外れたのだろう。今まで堪えていたものを全て吐き出すかのように、レイチェルは泣いた。

村には未だに結界の効力が残っていた。村を囲む森の中で侵入者を迷わせ、寄せ付けない結界。レイチェルが居なければ、エアニス達も村の中に入る事は出来なかつただろう。

その為、村は襲撃された時のまま、誰にも荒らされること無くそのまま残っていたのだ。

エアニス達はレイチェルと話し合い、村の瓦礫を全て片付ける事にした。

村人達の遺体もそのままだった。ルゴワールが遺体だけでも回収していないかと期待していたが、今回の彼等の仕事は雑だった。

レイチェルの負担になるだろうから出来るだけやらずに済ませたかった事だが、レイチェル当人はその現状をエアニスから聞かされ、安堵していた。自分の手で、村の人達を埋葬できるのなら、それに越した事は無い。ルゴワールの刺客達に回収され、ぞんざいに処理されてしまったかもしれない事を考えれば、それすらも彼女にとっては救いだった。

そして、エアニス達は見つけた遺体の数だけ墓穴を掘り、レイチェルが出来る限りその墓標に名を刻んで、埋葬した。

レイチェルの父、シャノンの遺体も見つける事が出来た。

父親の埋葬を終えて、レイチェルは「よかった」と、寂しそうに笑った。

エアニスはレイチェルの強さに感嘆する。彼女はエアニスやトキのように、死体を見慣れて何も感じなくなってしまう人間ではない。

そんな人間が、一度にこれだけの人の死に向き合う事は、並大抵の事ではないだろう。それも、殆どが彼女の知る顔なのだ。

レイチェルはそれに正面から向き合い、全てを受け止めたのだ。

エアニスには、それは何処となく、いつかのレナの姿と重なって見えた。

「・・・なあ、レイチェル」

「はい？」

「困った事があったらいつでも呼べよ。」

「いつでも助けに来てやるからな」

「！？・・・は、はあ、ありがとう・・・ございます・・・」

あまりに想いが真っ直ぐな人間を見ているのは、怖い。だがその行いは正しく、潔癖なまでに美しい。エアニスは、それはとても尊いものだと感じ、そんなレナに剣を捧げた。

レイチェルは、それに近い気質を持っているように感じる。

だからエアニスは、今更ながら彼女にそんな言葉を掛けた。そのいい加減な言葉をレイチェルはどう受け取ったかは知らないが、それはエアニスにとって誓いとも言える言葉だった。

もちろんエアニスは、トキやチャイム、仲間のために剣を振るえる人間だ。だが自分の剣を捧げても良いと思えた相手は、未だかつてレナしか居ない。

そして今日、レイチェルがそのふたり目となったのだ。



「エアニス！ いつまで休憩してんのよもう！！」

「うるせーな。もう一通り片付いてるんだからいいだろうが」

村に戻るなりチャイムに小言を言われた。

エアニスの言う通り、村の瓦礫は大方片付いている。殆どの建物が焼けていたので、建物の解体はそれほど大変ではなかった。村一つ分の瓦礫処理など本来ならば大勢の人を雇って取り掛かる規模の大仕事だが、エアニス達は4人だけで、それをこなした。

レイチェルが魔導で瓦礫を埋める為の穴を掘り、トキとチャイムが車を使い瓦礫を運び、エアニスは焼けずに残った建物を剣一本で斬り崩していった。遺体の埋葬と合わせ、全てを終えるのに20日近く掛かり、昨日、その全ての作業を終えた。

あくまで片付けが終わっただけで、これからエルカカをどうして行くかといった事等は全て棚上げされたままである。

それでも、とりあえずの区切りとして、今日は4人で打ち上げパーティーをする事になっている。

チャイムは村でただ一つの建物の前で小さな瓦礫拾いをしていた。これは村の建物の殆どが焼け落ちていた中、唯一僅かな損傷のみで焼け残った建物だ。村の片付け作業の拠点として、エアニス達はこの建物を修復し、この20日間の宿としてきたのだ。

特に言う必要も無いので黙っていたが、この建物は二年半前、エアニスがエルカカの村を訪れた際、レナやゲイルと共に数日間を過ごした屋敷でもあった。

建物は半壊していたが、エアニスとゲイルが使っていた部屋も、レナが使っていた部屋も、レナとゲイルがエアニスの誕生日を祝ってくれた食堂も、当時の姿のまま残っていた。

それを見たエアニスは流石に郷愁を誘われた。彼女がいつも座っていたロッキングチェアに手を当てて、あの数日間の暮らしを思い出す。

屋敷の事をチャイム達に話さなかったのは、あの思い出を自分だけの大切な物としておきたかったのかもしれない。

「はい、瓦礫拾い。後は頼んだわよ。あたしはウチでパーティーの準備してるから」

「はいよっと・・・」

ああ・・・。朝早く起きて労働して、決まった時間にメシ食って寝る生活も、そろそろ終わりか・・・意外と悪くなかったな。健康になった気がする。

ミルフィストに居た頃は一日中寝て過ごしてたからな・・・」

「アンタこの機に職に就いたら？」

「そうだな・・・俺、絶対社会で働けないと思ってたけど少し自信付いたわ」

そんな事をぼやきながら、エアニスはのたのたとチャイムに渡された瓦礫を入れる籠を背負った。

なんだかエアニスが丸くなってしまったように見えた。でも、この機に彼の牙を引っこ抜いてやる事も、一つの優しさなのかもしれない。それで平和な生活を送る事が出来るのであれば。チ

チャイムはそんな事を考えた。

「あ、あたしと一緒にエベネゼルに来るなら、仕事紹介してあげてもいいわよ・・・」

「・・・・・・・・」

思わずそんな事を口走る。

「・・・・・・・・っ　・・・・・・・・っ！」

驚くエアニスに見つめられ、彼女の顔はみるみる赤くなってゆく。

「ああ、まあ考えとくよ」

「う、うん。うん！」

かくかくと頷いて、チャイムは逃げるように家のドアの向こうへと消えていった。

もっとも。

大戦中にエベネゼルの王宮を襲った事のあるエアニスにとって、エベネゼルはこの世界で一番近づいてはいけない国である。この先、チャイムと一緒にエベネゼルへ行く事は無いだろう。

チャイムだってそんな事くらいは分かっている筈なので、今のはその場の思いつきか冗談の類だろう。

エアニスはそう思う事にした。



日が沈む少し前に、一番近い街へ食料の調達へ行っていたトキとレイチェルが帰って来た。ここにはまともな調理道具が無い為、いつも出来合いの料理ばかりだ。それらを全て温め直し、エアニス達が囲むテーブルにはそれなりに豪勢な料理が並んだ。

「かんぱあぁあーい！！！」

チャイムが立ち上がり、グラスを天高く突き出した。

「乾杯」とレイチェルが小さくグラスを傾け、「お疲れ様でした」とトキがいつもの調子で笑い、エアニスは無言でグラスを傾けた。チャイムは一気にグラスの中身を煽ると腕を振り上げて、「暗いわよッ！！」

エアニスの頭を思い切り叩く。パン！と景気の良い音が響いた。トキとチャイムが目を見つめる。

「ってえ！！何で叩くんだよ！！」

「エアニスがこのパーティーやろうって言い出したんじゃない！！」

「あんたが盛り上げなくてどーすんのよ！！」

「！！？」

チャイムの叫びにエアニスは戸惑い、トキとチャイムを見る。チャイムはキョトンと目を瞬かせ、トキは首を傾げた。

「いやいやいやいや！！」

「お前がやろうって言い出した事じゃねえか！！」

「何で俺が言い出した事になってんだよ！！？」

「・・・勢いであなたの頭を叩いた言い訳が思いつかなかったから。

適当な事を言ってみました」

パン！！と、エアニスはチャイムの頭を叩き返した。

トキが肩を揺らして笑う。

「まあ、そうですね。

正直、何かを祝うという気分にはなれないかもしれませんね」

溜息混じりに言う。その隣で、レイチェルも寂しそうに笑った。そんな彼らを見て、チャイムは静かにグラスを置く。

「・・・そうかもね・・・ごめん」

チャイムはしおらしく謝った。皆を楽しませようと無理に明るく振舞ったのだろう。エアニスは浮かしていた腰を椅子に下ろす。

「全てがそれなりに上手く行ったが・・・シャノン達が生き返ってでもくれないと、ハッピーエンドとは言えねーよな・・・」

4人の間に沈黙が落ちた。彼等の旅の結末は、ひどく物悲しいものとなりそうだった。

エアニスは空になったグラスに自分で酒を注ぐ。エアニスに酒を嗜む習慣は無いが、別に嫌いという訳ではない。ただエルフの体はアルコールへの耐性がそれほど強くない為、普段は控えているのだ。だが、今日のような特別の日は違った。

「終わった事は終わった事だ。これからの事を考えよう」

エアニスの言葉に、レイチェルは反射的に目を伏せてしまった。

これからの事。それぞれの、これから。

別れの時が来たのだ。



「僕は大学がありますのでミルフィストへ戻りますよ。

エルバークの街に行ってノキアさんの具合を診てからになりますけどね」

料理の鶏肉に手を付けながら、トキが言う。その声には何の感慨もない。いつものように、芝居がかった丁寧な言葉遣いだ。

「・・・そいやお前大学生だったな。すっかり忘れてたよ」

「大丈夫なの？ もう3ヶ月以上サボってるんでしょ？」

「あはは、単位の数には余裕がありますから大丈夫ですよ」

ヘラヘラと笑って答えた。

「すみませんでした、私のせいで・・・」

「とんでもない。大学で勉強するより、ずっと有意義な時間を過ごす事ができました。この事は一生忘れません。お礼を言うのは僕の方ですよ」

トキはレイチェルへ右手を差し出した。レイチェルはその手を取って、硬く握る。

「それで、レイチェルさんはどうされるんですか？」

◆
「私は・・・エルカカを、再興します」

「・・・本気かよ？」

エアニスはいちエルに前々からその意思がある事を知っていたが、聞き返さずにはいられなかった。

ヘヴンガレットが失われた今、最早エルカカの隠れ里にその存在意義は無い。村は人目に付かない場所にあるため生活の便も悪く、新たな移住者も望めないだろう。

「エルカカの人達は"石"を探す為に、世界中に散っています。私が知るだけでも、何人かの人達がエルカカの村に帰ってきていません。きっと、今も"石"を探して、旅をしているんだと思います。

その人達はいずれ村に、エルカカに帰って来ます。

だから私は、帰ってくる皆全員に"お帰り"を言うまで、この村で待とうと思います。

そしていずれ、皆でこの村を・・・」

「・・・そうですか」

不意に、トキはいちエルの胸元に目が行った。そこには、彼女が出会った時から身につけていた、黒い石の嵌めこまれたタリスマン。その中には最後の一つのヘヴンガレットが閉じ込められていたが、今はその成れの果てが収められている。

「少々、不便な体になってしまいましたね・・・」

レイチェルがエアニス達と旅をしていた間の記憶は、レイチェルの中から失われてしまった。だがそれは、あの双子の兄妹のお陰で戻って来た。

しかしその記憶は、レイチェルがヘヴンガレットを身に付けていないと、彼女の記憶の一部とはならなかった。レイチェルがヘヴンガレットを手放すと、たちまち彼女はエアニス達と過ごした2ヶ月間の実体験を忘れてしまうのだ。石を手放したとしても、その二ヶ月間に何があったのかという事は、知識の上では身につけている。だがそれは、実体験とは違う、単に人から聞いた話でしかない。

レイチェルは胸元に手を当てると、首を振った。

「別に、この旅の間ずっと身に付けていたものですし、何も気にしていませんよ」

「でも、お風呂の時とかは外してしまうんでしょう？」

チャイムが「セクハラ！」と叫んでトキの後頭部を叩く。エアニスが笑った。

「いいえ、どんな時も、肌身離さず持っていますよ。

私にとってこの2ヶ月間は一瞬たりとも忘れたくない、大切な思い出ですから」

「・・・参りましたね」

セクハラ発言をそのように返されてはトキの立つ瀬が無い。トキはいつもの作り笑いではなく、そう言って貰えた事が本当に嬉しくて、照れるように笑った。

レイチェルは自分の右手を見る。その手はまだ、握手の形でトキに握り締められたままだった。レイチェルはそれを両の手で包んで、

「トキさんも、時々遊びに来てくださいね」

「ミルフィストからエルカカまで歩いたら1ヶ月近くかかりますよ。車を使っても往復20日弱・・・ですか。まあ、次の春休みにでも遊びに行きますよ」

「あ・・・はは・・・ちょっと無理がありますね・・・」

エルカカとミルフィストの位置関係を思い出し、レイチェルは残念そうに言った。

「全然無理なんかじゃ無いですよ。僕はレイチェルさんの事が好きですからね。

暇さえあれば喜んで遊びに行かせて貰いますよ」

「はい！」

レイチェルは嬉しそうに笑い、そして名残惜しそうに二人はその手を離れた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

何かトキが凄い事を言ったような気がしたが、トキとレイチェルはその言葉を気に留める事も無くスルーしたうえ、何ともすっきりと話を纏めてしまった為、エアニスとチャイムは突っ込むタイミングを逃してしまった。



「俺はミルフィストには戻らない」

咳払いを一つ挟み、エアニスは話を戻した。

「戻らないんですか？何か用事でも？」

「宛ても目的も無いが、このまま旅を続ける。暫くこの辺りの土地を離れるよ」

「ああ、そういう事ですか・・・」

ふたりのやり取りに、レイチェルが小首を傾げる。

「今回の件では僕達は少々目立ち過ぎましたからね。少なくとも、ルゴワールには僕やエアニスの正体は伝わってしまった・・・暫くほとぼりを冷ますつもりですね？」

エアニスの端的な言葉をトキが分かりやすく言い変えた。

「そういう事だ。トキ、お前は本当にミルフィストに戻っても大丈夫なのか？」

暫くの間は一所に留まるのは危険だろう？」

「ルゴワールは面子やプライドの為に得にもならない報復を考えるような馬鹿な組織じゃありませんからね。大丈夫でしょう」

楽観とも取れる言葉だが、違った。トキはもし報復に遭ったとしても、それを受けて立つつもりでいるようだ。その意図に気づき、エアニスは短く口笛を吹く。

「余裕だねえ・・・まあ、とにかく俺はそういう事だ。もう少しだけ、ブラブラするさ」

そこで一度言葉を切ると、エアニスは黙り込んでしまった。不自然なタイミングで訪れた沈黙にトキは「おや？」と首を傾げエアニスを見ると、彼は薄く笑っているような、でも何処か寂しそうな、不思議な表情を浮かべていた。

彼は長い前髪をかき上げながら言う。

「トキ」

「はい？」

「・・・もう1年半以上前か。」

セトの街で出会ってからこれまで、色々ありがとうな」

照れくさそうに、エアニスとトキは笑いながら言った。トキの方は暫く呆気にとられたような顔を見せると、すぐにエアニスと同じような、寂しさを堪えた微笑を浮かべる。

「礼を言うのは・・・僕の方ですよ。あなたにどれだけ救われたことか・・・」

思えばエアニスと出会って一年半以上、ずっと彼と行動を共にしてきたのだ。今生の別れなどという事ではないが、やはり別の道を歩む事になるというのは、胸が詰まる。感情がこみ上げて来るのを感じた。

「お互い様さ。」

まあ、暫くしたら一度はミルフリストに帰るからよ。留守を頼むわ」

「ええ、お待ちしております」

二人はいつも通り、気楽そうでいい加減な口ぶりで別れの挨拶を切り上げた。



そして、エアニスとトキ、レイチェルは、未だ黙ったままのチャイムの方を見た。

「あたしは・・・もっとみんなと旅がしたいな・・・」

「はあ？」

「・・・チャイムさん？」

俯きながら言ったチャイムの声は、うわずっていた。表情は見えなかったが髪から覗いた耳は真っ赤に染まっており、彼女が泣いている事はすぐに分かった。

「レイチェルもさ、もっと、沢山世界を見て回りたいてって言ってたじゃん！

トキも大学で勉強するより、旅をしてれば貴重な文献や凄い発見が出来るかもしれないじゃない！！」

まるで子供が屁理屈を捏ねて自分の望みを通そうとしているような口ぶりだった。

「・・・おい、チャイム、」

声を掛けたエアニスの袖を、チャイムはさすがのように掴んだ。

エアニスに向けられたその顔は、やはり涙に濡れてぐしゃぐしゃになっていた。

「エアニスはいいんだよね、このまま旅を続けるのならあたしと・・・」

「・・・チャイム。俺は、一人で行く」

「え・・・」

唯一の望みを失い、チャイムは呆然とする。そんなチャイムにエアニスは目を伏せて、首を振る。

「俺やトキと一緒にいるのは、危険過ぎる。確かに俺達はこの旅でお前達の力になってやる事は出来たかもしれないが、それと同じ位・・・いや、それ以上に自分自身のしがらみにお前達を巻

き込んでしまった」

事実。この旅の間に遭ったトラブルの半分はエアニスやトキが引き寄せてしまったといっても過言ではない。ついでに、エアニスとチャイムのトラブル体質が、全く関係ないトラブルを運んで来た事も一度や二度ではなかった。

「お前達にこれ以上迷惑を掛けたくないし、危険な目にも遭わせたくない。

だから、少しの間だけお別れだ」

エアニスは涙で濡れたチャイムの目をまっすぐ見て、説得する。

「大丈夫よ・・・私もレイチェルも、自分の身は守れるわ」

レイチェルまでも引き合いに出すチャイムに、エアニスは困ったように肩を竦める。

「・・・レイチェルだって、エルカカに帰ってくる仲間を迎えるって仕事があるんだ」

「でも、エアニス言ったじゃない！！

俺と一緒に行くかって！！」

「っ！」

別に、忘れていた訳ではない。

ファウストに到着する前日。あの廃屋で野宿をした時に、エアニスとチャイムは二人きりで、少しだけ"これから"の話をした。その時にエアニスは自分がどうしたいのか、嘘偽り無くチャイムへ伝えていた。

「・・・ああ、言ったな」

「トキだって、レイチェルの村の復興を手伝うって言ったんでしょ！？」

チャイムはエアニスだけでなく、トキにも噛み付く。トキの意思を知らなかったのか、レイチェルは驚いて彼を見た。トキは一瞬呆けたような顔を見せて、エアニスを睨む。

「エアニスが喋ったんですか？ 全く、余計な事を」

「悪い・・・」

二人は溜息を吐いて、椅子へ沈み込んだ。

エアニスは両手で顔を覆い、頭をがりがりと搔くと、

「ああ、もう！！」

やけくそ気味の声を上げてて、椅子から立ち上がった。

「俺も、お前と一緒に旅を続けたいさ！

だからあの時、一緒に行こうって言ったよ！」

「・・・っ！」

そうハッキリと言われ、チャイムは驚き固まってしまう。

その不器用ながらも真っ直ぐな言葉に、トキの口角がニマリと吊りあがり、レイチェルは口元に手を当て頬を赤らめた。

最近仲の良いエアニスとチャイム。遂にその心の内を明かす時が来たのか！ と期待し、傍観者としての立ち居地を取るためトキとレイチェルは素早く二人から一步、身を引く。これ以上話の引き合いに出されるのは御免だという思いもあったが。

注目される中、エアニスは声のトーンを落とし、チャイムに言い聞かせるように話す。

「でもな、それはやっぱり危険過ぎる。俺の言葉が浅はかだった。

俺は多分、暫く色々な奴に命を狙われる。もちろん、殺られるつもりなんてカケラもねえが、守れるのは自分の身だけだ。俺のトラブルに巻き込まれる誰かにまで、手が回る保証は無い」

「それは・・・この旅を始める時にも聞いたわ。

でも、あたしは無事じゃない！！エアニス達が守ってくれたから！！」

「運が良かっただけだ。これから先は、どうなるか分からない。

俺だってお前ともっと一緒に居たいさ。

これからも、色んな所に行って、バカな話して、下らない事で喧嘩して、笑いあいたい。

だから、その為に、少しだけ時間を置こう。

俺達が一緒に居られるように、もう少しだけ待って欲しい」

「エ、・・・エアニス」

「・・・泣くなよ」

エアニスはチャイムの顔を覗き込むようにして屈むと、彼女の涙で濡れた頬と目元を自分の袖で無造作に拭った。

チャイムはその手を払い除けるとエアニスから顔を背け、両手で遮るように壁を作る。

「やだ！ちょっと・・・

面と向かって言われるとその、は、はずかしい、から・・・」

エアニスは恥ずかしがるチャイムの両腕を掴むと、彼女の顔を正面から見つめる。

「約束だ」

そう呟き、チャイムに顔を、唇を寄せた。

終わった世界のように静まり返る室内。

トキとレイチェルは、その時何が起こったのか理解するのに幾ばかの思考が必要だった。

もうその場の流れは完全にエアニスとチャイムは唇を重ね、もどかしかった二人の関係は遂にハッピーエンド。トキ達はどんな冷やかしの言葉かけるか、あるいは素直に祝福の言葉をかけるか考え始めていた。

それがまさか、エアニスがチャイムに顔面パンチされて床に伸びてしまうという結末になろうとは誰が予測出来ただろうか。

エアニスは椅子ごと床に引っくり返り、頭を打ったのかピクリとも動かなかった。チャイムは部屋の真ん中で拳を震わせ青ざめる。殺すつもりはなかったのにやっちゃった非業の犯人の顔である。

事情を聞けば誰もが納得してしまう、やむにやまれぬ理由があったのではないかと考えてしまいたくなる犯行。だがしかし、チャイムには何の理由も無かった。敢えて言えば、エアニスを殴り倒したのは単に"恥ずかしかったから"という至極単純で乙女的な理由だった。

トキは無表情でチャイムを見つめ、いつも優しくフォローしてくれるレイチェルが、チャイムに非難の目を向けていた。

「チャイム・・・今のエアニスさんは、すごい勇気を出して、チャイムに胸の内を話してくれていたと思うの・・・それなのにこれはちょっと・・・」

「ひょっとして・・・チャイムさんは本当にエアニスの事が嫌いなんですか？」

「ち、違う！ つ、ついカッとなって・・・」

「恥ずかしくてカァァッとなって殺っちゃったんですか？」

「そ、そうそう！ そんな感じ！！」

わが意を得たりと言わんばかりに、チャイムは何度も頷いた。

トキは気まずい空気を切り替えようと、勤めて明るい声で言う。

「まあ、しかし・・・チャイムさんの満更でもない顔を見て、流石に今回はこのような流れは無いかと思いましたが・・・何でしょうね。正直、安心しました。お二人はやはり、こういうバイオレンスな関係であるべきですね！！」

親指を立てて、二人を祝福した。チャイムは引き攣った顔で笑う事しか出来ない。

「それで、」

不意に、トキがかしこまった声で言った。

「エアニスの想いは伝わりましたか？」

いきなり真面目な眼差しで問い掛けられた。チャイムは言葉を詰まらせて床に伸びたエアニスを横目でチラリと盗み見る。

「うん、まあ。しょうがないから、待ってあげる」

そう笑って、チャイムは納得したのだった。肝心のエアニスが失神したままなので今ひとつ締まらない結末だったが、彼等らしいといえらしかった。

そうして、4人はそれぞれの道を歩みだす。



ささやかな打ち上げパーティも終わり、全員が寝静まった真夜中。

エアニス一人で玄関から外に出てきた。いつもの旅装束の上から冬用のマントを羽織っている。腰にはいつものように剣が吊り下げられ、肩には一抱えほどの鞆が掛けられていた。まるでこのまま旅に出てしまうかのような姿だった。

エアニスは正面に停められた愛車の前で立ち止まる。ミルフィストに移り住んですぐに手に入れた古い自動車。自分の手で走れるように修理して、今回の旅ではとても長い距離を一緒に走ってきた相棒だ。愛着はあるが、これは今の自分よりトキとレイチェルに必要なものだろう。エアニスはボンネットをひと撫ですると、

「今までありがとうな」

そう呟いて、そっと手を離した。最後にエアニスはチャイム達が眠っている屋敷を見上げると、様々な未練を振り切りかのように背を向けて、歩き出す。

「ふうん、大事にしてるんだね」

車の陰から聞こえた声に、エアニス は飛び上がりながら振り返る。

「ちょっと意外かな。エアニスがそんなにもこの子に愛着持ってたなんて」

「チャイム・・・」

車の陰には寝間着姿のチャイムがしゃがみ込んでいた。一体いつの間に気付かれ、しかも先回りされていたのだろう。チャイムとレイチェルは隣の部屋で眠っていた筈だ。彼女達の様子をはっきりと確認する事はしていないが、だとしてもエアニス程の使い手ならば先回りされた気配に気付くべきだった。もっとも、チャイムが上手に気配を隠せるようになってきたからという理由もあるが。

彼女は眉を吊り上げてエアニスを見上げる。

「何も言わずに行っちゃうつもりだったのね？」

最も見つかりたくなかった相手に見つかり、エアニスはばつが悪そうに頭を掻く。そして観念したように、正直に白状する。

「面と向かったの別れは苦手なんだ。

これでも、寂しがり屋でな。決心が、鈍る・・・」

らしくもなく、頼りない顔を見せるエアニス。

チャイムは腰に付いた草を払いながら立ち上がると、エアニスの正面に立つ。

そして、エアニスの胸にそっと自分の額を押し当てた。



「いいじゃん・・・ひとりぼっちは寂しいよ？

一緒に行こうよ・・・」

チャイムの囁きに、エアニスは「うぐ」と呻き、彼女の両肩を掴んでその体を引き離す。

「駄目だ・・・納得してくれたじゃねえか。暫くは一緒には居られない」

「・・・ちえ。やっぱ駄目かぁー・・・」

両手を首の後ろで組み、残念そうに笑う。その笑顔からぽろりと涙がこぼれ、チャイムは慌ててそれを拭った。

「えへへ・・・待ってるからね。いつまでも」

チャイムは照れ隠しのように拳を突き出し、

「そんなに待たせやしねーよ」

エアニスも、彼女の拳に自分の拳をぶつける。そしてそのまま、チャイムの拳をそっと握った。チャイムも手の平を広げると、エアニスの手に指を絡ませる。

互いの温もりを確かめ合う二人を月明かりが照らす。チャイムは少し照れたような顔で、それでもエアニスの顔を、瞳を見つめていた。

「何だよ、さっきは思い切り殴ってくれたくせに」

「だって、トキやレイチェルの前であんな事しようとするんだもん・・・」

「じゃあ、ふたりきりの時はいいのか？」

「・・・ま、まあ、ね」

「そうか、良かった。ホントに嫌われてんのかと思っちゃった」

「そんなワケないじゃない。

あたしは、エアニスの事大好きだから」

「・・・うん。俺も、だ」

そうして二人は、ごく自然に唇を重ねた。

唇を離し、互いの額をこつんとぶつけてから、二人は顔を離す。

「えへへ・・・何だかんだで初めての・・・だね」

「ん・・・何かと邪魔が入ったからな・・・」

「ね、続きはいつ？」

「やめろ、恥ずかしい事いうなっ」

「ふふっ、ごめん」

そして繋いだ手を、絡んだ指が一本一本離れていくように、離れた。

エアニスが後ろへ一歩、下がる。

「行くよ。手紙はミルフィストに送る。たまにトキやレイチェルの所にも遊びに行ってくれ」

「うん」

「じゃあな」

「ばいばい。またね」

エアニスはチャイムに背を向けて、振り返る事無く歩き出した。

最後に、互いの気持ちをはっきりと確認出来たのだ。

もう、彼女との距離が離れてしまっても不安はなかった。



そしてエアニスは再び一人の道を歩みだす。

一人の旅路などこれまで何年も経験してきた事だったが、エアニスはこれまでにない気持ちを抱いていた。

帰る場所がある。

待っていてくれる人が居る。

今思えば、一人の時は何処か「いつ死んでも構わない」といった自棄の念を抱きながら旅をしていたような気がする。それはそれで、気の楽な旅路とも言えた。

しかし、今はその気楽さが無かった。

今回の件で、エアニスが大戦中から引きずり続けてきた心残りも全て無くなった。

これまでにない程身軽になった筈なのに、いつの間にかこれまで以上に大きな荷物を抱え込んでしまった気がした。

エアニスは舌打ちをする。

「面倒臭いなあ・・・」

結局増えてしまった荷物の重みを心地よく感じながら、エアニスは笑った。

真っ黒な夜空に、明るい月が浮かんでいる。

月明りを照り返しキラキラと輝く草原を、エアニスは琥珀の髪を揺らしながら歩く。

エアニスの中で、ようやくあの戦争が終わったような気がした。

夜空を覆う分厚い雲から、小さな雪片がゆっくりと舞い落ちる。

薄く雪の積もる草原を、暖かそうなマントを羽織った人影が歩いていた。

足を滑らせないように坂を登り、辺りの稜線を全て見渡せる、なだらかな丘の上に立つ。

その丘の上には一本の木と、その傍らに小さな墓標があった。

「久しぶり」

マントを羽織った人影は、深く被っていたフードを跳ね上げて、小さく笑った。

レナ=アシュフォード。

墓標に刻まれた名前だった。墓石は以前訪れた時のトラブルで少し欠けてしまった筈だが、その跡は綺麗に修復されていた。

「前に来たのは・・・それほど前でもないか。」

色々あって、あれから随分経ちまった気がするよ・・・」

マントの男は荷物からガス缶とバーナー、幾つかの器を取り出す。水筒に入っていた水を鍋の形をしたコッヘルに流し込み、ガス缶と繋いだバーナーの上に乗せて湯を沸かし始めた。

墓標には丘の上に一本だけ立つ木の枝が真上に広がっているお陰で、それほど雪は積もっていない。男も木の幹に背を預け一息つき、辺りを見回す。

大地一面を覆った雪が、雲から滲む月明かりを反射させているのだろう。真夜中だというのに辺りは薄っすらと均等な明るさが広がっており、遠くまで続く白い稜線が見て取れた。

「・・・失って初めて分かる、って言葉があるだろ？」

男はおもむろに話し始める。

「あれは、まあ、本当だな。」

いくら分かってるつもりでも、いざ"その時"が来ると自分が全く分かっていなかった事を思い知らされる。

きっと人間は、手にした物を失ってみないと、その本当の価値を理解出来ないんだろうな。

馬鹿な生き物だ」

自嘲気味に笑って、男は俯いた。

「一緒に旅する仲間ってのは、いいものなんだな・・・。」

こうして一人旅に戻ってみて、あいつらの有り難味が良く分かった。

一人は、寂しい・・・」

男の人生の中では、一人の時間の方が圧倒的に多い筈なのに。

人は一度安らぎの場を得てしまうと、もう一人には戻れないのかもしれない。

「安らぎの場、ね・・・」

シュコココ、とコッヘルの中の湯が沸き始める。男は左手にグローブをして、熱くなったコッヘルを掴み、小さなポットの中に注ぐ。そして乾燥させた紅茶葉を包んだ絹袋を取り出し、それ

をポットに放り込んだ。

「まあ、もう暫くしたら連中の所に帰るつもりだよ。

一人で旅してる理由は、まあ、これまでの清算ってところか。

ザード=ウォルサムに、月の光を纏う者、そして、エアニス=ブルーゲイル。

この名前人間は全て同一人物で、そして死んだという情報を色々な手で流して回ってる。結構大変だったぜ。信憑性のあるウソをでっち上げて広めるのは。

噂の広まり方も波に乗ったようだし、まあ後は放っておいても俺の目的は達成されそうさ。

ゲイルに譲って貰った、エアニス=ブルーゲイルの名を捨てちゃったのは、申し訳ないと思ったがな」

今や名も無き男は、暫く暗い空を見上げ、詫びるように目を伏せた。

紅茶葉が蒸れた頃合を見計らい、ポットを手に取り2つのカップへ中身を注いだ。ふわりと、林檎の香りが辺りに漂う。カップの1つを墓標の前に置き、男はもう1つを口に付ける。

「そうそう。俺、ようやくお前との約束、守れそうさ」

男は思い出したかのように言った。

「もう誰も傷付けないって約束」

彼女と交わした、最後の言葉。

最期の、約束。

「復讐だとか、誰かを守る為だとか、これまで色々理由を付けて沢山の人を傷つけてきたけど・・・

あの旅が終わった事で、その理由も無くなった。

だから、お前との約束、守ろうと思って。

一人旅になってから今まで、剣も銃も抜いた事は無いんだぜ？」

このまま旅の目的が達成出来れば、男はこれからも剣を手にする必要は無くなるだろう。彼女との約束を、守り続ける事が出来るだろう。

「早くあいつ等の所に・・・チャイムの所に帰って、

誰も傷つける事無く、誰にも傷付けられる事の無い生活をしたいね・・・」

戦争が終わって数年が過ぎたこの世界では、それは比較的当たり前の事だ。しかし、そのような生活から程遠い世界を生きてきた男は、夢見るようにその願いを口にします。

「・・・なあ、レナ」

そして、ここにいる筈の彼女の名を呼んだ。

男は辺りを見回す。

当然、男の周りには誰も居らず、細かな雪が舞っているだけだ。

男がこの場を訪れると、そこには必ず彼女の姿があった。

それは、この地に眠る彼女の霊魂というものか、それとも男が勝手に見ている幻想か。

そのどちらかは分からなかったが、男にとってはどちらでもよかった。

しかし、今の男には彼女の姿が見えず、その存在の欠片すらも、感じ取る事は出来ない。

男はもう一度、彼女の名前を呼ぶ。

返事は無い。

彼女は、行ってしまったのだろうか。

あるいは、男の中で過去や彼女に対する未練が断ち切られたのだろうか。

男は鼻をすすって、雪の舞う空を見上げる。

「あ、ああ、まだ、あの旅の結末を話してなかったな」

声を詰まらせながらも、男は明るい声で言った。

何も悲しむ事は無い。

それはきっと、男が前に向かって進む事が出来たという事なのだから。

きっと彼女は、もう大丈夫だねと、言ってくれたのだから。

墓標に寄り添い、懐かしむようにあの日々を振り返る。

「うん。 そうだな。 まずは・・・ 」

そう言って、男は旅の話 시작했다。

月の光を纏う者

おわり

あとがき

素人Web小説の分際で "あとがき" などおこがましい感じがしますが、自分にとって「月の光を纏う者」は思い入れの強い創作物になってしまいましたので、自分がコレをどう思っているかという事を忘れない為にも、あとがきという形で自分の思いを記録に残させて頂こうと思います。

今も「月の光を纏う者」の更新を追ってくれている方は、いつからこの小説を知って下さったか分かりませんが、流石に第00話から見て下さっている方は居ないのではないのでしょうか。

だって「月の光を纏う者」の第00話を公開したのは2003年中頃の筈だからです。

そして確か第01話を公開するまで暫く放置して、それから20日に一話更新を目指してお話を作っていました。

しかし後半になるにつれて更新ペースが落ちてしまい、1ヶ月に一度、時には3ヶ月後に一度の更新になり、3部を書き終えてトキの過去編にあたる5部が始まるまで、1年以上更新を止めてしまった事もあります。

最盛期には結構あったアクセスも、今では随分と減ってしまいました。やはり、更新スパンが長くなってきた頃からアクセスが減ってきたような気がしますね……。コンスタントにお話を作り、公開出来る人は凄いです。

ちょっとしたチャレンジ精神で始めてみた小説ですが、まさか9年近くも、本編で78話も書く事になるとは思いませんでした。

自分が一つの創作物にこれほど時間を掛けて取り組んだのは、「月の光を纏う者」が初めてです。だから自分の中でも、とても思い入れのある創作物になりました。

色々なライトノベルを読み(普通の小説も読めよ)、その真似事のつもりで書いていたお話ですが、書けば書くほど勉強になる、というより自分の書く文章の浅はかさを理解できるようになってしまい、凹んでゆく一方でした。(それが少なからず勉強になってる証拠なのでしょうが)

これだけ時間をかけてお話を書く事を続けてきましたが、未だにその成果は自信に繋がる事はありません。ベコベコに凹まされたまま、どうすりゃ面白いお話になるのかと考え、行き詰ったままです。それでもお話作りがイヤになった、という事はないので、これからも小説作りを続けていこうと思っています。

いつか自信をもって人に見せれるお話を、文章を書けるようににりたいなあ。

書きたい展開に至るまでの過程を描くのがダルかったり、サイトのアクセス数が減ってしまったりとモチベーションが下がる事も多かったですが、少ないながらも「月の光を纏う者」の感想を書き込んでくれた方、「更新待ってます」とコメントを付けてくださった方がいたからこそ、完

結まで続ける事が出来ました。

本当に有難うございました。

なんだかこれでお終い、という流れですが、9年近くも一緒に居たエアニスとチャイム、トキとレイチェルにお別れをする勇氣は自分にはありません。

欲を言えば「月の光を纏う者」をまだ読んでない人達の目にも留めてもらいたいと思っていますのでこれからも番外編を書いたり、前半の随分と古い挿絵を書き直したりしたいと思っています。エアニスとの寿命の差に絶望したチャイムが永遠の命を手に入れようとして闇落ちするお話や、膨大な知識を持ちながらも全ての力を失ったイビスとアイビスが、限られた手段の中、頭脳を駆使して敵と戦うお話など、まだまだお話を広げていける気もするのですが、一つの作品に固執するのもアレですので、「月の光を纏う者」に手を掛けるのは程々にして全く別の"次"を目指して創作活動がんばります。

それでも一応、本編終了の区切りとして「月の光を纏う者」を読んでくださった方々に、ましてやこんな日記のように駄文まで読んでくださった方々に、心からお礼を申し上げます。

皆様のお陰で最後まで書き切ることができました。

本当に、有難うございました。

2012.04.07 猫崎 歩



本当に最後にもうひとつ！

簡単にアンケートにお答え頂けたら幸いです！

【>>[アンケート入り口へ](#)】

特にこの2013年6月製作の電子書籍版をお読みの方はアクセス解析にも反映されないの・・・。

やっぱりどうい層の方が読んでくれていたのか、漠然とでいいので知りたいのです！

アンケート結果やコメントのお返事は、Web版のあとがきにて随時公開しております。

【>>[サイトTOPへ](#)】

宜しくお願い致します。

そしてもう一度、

ありがとうございました！！！！

月の光を纏う者 -6-

<http://p.booklog.jp/book/52945>

著者：猫崎 歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52945>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52945>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ